

---

# 恋人宣言

るうあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋人宣言

### 【Nコード】

N6295S

### 【作者名】

るつあ

### 【あらすじ】

「社内恋愛なんてできない」と宣言した、わたし。上司の高倉主任は意味ありげに笑ってて、わたしは何やら落ち着かない心持ち。……これっていったい、何の兆候？

木崎美鈴と高倉維月の、ゆったり甘やかな日常的恋話。【注】本編以後の小話は基本的に一話で読み切りの話となっています。時系列は整っておりません。【注2】タイトル後に「マークのついてるものは微エロで、ぼかしています」が性的な表現が含まれます。苦手な方は自己回避をお願いします。



不思議だなと思う人がいて。

不思議にその人ばかり目で追って。

不思議な気分以小首を傾げてる。

これっていったい、何の兆候……？

生ビールのジョッキ片手に頬杖ついて、わたしはぼそりと呟いた。

「社内レンアイって、わたし、きつと出来ないなあ」

話の流れを唐突にぶった切ったにもかかわらず、向かい側に座って同じく生ビールのジョッキを傾げている人は、驚き顔も戸惑い顔もせず、「へえ、どうして？」と返してきた。

「どうしてって……」

ジョッキに少し残っていたビールを飲み干して、わたしは息を吐く。

実のところ、どうして突然そんなこと言い出したのか、自分でもよく分からない。

先を続けられず、言葉を濁した。

そんなわたしを興味深げな顔をして見ているのは、職場の上司だ。わたしより七つ年上で二十八歳の彼、高倉主任とはたまにこうして飲みに来る。以前はもう一人一緒に飲みに来ていた人もいたのだが、この半年ほどは、二人きりで飲みに来てた。

だからといって、特別な関係……男女の関係ってわけじゃない。友達ってわけでも、もちろんないけど。

とはいえ、ただの上司と派遣社員っていうには、ちょっと微妙かもしれない、わたしと高倉主任だった。

今、わたしと高倉主任がいるのは、雑居ビルの一階にある狭い居

酒屋。和洋入り乱れたアルコール臭と揚げ物系の臭いが充満し、古臭い歌謡曲とご機嫌なオヤジのだみ声が紫煙を揺らす雑然とした店内、ムードもへったくれもない居酒屋のテーブル席で、わたしと高倉主任は向かい合って座っている。

なんともいえない奇妙な距離を保ったままで。

高倉主任はジョッキをテーブルに戻し、わたしの顔を覗き込んできた。

じりつ、と、一步距離を縮められる。

しまった。うっかりしてた。詰まらない事こぼしちゃった。そう思っても、後の祭りだ。

わたしはなんとなく気まずくて、首をすくませた。

高倉主任はそんなわたしの様子に気づいているのかいないのか、ちよつとからかうような口調で尋ねてきた。

「もしかして、社内の誰かに告られでもした？」

「えっ、いえそんなまさか！ 入社してから二年、一度もそんな目には遭ってませんから！ わたしなんかそんなこと言う人いませんし！」

「そう？」

高倉主任は静かに笑っている。

「なんですか、主任？ にこにこ笑ってくれちゃって。いやに嬉しそうなんですけど？ というかですね、今日はちよつとオカシイですよ？ わたしが。わたしが、オカシイです。ヘンです。」

目が眩んできます。顔が熱いです。

「おかしいな。まだビール、ジョッキで二杯しか飲んでないのに。これくらいで酔ったりなんかしないのに。」

「木崎さん、ビールのおかわり、いる？」

「はい？」

「ビール。空だし。ついでに何かつまみも頼もうか」

「はあ、そうですね」

高倉主任に手渡されたメニュー表を開きつつ、わたしは主任の顔をちらりと見やった。

そこにあつた主任の顔は、いつもと同じようどこか違う、「男の人」の顔だった。

ずっと前から思ってた。

高倉主任はフシギな人だ。

と、同僚に言ったら、「どこが？」と聞き返された。

「おっとりした人だよな？ 存在感があるのかないのかわからないって感じはするけど、不思議とかは思わないなあ」

「まあまあかっこいい」だの「そこそこイケメン」だのと、中途半端な評価を下されることが多い。つまり、「可もなく不可もなく」といったところらしい。もっともこれは独身女性、主に派遣社員の間での評価だから、偏ってるとは思つ。

上司としての評価は高い。目端が利くのに小うるさくなく、適材適所、わたし達派遣社員をうまく使っていると思う。

うちの会社には、わたし以外にも派遣社員が複数在籍している。同じ二十代の女の子もいれば、三十代、四十代の女性もいる。それぞれ派遣登録の際に提示したスキルに合わせた各課に配属され、その課の「上司」の指示のもと、働いている。

わたしは高倉主任が総括を任されている「サポート課」に配属された。

ちなみに、わたしが派遣された会社は、おもに輸入雑貨などの通信販売をしている、通販会社。「サポート課」というのは、お客様の問い合わせやクレームに直接関わるのではなく、クレーム等の事務書類としてまとめたり、対応のために準備を整えたりする、「お手伝い」専門の課だ。営業課のサポートをすることもある。パソコンと向かい合ってるデスクワークで、ようは事務仕事。

サポート課の事務員の数はさほど多くなく、十人強。その半分が派遣社員で、その派遣社員を監督、総括するのが高倉主任だ。だから高倉主任はわたしにとっては直の上司。

だから、興味はあった。高倉主任の仕事ぶりとか、人柄とか。

それで、訊いてみたんだっけ。仕事とはまったく関係のない事柄なんだけど、目に付いていたことがあったから。

「高倉主任で、ジャンケン強いですよね」

わたしが感嘆して言うと、主任は笑みを返してきた。「よく見るね」と。

「何かコツとかあるんですか？」

だって、ズルとかはしてなかったし。それなのに、ああも強いって、まるで超能力だ。読心術とか予知とか！

「コツって程じゃないけど」

高倉主任は、目立つタイプではない。際立つてかつこいってこととはないんだけど、温和で穏やかな顔立ちや仕事には好感が持てるけどその一方で、安易に近寄れない雰囲気もあった。

気安いようできて、腹を見せない。矛盾してるのに、それが「高倉主任」の中では相反することなく混在してる。

なんとも不思議な人だと思う。

「その人が何を出すか、なんとなく分かるってだけ。この人はグーを最初に出すタイプだとか、そういうのがなんとなく、ね」

「ええ？ でもその人がいつも必ずグー出すとは限らないじゃないですか」

「うん。でもそういう時って、顔に出るし」

「えええ？ 顔に、グー出そうと思ってたけど、パーにしようとか、出るってことですか？」

「うーん、そんなとこ」

高倉主任はちよつと困った風に笑って、曖昧に答えた。

「いや、出ませんで、ぶつう」

「普通の状態ならね。でも気負っていると、出るよ」

「よくわかりませんが」

「うん。僕にもよくわからないから、答えようがないな」

結局、いつもこんな具合にはぐらかされてしまう。

高倉主任はやっぱり不思議だ。

不思議だから、気にかかってしょうがない。

二人で飲みに行く間柄とはいえ、社内では、わたしと高倉主任はそう頻繁には話さない。話すといったら仕事のことくらいで、傍から見て親しい関係だとは思われないうくらゐの距離はあると思う。

一緒に飲みに行くことは、社内では秘密にしてる。

別に隠すようなことではないのかもしれないけれど、妙な邪推をされるのは高倉主任に迷惑がかかるだろうし、わたし自身、浮いた噂を立てられるのは嫌だった。

だから、「木崎さんってさ、高倉主任に気があるの？」

と訊かれた時は、内心ひどく焦った。

表面上はしかめっ面をして、その焦りをありありと見せはしなかった。

けれど、同僚の彼女はわたしの感情を愉しげな様子であて推測しているようだった。

「木崎さんって、ああいうタイプが好みなんだあ。ま、そこそこかっこいいもんね？」

まったく、どうして女つてのはそういう邪推をしたがるんだろう。

これで、月一の割合で二人して飲みに行ってるなんて知れたら、どんな噂を流されることやら。

「違う、そんなんじゃないよ。そりゃあ嫌いではないけど、タイプだとかそんなの、考えたこともない。ただいい上司だな、とは思ってる」



「ええ、それだけえ？」

彼女としては、わたしにもつと動揺してほしかったみたいだ。「ち、ちがうよ、そんなわけないでしょっ」って具合に慌てて否定すれば、「そんなに動揺するなんてアヤシイ」とつつこめるから。

わたしはため息をついて、言った。

「それに、わたし、会社内の人にそういう感情持てないから」

「えええ、なんでえ？」

「なんでって、面倒だから。仕事に来てるんだから、それ以外の事に関わりたいと思わない」

真面目くさった、嘘をついた。「面倒だから」っていうのは、本心だけだ。

「木崎さんって、意外に堅いんだあ」

「……放っておいてよ……」

彼女と離れてから、わたしは吐き捨てた。

チクチクと、彼女の目線がわたしの背に刺さってる。痛くてたまらない。

放っておいてよ。わたしのことなんか、どうだっていいじゃない。

そう言い返そうとして言い返せなかった自分が、……不思議だった。

どうだって……いい？

どうって、何が？

ふと浮かび上がったその感情は、一瞬で掻き消えた。

ただ、チリチリと痛むような、こそばゆいような、奇妙な感覚が胸に残っていた。

わたしが勤めている派遣先の会社は、一応というか基本的には週休二日で土日は休み。だから明日と明後日は仕事は休み。そして今日は金曜日。残業をすることもなく、定時に上がった。

帰り支度を済ませ、一人、のろのろと廊下を歩いていたら、高倉主任に呼び止められた。

珍しく、高倉主任も定時で上がれたらしい。

高倉主任は周りに誰もいないことを確認してから、「飲みに行かないか」と軽い口調で誘ってきた。

だけど、ワンクッションおいて、だった。

高倉主任は、悪戯っぽく笑って、こう言った。

「ジャンケンしよう。で、木崎さんが勝ったら、僕の奢り」

ジャンケン不敗の人が何言ってるんですかっ！ と言い返したかったけど、何故だか受けてたっちゃったんだ。

負けるとわかってる勝負なのに。

だけど奢ってもらうことが多かったから、たまにはいいかって考えた。

勝つ気はしなかったし、勝つ気もなかった。

だから…… だったのかもしれない。……後にして思えば。

冷えた生ビールが、喉を通っていく。一息に飲み干してやりたかったけど、さすがに息が続かない。

なんだか喉が異様に渴く。

高倉主任のせいだ。絶対に！

今夜のわたしはどうにもおかしい。ほんとにおかしい。

酔ってる感覚はないけど、「酔ってるヤツは大抵そう言う」というから、酔っているのかもしれない。

高倉主任がジョッキを傾ける。

……いつもなら気にも留めないのに。

勘弁してください、主任。動く喉仏が妙に色っぽいですけど？  
ネクタイ緩めないでくださいってば、それ以上っ！ あ、腕もまくらないで欲しいんですけどっ。筋っぽい手首は、わたし的にはとつてもマズいです！ ごつい時計が似合う骨ばった手首は、かなりヤバいんですってば、わたしにはっ！

「今日の木崎さんは、なんだかおもしろいくすつと、主任が笑う。」

「さつきから俺の事睨んでるけど、何？」

「……………」

わたしは押し黙る。「見惚れてたんです」なんて言えませんか。

なんだろう、この……妙にふわふわした気分は！？ 心が落ち着かない。

春って、妙な気分になる人が多くなるって、ほんとだと思っ。甘い蜜の香が、飛散する杉花粉と一緒に乗ってるせいだ。絶対そっだ。

脳内に、甘味成分が仕込まれるに違いない。

春って……………怖い。

「俺、木崎さんを怒らせるような事した？」

「してません」

「そう？ なら、いいけど？」

「してませんが、主任って意地悪ですな」

「面と向かって意地悪と言われるのは初めてだな」

そう言って高倉主任は、また笑う。食えない笑顔で。

ビールのつまみには、甘すぎる。だから「食えない」。食ってたまるか、奥歯を噛み、しかめた顔で高倉主任をねめつけた。

高倉主任は器用だ。

会社にいる時と、飲みに来る時と、ちゃんと自分を使い分けてる。なのに、らしさを失わない。

本当に……本当に不思議な人だと思う。

「高倉主任って、会社では『僕』なんですね。それってやっぱり意識してそうしてるんですか？」

「まあ、そうかな。さすがに上司に対して『俺』とは言えないしね。それに、上司以外にでも『俺』より『僕』の方があたりも柔らかいから、都合がいい」

「なるほど」

こういう時、高倉主任はオトナなんだと思う。社会人として当たり前なことなんだろうけど、まだまだ若輩者のわたしとしては、ただただ感心するばかりだ。

自然に自分を使い分けて、相応に振舞えるって、すごいと思う。

わたしなんかには出来ない芸当だ。

「木崎さんはけっこう素のままだね」

「すみません、不器用なんで」

「素のままだけど、素直じゃないというか」

「は？」

「いや、素直には素直なんだけど」

高倉主任は、いきなりわたしの頭に手を置いた。大きくて、無骨な手。思わず、「ひょえっ」と声が漏れた。

普段なら、生ビール三杯くらいじゃ酔わないんだけど、なんですか今日は。酔いが早い。心臓がバクバク鳴って、痛いくらい。

「木崎さんて、ものすごく人目を気にするね」

「……………え？」

「自分のこと、すぐく見られてるって思ってるでしょ？」

「…………わたし、そんな自意識過剰じゃないと……………思います、ケド」  
断言できない自分が情けなくて、俯いた。たぶん、顔も赤くなってる。

「そういう意味じゃなくて。木崎さん、自分のこと、なんかつてつけるでしょ？ 自分なんかつて。それって誰かと比較してるってことだよな」

主任の手が、わたしの頭を撫でている。半端に長いわたしの髪をくしゃくしゃ搔いている。

何をしてるんですか、この人は。

何を言い出すんですか、この人は。

わたしは顔を上げられないままにいる。

「木崎さん、そのままちよっと目、瞑って」

「は？」

「顔上げなくていいから、ちよっとの間」

「……………」

逆らえなくて、言われる通りにした。

主任の手が、わたしの頭から離れた。

わたしはぎゅうっと目を閉じた。肩をすくませて、縮こまっている。店内の雑音が、ぐるぐる渦巻いて聞こえる。急速に世界が狭くなり、窮屈になる。

「誰かに見られてるような感じがする？」

ささやくように低い主任の声に、鳥肌がたつ。やや洩れた声は、妙に艶っぽい。

わたしはこくこく小さく頷いた。

「なんか……………じろじろ見られてるみたいに、感じます……………けど」

「うん、そうだね。……………目、開けて、木崎さん」

「……………」

顔を上げたそこには、頬杖ついた主任の穏やかな笑顔がある。

「周り、見て。誰も木崎さんのこと見てなかったよ。それぞれがそれぞれ勝手にやってる。見てたのは、俺だけ」

「……………はあ」

わたしは身を竦ませる。上目遣いに高倉主任を見た。高倉主任は

穏やかな微笑を湛えて、わたしをじっと見つめている。

「なんだか、居たたまれない。」

呼吸が苦しい。動悸までする。

「つまりね、木崎さんが日ごろ感じてるだろう人の目ってというのは、自分自身の目なんだよ、おおよそはね。自分で自分を見張ってる」

「……………」

「そうやって、他人と自分とを比較してる。なのに競争心はあまりないよね。どちらかといえば逃げ腰で。周りをよく観てるかと思えば、実はあんまり観てなかったり」

高倉主任はため息をついた。それから頬杖をとり、額に垂れ下がっていた前髪をもの憂げな仕草で掻きあげる。

その、骨ばった手首に、わたしの目は釘付けになっている。ちなみにいえば、主任の深いまなざしからも、目が放せない。……つまり、主任から顔を逸らせない。

「木崎さんて、不思議だ」

まさかの、その一言だ。

それ、わたしこそが言いたい台詞なんですけど。

「とらえどころのない子だなと、ずっと思ってた。消極的なところがたぶんあるのに、時々行動的になるし。存在感がないようである、というか」

「……………」

わたしは、それはもうたいそう複雑な面持ちをしていたに違いない。

高倉主任はわたしを見て、くすつと笑う。

「だからずっと、気にかかった。分からないから、つきとめてやりたくなるって言うのかな」

「……………は、そ、そうですか」

わたしのこと、そんな風に見ていたなんて。全然気がつかなかった。

高倉主任のことずっと見てたのに、気づかなかった。

わたしなんかを、……見てくれてたなんて。

「それでね、今日は覚悟を決めたわけ」

「はぁ？」

高倉主任は悪戯っぽく笑う。

「ジャンケンして俺が負けたら、木崎さんのこと、ちゃんと口説こうってね」

「……………はぁっ?!」

素っ頓狂なわたしの声に、店内にいた何人かがこちらに顔を向けた。

けど、さすがに人目を気にしてる余裕なんてなかった。

「な、何言ってるんですか、いきなり？」

「ああ、じゃ、単刀直入に言った方がいいかな？ 俺、木崎さんのこと好きだから」

「って、ちよつと、わぁっ！」

狼狽しまくって、わたしの口から出るのは意味不明な声だけだ。

事もなげに「好きだ」と言った高倉主任は、余裕綽々といった風に微笑んでいる。

「いきなりなんで話がそこに発展するんですかっ」

わたしは声を荒げて詰問した。

だって唐突過ぎるし、俄かには信じられない。けど、からかってる風にも見えない。何がなんだか、さっぱり状況が把握できない。

高倉主任が、わたしを「好き」？

嘘でしょ？ いきなりっ、そんなのっ、信じられるわけがないっ  
!!

「いきなりといえば、まあ、いきなりだね。けど、自覚したから、そろそろちゃんと言わないとマズいかなと」

高倉主任は顎をかきながら、言葉を続けた。

「年の差もあるから、これでも悩んだんだよ。あと、やっぱり同じ課の部下だしね」

「……………うん」

「けど、さつき木崎さん、言っただろう？ 社内恋愛はできないって。それで、覚悟完了した」

「いつ、意味不明ですけどっ！？」

「なんですか、高倉主任？ その勝利の祝杯を飲み干したような、ご満悦的笑顔はっ？」

「心臓が破裂寸前だ。飛び出してしまわないよう、こぶしを握り、胸を押さえた。」

「木崎さん、真面目だし人目を気にするから、そう言うことで、自分をセーブしてるんだなと思っただら、……………気がついた」

「な、なっ……………」

「何に気がついたんですか。……………なんて、聞けやしない。」

「木崎さん、よく俺のことを見てたろ？ 観察してたってことなんだからうけど、そうやって探って俺のことを知るうとしてたよね？」

「それ、俺も同じだったから」

「……………」

「ずっと見てた……………にもかかわらず、分からないところが多くて、すごく、新鮮だった。こうやって飲みに来て色々話を聞いても、全然飽きない。もっと知りたいと思った」

「高倉主任は真摯なまなざしを、改めてわたしに向ける。」

「あ、この目。」

「今日、わたしに「ジャンケンしよっか」って言ってきた時と同じ目だ。」

「子供っぽくすら感じた、挑むような目。本気の目。」

「あ、あのですね、主任？ ええっと……………それで、その……………なんで行きなりジャンケンだったんですか？ それに、負けたらって……………」

「主任、ジャンケン強いのに」

「うん」

「高倉主任は小さく笑った。」

「だから、木崎さんが何をだすのか分からないのが前提だった。分



からないことを確認したかったっていうところかな」

「わっ、わけわかりませんっ」

「そう、分からない。木崎さんも、俺のことよく見てるのに、まだ分からない”だろ？ それも、そういうことだから”

「そういうこと……って！」

「だから、そういうことだよね？」

「……っ」

わたしはを声を詰まらせた。

生憎と、……「そういうこと」「が」どうということ」「なのかが分からないほど、わたしは鈍感じじゃなかった。してやられた、と思うほどには、頭はまだ働いていた。

あの時、高倉主任は晴れ晴れと笑って、言った。

「やっぱり負けちゃったか」

三度の「あいこ」が続いた後、勝負はついた。

わたしはグーで、主任はチヨキ。

あの時、わたしは不思議な気分に小首を傾げた。

勝ったのに、負けちゃったような。

それになんだか、……畏にはまったような。

「ビール」

空になったジョッキに手をかけ、ぼそっとこぼした。

「おかわり頼んでいいですか、主任？」

「……いいけど」

高倉主任は余裕たつぷりに笑っている。

「今日は酔いが早いね、木崎さん」

「誰のせいだと思ってるんですか」

酒豪と言われるほどじゃないけど、酔っ払って正体なくした経験は、今まで一度もない。けど、今日は酔ってしまいたい気分だ。

高倉主任はにこにこ顔を崩さない。ちょっと黒っぽい笑顔に見えるのは、気のせい？

「今夜は泥酔すると、木崎さん的にはピンチだと思うけど？」

「は？」

「俺としては構わないけど。狼なりに、責任はとるし」

「……のわっ、な、何その危険発言っ?!」

だ、だれ、この人っ？ 今わたしの目の前にいる高倉主任の顔を  
した男は、いったい何者っ?!?

恐慌状態のわたしを、主任は可笑しそうに笑って見つめている。

しかも、何か企みを含んだ目をして。

「で？ どうする？ ビールのおかわり頼む？」

「……………ウーロン茶で」

「了解」

笑って、主任は店員呼び出しブザーを押した。

わたしはふくれっ面を主任に向ける。どういう顔を返しているの  
か分からず、自然、不機嫌顔になってしまっている不器用さだ。

なんだかいろいろ口惜しい。

わたしなんかまだ状況を把握しきれしていないのに、主任ばかり  
余裕で。

動悸はちつとも治まらないし、顔は熱いし！ なんだか泣きそう  
だ。

「……………木崎さん」

主任は何か思いついたらしく、やにわに腰を浮かせた。

そして手を差し出し、人差し指をくいくいつと曲げ、「ちょっと  
とわたしを促した。

「なんですか？」

わたしは身を乗り出す。我ながら浅はかだ。と、気づいたのは、  
一瞬の後。

「ッ!?」

軽く、唇の先が触れた。主任の唇がっ！わたしの唇にっ!?  
「ちよっわわっっ」

高倉主任は何事もなかったかのような顔をして、座りなおしている。

わたしの胸の内の葛藤とか逡巡とか困惑とか、あと、出かかった涙も、吹っ飛んだ、今の一撃でっ！

「ちよっ、しゅっ、主任、こんなところで何をいきなりっ！」  
「怒った？」

高倉主任は頬杖について嬉しそうに笑っている。

「いやそのっ、ちよっ、だってっ、こんなところでっ！」

「怒ってはいないんだ？」

「いや、だからですねっ」

「よかった」

「よくないですってば！」

「嫌だった？」

「嫌じゃ……って、あう」

いとも簡単に誘導された。

高倉主任のかけた罠に、こつも易々はまるとはっ。

情けないやら、恥ずかしいやら……。

「もっ、もういい大人なんですからっ、その、少しは人目を気にした方がいいと思いますけどっ」

照れ隠しなんて今さら遅いけど、素直になれなくて、つい、そう返してた。

大人な高倉主任は、まったく動じない。

「うん。そうだね。いい大人なんだし……」

それどころか、高倉主任は破顔一笑、こつ言った。

「オトナのお付き合いをしようか。今夜から」

爽やかな顔して、何か今、えらいこと言いましたか、この人！っ!?

けど、もはやわたしにつっこむ気力はなく、主導権はぼつちり高倉主任に握られてしまっていた。

そしてわたしはハタと気づく。

できないと宣言したばかりの状況に追い込まれてしまったことに。

「……嘘でしょう……」

がっくり肩を落とす、うなだれた。

姿を、つい探してしまう。そして目で追ってしまう。

光の加減で栗色に見える髪や、長い睫の下の瞳がキレイだなあって、見惚れてため息をついてしまう。

ほわほわ甘い気持ちになったり、そわそわ居たたまれない気分陥ったり、ちくちく痛くて苦い思いをしたり。

これってかなり、重症なんじゃなかるうか……？

衝撃的な告白があったあの日から、数日後。

会社の階段の踊り場、偶然居合わせた高倉主任が、こそつと耳打ちをしてきた。もちろん、誰にも見られていないだろうことを、確認してから。

高倉主任の突然の行動に慌てふためいて、「ぎよええっ」と声が出かかった。

持っていた段ボールを落とさずにすんだものの、全身に無駄な力が入ってしまう。

「木崎さん、最近ちよつと挙動不審」

高倉主任はからかう風に笑う。

そしてワイシャツの袖をまくりながら、高倉主任は「それ、持とうか？」と訊いてきた。

わたしは首を横に振る。遠慮したのは、この段ボールを運ぶのが今のわたしの仕事で、それを高倉主任に手伝ってもらったら、……周りの人達に、「わたしと高倉主任」の事を勘ぐられちゃう気がしたからだ。

そんなわたしの気持ちを見透かしているとしたか思えない高倉主任

は、笑いをおさめず、さらりと言ったのけた。

「木崎さん、ここずっと、会社で僕のことばかり見てぼんやりしてるよね？ そんなだと、僕との関係を疑われて噂になっちゃうよ？」

「……っ」

ぶわっつと、音がしそうな勢いで赤くなつたわたしを見る高倉主任は、何やら嬉しげだ。

「まあ、俺としては別段構わないけど？」

「ちよっ！..！」

慌てて身を離れた拍子に、ドンツと、壁に背をぶつけた。

「大丈夫。会社内では何もしないよ。セクハラになっちゃうからね」

「っ」

高倉主任は余裕綽々、にっこりと笑う。

高倉主任め、「僕」と「俺」の使い分けが上手すぎる！ それに、わたしの反応見て楽しんでるのが一目瞭然だ。

「セ、セクハラはともかくっ！ わたしも気をつけますから、高倉主任も気にしてくださいっ」

臥して願いますヨ！ もうホントに勘弁してくださいっ！

懇願の目を向けられ、高倉主任は微苦笑を浮かべた。

よもやの「社内恋愛」に踏み切ってしまった、わたしと高倉主任。

高倉主任は最初、「隠すことないのに」と言っていたけど、やっぱり「隠しておいた方が無難」だと思いつたのか、「内緒の方向でお願いしますっ」というわたしの我侭を受け入れてくれた。

高倉主任はオトナだし、もともと腹を見せない人だから、会社での態度はまったくもって、以前と変わらない。

なんだかそれが口惜しいなんて。憎らしいなんて。………っつっつ、言えないけどっ。

うちの会社は表立って「社内恋愛禁止」というようなことは言っていない。けど、暗黙のルールというか、「やめといた方がいいんじゃない」的な雰囲気はある。もっともそれは、派遣社員や女子職員という限定された枠内での「ルール」ではあるのだけだ。

だから、というか、やはり、というか。

「わたしなんかと噂になったら、高倉主任、困るでしょう?」

女子職員のネタになって困るのは、わたしなんかより、きっと高倉主任だと思うから。

「……………」

高倉主任は眉をひそめ、小さく息をついた。

「あのね、木崎さん」

「はい」

「……………いや」

高倉主任は肩を落とした。

「……………?」

表情を曇らせた高倉主任は、大きく息を吐き出したその流れのまま、淡々とした声を発した。

「木崎さんこそ、僕なんかとの仲を疑われて冷やかされたりしたら、迷惑だよな? 木崎さんの評判を落とさないためにも、気をつけるよ」

「え、あ」

高倉主任は「じゃ、また」と片手を上げて、踵を返した。

「まっ、待ってください、高倉主任っ!」

とつさに、高倉主任を引き止めた。

段ボールを両腕で抱えているせいで、腕を掴んで引き止めることが出来ない分、慌てた。

「違います、そうじゃなくて! わたしのことなんかはどうでもよくて! 高倉主任に迷惑がかかるのが嫌で!」

背中がヒヤリとする。

高倉主任は立ち止まり、振り返ってはくれたけど……………。

もしかしてわたし、高倉主任を怒らせちゃった？ それとも、傷つけてしまったのかもしれない。

だって、高倉主任の、こんな悲しそうな顔、見たことないもの！  
「わたし、主任の負担になりたくなくて」

不安にかられ、しどろもどろに言い訳を始めた。

「……………」

「そ、そりゃ、自己防衛も、ちょっとはあるからなんですけど、嫌とかそういうんじゃないんですっ。むしろ光栄……ってゆーか、ええっと、わたし…………っ」

ああ、もうっ、わたし、何口走ってるんだらう！

言いたいことがちっともまとまらなくて、支離滅裂だ。

そんなわたしを、高倉主任はじっと見つめている。

ふと、苦いブラックコーヒーみたいな瞳に甘みがさした。

「木崎さん」

高倉主任は腕を伸ばし、そしてほんっと軽く、わたしの頭に手を乗せた。

ひゃっと、思わず身を竦ませる。

ゆるい癖のあるわたしの髪を指先でくしゃくしゃと掻き、高倉主任は穏やかに笑って言った。

「うん、わかってる。わかってるから、「わたしなんか」っていうのは無しね、木崎さん？」

「え」

おずおずと、わたしは上目遣いに高倉主任を見やった。

高倉主任の目元には、もうやわらかな微笑が戻っていた。

「木崎さん」だから「付き合いたいと思った。木崎さんだからこそ、妙な噂を立てられたら迷惑だろうって、考えた。木崎さんも同じように思ってくれたんだよね？」

「……………」

…………敵わない。

本当に、高倉主任には敵わないよ…………。



どうしよう。

胸が痛い。きゅっと締まった胸の奥で、鼓動が高まっている。目頭が熱くなる。頬も熱いし、頭も……というか全身が痺れるみたいに、熱い。

俯こうにも、涙がこぼれそうに俯けず、唇の端をきつくしめて、泣くのを堪える。

わたし、本来泣き上戸じゃないんだけどな。

高倉主任のせいだ。高倉主任が、わたし自身も知らないようなわたしの感情を引っ張り出したりするからだ。

口惜しいのか嬉しいのか、もどかしくて、思考がまとまらない。

「うーん、困ったな」

高倉主任が苦笑まじりに呟いた。

「そんな可愛い顔されると、抑えがきかなくなるんだけど？ さて、どうしよう……？」

ニヤリと笑み、高倉主任は悪戯っぽく……というより、挑むように迫ってくる。

「えっ？ ちよっ、あのっ、主任っ？」

思わず声が裏返る。退こうにも、もう後がない。

「てゆーか、ここ会社だし！ 会社じゃ何もしいって、さっき言ったのに！」

「いやいや、待ってよ、わたし?! 何ドキドキしてるの？ 何を……期待してるの？」

「ダメだっっていうのにつ！」

「そんなわたしの動揺を察してくれてのことだと思う。」

「ハハ、なんちゃって」

おどけたように両肩を軽くあげ、高倉主任は目を細めて笑った。それから素早くわたしの手から段ボールを奪い、歩き出した。まるで、何事もなかったかのように。

「さ、行こうか。これ、総務に持って行くんだろ？」

何もされなくて、ほっとしたのか、がっかりしたのか。どちらと

もつかず、複雑な気分だ。

……いや、だからね！

期待してたわけじゃなくて。……って、自分に言い訳してる時点で、やっぱり高倉主任に「してやられた」んだと思う。……いつかのように。

「急ごうか。あんまりゆっくりしていると、それこそ妙な具合に勘ぐられるだろうし」

「……………はい」

階段を昇り始める主任の後を、わたしは慌てて追う。けれど、横に並んだりはしない。二、三步離れて歩く。これが、会社内でのわたしと高倉主任の距離だ。

だけど……………

わたしは一步だけ、高倉主任に近づいた。

段二つ上に、主任はいる。

「あのですね」

息を整えてから視線を上げ、告げた。

「わたし、高倉主任のこと、……………好きです」

さりげなく、さらり。とは、いかなかったけれど。

高倉主任は少しだけ驚いたような顔を、こちらに向けた。

足を止め、肩越しに振り返った高倉主任と、目が合う。

気恥ずかしいんだけど、今さら目を逸らすなんてできない。

「ほんとに？」

高倉主任の笑顔が眩しい。

なんでそんな嬉しそうな顔ができるんですか、この人はっ！

おみくじで大吉が出たみたいなの、福引で一等を獲得したみたいなの。

「本心から言ってくれてる？」

「はいっ、もちろんですっ」

本気の告白がこんなに照れくさいものだとはっ！

眉間に力が入り、緊張のあまり顔が強張ってしまう。

「そっか」

淡泊な言葉に反して、高倉主任は表情は和らいでいる。

春の陽射しのように温かく柔らかい笑顔だけど、瞳の奥に企み事を秘めている……気がする。

その直感は、大当たり。

こともなげに、高倉主任は言う。

「その言葉、ここでじゃなく、もう一度聞かせてほしいな。今夜」

「は、はいっ！ って、ええっ?!」

さり気に付け足された言葉に、わたしは困惑と仰天の声をあげる。相変わらず、高倉主任だけが余裕たつぶりだ。

「上司の僕にじゃない、俺にね」

「……っ」

高倉主任の瞳の甘やかさには、本当に敵わない。

動揺をごまかすことすらできず、照れ顔を隠すこともできないわたしを、高倉主任は満足そうに見つめ、また笑う。

わたしと高倉主任の「秘密の社内恋愛」は、まだまだ始まったばかり……だというのに。

毎日が冷や冷やし通しで、落ち着かない。今まで以上に人目を気にして、行動が慎重になるかと思いきや。

わたしの目は、高倉主任ばかりを追ってる。わたしの心は、高倉主任でいっぱいになって、感情は制御不能になってる。

ほんとにこれはもうなんていうんですか……。

かなりの重症だと思っんですよ。高倉主任に翻弄されっぱなしで。

「願ったり叶ったり、だね」

高倉主任は笑いつつ、身を寄せて腰に手を回してくる。

会社では見せない艶めいた顔をして、高倉主任はそっと、わたし

に囁いた。

「好きだよ、木崎さん」

きゃあああつ!!!

不意打ちはダメだってば!

それに、明らかに誘導してるし！ わたしにも、ソレを言わせよ  
うと！

言わないと放さないよと、高倉主任の目がいじわるく笑っている。

もののみごとに高倉主任の術中にハマったわたしは、今夜もまた  
情けない声をあげ、「勘弁してくださいっ」と泣き言をこぼす。

ほんとうにもう……………この先いつたいどうなるの？ わたしの  
明日は、どっちっ?!

高倉主任はにこやかに、「こっち」と自分を指差してるけど。

## 恋人宣言 2

春うつらかな休日。

桜は散り始めてるけど、春はこれからが本番。

そして、どうやらわたしの「社内恋愛」もこれからが本番……かも。

「ところで、木崎さん」

「はい？」

高倉主任は腰をかがめ、淹れたての紅茶をわたしに差し出した。

それはわたしが手土産に持ってきた、ストロベリー・ティーだ。

甘酸っぱい香りが、部屋中にひろがってゆく。

ところで、といえば、今わたしは、高倉主任のマンションにお邪魔している。

初めての「お宅訪問」なんで、ドキドキしている……と言いたいところなんだけど、どうしてか、まったくゆったり、寛ぎきつてい

る。1DKの部屋は、それなりに散らかっていて、それなりに整頓されている。インテリアにこだわっている風はないけど、アース・カラーに統一されているからか、目に優しい。引越祝いに貰ったという幾つかの観葉植物がマイナスイオンを発しているせいかもしれない。

少しだけ開けた窓から入り込んだ夕風が、白い紗のカーテンを揺らす。

温かな夕餉の香りと子供達のはしゃぐ声、夕刊を配達してるバイクのエンジン音。川辺の雑木林を渡る風の音や忙しない鳥達のさえずりが、新鮮に聞こえる。

紅茶も美味しい。

しかも今夜はなんと、高倉主任が手料理……といってもお好み焼きらしいけど……を披露してくれるというのだ。

恥ずかしくて絶対口に出しては言えないけど、すっごく……幸せ……かも。

「あのね、木崎さん。ニヤけてるところをなんだけど」

「……はっ、うっかり顔に出てました？」

ぎよつとして、わたしは空いている方の手を、緩みまくってた頬に当てた。

「何が？ って訊かない方がいい？」

高倉主任はくすくす笑いながら、けれど少し困った風な目をしてる。

「訊かない方向でお願いします、高倉主任」

でも困ってるのはわたしも同じ。

わたしはソファに腰かけてるんだけど、高倉主任は立ったままでいる。向かい側に座るなりしてくれればいいのに、わたしの目の前に立っていて、わたしのことを見下ろしている。

高倉主任は中肉中背で、マッチョ体型でもなければ薄っぺらい痩せ体型でもない。

けど、なんだか今日はいやに大きく感じてしまう。

服装のせいかな？ いつものスーツ姿じゃない、ラフなカットソーとジーンズ姿だから、そう見えるのかな？

それに髪も、会社にいる時と違って自然に流してる。染めてはいないみたいだけど、ちょっと茶色っぽい。瞳の色も、そうだ。

会社にいる時とは違う、プライベートな高倉主任。

じかに高倉主任を見ている感じがして、だから「大きく」思えるのかもれない。

「あのね、木崎さん」

「はい？」

高倉主任は深く息をついた。

わたしは小首を傾げる。

「なんだろう？　今ちよつと、わたしと高倉主任の距離が縮まったような？」

「実際、高倉主任は一步わたしに近づいてはきたんだけど……」。

「なんですか、高倉主任？」

「さりげなく、おしりをちよつとだけ動かして、場所を移動した。」

「ティーカップをテーブルに置いてから、再び高倉主任に視線を戻した。」

「高倉主任はもう一度、ため息をついた。」

「木崎さん、主任って呼ぶの、そろそろやめない？」

「はい？」

「会社の外では、名前で呼んでもらいたい。主任じゃなく、ね」

「高倉主任は目を細め、わたしをじつと見つめて言う。」

「思わず、肩が竦む。……首筋がぞくぞくして、高倉主任から目を逸らせない。」

「なんですか、これ？　これが「オトナの男性」の眼力ってヤツでするか？」

「怖すぎですけどっ！　いや、怖いっていうか、甘すぎっていうかっ！」

「ええつと、でも、主任」

「今ここに居る俺は、君の主任じゃないよ。………美鈴<sup>みすず</sup>」

「………っ」

「さりげなく落とされた、爆弾。」

「それはもう、直撃でしたっ！」

「一瞬の間をおいてから、わたしは………」

「ちよつ、だわっ、くっ、はっ」

「意味不明な単語を連発した後、堪えきれず、笑いだした。」

「止めようと思うのに、笑いはちつとも止まらない。」

「ちよっ、もっつ、高倉しゅっ……主任、勘弁してっ、くださっ……っ」

もっつ、横っ腹が痛すぎる。筋肉痛になったらどうしてくれるんですかっ。

苦情を交えつつ、笑い続けているわたしを、高倉主任は呆れたような、失望したような顔で見下ろしている。眉間の皺は深く、ついたため息も同じくらいに深い。

「あのね、……美鈴？」

苦虫をガリガリ噛んだみたいな顔を近づけて、高倉主任はわたしの腕を掴んだ。

わたしはまだ笑いを止められない。すいません、と謝罪しつつ、抱腹絶倒している。

たぶん、緊張して張り詰めていた神経がふつつりと切れてしまったんだと思う。

「しゅっ、主任っ、もしかしてっ、用意してませんでしたか、その台詞？」

「……………」

「なんかすごく気合い入ってる顔してましたけど」

緊張とまではいかなけれど、「キメてやる」って顔をしてた。

それがもっ、すごく……可愛くてっ！それに、なんだか嬉しかったのだ。

「高倉主任でもそんな顔するんですねっ」

「……あのね、美鈴」

あ、あれ？ちよっと？なんですか、この体勢、いつの間

高倉主任はわたしの腕を掴んだまま、ソファーに膝を乗せた。高倉主任の胸がわたしの上に迫り、のしかかってくる。

高倉主任のもう片方の手が、わたしの顔の横に置かれ、あっといっ間に、高倉主任に閉じ込められてしまった。

「ちよっ……ちよっと、高倉主任っ」



「名前で呼ばないと、いつまでもこのままだよ？」

うつ、嘘だっ！ それ絶対嘘っ！

「それとね、美鈴。君は無防備すぎるよ。といっても、警戒されっばなしよりはいいし」

「ぎよわわっ」

耳元で囁かないでくださいってばっ！ 全身鳥肌立ちましたけどっ！

「それに、無防備に笑う美鈴を見るのは好きだから、まあ、いいんだけどね」

「しゅっ、にっ」

頬に息がかかるほど近くに、高倉主任の顔がある。

顔が、みるみる赤くなっていくのが自分でもわかる。

「笑いすぎの罰ってことで」

高倉主任の瞳に、悪戯な微笑が浮かぶ。

「泣かせるから」

「……うつ、ええっ？」

「嫌というほど泣かせるからね。今すぐ覚悟完了して？」

「って、ちよおおおっ」

わたしの奇声を、高倉主任はこともなげに押さえ込んだ。

軽くついばむようなキスに、抵抗できる術はなく。

わたしは硬直しつつも、抵抗を試みた。

「うつ……… やっ、そのっ、勘弁してくださいってば、……… いったいつつ、いっき維月さ………」

高倉主任は満足げに笑う。

「やだ」

鎖骨を指先で撫ぜられ、わたしは情けない上に色気のない声をあげる。

「ぎよわわっ」

やっぱ嘘つかれたっ！ 名前呼んだのにっ！ 高倉主……… いや、えっと、維月さん、離れてくれないっ！

「ちよっ、しゅっ、主任っ」

わたしは手足をばたつかせていたのだけど、一旦、それを止めた。そして、高倉主任……じゃなくて……維月さんの眼前にごぶしを突き出した。

「ジャ、ジャンケンしましょう、しゅ……、い……維、月さんっ」

「ジャンケン？」

「そ、そうですね。それでわたしが勝ったら、体、どかしてくださいっ」

高倉主任……じゃなくて、うっっ、慣れないな、……維月さんはいこりと笑った。悪代官一步手前の不敵な笑みで、そして「いいよ」と受けた。

わたしがバカでした。

ええ、それはもう、浅慮でした。

一発勝負、「ジャンケン、ホイッ」！

わたしがグーで、維月さんがパー。

うそ、なんで？！

維月さん、わたしがジャンケンで何出すか分からないって言ったのに、なんですか、最初から勝つこと分かってたみたいな顔しますけどっ？！

「気負ってるって、分かるって言ったろ？」

「……っ」

「と、いうことなんで」

維月さんは嬉々として、笑う。

「続行します」

「やうつ、わあぁっ！」

抵抗も空しく、わたしは情けない声をあげるばかり。

本格的な春の到来は、これから。

そして、わたしの「恋愛」もこれから本格的に始まる、みたい。

春の嵐の予感を、維月さんの抱擁の強さを感じて。

## 恋人宣言 2・5

あなたのことをもっと知りたい。

そして、何かしてあげられたらいいのについて思った時、改めて自覚する。

……好き、なんだなあって。

「あのですね、高倉主任……じゃなくて」

ぺちつと、わたしは頬を軽く叩いた。

すんなり出てこない名前を、出すために。

もう二年近くも「高倉主任」と呼んできたんだもの。そうそう慣れるもんじゃない。

それにワイシャツとスラックス姿でいる時は、やっぱり会社の上司って目で見てしまう。

たとえ今居るここが、高倉主任のマンションであっても。

しかも、とうに夜も更けた時間であっても。

「ええつと、い、維月さん」

言葉が詰まり、頬が火照る。差し出されたレモン味のチューハイを飲んでみたのだけど、喉を潤すだけで、声が滑らかに出てくる効果はないみたい。というか、かえって熱くなる。

そんなわたしを見て、高倉主任は嬉しげに笑っている。そして、こともなげにわたしの名を呼ぶのだ。「美鈴」と。それはもうさりりと、照れもなく。

うつつ、何やら口惜しい。

高倉主任……じゃなくて、維月さんはわたしの照れ顔を楽しがっている。

オトナなのかコドモなのか、維月さんは本当につかみ所がない。

「何、美鈴？」

ネクタイを緩めながら、わたしを見つめ返してくる高く……じゃなくて、維月さんの目は笑っている。何か期待するみたいに。

余裕の欠片もないわたしは思わず身構えてしまう。これはほとんど条件反射だ。

けど、挫けずに訊く。

「維月さんの誕生日って、いつですか？」

意気込んでまで訊く質問じゃないんだけど。

只知道りたいことだった。今まで訊く機会がなかったから。

「誕生日？」

維月さんは拍子抜けといった顔をして、だけど小さく笑った後、

「六月七日」だと教えてくれた。

「えっ、じゃ来月っていうか、もうすぐじゃないですか！」

「そうだね、そういえば」

うわ、あと一ヶ月ないよ、どうしよう?!

同じふたご座なんだあ、なんて悠長なこと思ってる場合じゃない

よ、わたし!

「もしかして何かしてくれるつもりだった？」

維月さんは目を細めて笑う。穏やかな瞳の色がさらにやわらいで、甘やかムードがそこはかとなく漂ってくる、……ような気がする。

……気がするんじゃないかと、確実に甘い色が濃くなったよ!

「そ、そりゃあ……一応は」

「そっか」

維月さんは持っていたグラスをテーブルに戻した。中身のブランデーはまだ少し残っている。氷がカランと涼しげな音をたてて、揺れる。

「それよりも先に、美鈴の誕生日があるよね？ 五月二十五日、だっけ？」

「え、なんで知ってるんですかっ」

ぎょっとして、わたしは大袈裟なりアクションを示してみせた。

そりゃあ、月一の割合で飲みに行く間柄だったけど、誕生日とかって、教えた記憶ないよ。

「履歴書見て、憶えてたから」と維月さんは答えたけれど、素直じゃないわたしはそれを鵜呑みになんてしなかった。

だって履歴書なんてそう度々見るものじゃないし、それに誕生日なんて仕事上まったく関係ない事柄じゃない。記憶に留めておくべき事項じゃない。

「疑りぶかいね、美鈴は」

「……………」

軽く唇を噛んで、少し俯いた。

だって、わたしなんかをこんなにも気にかけてくれるなんて、まだちょっと、信じられない。

維月さんのことを信じてないわけじゃない。だけど、どうしてもわたしなんかのどこが」と思ってしまう気持ちも拭いきれない。

「美鈴、もしかして、怒ってる?」

「は、……………ええっ?」

維月さんの不安げな声に、わたしは慌てて顔を上げた。

「怒ってって、なんのことですか?」

「いや、履歴書で個人情報確かめたのを怒ってるのかな、と」

「そんなことで怒ったりしませんっ! そりゃ、維月さん以外の人だったら嫌だって思うかもしれないけど」

「じゃ、怒ってない?」

「まったくもって、全然怒ってません。てゆうか……………すみません、わたしの方こそ」

「ん?」

維月さんは小首をかしげ、わたしを見つめ返す。

「不快な思いをさせてしまって、すみませんでした」

わたしの独りよがりな逡巡のせいで維月さんに気を遣わせてしまった。

情けなくて、また落ち込んでしまいそうになる。

「ただどこれ以上維月さんに心配をかけたくないし、それよりも先ず、維月さんに言っておくべきことがある。」

「わたし、維月さんのこと信じてますから」

「わたしのことはさておき、維月さんのことは信じているから。」

維月さんの「心」は。

「うん」

維月さんは口元をほころばせ、優しく笑った。

「伸びすぎた感のある前髪をうつつとうしげに掻きあげる仕草ときたら、目がチカチカするほど艶っぽい。」

「酒のせい？ ああ、もうっ、酒のせいってことにしておこう！」

「心臓が炙られて焦げそうなのも、酒のせいってことで！」

「そっ、それより、よく憶えてましたね。男の人ってそういうのすぐ忘れるもんだと思ってたけど。あ、でも維月さんは几帳面ですもんね、わたしなんかよりずっと。気が利くっていうか、目端が利くっていうか」

高倉主任の細やかな気配りは、わたしだけじゃなく他の派遣社員の人達にもちゃんと向けられていた。些細なミスを知らぬうちに訂正してくれたりする一方で、失敗を叱ることもある。けれど叱り方まで気を遣っていて、さりげなくフォローするのも忘れない。器用な人だなあって、感心してた。

「ほんとに高倉主任って、底の知れない人だと思う。」

「もしかして俺、褒められてる？」

「え？ もちろんですよ。みんなにもっと気づいてほしいって思ってるくらいなんですよ？ 陰から支えてくれてる『高倉主任』のこと」と

「……………」

維月さんは顎をかき、何やら困った風な微笑を浮かべた。

「返答に窮し、きまりの悪そうな顔をしてる。」

「……………あれ？ めったに見ない表情だけど、もしかして、……………照れてる……………のかな？」

「うわあ、新鮮だ！」

「ちよつと……可愛い……かも。」

「てゆうか、ですね。わたしまで照れくさくなってきちゃったんですけど。」

「けど、ちゃんと言わなくちゃ。肝心なことだもの、わたしにとつて。」

「それから、誕生日憶えててくれて嬉しかったです。しかも同じふたご座なんですよ。なんだかそれも嬉しかったりして」

「言ってから、さらに気恥ずかしくなった。」

「顔、熱っ！ 維月さんの顔が見れませんけど。」

「美鈴」

「維月さんの、いつもより低い声が耳を撫ぜる。」

「全身が栗立つ。アルコールのせいだけじゃない、この熱。」

「顔を上げると、そこには優しく微笑んでいるオトナの男の人がいる。」

「会社の上司じゃない、わたしにとって「特別な」男の人。」

「……恋してる、人。」

「俺こそ嬉しいよ、美鈴」

「は？ え、と、何が、ですか？」

「………見ていてくれて」

「え？」

「わたしは首をかしげ、目を瞬かせた。」

「何が嬉しいのかな？ 褒められたから？ 同じふたご座だから？」

「………わからないけど、そうじゃない気がする。」

「維月さんは答えない。代わりにわたしの頭に手をおき、ポンポンと軽く叩いた。」

「そのお礼も兼ねて。誕生日、何かしてほしいこととか、ほしい物とか、希望あるならきくよ？」

「そんないきなり言われてもっ」

「ああ、まあ、そうだよ。けどあと何日もないし」



どうしようかと訊かれ、わたしも困ってしまふ。

だいたい、わたしのことより、わたしにとって大事なのは、維月さんの方なんだからして。

「あのですね、維月さん」

「うん？」

「それ、わたしも訊きたいんですけど。維月さんの誕生日、わたしも何かお祝いしたいから。欲しい物とかそういうの、何かありますか？ わたしができることで何かあれば、それでも」

「それは嬉しいね」

につこりと、維月さんは笑った。悪戯を思いついた子供みたいに。……あ、しまった。こういう顔する時の維月さんは、キケンだ、キケン！

こういう時のわたしの直感って、当たるんだ。経験的な「直感」ではあるんだけど。

「いきなり言われても、思い浮かばないな」

わたしの頭に置かれていた維月さんの手が、滑るように下へ移動し、髪と耳先をつままれた。

ひゃっ、と声が漏れる。

「けど、欲しいものなら今日の前にあるから、前倒しして、もらっていい？」

「……っ！……っ！」

慌てふためくわたしなど、維月さんはお構いなしだ。というか、明らかに面白がってる。

わたしばかりなんでいつもこう余裕ないのかな、もおっ。

しかえし……というか、ちょっとはわたしの方からって、思ってるのに。

「ちょ、ちょっと待って」

顔を迫らせる維月さんに、わたしは慌ててストップをかけた。

「ん？」

維月さんの前髪が、わたしの額にかかる。そのまま、維月さんは

動きを止めた。

「誕生日、わたしの方が先なんですけど」

「ああ、うん」

維月さんは目を瞬かせた。

砂糖を山盛りに入れたコーヒーみたいに甘い色をした瞳に、くらくらす。

顔が火照って、耳まで赤くなってるのが自分でもわかる。

維月さんは静かな微笑を浮かべたまま、焦っている様子もない。

ただ少しだけ、……お酒のせいかもしれないけど、吐息は熱かった。手も、温かい。

わたしは維月さんの胸元を、きゅっと掴んだ。

「ええっと、だからですねっ」

「えええいっ！」

気合いで、恥じらいを吹き飛ばした。

そして、首を伸ばし、顎をあげて。

ちゅっ、と。

わたしから先に、キスをした。

その後維月さんがくれたキスは、ちょっぴり苦くて、とびきり甘い、ブランドーの味がした。

### 恋人宣言 3

ネクタイをゆるめ、首を伸ばして嘆息する。

そんな何気ない仕草が、妙に艶っぽく、さまになってる、高倉維月さん。

うつとり見惚れて、それから慌てて目を逸らす。

そんなことを繰り返してばかりの毎日は、ほんのちよっぴり、もどかしい。

不器用なわたしは、やっぱり「社内恋愛」向きの性格じゃないんだらうな。

でも、もう抑えきれないことも、自覚してる。

派遣社員として入社し、配属された部署の上司である高倉維月さんと出逢ったのは、二年とちよつと前。

二年の間、単なる派遣社員と上司という間柄だったわたしと高倉主任は、現在、「お付き合い」をしている関係に変わった。

もちろんそれは、会社の皆には秘密にしてる。

別段、社内恋愛禁なんてことはないんだけど、やっぱりあまりおっぴらしていいものじゃないと思う。……というか、気恥ずかしいっていうわたし個人のわがままな理由が大きい。

「内緒の方向でお願いします！」、と懇願したわたしだけど、必死に頼み込まなくても、高倉主任はきつと黙っていてくれただろう。

「秘密っていうのも、スリリングで楽しいかもね」

おどけたように笑って、わたしの力を緩めてくれる。

高倉維月さんは、そういう気遣いがさらりとできる人なのだ。

「どうやら今日は残業もないようで、定時に上がれるようだ。」

わたしの顔を見て、一瞬何か言いたげな目をした高倉主任だったが、口に手をやり、眉間を寄せた。

周囲の目を気にしてくれたのだと思う。

「お疲れ様でした」

と言つて軽く頭を下げたわたしを見る目は、まだ「上司」の顔。

高倉主任は何人も派遣社員を束ねている立場にいるから、終業後もよく、派遣社員の女の子達に、話しかけられている。

それはもっぱら仕事上の相談だったり愚痴だったりするのだけど、たまに（とくに金曜日なんかには）、「みんなで飲みにいきませんか？」という誘いの声も聞こえてくる。

みんなで、という単語がつかだけまだ安心なんだけど、それを聞くたび、胸がちくちく痛む。

……子供っぽい、やきもちなんだって自覚はしてる。だけど、その気持ちを抑えられるほどの余裕を、わたしはまだ持ってなかった。

高倉主任を誘う女性職員の目的は、高倉主任個人というより、高倉主任の財布だったり、あるいは他の男性社員を誘う口実だったりすることが多い。それは、本人も認めていた。

「部下を引き連れて飲みに行く以上、全額奢らなくとも、ある程度の金は落としてこなきゃならないからね。正直、面倒だと思ふ事もあるけど、これも人間関係をスムーズにさせる一つの方法でもあるから、仕事の一環として、割り切ってるよ」

飲みに行くのも、仕事のうち。

大変だなんて、思う。

少し前まで、わたしも「高倉主任」にはよく奢ってもらっていたし。

だから、今になって……わたしと高倉主任の関係が変化したから

つて、……文句を言っちゃ、いけないよね？

みんなで飲みに行くという時は、大抵わたしにも声がかかる。でも、最近は断っている。人付き合いが悪いと思われては仕事にも差支えがあるだろうと、時々は誘いにのるけれど、独り暮らしを始めてからは、「財布がピンチなんで」という理由で断れるようになった。

だから今夜も、残念そうなふりをして断った。

……ビアガーデンというのには、少し惹かれたけれど、飲みに行く気分にはなれなかった。

高倉主任は断れなかったみたいだった。

今夜は「維月さん」と一緒にいられないんだと思うと、ちょっとだけ……うつん……とても……寂しかった。

なんてわがままになっちゃったんだろう、わたし。まいったなあ、とため息をこぼし、そのため息の深さ分、凹んでしまった。

高倉主任の後姿を振り返りつつ、

「お先に失礼します」

短く挨拶をして、わたしは足早に会社を出た。

前々から思っていたんだけど、……高倉維月さんって人は、不意打ちかけるのが好きなんじゃないだろうか。しかも、いつも成功しているし。

わたしの心を読んだかの如くの行動に驚かされ、とまどわされる。「遅いよ、美鈴」

アパート前に、シルバーグレイの車が停まっていた。そして、見

覚えがあるどころではない男の人が、車にもたれかかるようにして立っている。

「定時に上がったはずなのに、ずいぶんと遅かったね」

「え、え、ええっ!?!? な、なんでっ?」

不機嫌な顔と声のその人は、数時間前に会社で別れたばかりの、高倉主任だった。

腕を組み、じっとわたしを見つめている。夜闇のせいではつきりとは見えないけれど、街灯の下、維月さんの眉間には深々と皺が寄っている。

……なにか……怒ってる……?

「電話、全然繋がらないし。まあ、無事でよかったけど」

「え、あ……」

大慌てで、鞆をまさぐり、携帯電話を探した。電車に乗る前に電源を切つて、そのまま鞆の奥底に沈んでいた携帯電話は、ストラップが何かにひっかかっているらしく、取り出そうにも取り出せない。「す、すみません、色々寄り道してたものだから、あのっ、心配をさせてしまって……っ。け、けど、……維月さん、なんでここにいらっしゃるんですか?」

背中に、汗が流れる。

冷や汗なのか、それとも夜風が蒸しついて熱いからなのか。

なににせよ、心臓は煽られて、急速に心拍数を上げている。

「いちゃいけなかった?」

維月さんは微動だにせず、腕を組んだまま、わたしを見つめている。

維月さんの低い声に追い詰められて、さらに鼓動が速まる。

「そっ、そういうことじゃなくて! だって、みんなとビアガーデンに行ったんだと……」

「……………」

維月さんは軽く息をつくと同時に、組んでいた腕をほどき、短く応えた。

風に乱れた前髪を、うつとうしげにかきあげる。大きな手と、筋張った手首が、さらにわたしの心拍数を上げる。

「少し付き合って、あとは金を置いて、抜け出してきた」

「……………」

「今夜は美鈴と一緒に……………って、……………美鈴？」

この時のわたしの行動は、わたし自身驚くほど大胆なものだった。小走りに駆け寄って、維月さんの胸元に飛び込んだのだ。甘えた仔猫みたいに背中を丸めて、それから背中に腕をまわして、軽くシヤツを掴んだ。

「維月さん、わたし、……………すごく嬉しいです。嬉しくて、今ちよつと……………気が動転してますからっ」

「……………美鈴」

維月さんの手が、わたしの頭の上に置かれた。

指先で、くすぐるように後頭部を搔いている。官能的とすらいえる指使いは、まるでわたしの感情を誘い出しているかのようだった。照れくさい台詞が、口について出てくる。

「やきもち焼いて、一人で悶々として。今夜は一緒にいたいって思ってたのだって、ほんとは我慢したくなくて。でも、そんなわたしの心も、維月さんはいつだってお見通しで……………。ずるいつて思っちゃうくらいに、維月さんは優しすぎなんです」

声が震える。体中が熱くなる。

泣きそうになっただけのこと、きつと維月さんは気づいているのだから。

腰に回っていた維月さんの腕に、力がこもった。

維月さんの甘やかな香りがわたしを包んでくれている。夢見心地って、きつとこういう気分のことを言うんだ。

胸はどきどきしっぱなしだし、足はふわふわ浮いてるみたいだし、落ち着こうなんて無理な話だ。

維月さんの指が、わたしの頬から耳、うなじへと動いた。

反射的に身を縮こまらせたわたしの身体をさらに寄せて、維月さ

んは耳元でささやく。

「可愛いことを言ってくれるね、美鈴？」

「……………っ！！！」

耳に息を吹きかけられて、途端、わたしは我に返った。

「わっ、た……………っ！ わぁあっ、あのっ、いつ、いきなり抱きついちゃってすみませんでしたっ！」

身体を離そうと、維月さんの胸元に両手を押し当てた。

夜とはいえ、まだ人の往来もある路上。こんなところで抱き合ってるなんて、はっ、恥ずかしいにも程があるよ！

そりゃあ、抱きついたのは、……………わたしからなんですけどもっ！

「あ、あのっ、もう離れたいんです、けどっ！」

「もっ？」

維月さんは意地悪く笑って、けれど名残惜しそうに、腕を放した。

「遠慮することないのに」

「遠慮とかじゃなくてすねっ！」

恥ずかしくて維月さんの顔がまともに見られない。穴があったら速攻もぐりこんでしまいたいっ！

衝動的だったとはいえ、なんてことしちゃったんだろ、わたし！  
熱帯夜とは言えない今宵だけど、わたしの感情気温計はうなぎのぼりに上がって、茹であがっている。

「……………美鈴」

くっついていた身体は離れたとはいえ、わたしと維月さんの距離は、近いまま。

維月さんは、またわたしの頭に手を置いた。

維月さんはよくこうしてわたしの頭を撫でる。子供を宥めるかのように、優しく。

だけど、こういう時に限って維月さんは、わたしを子供扱いしない。

維月さんは柔らかく笑んでいる。それから、ごく当たり前のように顔を近づけ、そっとキスをする。羽根が触れるみたいな、口づけ。



「……ちよつ、わつ、やつ、維月さん……っ、こんなところぞっ！  
一瞬の事とはいえ、人通りもまだある路上で、キスなんてっ！  
大仰に慌てたって、当たり前前！なのに維月さんは何やら可笑し  
そつに、あるいは嬉しそうに笑っている。ちゃっかり、手まで握っ  
てる。」

維月さんの不意打ちには、まったく敵わない。急所に打ち込まれ、  
立っているのですら、やっとだ。眩暈がしますけどっ！

「美鈴が思ってたことを実行したただけなんだけど、ね？」

「……ってそれ、維月さんがしたいと思ってたことの間違いなんじ  
やあ……」

「うん、そうとも言っね。つまり、俺がしたいと思ってたことと、  
美鈴がしてほしいって思ってることは、大抵同じなんだよ」

だから『分かる』のだと、維月さんは言った。

わたしの心を読み取っているのではなく、自分がしたいと思うこ  
とをしているのだと。

維月さんは小首を傾げ、茹でタコもびっくりなくらいに赤くなっ  
ているだろうわたしの顔を、また覗き込んできた。

「キスしたいと思った。してほしいって、美鈴も思ってたよね？」

「あ、う……」

「今も」

艶かしい声と視線は、夏の夜風にあたって、さらに甘みを上げて  
いる。

維月さんはまたしても顔を迫らせてくる。

「う、やつ、ここじゃだめですっ！」

だめですってばっ！と、うるたえつつも抵抗を試みてみたの  
だけだ。

わたしの抗議の声は、いともたやすく、維月さんによって塞がれ  
てしまった。

同じこと考えていた、なんて、恥ずかしすぎて頷けない。

……なのに。

「否定しないよね、美鈴？」

維月さんはやっぱり、わたしのことなんて、お見通し。

## 内緒のメッセージ

わたしの「恋」はもっかのところ、「秘密の恋」。

不倫ってわけじゃないけれど、同じ会社の、しかも同じ部署の上  
司と部下。

社内恋愛は禁止なんてことは言われてないけど、やっぱり当面は  
隠しておく方が無難だと思う。

「秘密っていうのも刺激的でいいかもね？」

高倉主任は冗談めかして言うけれど。

……刺激がありすぎて、ちょっとばかり困惑気味のわたしだった  
りする。

高倉主任から突然の告白を受けてから、ひと月半。

わたしこと木崎美鈴と、わたしの上司である高倉主任……高倉維  
月さんとの「仲」は今のところ誰にも気づかれていないみたい。

そして今現在。わたしの眉間には皺が寄っている。

困ったことが起こったわけではなく、ふと思いついたことがあっ  
たからだ。

それは、実にくだらない……というか、しょーもないこと。思い  
ついたきっかけは、今手に持っている書類の束だ。

この書類を高倉主任に渡すよう、総務課の事務長さんに頼まれた。

「……………」  
書類はもちろん早々に手渡すつもりだけれど。

「……………うーん」  
高倉主任もいる、自分の所属している課に戻るその途中でわたし  
は足を止めた。

燦燦と照りつける陽射しが暑い、廊下。もうあと二十歩ほど歩け

ば、高倉主任のいる部屋に着く。そこには高倉主任だけじゃなく、何人も社員や派遣社員がいて、それぞれの仕事をこなしている。だから、「事務長からです」と一言添えて渡すだけ。高倉主任も、「ありがとう」と返すだけだろう。

事務的な会話に、時々雑談をまじえることもあるけれど、めったにしないし、今となっては極力避けるようになってしまった。

秘密の社内恋愛って、すごく骨折リだ。

だけど、ね。時にはわたしだって余裕ぶってみたくなる。

高倉主任に先手を取られてばかりで口惜しいし。

せつかくの……というところとちょっと楽しんでるみたいな響きがあるけど……「秘密の社内恋愛」なのだから、こういう時って、秘密のメモをこっそり書類に挟みこんでおくのが、定石じゃない？

今夜はあいてるか、とか、日曜日はどこに行こうかとか、そんな感じのメモを挟んでおくの。

………我ながら妄想激しいな、とは思っけど。

けれど結局、メモは挟めなかった。ペンは持ってたけど、紙がなかった。……書く事も、すぐには思いつかなかったし。

でもいつかやってみたいな、なんてことを考えながら、わたしは高倉主任の元へと急いだ。

事務長からですと書類を手渡すと、高倉主任はにこりと笑って、「はいこれ、社内広報。木崎さんの分」

と、物々交換みたいにA4サイズの社内広報を差し出してきた。高倉主任は、わたしの手に渡った社内広報の表紙をぼんつと軽く叩いて、言った。

「すぐ読むようにね」

「……わかりました」

一瞬高倉主任の瞳に過ぎった、いたずらっぽい光。それは「ジャンケンしよっか」と言ってきた、あの時の瞳と同じだった。

歩きながら、社内広報のページを繰った。

「……う、ええっ」

その瞬間に、思わずもれた奇声。

わたしは慌てて社内広報を閉じ、胸に押し当てた。

傍にいた人達は、「何事か」と怪訝そうな顔をわたしに向ける。

「どうしたの」と声をかけてきた同僚もいた。

わたしは首を横に振って、

「いや、ほんともう何でもないからっ」

と答えたものの、自分でも顔が赤くなっているのがわかって、平常を装うなんてできなかった。

ともあれ、「なんでもないから」と繰り返し、急ぎ足で持ち場へ戻る。その途中、わたしは肩越しに振り返ってみた。

わたしの目は、口元にこぶしを当てて笑いを堪えている高倉主任の姿をとらえた。

高倉主任め、なんてことしてくれるのよ、もおおっ！

誰も見ていないことを確認してから、わたしは身体を縮こまらせて、もう一度社内広報を開いた。

テープで貼られた一枚のメモが、そこにある。

『今夜八時、うちにおいで。待ってる。維月』

あいにくなのか、さいわいなのか、このメモは自動的に消去されたりはしなかった。

もおおっ、高倉しゅ……じゃなくて、維月さんってば、大胆すぎるよ！ 心臓が口から飛び出るとこだったよ！

まだ心臓、鳴ってる。顔も火照ったままだし！

てゅーかですね。

これって……以心伝心？

どうして、わたしがしたいって思ったことを、維月さんはわかって、先にしちゃうんだろう。ずるい。ほんとにずるいよ、維月さん。

嬉しいけど、ちょっとぴり口惜しい。口惜しいけれどやっぱり、すごくドキドキして、維月さんが言ったみたいに、刺激的だ。

社内恋愛の醍醐味ってヤツだよな、なんて維月さんは言ってたけど。

わたしは顔をあげ、離れた場所で派遣社員達に指示を与えている維月さんを見やった。

維月さんはもう「主任」の顔に切り替えていた。

わたしを見ないようにしてるみたいだった。

維月さん直筆のメモをはがし、それを手元にあった化粧ポーチにしまった。

「次はわたしからしてやるんだからっ」

その決意表明は口には出さず、代わりにこぶしを握り締めた。

どんな方法で内緒のメッセージを送ろうかな。  
二人だけが解かる暗号なんか、作ったりして。

できないと思って宣言した「社内恋愛」なのに、ちょっとだけ楽しみ始めている自分がいて、驚きを隠せない。

だけどやっぱり、わたしばかりが余裕をもてなくて、焦って、とまどってる。

維月さんは悪戯っぽく笑い、

「俺だって余裕ないんだけど」

そう言ってから「ほらね」とわたしを抱きしめた。

「ちよっ、はっ……わわっ」

押し当てられた維月さんの胸からは速まってる鼓動が聞こえる。

「けど、余裕なんて、要らないから」

「……………」

わたしは無意識のうちに、ほどけて首にかかっていただけのネクタイを掴んでいたのだけど、力を入れた拍子にするりとはずしてしまった。

「美鈴、それ反則」

「や、あのっ」

「まあついでだから、シャツのボタンもはずしてくれると嬉しいんだけど」

「ちよっ、いつ、維月さんっ、もおっ、何考えてんですかっ」

一応は、抗ってみる。無駄だとわかってるんだけど。

維月さんはわたしの顎に手をかけて、顔を上げさせた。そして、艶めいた微笑を浮かべて言った。

「内緒。というか、お楽しみに、かな？」

「……………っ！！」

顔も頭も、一瞬にして沸騰した。

甘すぎる刺激はほどほどに。ほどほどに願います、維月さんっ。

## 落ちたと気づいた

我慢しようとするほど、声は漏れてしまう。

手で押さえても、唇を噛んでも、喉元から、鼻から、零れてしま  
う。

くぐもった声がさらに身体を緊張させ、硬くさせてしまう。

枕に顔を埋めていたのだけど、息苦しくなって、横向けた。そん  
なわたしを気遣って、うつ伏せているわたしの身体の上から維月さ  
んがそつとささやいた。

「痛むなら、言って。我慢することないから。……ね？」

「……っ」

身体が強張ってしまふ。

維月さんの声は、少し掠れてた。疲れ気味なのは、わたしのせい  
かもしれない。

身構えていたとはいえ、やっぱり声はあがってしまふ。

「……っ、い、た……っ」

痛みが走ったのと同時に、足も跳ね上がった。維月さんを蹴り飛  
ばすにはいたらなかったけど、わたしの過剰な反応に維月さんは慌  
てて手を離れた。

「ごめん、キツくしすぎた？」

「……う、や、あの……すみません、大丈夫です」

大きく息を吐き出して、わたしは全身の力みを抜く。

額から汗が流れ落ち、維月さんがそれを指先で拭ってくれた。

「続けてもいい？ それとも、もう止めようか？」

「ひゃっ、わっ」

もおおっ、耳元でささやくのは止めてほしいんですけど！

わたしの粟立った肌を見て、維月さんは小さく笑っている。



「どうする、美鈴？」

シャワーを浴びたばかりの維月さんの髪は、シトラス系の香りがある。だけど、その爽やかな香りさえ凌駕する濃厚な甘い香りが、維月さんの、少し掠れた低い声に含まれている。

「……………も、もうちょっと……………」  
「ん？」

ううっ、維月さんめ！ ぜったいわたしの反応見て楽しんでるっ！  
それを分かっているのに、抗えないよ。  
だって、だって……………

「っ、っづ……………けて、ください」

維月さん、上手なんだもん。……………気持ちいいんだもん。  
恥ずかしげもなく、「続き」をせがんでしまう。  
病みつきになったら……………どうしよう。

熱に浮かされていている頭のすみっこでそんな焦りを感じているわたしを、維月さんはきっと見透かしてる。

「じゃ、もう少しね」

「は、い……………お願いします」

わたしは顔を枕に埋め、小さく懇願した。

そういえば維月さん、学生の頃からテニスをずっと続けてるって言うってた。だから身体にだぶつきがないし、体力も筋力もある。

全体的に均整がとれていて、筋肉にも張りがある。とくに、腕、……………手首なんか。一見ただけでは分からないけど、意外にごつくて、筋張ってて、見惚れてしまうくらい。

維月さんはどちらかといえば柔和で穏やかな顔立ちだけど、手や腕は（ついでに胸元も）見た目に反して逞しく、当たり前なのかもしれないけど、「男の人」って感じがすごくする。

わたしは、維月さんの力強い手と包容力のある腕が堪らなく好きなんだと、こんな時に改めて気づかされる。

「ここ、気持ちいい？」

「んっ、は、う……はい」

「素直だね、こういう時の美鈴は」

「うう……っ、そ、んなこと、な……、と思います、けどっ」

声をつつかからせながら、反論してみる。身体の揺れに合わせて声も揺れてしまい、滑らかに出てこない。

顔も髪も、くしゃくしゃになってるのに違いない。

「いつにもまして、……艶かしい」

「ちよっ、やつ、そ、な、はわっ」

ほこほこ温まり、ほぐれていた全身が一気に温度を上げ、火がついたみたいに熱くなる。

「恥ずかしい？」

維月さんは楽しそうに笑い、わたしのうなじに手を当てる。親指と人差し指を、ぼんのくぼへ這わせていく。

ぞわぞわして、痛いけど、不本意ながら……気持ちいい。

「はっ、恥ずかしいですからっ」

「けど、気持ちいいんだ？」

「もっ、もおっ、維月さんっ、からかわ……な……っ」

じたばたと、両足をばたつかせてみた。維月さんを退けようとしてみたのだけど、本気で退けたいわけじゃないから、ちっとも力が入らない。

「ごめんごめん」

維月さんは笑いつつ、わたしの後頭部を軽く叩いて、それから髪を撫ぜる。

「他、してほしいところ、ある？ 痛くない程度にするから、言うて？」

「ん………あ、の」

枕をそっとどけ、顔を横向けた。意地悪を言う維月さんに文句を

返す余裕もない。息すら、苦しい。

……維月さんの手が、気持ち良すぎて。

「も、そろそろ、い……です」

「そう?」

「は、い。もう、……楽、に」

楽になったけど、……苦しいなんて。さすがに言えなかったけど。速まってる脈拍が聞こえちゃうんじゃないかなと、それも、恥ずかしかった。

「それにしても」

うつ伏せたままの状態のわたしから、維月さんは身体を離した。ため息をついてから再びわたしの背骨から腰骨を、親指の付け根あたりで強くこすりつけるようにして、押し撫ぜる。

「ずいぶん凝ってるね、美鈴。……まあ、うちの模様替えを手伝ってもらってこんなこと言うのはなんだけど」

入居してまだ一年にも満たない維月さんのマンションは、ほどよく整頓され、ござっぱりとしていつもきれいだ。

そう言ったら、「頻繁に模様替えをしているから必然的に整頓される」という返事が返ってきた。

梅雨の中休みの土曜の午後、維月さんの部屋の模様替えを手伝うことにしたのは、日ごろの感謝の気持ちを形にしたかったという、私的理由。

そして、

「ついでに、美鈴の私物入れの場所も作っておくから」

その一言にほだされちゃったなんて、………維月さんにはバレちゃってるだろうけど、言えせんつ。

気遣わしげに、維月さんがわたしの顔を覗き込んでくる。

「身体、もう辛くない？」

「は、はい」

身体を起そうとしたのだけど、なにやら力が入らず、わたしは維月さんのベッドの上、うつ伏せた格好のままにいる。

こういつ時って、脱力しきっているのか、すぐに身体を動かせない。

「維月さん、マッサージ上手ですね。すごいです、気持ちよかったです」

「はあ、と大きく息を吐き出し、ついでに手を組んで腕を伸ばした。」

「会社の上司に全身マッサージしてもらっちゃうなんて、すごい果報で贅沢な部下ですよ。あ、でもこれって、もしかして逆セクハラ？」

「セクハラとは違うんじゃない？ それに今の俺は、美鈴の上司じゃないよ」

「あ、そ、そうですね、ごめんなさい」  
慌てて、訂正した。

維月さんは眉をしかめただけで、それ以上は何も言わなかったけど、セクハラなんて言われて、やっぱり気分を害しちゃったのかもしれない。

もうっ、わたしってなんでこう迂闊かな。

維月さんの役に立つどころか、疲れさせちゃうなんて。

ベッドの端に腰かけている維月さんが、またため息をついた。視線を上げ、維月さんの顔を見やると、なにやら眉尻を下げて、困ったよう顔をしていた。

「……維月さん？」

「あのね、美鈴？」

「はい？」

「前にも言っただけど」

「はあ？」

維月さんの顔が近づいてくる。

途端、頭の中でシグナルが点灯した。目も、チカチカする。

しつとりと落ち着いた微笑は、『キケン』の前触れだ。甘くて熱い危ない罠に、わたしを誘う。

「美鈴は本当に無防備すぎる。そうやって俺を煽るの、……わざとじゃないよね？」

「え、ええ？ な、なんのこ……っ」

「無自覚というのがさらに性質が悪い」

「う、す、すみません」

何のことやら分からず、だけど「悪い」と言われて、つい条件反射的に謝ってしまった。

「本当に、まいった」

「……………え？」

いきなり視界が、狭くなった。

避ける間もなく、維月さんがわたしをその身体全部で、閉じ込める。

マッサージしてもらっていた時と同じような姿勢のはずなのに、維月さんの表情から醸し出される雰囲気は、明らかに甘味成分を増している。さらに強く、激しく、躊躇なくなだれこんでくる。

「お誘いには、乗じないとね」

「はええっ？」

誘ってなんかいませんよっ！　なんて、言い返してみたところで、維月さんは手を休めてはくれない。

苦しいんだか、気持ちいいんだか、もうわけが分からなくなって、自分のものだとは思いたくないような声が、堪えようとするわたしの意なんか無視して、零れ、喘いでる。

「……………落ちて、く」

ふと漏れた維月さんの声に、わたしも急転直下に、落ちてゆく。

不安にかられて握った手を、維月さんはきつく握り返してくれた。

怯えて震えるわたしの身体を、そうして解ほくしてくれる。

その、大きく温かな手で。

## あと一歩踏み出すだけ

会社においてはわたしの『上司』で、プライベートにおいてはわたしの……こっつ、『恋人』の高倉維月さんは、あまり自分のことを語らない人だ。

ただの『上司と部下』という関係だった頃から一緒に飲みに行っていたけど、そうした期間があったにも関わらず、高倉主任のプライベートって、知らない事が多かった。

別段隠している風ではなかったから、訊けば、大抵は困った顔もせずに、教えてくれる。

「詮索されるの、イヤじゃありませんか？」

と、少しばかり不安になって訊けば、

「美鈴になら構わないよ」

と、こちらが困るような事を言って返してくる。

お兄さんがいるのは知っていたけど、妹さんがいるのは知らなかった。

学生の頃からずっとテニスをやってて、今もサークルに所属していることも、最近知った。

腕時計マニアで、古いアナログタイプの時計をいくつかコレクションボックスに収納していて、たくさんはなかったけど、意外なところまでこだわりを持つ人なんだと、新たな発見もした。

ピーマンが嫌いだって知って、つい笑ってしまっただし、玉子焼きは甘い砂糖入りはどちらかといえば苦手らしいことも、教えてもらった。

訊けば、維月さんは話してくれる。

だけど、わたしに訊き返してくることは、少ない。

わたしを気遣ってくれてるのだと気づいたのは、……つい最近。

ずっとそうしてくれていたんだって、遅まきながら、ようやく気がついた。

維月さんの過去のことを、知りたくないのに、時々知りたくなる。聞いたら落ち込むかもしれない自分を分かっているから、維月さんの過去の『彼女』のことなんて、知りたくなかった。

つき合う前には、そんなこと全然思わなかったから、わたしが直接聞くことはなくても、そういう話の流れになった時だって、別段平気で、聞いていられた。

……こつというのが心境の変化で、わたしが高倉主任を特別に意識してる証拠みたいなものなんだろう。

高倉主任……ううん、上司ではない『維月さん』は、どうだったのかな？

維月さんも、こんな風にわたしに対する心の変化を自覚していたんだろうか。

わたしはほとんど無意識に、維月さんを見上げていた。

維月さんはキッチンに立ち、朝の目覚めを促してくれるコーヒ―を淹れてくれていた。

「何、美鈴？」

わたしの視線に気づき、維月さんは微笑を浮かべる。

わたしと違って寝起きのいい維月さんは、わたしと違っていつでも余裕たっぷりに見える。

そんなことないよって維月さんは笑うけど、そんなこと、あると思っ。

「維月さん、あのう……」

ぼんやりと寝ぼけた頭では思考をまとめることもできないし、抑えることも当然できない。



寝ぼけ眼を維月さんに向け、わたしはぼろりと言葉をもらした。

「維月さん、……わたしのこと、好き、ですか？」

「……………」

頭も身体も、ふわふわ夢見心地。わたしはまだ半分眠ってるのか  
もしれない。

維月さんの夢を見るのかももしれない。

力が抜けて、そのまますぐ後ろにあるソファ―ベッドに身体を預  
け、目を閉じてしまった。

「美鈴」

日曜の朝はもっとゆっくりしてていいよね。あと……もうちょっ

と……………」

「美鈴？」

すぐ近くで、維月さんの優しい声がする。苦いような甘いような  
コーヒーの香りと一緒に、維月さんの手が、わたしの頬に触れてい  
る。

維月さんがわたしの横に腰かけて、肩を貸してくれた。ベッドに  
戻ろうとしたのだけど、この方がずっと心地いい。

「……………だよ、美鈴」

維月さんはわたしの髪を指に絡め取り、そして耳元でささやいた。

「ん……、わたし、も……………」

あともう一步踏み出して、そして維月さんの心に近づこう。

たった一言があれば、きっと、それはできるはず。

維月さんは、そうやってわたしの心に触れてくれる。

詮索をするのではなく、そうしてわたしの心を知ってくれる。

わたしにも、できるのかな……………？

不器用なわたしにも……………？

「好き、です、維月さん」

眠り込んでしまったから、維月さんの反応は窺えなかったけれど。

## またたく花色 【前】

火遊びをしませんか？

ちよつと大胆に、ちよつとふざけて、思いきつて彼を誘ってみた。きつと彼 高倉維月さんは、笑って、誘いに乗ってくれる。

うまく火を点けられるかどうか自信はない。けれど、わたしの方から燃やすことができなかったとしても、自然発火してしまうんじゃないかと思う。……むろん、わたしの方が、だけど。

いつだつてわたしは維月さんに熱せられ、焦げ痕を残されてしまふのだから。

日本の夏といえば、やっぱり花火。打ち上げ花火だ。これを見なければ夏は始まらない……とまでは言わないけれど、夏の風物詩であるには違いないと思う。

ということ、先週の土曜のことだけれど、友達……女ばかり四人で、地元で行われていた花火大会へ行ってきた。

全国でも有名な花火大会ってわけじゃなく、地元の、ちよつと大きな公園で開かれる夏祭り、知名度は地元民なら大抵の人は開催日と場所を知っているって程度。

「年々ショボくなっていった新作も少ないけど、それなりに見ごたえはあるよね」

と友人が言うように、上がる花火の本数は年々少なくなっているような気がする。数えてるわけじゃないけれど、花火と花火の間隔が長い時があったりして、どうにもごまかされているような感がある。

それでも、花火が上がり、ドンツと大きな音をたてて火花を散らすたびに歓声も上がって、わたしも友人らも、子供っぽく手を叩いて喜んだりした。

やっぱり一夏に一度は、こういう空に上がる大きな花火を見なくちゃ！

夏の夜空に咲く大輪の花は、もやもやと心に淀んでる鬱気を晴らしてくれる。人混みは苦手だし、暑さも半端ないけれど、観に行きたいと思う活動的な気分もまた、心身の倦怠感を拭ってくれるのかもしれない。

ともあれ、友人らに誘われて花火大会に行ったのは、ちょっと沈みがちになっていた気持ちを上向かせるためでもあった。単純に、打ち上げ花火を見たいってこともあったのだけ。

花火大会の会場では、地元ということもあって、屋台を出してる人の中に顔見知りもいたし、ばったり昔の同級生と出くわしたりもした。そういう出会いは、確率は少なくともあるだろうと予想していたし、覚悟もしていた。

だけど、まさか会うとは思わなかった会社の人達もいて、それにぎよつとさせられた。

「あれえ、木崎さんじゃん？」

と、背後から聞き覚えのある声で呼びとめられた時には、ほんと驚いたし、狼狽した。

わたしを呼び止めたのは、同じ課の桃井香歩さんだった。他に、わたしとは別の課にいるけれど、同じ派遣会社から来た女の子も三人ほどいて、さらに、やっぱり別の課の男性社員もいた。

どうやらコンパの野外バージョンらしい。そういえば先週、桃井さんに、「コンパやるんだけど、木崎さんも来ない？」って、声をかけられたっけ。もしかして、この花火大会のことだったのかな？先約があるからと断ったのだけど、まさかここで鉢合わせしてしまうとは思ってもよらなかった。

わたしは友達と一緒にだったから、桃井さんも気を遣ってくれ、一

言一言簡単な挨拶をしたに留まり、すぐに別れた。

わたしは、心底ホツとした。

高倉主任……維月さんと一緒に来なくてよかったです。

会社の人達にはヒミツにしている、わたしと維月さんの関係。

花火大会の会場で二人並んで歩いているところを会社の人……とくに桃井さんに目撃されたら、困ることになりそう。

桃井さんはかねてから、わたしと「高倉主任」の関係をあやしんでいた。「木崎さんって高倉主任に気があるんじゃないの?」と訊いてくるのは面白半分にすぎないようで確信を得ているわけではなさそうだけど、多少なりそういつた疑念を抱いている桃井さんに現場を押さえられてしまったら、何をどう取り繕っても、ごまかせない気がする。

社内恋愛は御法度なんてことはないし、やましい関係でもない。だけど、極力隠していたい。

桃井さんに限ったことではなく、女っていうのは 全員がそうではないけれど、色めいた噂話が好きなものだ。悪気はなく、……時にはちよつとだけ悪意を交えることもあるようだけど、誰が誰とつきあっているだの別れただのと、虚実入り混じった噂話を広めてしまう。

維月さんだけじゃなく、ある程度の役職に就いている人が色めいた恋愛絡みの噂話を流されてしまうのって、たとえ仕事に支障をきたすことはなくても、プラス要素にはしにくい事柄だと思う。恋愛絡みの噂話って、好意的に解釈されることって少ない気がするし。

わたしなんかのことで維月さんに迷惑をかけたくない。維月さんの負担にだけはなりたくない。

そういう気持ちがあったから、維月さんに「花火大会、一緒に行きませんか」と、声をかけなかった。どのみち、七月はクレーム処理などいろいろとあって仕事が忙しかったから、そんな暢気なお誘いはできなかつたのだけ。

……

だけどやっぱりって、思った。

維月さんに会いたいって、思ってしまった。

会社で毎日会っているし、週末だって維月さんは少しでも時間を割いて、会いに来てくれる。

それなのに、会社の上司である高倉主任じゃない維月さんとゆっくり会いたいなんて贅沢なことを思ってしまった。

まさか桃井さん達と出くわすなんて思いもしなかったから、誘わなくてよかったって安堵したけど、本心をいえば、やっぱり一緒に花火を観たかった。

そうした我儘な思いは花火の火の粉が散り落ちるようには消えず、心に残ってしまった。

心残りを抱えたまま七月が終わり、あっという間に八月になってしまった。

だけど夏はまだまだ、これからが暑さも盛りで、熱帯夜も続く。そして数日経てばお盆休みになる。

そして今日はお盆休みに入る一週前の、土曜日。

わたしは休みだけれど、維月さんは休日出勤してる。だから、午前中から夕方今の今まで、携帯電話に電話もメールもしないよう、我慢をした。

もつとも、午後からはわたしにもメールを打ってる余裕がなかったのだけど。

「……………」  
冷房のきいた部屋で、わたしは携帯電話を持って、鏡台の前に立っている。

液晶に表示されている時刻は、六時。

まだ窓の外は明るくて、日が暮れるまでには時間がある。今日も

猛暑で、雲は多いけれど、日が隠れるほどではなく、外気はなかなか冷えていかない。茹だるような熱気に当てられて、街路樹もちょっと元気がなさそうに見えた。そういえば、何日雨が降っていないんだろう？

わたしは目線を上げ、青色の絵の具を水で薄めて大雑把に塗りたくったような青い空を見やった。窓から見えるだけの小さな空に、半月を見つけた。昨日より少しふつくらとした、透けそうに白い月。満月まで、あと何日かな？ そんなことをぼんやりと考え、嘆息した。

それから視線を下げ、左手の中の携帯電話をじつと見つめた。三分ほど前に、維月さんからのメールがあったばかり。「今から帰る今夜、空いているならうちに来ないか」と。

親指を、そろりと動かす。早く返信しなくちゃと逸る気持ちだが、指の動きを鈍くして、短い文章なのにやたらと打つのに時間がかかってしまった。

「うちの方へ来てくれませんか？ わがまま言ってますみません。夕飯を用意して待っています」

たったそれだけの、簡素すぎる返信文。もうちょっと気の利いた誘い方だつてあるだろうに、いつだつて素っ気なさすぎる文章しか打てない。

そんなわたしに合わせてくれているのか、すぐに返ってきた維月さんのメール文も簡素なものだった。「わかった。すぐに行くよ」と。

メール文にあった通り、維月さんは本当にすぐ来てくれた。会社から直接来てくれたようだ。クールビズ仕様だからネクタイはしてないけど、白地に濃紺のストライプ柄の長袖シャツと黒無地のストリートパンツという、ビジネススタイルだ。

維月さんって、こういうビジネスファッションが似合う。もちろ

んTシャツにジーンズっていうカジュアルなスタイルも似合うんだけど、スーツ姿は格別に素敵だ。見惚れてしまう。

ホウツとため息をつくわたしを、当の維月さんは驚いたように瞳目し、まじまじと見つめてくる。

……あまりそう……、じっと見つめないでほしいのだけど……。

維月さんに、なんと声をかけてよいものやら分からず、わたしは所在なげに身を小さくしている。

そんな小心者なわたしに、維月さんは言ってくれた。「可愛いな」って。嬉しげに目を細めて、口元を綻ばせている。

かつ、可愛いって言ってもらえて、それは嬉しいんだけど、やっぱり恥ずかしい。

わたしは今、夏限定とっていい格好をしている。花火大会にも、この格好で行った。

浴衣姿なのだ。ちなみに、今年新調したばかり。

黒字にブルー系統の大きな牡丹の花柄模様の浴衣で、薄紫とサーモンピンクのリバーシブルの帯に、白いビーズの帯飾りをつけている。髪もアップにして、とんぼ玉の簪を挿してみた。

維月さんは感心しきった様子で、わたしを見つめる。「自分で着たの？」と問われて、「一応は」と曖昧に答えた。

「美容師の友人に着付け方を教えてもらったんです。それで今日、なんとか一人で頑張って着てみたんですけど、帯を結ぶのが、それはもう大変でした」

なにしろ不器用なわたしだから、一番のネックは帯だった。最初から形作られている作り帯も沢山売っていて、けっこう可愛いものもあったからそれを買ってしまったおうかと迷ったのだけど、結局友人に「やめなさい」と止められた。

「しまう時に場所もとるし、同じ形だと飽きるし、第一、子供っぽいよ」

と、言われ、さらに「簡単な結び方教えただけだから」と言い添えられて、結局それもそうかと納得し、作り帯を買うのはやめた。

「だけどやっぱり、ちょうちょ結びみたいには簡単にいかなかったんですよ。帯だけですごく時間がかつちゃって」

ちようど胃のあたりを締めている帯をぼんぼんっと叩き、ため息をこぼした。

維月さんは妙に嬉しげだ。

「ホテルや旅館なんかに置かれてる寝巻代わりの浴衣のようにはいかないってことか」

にこやかに笑って、「お疲れ様、美鈴」と、わたしの苦勞をねぎらってくれた。そして、「よく似合ってる」とも、言ってくれた。

「そ、そうですか……」

よかった。

自分でも気に入った柄の浴衣だったから、維月さんに着た姿を見せたかった。花火大会は一緒に行けなかったけれど、ならばせめて買ったばかりの浴衣を維月さんに披露したかった。

維月さんに喜んでもらえるかどうかなんて、それこそ自信なんてなかった。だけど維月さんに見てもらえるだけでもって身勝手なことを考えてた。

だから、「似合うよ」って言ってもらえて、嬉しかった。

もしかすると維月さんも喜んでくれたのかも？ そう自惚れてしまいそうな、維月さんの喜悦に満ちた笑顔だ。

頑張って着た甲斐があったなあなんて、わたしは自己満足に浸り、口元を緩ませていた。



## またたく花色 【後】

維月さんは、わたしが急ごしらえで作った簡易すぎる夕飯……冷やし中華と鶏肉の酒蒸しも、美味しいと言って完食してくれた。その後も、浴衣姿のわたしを気遣って、維月さんは後片付けを手伝ってくれた。

こんな時、食洗機がしみじみと欲しくなる。だけど洗い物をするのってけっこう自分のにストレス解消になってるところがあって、面倒ではあるのだけど、洗い物全般は、わりと好きだったりする。

どうやら維月さんは、わたしのそういう「片づけ好き」などところにも気がついていっているらしかった。

「美鈴は、こまごまとした整理整頓が好きだね？ 会社でもマメにデスク周りを片づけて、他の子のところまで手を伸ばして」

「え、それは、その……」

少し気まずいような、気恥ずかしいような気分になって、もごもごと小声で言い訳してみたことを言った。

「あんまり散らかっていると、つい気になっちゃって……。一応手を付けてもいい所といけない所はわきまえて片づけてるつもりなんですけど」

「散らかりやすいところでもあるから、こまめに整頓してくれるのは助かるよ。浅田さんもありがたがってたし。うちに来て掃除してもらいたいとか言ってたな」

「そういえば浅田さんに言われました、きれい好きなんだねえって。そりゃあ、掃除自体は嫌いじゃないんですけど、きれい好きって程じゃあ……」

「浅田さんは散らかし好きらしいよ？ 仕事を片づけるのは上手いんだけどね」

「そうですね。浅田さんって仕事早いですし、きっちりしてて頼りになるんですよ！」

「そう、それでデスク周りはわりときれいにしてるんだけど、引き出しの中はとんでもないことになってた。美鈴は、見たことある？」  
「あ、ありますあります！ ものっすごくいろいろなものが入っててごちゃごちゃしてて……。あれ、一度全部取り出して、掃除してみたいなあ……」

「ぜひやってほしいところだけど、たぶん全部の引き出しがあんな状態っばいから、時間かかると思うよ？」

わたしと維月さんは顔を見合わせて笑った。

「浅田さんのデスクで宝探ししてみるのも楽しそうですね」

「たしかに、何か面白そうな宝が眠ってそうだし」

勤労主婦の先輩浅田さんとわたしと、そして維月さんは、かつての飲み仲間だった。維月さんは、しっかり者でさばさばとした性格の浅田さんに一目置いている。同じ頃に入社したこともあって、よき相談者でもあり協力者でもあったと、語ってくれたことがある。

その浅田さんに声をかけられ、「高倉主任」と三人で飲みに行くようになったのは、もう二年近くも前のことなんだ。そう思うと、月日が経つので、本当に早い。

誘われたあの頃は、まさか「高倉主任」とこんな関係になるとは、ちっとも思わなかった。……ううん、今となっては「ちっとも」とは言えないかもしれないけれど。

その浅田さんにも、まだわたし達の話していかない。いずれ折を見て、「実は」と告白するつもりではいるけれど、なかなかタイミングが計れない。維月さんは「俺から話そうか？」と言ってくれたけど、わたしは首を横に振った。

維月さんが言っても別段問題はないと思うし、維月さんの方がきつとうまく話してくれるだろう。だから、これはわたしのわがまま。それに、わたしから話すべきことのような気がする。女同士だからこそ、そういうところはきつちりとけじめをつけたい。

そういったことを、しどろもどろに話すと、「美鈴に任せるよ」と言っ、維月さんはあっさり了承してくれた。それから優しく

目を細めて、微笑んだ。

維月さんの瞳は、濃く淹れたコーヒーのような深みがある。コーヒーの香りのように吸引力があつて、目を逸らせない。

「美鈴は少しだけ、潔癖なところがあるね。一人であれこれと気を回しすぎてストレスを溜めこみやすそうな子だかつて、以前まえから思つてた。遠慮ばかりしてないで、もっと周りの人に頼つてもいいのにつて。過剰でなければ頼られるのもけっこう嬉しいものだからね」

「……………」

「俺も、美鈴に頼つてもらつのを心待ちにしてるくらいだし」  
維月さんはちよつとおどけた口調でそう言い、小首を傾げて、俯いてるわたしの顔を覗き込んできた。

「そ、んな……。わたし、維月さんには頼つて、甘えてばかりで」「人を信じて頼るのには、たしかに勇気が要る。だから今すぐどうこうとは言わないし、無理をすることもない。だけど、たまには勇気を出して、思いきり寄りかかつてほしい。……………そう、これも俺の我儘だ。美鈴に頼られて格好つけたっていう、ね」

維月さんはこともなげに、さらりと自分の心情を話してくれる。そうして自分の弱い部分をわざと晒して、なおかつわたしをその胸の内に包んでくれるのだ。時に強引に、時にさりげなく。

わたしは維月さんに対して、まだ、どこかで踏みとどまつてるところがある。信じきれない思いが心の底に沈んでいる。それに、維月さんは気付いているんだと思う。

信じきれないのは、維月さんのわたしに対する思いでもあるし、わたし自身の思いだ。

維月さんの思いを疑っているのとは、違う。だけど信じきつて、その思いにこの身をすべて委ねてしまうのは、やっぱりまだ怖かつた。

「美鈴が怖がりなのは分かつてるつもりだから、焦らせる気はないよ。だから今夜みたいに、美鈴が負担にならない程度で甘えて頼つてくれたらいい」

「今夜みたいに？」

おうむ返しに訊くと、維月さんは「うん」と少し子供っぽいような表情で頷いた。

「会いに来てって言うってもらえるのは嬉しいよ。浴衣姿を見せてくれたのも、嬉しかった」

「……………」

こうまで言われて、維月さんの思いを拒めるだろうか。

信じたいと思いき気が凌駕して、それが心をときめかせる熱い思いにさらに燃え立たせる。

わたしは「それじゃあ」と切り返した。

「それじゃあもう一つ、わがまま言ってもいいですか？」

維月さんは、小さく笑って頷いた。

「少し行ったところに、小さな公園があるんです。そこで、花火しませんか？」

そう言って、周到に用意した花火のセットを取り出した。すべて手で持つタイプの花火。いかにも子供用っぽくイラストが入った花火セットで、それを二つ買ってきておいたのだ。

「打ち上げ花火もいいけど、こういう花火も好きで、やりたかったんです」

維月さんは「いいね」と、破顔一笑した。

一言に手持ち花火といっても、種類はたくさんある。

火が勢いよく一直線に伸びて色の変化を楽しめるススキ花火や、火花が横に散ってパチパチと光と音を爆ぜさせるスパーク花火、そしてなんととっても手持ち花火の定番、線香花火、これは欠かせない。

「けっこうあつという間に終わっちゃうのが多いですね」

維月さんに手渡され、わたしは両手に花火を持っている。シューッと音を立てながら、オレンジ色の火が手元や足元を明るくしてくれている。

公園内には外灯もあつたし、家々の門灯や窓から零れる灯りが届いて、それほど暗くはなかつた。月明かりも手伝つて、ふと見上げたそこにある維月さんの笑い顔も見てとれた。

「俺は、地味なんだけどへび玉が好きだったな。あのなんともいえない不気味な感じが面白くて」

「へび玉？」

「知らない？ たしかに花火つていうには微妙だけど、火をつけると何倍にも膨らんで蛇みたいに長くなる地味なやつなんだけど」

「ああ！ わかりました！ 売ってましたよ、それ。でも写真で見ただけなんだか蛇の具合がリアルで、買うのためらっちゃったんですよ」

「それは残念。見てみたかったな」

「……維月さん、けっこうヘンなの好きなんですな」

わたしがちよつと呆れたように笑うと、維月さんは「まあ、そうかな」と苦笑した。少し照れているような、けれど悪戯っぽいような、どこか少年っぽい笑い方だった。

維月さんはわたしの手に握られてる花火の火が落ちる前に、別の花火に火を移した。それがまたパチパチと小気味のいい音をたてて、火の粉を散らす。

「へび玉も面白いけど、やっぱりこういう明るい火が散る花火が、見ててもやつても楽しいよ。それに、花火なんてずいぶんやつてなかつたしね。……ありがとう、美鈴」

維月さんはわたしの横に並んで立ち、花火を持っていない方の手をわたしの後ろに回した。

「維月さ……」

維月さんの手が、わたしの肩を掴んだ。維月さんは花火を両手に持ったままのわたしを少しだけ引き寄せて、唇の先をかすめ取るよ

うなキスをした。

二人きりの花火大会は、あっという間に終わってしまった。ラストは線香花火でしめて、ちよつとしんみりとした気分に分らせる。

公園には、わたしと維月さん以外誰もいない。狭い敷地の公園は、来た時からわたし達以外に人はいなくて、ただ時々犬の散歩をする人が通り過ぎていったくらいだ。

夜風が伸び放題になっている雑草をさやさやと揺らし、その中で虫がリーリーと鳴いている。

夜はすっかり更けきって、安らいだ静寂がわたし達を包んでいた。火薬のおいの混じるしつとりと安らいだ空気がちよつぴり淋しいような気分させる。だけどそれは楽しいひと時があったからこそだ。淋しいのだけど、心は潤っている。

花火の後片付けのほとんどをすませてくれた維月さんに、わたしは「ありがとう」を伝えた。

「今日、花火つきあってくれて、嬉しかったです。こうやってゆっくり会えたのも嬉しかったです……」

とても楽しかった。そう言うと、維月さんも嬉しげに笑ってくれた。

「さあ、じゃあもう帰ろうか」

維月さんはバケツとゴミの入ったビニール袋を持ち、わたしを促した。わたしは「はい」と答えてすぐに維月さんの後について歩き出したのだけど、ふと、維月さん呼び止めた。振り返り、わたしを見つめる維月さんに、わたしは今日何度目かの我儘を言った。

「あ、あの……、手、……手を繋いでもいいですか？」

わたしの申し出に、維月さんは一瞬驚いた顔をしたけれどすぐに口元を綻ばせて、空いている方の手を差し出してくれた。

その手を、おそろおそろ握った。

どんな風に握ったらいいのかな、なんて考えてる間に、維月さん

の方からきゅっと握り返してくれた。大きくて熱い、維月さんの手。握られていると、ときどきするのに、安心感がある。

「行こうか」

「……はい」

わたし達は再び夜道を歩きだした。維月さんはわたしに歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれている。わたしは時々維月さんの端正な横顔を見たり、握り合った手を見たりしながら、慣れない浴衣と下駄のせいで躓かないよう小股になって歩いている。

「維月さん」

歩みを止めず、維月さんに声をかけた。

繋ぎ合った手と手。そこから伝わる維月さんの熱のおかげで、わたしはいつもより少し大胆になれた。

思いきって……かなり恥ずかしいのだけど、それを言った。

「……か、帰ったら、また“火遊び”しませんか？ えっと、その

……遊びじゃなくて、本気です、けど……」

「ベッドの上で？」

わたしの意中を察した維月さんはそれを露骨に口にし、悪戯っぽく笑った。

「……っ」

恥ずかしさで頭が沸騰し、蒸発して消えてしまいそう。だけど、消えるのを許さないとでもいった風に、維月さんの手に力がこもった。

「………そ、そ、です……」

俯き、虫の音よりも小さい声で応えた。

落ちかかってくる沈黙に、わたしは今さらながら、何言っちゃったんだらうと、動揺しまくった。だけどこの期に及んで訂正するのはもっと情けなくて、恥ずかしい。

「あの、いつ、維月さん……？」

心なしか、さっきより歩調が速くなってる気がするのだけど……。ちよっと焦って顔を上げ維月さんを見る。維月さんはわたしの視

線に気がついたようで、けれど足は止めずに、振り返った。

「もともとそのつもりでいたけど、美鈴の方から言ってもらえるとはね。急ごうか、美鈴の気が変わらないうちに」

「……かつ、変わりませんっ」

維月さんの甘やかなまなざしとぶつかって、動悸はさつきよりも激しくなった。

「わたしの方は、もうとっくに火が点いてますからっ。だから、そのっ」

「それなら俺も同じだ」

わたしの手を掴んで離さない手も、蕩けそうに優しいまなざしも、維月さんが抱えている熱を伝えてくれた。

「は、はい……」

だから、わたしもちゃんと伝えよう。素直に甘えて、寄りかかってしまおう。

維月さんがいつもそうしてくれるように、内に秘めているだけではいられなくなった想いを、…… 今宵、存分に。

抱擁の激しさは、一瞬一瞬、その限りで過ぎてしまう。

それはまるで、花火の激しさ。

きらめきを散らし夜空を彩る火の花は、たったの一瞬で消えてしまう。だけどその鮮やかな火の花は心の内で咲き続け、幸せな気分を思いださせてくれる。

花火のような、維月さんの“火”。

維月さんが焦らしながら肌に刻んでいく熱情は心の奥深くにまで浸透し、冷たく凝り固まっている怖れやわだかまりを融かしてくれる。



そうして、熱い夜にまたたく花音おとを響かせる。

## Trick or Treat!?

「悪戯か、お菓子、か」

喉の奥、維月さんは笑いを潜めている。

維月さんの微笑は、とつても危険極まりないものだ。幽鬼も尻尾をまいて逃げ出すほど、と、わたしは思ってる。

危険には違いないんだけど、怖いもの見たさって言葉があるように、わたしはついつい見つめてしまうのだ。

悪戯を仕掛けてくる気満々の、維月さんの微笑を。

街のショールウィンドウはハロウィンカラーに染まっている。クリスマスほど大々的ではないけれど、お菓子売り場は躍起になってハロウィンを宣伝している。もはやもとのハロウィンの意味なんて、忘れ去られているどころか、起源を知らない人の方が多いと思う。

キリスト教の祭典、万聖節の前夜が十月三十一日。万聖節とはすべての聖人を祭る日で、すなわち十一月一日が「All Hallow's day」。それが省略されて「Halloween」となったみたい。

キリスト教のお祭と思われがちだけど、古代ケルトの収穫感謝祭（古代宗教のサウィン祭）がキリスト教に取り入れられたものだから、純然たるキリスト教のお祭とは言いきれない。

けど、無節操でお祭好きな日本人は、これ幸いにとばかり、ハロウィンを「商売道具」として利用している。そして、やっぱり無節操でお祭好きなわたしも、うっかりと雰囲気のにせられ、ハロウィンを楽しんでいる。

かぼちゃのランタンや幽霊や魔女のオーナメントを見ると、なん

だかわくわくした気持ちになる。童心にかえる、というのが近いかもしれない。クリスマスより気軽に楽しめるのは、何が何でもお祝いしなくちゃならないイベントだからじゃないからかもしれない。自分の心の中でだけ、「ハッピーハロウィン」と盛り上がってられる。ハロウィン当日に近所の家々を回ってお菓子をねだったりはしないし（というかできないし）、せいぜいかぼちゃ味のお菓子を買ってきて、一人で自己満足するくらい。

だからハロウィン当日の今夜も、わたしは誰かに「Trick or Treat!」なんて言うはずもなく、冷蔵庫にしまっておいたかぼちゃ味のプリンを、食後のデザートにするだけだった。…予定では。

けれど、その予定は変更されることになった。

予告のない来客は、めったにない。

けど、それがいきなりあったのは、夜も九時を回った頃。

玄関チャイムが鳴るほんの数分前、ケータイ電話が鳴った。着信音は、指定されたメロディーだ。

わたしは慌ててケータイを握った。

液晶の画面を見るまでもない。鳴ったメロディーは、特定の人に設定した着メロだから。

「いつ、維月さん？」

思わず声の上擦ってしまった。

『うん。今、いい？』

維月さんの声には、少しばかり笑みがこもっているようだった。

わたしがすぐ電話に出たのを可笑しがっているようでもあり、でも何か違うことで笑っているようでもあった。

「いいですけど……」

なんですか、なんて問わない。維月さんに会いたいなと思っただけのこと、口にしなかった。

だってなんとなく……維月さんはわたしの気持ちに気づいてくれているようで。

維月さんって絶妙のタイミングを計ってくる。以心伝心……？  
と、つい自惚れてしまうくらいに。

『今、アパートの前なんだけど、行っていていい？』

「ア、アパートって、うちのですか？」

『うん、そう』

「え、やつ、いいつていうか、いやちよつと待って……っ、わたし今もう寝る体勢に入ってる。や、まだ寝てはいないんですけどもっ慌てふためいてるせいで、わたしはもう何を言っているやら、自分でも分からなくなっている。

そんなわたしを、維月さんはまた笑うのだ。

『それは好都合』

なんて、さらりと言って。

やつ、ちよつと待って！ 好都合って、どういう意味ですか？

『じゃ、行くから』

「い、維月さ……」

そして通話が断たれ、一分もしないうちに、玄関チャイムが鳴った、という次第だ。

わたしは今日、残業もなく定時に上がったのだけど、「高倉主任」は多少の残業があり、退勤したのは八時半だったそうだ。

高倉主任は会社から直で、わたしの元にやってきた。高倉主任から、維月さんに成り代わって。成り代わって、というより戻って、なのかもしれない。どちらも高倉維月さんには違いのないのだけど、高倉主任でいる時の維月さんは、予定外の行動を突発的に起こしたりはしない。時々わたしに対し悪戯心を起すこともあるけれど、そんな時は維月さんの表情になっている。

維月さんって、器用な人だと思う。またそれが、嫌味に感じないという、さり気なさだ。

すごいなと感心してしまう。

わたしの感動を、維月さんは嬉しげに受け取ってくれる。そしてさらに感動させてくれるわけだけど、……その感動にはいろいろと種類がある。

とまどうのも、焦るのも、一種の「感動」だから。

「Trick or Treat」

と、いきなり手を差し出され、わたしは面食らった。目を瞬かせ、間の抜けた顔を晒してしまった。

「はい？」

「今日、ハロウィンなんだよね？」

「……………」

どうやら維月さんは、今日職場でわたしが浅田さんと話しているのを聞いていたようだ。

たわいないお喋りだった。「今日はハロウィンですよね」と浅田さんに語り、「わたし、なんだかハロウィンって好きなんですよ」「的なことを言っていたのを、ちゃっかり聞いていたのだろう。」

「と、いうわけで。Trick or Treat」

いやもう、何が「と、いうわけで」なのが全然わかりませんが！

維月さんは維月さんなりに、もしかしてわたしの機嫌をとろうとしてるの……かな？

そう思うと、ちよつと嬉しくなった。

「だめです。だって維月さん、仮装してませんよ？ Trick

or Treatと言うからには、ちゃんとオバケの仮装してくれなきゃあ」

ちよつと文句をつけてみた。

すると維月さんは慌てるでもなく、わたしの腕を強引に掴んで、体を引き寄せた。

「扮装なんてする必要はないと思うけど」

維月さんは顔を近づけて、にっと不敵に笑った。七歳年上で、わたしなんかよりずっと大人のはずの維月さんだけど、時々こんな風に、子供っぽい所作をしてみせる。そのギャップが、たまらない。

というか、ズルイと思う。

維月さんのさらさらとした前髪がわたしの鼻先にかかって、くすぐりたい。ちなみにいえば、吐息もかかるほど顔が近づいている。

さっきお風呂に入ったばかりのわたしの体は、まだほこほこと温まっているのだけど、維月さんが体を寄せて……というか抱きつけてくるものだから、さらに体内温度はあがり、頬まで熱ってきた。

「俺は今、狼男だから」

「……………」

なっ、何言って……っ?! 今、さらりと気障なこと言った、この人っ!!

思わず体をのけぞらせたわたしを、維月さんは小さく笑って見つめている。狼男にしては、ずいぶんと優しいまなざしで。けれど、蜂蜜も負けるくらいの甘さ成分たっぷり、頭の芯がくらくらとする。

「好きなんだよね、美鈴は、こういうの」

「や、それっ、曲解ですから! わたしはハロウインの雰囲気が好きってだけで……………」

もがけども、維月さんはわたしの体を離してはくれない。いつの間にか腰に手が回ってるんですけども!

というかこれってもしかして、すでに「悪戯」なんじゃあ……………」

「あううっ、そ、そだっ、お菓子っ! お菓子ありますからっ!

それ、一緒に食べましょう!」

わたしは空しく抵抗をしてみせる。維月さんの胸元に両手を押し付けて、なんとか体を離そうと力を入れる。

「お菓子?」

維月さんの腕の力が、ちょっとだけ緩んだ。

「かぼちゃのプリンです。ふたつありますから、一緒に食べましょう。ね、ってことで、Treatです、Treat!」

「……………」

くすつと、維月さんはまた笑った。それから片手で、ネクタイを

緩める。その仕草がなんとも艶かしくて、つい視線をそらしてしまつた。頭が沸騰しそう……。顔が熱い。心臓が早鐘のように鳴り続けている。苦しくて、体に力が入らない。

それを察してか、維月さんはわたしの腰を掴んでいる手にぐつと力を入れ、さらに体を引き寄せた。

「じゃあ、言い直そう」

「……え？」

維月さんは低くささやいた。その声につられて、わたしは顔をあげた。

「Trick and Treat」

「え、えええっ？」

「どっちも、もらうから」

「……っ、ちよっ……」

待って、と言う前に、唇をふさがれてしまった。

「かぼちゃのプリンは、また後で」

まずはTrickの方から、と言った後で、維月さんはさらりと訂正した。

「甘いお菓子の方が先かな。甘いのは、美鈴だし、ね？」

「ねって、維月さ……っ、ちよっ、わぁ……っ」

わたしはもう言葉もでない。

だって、甘い言葉に蕩かされて、わたし自身が甘くなり、まんまと維月さんに食べられてしまったのだから。それはもう……余すところなく、ペろりと。

だけど、もしかしたらお互いさまなのかもしれない。

わたしは維月さんの腕の中、こっそりと呟いた。きつと聞かれると思うけど、聞かれていないつもりで。

「ごちそうさまでした」

とっつてもとっつても甘かった、「狼男」の維月さんに。

I love you .

直訳じゃ、詰まらない。

勝手な解釈だっつていい。言葉の内側に含まれている『思い』を覗いてみたい。

好き、という言葉の奥底に、わたし自身いろいろな想いを潜めている。

形にならない想いもあるし、別の言葉に置き換えてごまかしてしまふこともある。

わたしの想い人も、言葉の裏に何かを秘めているのだろうか。

二人でテレビを観つつ、のんびりと酒瓶を傾けている夜。

ちよっと思いついて、維月さんに訊いてみることにした。

「昔、『I love you』っていう文を、夏目漱石は『月がキレイですね』って訳して、二葉亭四迷は『わたし、死んでもいいわ』って訳したら素晴らしいですけど」

「……へえ？」

維月さんはグラスの中の氷を鳴らした。素っ気無い音なのに、アルコール度数の高い液体が絡んでいるせいか、奇妙に、艶かしい。少しだけ細められた維月さんの目が、わたしをじっと見つめている。

ブランデーよりも、酔わせる度数は維月さんの眼力の方が、うんと高いと思う。

速まる心拍数を感じながら、維月さんに尋ねてみた。

「もし維月さんなら、どう訳します？」

「唐突だね、美鈴」

「唐突ですけど、……維月さんなら気の利いた訳し方してくれそう



「だなぁと思って」

「ちょっとした好奇心だった。」

維月さんは、気障な台詞をしれっと言える人だし、気障でない台詞でも気障に聞こえる雰囲気をもとってる人だから、素敵な訳し方が……しかも気障っぽく……できるんじゃないかな、と。

「I love you、ね」

くすつと、維月さんは小さく笑った。そしてグラスをテーブルに戻し、ついでにテレビのスイッチも切った。

少し距離を置いて座っていたわたしに、維月さんは腕を伸ばしてきた。

維月さんはソファアの背もたれに腕を乗せた。手は、わたしの背に触れている。

「ひじょうに……くすぐりたい。落ち着かないし、どういうリアクションをすればいいのかと、気もそぞろになっていた。」

維月さんの指が、肩甲骨に触れた。つうつと、這うように。その拍子にびくりとあがった肩を見て、維月さんはまた笑った。

「美鈴の期待にそえられるかどうかは分からないけど」

維月さんの手が上に移動し、わたしの肩先にかかっている髪を掴んだ。指先で、髪感触を楽しむように、擦っている。

いつの間にか、維月さんはわたしににじり寄ってきていて、膝が触れた。

「……あ、の」

「迂闊といえば、迂闊だった。」

「けれど、期待していたことだったかもしれない。」

わたしの手は、ほとんど無意識に、維月さんのシャツの裾を掴んでいた。わたしの指先は綿シャツのやわらかな手触りではなく、温かな素肌の感触を求めている。

でも、わたしの手は維月さんの手のように能動的ではない。シャツを掴んだまま、止まっていた。

「俺なら、そうだな……。うーん……」

維月さんの手が、わたしのうなじへと移動した。さわさわと髪の毛を撫ぜている。

「けっこう直球な訳だけど」

「は、はあ……」

ほんの少しだけ身体を擦らせると、それにあわせるようにして、維月さんは手に力を入れてきた。

首根っこをつかまれた猫の気分。

逃げられないって状況を、わたしは自ら作ってしまったようだ。

「『私を好きにして』、とか？」

につ、と、維月さんは笑った。艶かしいことこのうえない目をして。

「そ、それ、なんか、エロっぽいんですけどもっ」

言葉だけじゃなく、表情も声も仕草も、維月さんの何もかもが、

全部！

維月さんは、背中に汗をかいてるわたしの焦り顔を愉しがって笑っている。

「じゃあ、ちょっと変えて」

「変えて？」

「『私の好きにさせて』、とか」

「ほっ、ほんと、直球ですね」

「分かりやすいほうが、美鈴はいいんじゃないかと思って」

首から、じわじわと熱が上昇してくる。

耳たぶが熱い。そう思ったのと同時に、維月さんの唇が、右の耳たぶに触れた。

「……っ」

息がかかり、全身が栗立った。

「という感じで」

シャツを掴んでいるわたしの手に、維月さんのもう一方の手が重ねられた。

もう、わたしは維月さんの罠の中。

それとも。

畏にかかったのは……。

「どうかな？」

維月さんが訊く。

わたしはちよつと俯きかげんになって、応えた。

「月、が……キレイ、です、ね」

そして、維月さんが耳元でささやいた。

甘く撫ぜるように、維月さんの意識を。

おりしも今宵は、満月。

皓々とした月光が、夜を照らしている。隠しようのないわたしの  
気持ちをも。

維月さんの甘くて意地悪な微笑は、わたしの心を乱しながら、優  
しく包んでくれる。

維月さんの力強く容赦のない両腕は、わたしの身体を隙なく熱く、  
かき抱く。

狂おしいほど切なく焦がれる、月華の秋宵。

わたしは月に結びつけられ、<sup>つな</sup>維がれている。

I love you・(後書き)

【I LOVE YOUを訳しなさいボタン】が元ネタとなっています。

## 金木犀

秋の夜に漂う甘い花の香りは、好きな人を恋う想いに似てる気がする。

傍にいたい。それだけの気持ちじゃなくて。寄り添い合うだけじゃ物足りなくて。

だから求めてしまう。花の香りのように、率直なほど、貪欲に。

夜更け、窓を少し開けると、しっとりしたと甘い芳香が室内に忍び込んできた。鼻腔をかすめるそれは、黄金色した秋の花の香。金木犀だ。

「どこで咲いてるんだろう。すごくいい香り」

花の姿は見なくとも、甘い香りを漂わせる金木犀はその香りだけでも存在感がある。金木犀の花の香りをもっと部屋に取りこみたくて、さらにひろく窓を開けた。風呂上がりで、酒気も帯びて温まっている体に、涼しい夜風は心地よかった。

「金木犀の香りって甘いですよ。昼よりも夜になると香りが濃厚になって、窓を閉めきつちゃうのがもったいないくらいで」

窓際に立ったまま首をめぐらせ、ソファーベッドに背を預けている維月さんに話しかけた。

維月さんは、わたしが食前酒として買ってきた梅酒を飲んでい。小さなグラスに氷を一つ入れ、少しずつ飲んでいた。珍しく、飲むペースが遅い。まだやっと二杯目だ。それなのに、まるで酔っているみたいにぼんやりしている。

「維月さん？」

酔っている風には見えない。けれど少し心配になって、顔色を窺

った。

維月さんはわたしの視線に気づき、取り繕ったような微笑を口元に浮かべた。

「……ああ、そうか、この香り、金木犀か。たしかに甘い、いい匂いだ」

「……………」

今夜の維月さんはいつもと違う。らしくないというほどでもないけれど、いつものような泰然さが無い。不機嫌そうというより物憂げで、ため息も多かった。

それは、今夜だけのことじゃない。ここ最近、維月さんはずっとこんな調子だった。

体調を大きく崩しているってことはなさそうで、休まず出勤して仕事もきちんとなしていた。仕事後も、わたしを誘いだしたり会いにきてくれたりした。

だけど、維月さんはどことなく上の空で、ぼんやりしてたため息をつくことがしばしばあった。

どうやら夏の疲れが涼しくなった今、どっと押し寄せてきたらしい。

維月さんもそれを自覚しているようで、

「夏バテしてる暇がなくなくらい、夏場はいろいろと忙しかった。疲れを溜めこまないようにはしてたんだけど、一段落した今、ツケが回ってきたって感じだな」

と言つて、苦笑してた。

維月さんが「いろいろ忙しかった」というその原因のほとんどは会社で起ったトラブルだ。たとえば取引先への連絡ミスで起ったトラブルだったり、顧客からのクレームが相次いだりと、よくある系の（よくあつちやいけないのだけど）トラブル。その後始末やら処理やらに、維月さんも奔走していた。

「維月さん、あの……無理しないで、休める時は休んだ方がいいです。季節の変わり目は風邪もひきやすいし」

「体の方はいたって元気だから、大丈夫」

維月さんは自身の健康を過信するタイプじゃない。だから大丈夫というのなら、たしかに大丈夫なんだろうとは思う。

だけど油断は大敵だと、わたしはちよつと厳しい面持ちになって注意を促してみた。

「最近はずく早く帰れるようになったからって、わたしを誘って出歩いてたんじゃ、体、休まらないんじゃない……。あ、いえそのつ、食事やドライブに誘ってくれるのは嬉しいんですけどもっ！でもっ、運転するのも疲れるだろうし、いいのになって」

維月さんはふとため息まじりに小さく笑った。

「外に出てる方が気も晴れて、休まるってこともあるから。一人でいたい気分でもないしね」

「……………」

つまり、肉体的に疲れより、精神的な疲れの方が大きいってことなのかな？

維月さんがそんなことを言うのは珍しい。少なくとも、「一人でいたくない」というようなことをあからさまに口にしたりはしない人だ。……それを行動で示すことは多々あるのだけど。

こんな時、わたしは維月さんに何もしてあげられない。ただ、こうして傍にいただけ。維月さんが望むように、ただ居るだけ。どんな形であれ、維月さんがわたしを必要としてくれるのは嬉しいけれど、かえって何もできないって思い知らされるようで、情けなかった。

たとえば、わたしが元気がない時、維月さんはとても上手に励まして、癒してくれる。

こまめにメールしてくれたり、美味しい洋菓子を買ってきてくれたり、ドライブに誘い、その車中でいろんな話をしてくれたり、わたしのつまらない愚痴にも耳を傾けてくれて、助言してくれたりもする。

焦りや不安、怖れや戸惑いといったマイナスの感情に振り回され

がちなわたしを、維月さんは時にはちょっと困ったような顔をしながらも、ありのまま受け止めて、支えてくれる。心ごと、包み込むように抱きしめて、維月さんのことしか考えられなくしてくれる。そんな風に、維月さんはさりげなく、場合によっては強引に、わたしに安心を与えてくれる。

維月さんは本当に甘えさせ上手だ。

わたしばかりが一方的に甘えて、頼りきってしまっている。

維月さんは嬉しげに笑ってくれるのだけど、やっぱり負担をかければかりなのは心苦しい。

一方的なのが辛いなんて、これもわたしの我がままなんだけど、せめてもう少し釣り合っていたい。

対等な関係なんてとても望めないだろうけど、でもせめて、少しでもいいから維月さんの心を支えてあげられる存在でいたい。元気を分けてあげられるような、相互依存し合える関係でありたいと思う。

今夜だって維月さんは、「美鈴に会いたい」と言っつて、車を飛ばしてきてくれた。勝手な憶測かもしれないけれど、わたしに何かを求めて会いにきてくれたのだと思う。……そうだと思いたい。

だから、「何か」してあげられたらっつて思う。

維月さんを元気づけられる、何か具体的なことっつてないかな？

わたしにできることで、維月さんを励ませないかな？

わたしは維月さんみたいにさりげなく慰めたり励ましたりできなくて、そのうえ維月さんが今欲しているものが何なのかも察せないから、真っ向から訊くしかなかった。

「あっ、あの維月さん！わたしに、してほしいことっつてありませんか？」

いきなり問われ、維月さんは驚いたように目を瞠った。けれどすぐにふと力の抜けたように笑みをこぼし、グラスをテーブルに置くと、ゆっくりと立ち上がった。

維月さんは額にかかる髪をかきあげ、わたしから視線をはずした。



「あの、……維月さん？」

「……………」

維月さんは嘆息し、それからわたしとの距離を縮めた。

二つの香りが、わたしの鼻腔をかすめる。

窓から流れ込んでくる金木犀の甘い香り。そして、目の前に立つ維月さんの、まだ少し濡れた髪から漂ってくるシトラス系の香り。

どちらともひどく官能的だ。身体が、火照りだす。

維月さんは腕を伸ばし、窓に手をかけた。

「美鈴、窓、閉めるよ？」

そう言うや、維月さんは窓を閉め、外気を遮断した。金木犀の僅かな余薫は、やがて維月さんの醸し出す甘く濃密な香りに消されてしまう。

自分でも分かるほど、頬が熱い。さつきまで一緒に飲んでいた梅酒のせいじゃなく、視界をふさぐ維月さんの艶めいた目のせいだ。

鼓動が高鳴りだして、声が震えそうになる。

「あ、あの、ごめんなさい、寒かったですか？」

「いや。涼しくてちょうどよかったけど、香りに、酔いそうでもあったかな」

「…………え、金木犀の香りに？　もしかして苦手でした？　ごめんなさい、気付かなくて」

「違う。酔わせるのは、金木犀の香りじゃなくて、美鈴の方だから「え？」

維月さんの熱いまなざしに射竦められ、わたし思わず息を飲む。

緊張して身を固くするわたしの頬に、維月さんの手が添えられた。酒気帯びのためか体温が上がっているようで、維月さんの手のひらは僅かに汗ばんでいた。

維月さんの微笑もまた、やわらかなものなのに、ひどく熱帯びている。

「それに窓を閉めたのは別の理由からだから」

「え？」

わたしが首をひねると、維月さんは目を細め、からかうような口調で言葉を継いだ。

「窓、開けたままでと、声が漏れちゃうからね」

「え、……っ!？」

どういう意味ですかと問おうとしたわたしの声は、維月さんに呑み込まれてしまった。

「……んっ、ふ……っ」

息継ぎもできないほど深い口づけに眉をしかめ、抗議すべく維月さんの胸元を軽く叩いた。維月さんはわたしの要求をきいて唇を離してくれたのだけど、今度は二の腕を背に回し、きつく抱きしめた。

「美鈴」

維月さんのくぐもった声が、わたしの耳朵をくすぐった。乾ききっていない維月さんの髪が頬に当たって、それもくすぐりたい。

「美鈴」

「……は、はいっ」

とっさに返事をする、維月さんは少し腕の力を緩めてくれた。

一瞬どうしようかと迷ったけれど、わたしは遠慮がちに維月さんの背に腕を回した。

きゅっとシャツを掴むと、維月さんがふっと小さく笑った……ような気がした。顔が見えなくて分からないのだけど、肩の力が抜けたようなやわらかいため息が聞こえた。

「癒して」

「え……?」

「美鈴に癒してほしいくて今夜は会いに来た」

「はい。あの……、わたしにできることならなんでもします。維月さんがしてほしいって思うこと、言ってくれたら嬉しいです」

わたしにできることは、少ししかない。癒してあげられる自信もない。けれど維月さんがわたしが必要としてくれるのなら、その想いに応えたい。

維月さんはわたしの顎を指先でつまみあげると、少し困ったよう

に眉尻を下げてわたしを見つめて言った。

「今、もう十分に癒されてるんだけど」

「……………」  
わたしは黙したまま維月さんのまなざしを受け止めている。

維月さんの双眸は、金木犀の匂い立つ秋宵の色だ。その匂いの強さに、酩酊しそう。

「今夜は、美鈴で満たしてほしい。何もかも忘れて、ただ美鈴だけを想っていたい」

「…………… 維月さん……………」

「酒に酔うより、美鈴に酔いたい。…………… って言ったら、引く？」

「…………… 引きません。照れるし、よくそんな台詞が出るなあって感心して、ちよつと呆れもしますけど」

わたしが恥ずかしさを素直に口に出すと、維月さんはわたしの額に自分の額を当ててきた。

「よかった、拒まれなくて」

「引かないし、拒みません。維月さんが…………… 好きなんですから  
意を決していたわたしは、顎を上げ、押し当てるようにして維月さんにキスをした。

「……………」

維月さんは不意打ちを食らったとでも言わんばかりの驚き顔でわたしを見つめ返してきた。

「……………」

わたしはというと、キスをしちゃったのはいいけど、恥ずかしさのあまり二の句が出ず、進退窮まってしまうていた。けれど、わたしの腕は維月さんの背に回ったまま。離れようなんて気は微塵も起らなかった。

このままこうして抱き合っていたい。そして先の展開をも、わたしは維月さんに求めてた。

「そっ、そのっ、わたし、もう酔ってるみたいなの状態なんで、維月さんを酔わせられるのは難しいと思うんですけどっ。だから、その

っ

わたしが慌てふためき、言い訳じみたことを口にすると、維月さんはわたしを宥めるように髪を撫でてくれ、そして、

「それはお互いさまだ」

そう言って、維月さんは眉を開き、甘やかに笑った。

維月さんも、きっと同じ思いでいる。

維月さんのまなざしの熱っぽさに、維月さんの思いを読みとれたような気がした。

わたしは維月さんの胸に顔をうずめて、呟いた。

「維月さんと一緒に、酔いたいです」

## 椀と咲う

連れてきてもらった、紅葉の名所だという古い寺院。きっと普段は閑静な所なのだろうけど、シーズン真っ盛りですごく賑わってた。それなりに有名な所で、観光バスが止まる程ではないようだけど、一応ここいらの地域では観光名所の一つらしい。

人も多く、よそ見しながら歩いてると人とぶつかったり、足を取られて躓きそうになったりする。

たいていの場所や道は石畳が敷かれるなどして整備されているのだけど、土がむき出しになってるところや砂利道になってるところもあって、踵の高い靴を履いてきちゃったのは失敗だったかもしれない。ちよつと歩きにくい。ヒールではないからまだしもマシなのだけど、スニーカーにしておけばよかったな。けれどモミジを見ながらの散策は楽しかった。

「すつごくキレイ……！」

わたしはあちこち見まわしながら何度も感嘆の声をあげた。

風も穏やかで、陽射しが暑いくらいの晴天。「天晴れ」と言いたくなるほどの秋晴れで、自然、気持ちも高揚してくる。

流れるような枝ぶりが美事な紅色のモミジや羽の団扇みたいな形をした葉の黄色いモミジ、まだ紅葉しきつてないモミジの樹もあって、今、目の前にある光景はまさに綾錦といった風。

「紅葉狩りに行こう」って急なお誘いで少し戸惑ったけど、来てよかった。

「維月さん、今日はありがとうございました」

わたしを連れ出してくれた人に、改めて礼を言った。

「今朝いきなり誘われた時は驚きましたけど」

「ああ、それはごめん」

維月さんは小さく笑った。

「今週末から来週末にかけてが見頃だってニュースで見て、急に行

きたくなつて。こういうのは思い立ったが吉日というし。美鈴が、ちやうど空いててよかったよ」

「維月さん、そういえば予定があるって言ってませんでした？ テニスクラブの方で何かイベントがあるようなこと……」

「うん、まあ、イベントっていうかちよつとした練習試合みたいなもんなんだけどね。いろいろと調整のつかないことがあつたらしくて、それで急遽来週に変更になつたんだよ」

「そうだったんですか」

学生時代テニス部だったという維月さんは、今でも、毎週とはいかないようだけど、日曜日はテニスクラブに通っている。テニススクールとかじゃなくて、お気軽な市民サークルのようなものらしい。クラブのメンバーの年齢層も高くて、維月さんなんかは「若造」扱ひされてるらしい。

「俺と友人とでなんとか平均年齢を下げてるけど、それでも五十代がほとんど。六十八か九の人が最高齢だったかな」

その四捨五入すると七十歳になるという男性は、それはもう元気いっぱいニコートを駆けていらつしやるというのだから、驚きだ。

わたしなんかすぐへばつちゃうだろうなあ。何しろ文系まっしぐらで、運動系の部活になんて入ったことないし、そもそも体育の授業の成績は……そこそこ程度だったし。

それはともかく！

今日のような素晴らしく好いお天気の日にひきこもってちゃ詰まらない。……ほんとは、今日は一日うちひきこもって、お掃除したり読書したり昼寝したり美味しいスイーツ食べたりしてまったり……というか、のんびんだらりとして過ごすつもりだったのだけど、こうして連れ出してもらって、よかった。

維月さんも、そう思ってくれてるみたいだ。わたしの嬉しがる様子を見て、連れ出した甲斐があつたって、笑ってくれた。

「もみじ狩りなんて、ずいぶん久しぶりだな。ドライブがてら遠出するにも、この季節はいいね」

「そうですね、ほんとに！ 気が晴れるっていうか！ あっ、そうだ！ せっかくもみじ狩りなんだから、落ちてるもみじ、きれいそ  
うなのを持って帰りたいな」

「無理やり“狩り”をしなくてもいいと思うけど」  
きよるきよると辺りを見回すわたしを、維月さんは可笑しげに笑  
う。

いいんです！ 無理やりでもなんでも、ちゃんともみじ狩りをし  
たい気分なんですから！

急いで出てきちゃったから、デジカメを持ってくるのをすっかり  
忘れてしまった。とりあえずはケータイで何枚か撮ったけど。

けれどやっぱり、実物の迫力には敵わないと思う。

それでも思い出はとっておきたいから、写真であれもみじの葉一  
枚であれ、形にして残しておきたい。

維月さんに連れてきてもらった所なのだから、なおさらこの紅葉  
の美しさは記憶に留めておきたいと思う。

そう思いながら、今度は上ではなく下ばかり見ながら歩き出した。  
色と形のきれいなもみじの落ち葉を拾うべく、虎視眈々と目を大き  
く見開いて。

一枚、二枚と、それなりにきれいなもみじを拾った所でふと顔を  
上げると、そこに維月さんの姿がなくて、焦ってしまった。

「い、維月さんっ？」

首をめぐらせて周りを確かめる。雑踏に紛れ込んで維月さんを見  
失い、はぐれてしまった。

「どっ……？」

途端不安になり、小走りになって維月さんの姿を捜した。幸い、  
維月さんはすぐに見つけた。ちょっと行った先で、老夫婦に写真  
を撮ってくれと頼まれたらしく、カメラを構えていた。ほっとして、  
維月さんが老夫婦にカメラを返したところで、声をかけた。

「維月さん」

名を呼ぶと、維月さんは振り返り、「ああ、よかった」とため息

をついた。そして、すまなそうな顔をして謝った。

「うっかり目を離して……。ごめん」

「え、いえ、そんな！ わたしこそみじ狩りに夢中になっちゃってて！ でも、すぐに見つかってよかった……」

言ってから、わたしは手を伸ばした。

「混んでますし、その……」

そして、維月さんの上着の端を、きゅっと掴んだ。我ながら子供っぽい所作で、恥ずかしい。けれど、こうして掴んでいないとまたこの混雑してる境内の中で、維月さんとはぐれてしまうそう……。こうして、掴んでいいですか」

と、問おうとしたのだけど、維月さん先を越されてしまった。

維月さんは「ここじゃだめだ」と、上着を掴んでるわたしの手を握った。

「この方がいい」

「……………」

手を繋いで歩こうと維月さんは言うのだけど。

「……恥ずかしいんですけども……」

「それならいっそ」

「え？」

俯いて呟くと、維月さんはいきなり肩を抱いてきた。

「ちよっ、あのっ」

「こうやって歩こうか？ こうやって密着してればはぐれる確率はぐんと低くなる」

あまつさえ！ 維月さんは耳朶をくすぐるように囁いてくるのだ。真昼間っていうのに、なんていう甘い声を出すんですか、維月さんはっ！？

カッと全身が火照りだす。火がついたみたいに、耳どころか頬やら首筋まで熱い。

「いっ、いいです、手、手で！ 手でお願ひしますっ！」



結局、維月さんは「残念」と笑いながらも手を繋ぐだけに留めてくれた。

……ほんとうにちょっとだけ、ほんのちよっぴりわたしも心の中で「残念」って思ってたのは、今は、内緒にしておこう。

でも気付かれちゃってるかもしれない。照れくささと期待がわたしの顔を色づいたもみじのように赤くしてるから。

権と咲う(後書き)

「権と咲く」は、「もみじとわらう」「と読みます。

## White and Black

夜、約束していた時間より少し遅れて、その人はやって来た。

午後八時。あたりはもうすっかり暗い。空には雲が多く、時折吹きつけてくる風は冷たかった。乾き、冷えた空気が頬を撫ぜ、体を縮こまらせる。

手がかじかんで力が入らない。ドアノブにかけている指先がすっかり冷えきっている。

だけど、寒さなど押し返すくらいの勢いで、わたしは急いでドアを開けた。

だって、早く顔を見たくて。声を聞きたくて。

そして、ドアを開けた直後、

「い……っ」

わたしは絶句して、硬直してしまった。

ドアの向こう側にいた人、高倉維月さんの姿があまりに衝撃的すぎて。

わたしは開口一番、驚きの声をあげた。

「なっ、なんて恰好してるんですか、維月さんっ!？」

わざわざ足を運んでくれた人にかける言葉じゃないだろう。それに、待ちわびていた人にかける言葉でもない。

だけど、しかたがないと思う!

だって維月さん、とんでもない恰好をしてくるんだもの。ラフな普段着でもなければ、いつも会社でみるシャツとスラックスというスタイルでもない。

わたしは目を見開き、啞然として維月さんを凝視している。

非難めいたわたしの声に、維月さんはちよつとだけたじろいだよ

うだ。

「まいったな。……そこまで引かれるとは正直予想してなかった」  
維月さんは気恥ずかしげな苦笑を浮かべて肩を竦めた。

「引くとかじゃなくて……っ、や、むしろその逆っていうかです  
ねっ！ いえ、そのっ、ああもういいですから、中入ってくださいっ」  
みつともないくらいに慌てふためき、うるたえまくっているわ  
たしとは正反対に、少し困ったような顔はしつつも沈着さを失わない  
維月さんは、わたしの言葉に従い、ドアをくぐった。

部屋に入っすぐ、わたしは身を竦ませて、維月さんと対峙して  
いた。お互い佇立したまま、距離を縮められずにいた。腕を伸ばし  
ても維月さんに触れることはできない。

それなのに息苦しくて、胸が詰まる。

部屋が急に狭まったように感じられた。

わたしが住んでいるのは、1Kの木造アパート。維月さんの居所  
である2DKのマンションに比べたら狭いには違いないけど、一間  
7・5帖はあるから、決して狭くはない。それに一応掃除はして、  
整理整頓したばかりだから散らかってもおらず、足の踏み場は十分  
にある。

なのにどうしてこんなに狭く感じるんだろう……？

維月さんがいるだけで、寒々しくすらあった部屋が、濃密な空間  
に変わる。部屋全体に維月さんの存在感が溢れて、それがわたしを  
包み込んでいるかのようだった。

とくに今夜の維月さんは、いつも以上にキケンな雰囲気をも  
っている。維月さんの穏やかなようでさりげない押し強さがある  
瞳と、微笑とともに切なくこぼれる吐息は、依存性のある媚薬の  
ようだ。酩酊してしまいそうで、正視するのが怖いくらい。……っ  
ていつても結局は目を逸らしたままではいられず、甘やかな雰囲気  
に囚われてしまうのだけだ。

「あの……維月さん」

わたしはいぶかしげに顔をしかめたまま、再び尋ねた。

「どうしてそんな恰好してるんですか？」

口調は知らずと不審そうなものになる。維月さんの恰好がいつになく「不審」なものなのだからだ。

「ああ、これね……」

くすつと笑って、維月さんは細いネクタイをつまんで見せた。サテン生地で光沢のある黒いナロータイだ。

維月さんが着てる服は、別に奇抜な衣装ってわけではない。端的に言えば、「黒スーツ」だ。俗っぽく言うなら、「いかにもホストが着てそうな黒スーツ」。

体にぴったりフィットした細身のスーツだ。一つ釦の黒ジャケットに、ブルーグレイのシャツ、ちらりと見えたベルトのバックルはハート型をしていて、縁取りは銀だったけど中央は深紅で、目を引いた。

とにかく！ 普段着でないことは確かだし、維月さんのこういう感じのスーツ姿は初めてだ。不審に思っても仕方がない。

それに、髪型もいつもとちょっと違う。スタイリング用のジェルがワックスで額の生え際から耳の上あたりを、持ち上げるように整えてある。少し濡れたような艶をだしながらもごく自然にセットして、ガチガチに固めてはいない。

それによくよく見てみれば、いつもはしない銀の指輪までしてる。左の人差し指にはめてるそれは、たぶんオニキスと思われる石を中央に埋め込ませた十字架の彫りのリングだ。ピアスは、さすがにピアスホールがないからしてないけれど、耳たぶの後ろに、絶対トワレをつけてきてる！ だってムスク系の甘い香りがほのかに漂ってくるもの。いつもの維月さんとは、少し違った香りだ。

……ホスト……。ホストだよ、どうみても。ごく普通のサラリーマンには見えません！

維月さん自身、着なれない服に少々戸惑っているようだ。ジャケット

ツトを脱ぎ、ネクタイを緩めている。その仕草がまた様になつていくというか、絵になるといふか……

これはもう、瞼の裏に焼きつけておくだけでは足りない。

「さすがに照れるね。こういう服は普段着ないし、指輪や香水もつけないし……って、美鈴？ ケータイ構えて何してるのかな？」

「えっ？」

わたしの驚き声と、シャッターを切るパシャツという音が重なった。

わたしは我ながら感心する素早さでケータイ電話を手に取り、カメラモードに切り替え、そしてちゃっかり撮影に成功した。

ケータイのカメラで撮った維月さんのホスト姿を確認し、その画像は即座に保存した。

「だって、写真に撮っておかなきゃもつたいないじゃないですか！ 刺激が強すぎて目の毒と言えなくもないですけど、やっぱり目の保養ですし！ あ、大丈夫です。誰にも送ったり見せたりしませんから。ちゃんと鍵つきのフォルダに保存したんで、わたし一人で鑑賞します！」

わたしは今しがた撮った維月さんの写真をもう一度開いて、確認した。

うん、とっさだったけど、いい感じに撮れた！

脱いだジャケットを無造作に腕にかけ、少し首を伸ばしてネクタイを緩めている。その構図には男性特有ともいえる色気があって、うん、なんといいのか、実に……セクシーだ。

維月さんのホスト姿に驚きはしたけれど、あまりの似あいつぶりに、写真を撮らずにはいられなかった。ああでも、全身像を撮れなかったのはちよつと惜しいかな。

口元を緩ませているわたしを見、維月さんは「まあ、いいけど」と苦笑した。

「美鈴が喜んでくれたなら、着てきた甲斐があつたつてものだし」そして、維月さんは珍しく複雑そうな顔をして、小さくため息を

ついた。

少し動悸が治まってきたところで、改めて維月さんに尋ねた。

「ところで、どうしてまたそんな恰好してきたんですか？」

「ああ、うん、これね……。実は妹が着ていけって押しつけてきたんだ」

「え……。妹さん？」

わたしは目をぱちくりとさせ、首を傾げた。

維月さんに、年の離れた妹さんがいるのは知ってる。会ったことはないけれど、ずいぶんと仲がいいらしい。そしてその妹さんは、わたしのことを「兄の彼女」として、（維月さん曰くだけど）わりと好意的に認めてくれていたらしいのだ。

「妹さんが、どうして……？」

「まあ、気まぐれな思いつきなんだろうけど……。今日はホワイトデーだろう？ だからチョコのお返しに、これ着て彼女に奉仕して来いって」

「ほっ、奉仕っ!？」

わたしは今夜何度目かの頓狂な声をあげ、またしても硬直してしまった。

維月さんはわたしをソファアベッドに座らせると自分はキッチンに立ち、お茶の用意をしてくれている。買ってきてくれたケーキは、以前雑誌で見て、食べてみたいなあとはぼしていたイチゴのたっぷり入ったロールケーキだ。

今日は三月十四日。いわゆる「ホワイトデー」だ。バレンタインデーの返礼日ともいうのか……。ともあれ、バレンタインデーと対になっているイベント日。

ホワイトデーの起源は諸説あるようだけど、このイベント日が流

行りだした頃って、たしか返礼の品はキャンディーとかマシマロだったって記憶がある。だけど今じゃすっかり多様化して、食べ物じやなくなってることすらあって、三倍返しだの十倍返しだのと、世の男性たちを悩ませているみたいだ。

わたしは三倍返しとか、そんな過分なお返しは望んでいない。そりゃあ、「お返し」を全く期待していないといえば嘘になる。けど、気持ちだけでも十分に嬉しいと思うのも本当だ。

……ううん。わたしはやっぱり欲張りだ。維月さんの“気持ち”を“いつも”求めすぎるほどに求めている。

今夜維月さんが用意してくれたのはロールケーキで、キャンディーでもマシマロでもない。けど見た目的にはスポンジも白くて赤いイチゴは入ってるものの生クリームは純白だから、ホワイトデーに相応しい一品。

そして維月さんがもう一つ用意してくれたのは、維月さん自身。その維月さんは、全身黒づくめだ。その黒が、よく似合っている。わたしは暫時、お茶の用意をしてくれてる維月さんをぼんやりと見つめていた。けれど紅茶の缶を取り出し、どれを淹れようか迷っている維月さんに気付いて、わたしは慌てて立ち上がった。

「維月さん、あのっ、わたしがやりますから！」

「いいよ。お茶を淹れるだけなんだから」

「でも維月さん、疲れてるでしょう？ 今日も休日出勤だったんですよね？」

今日だけじゃない。維月さんはこのひと月余り、毎週土曜は休日を返上して、出勤してた。

二月の半ばから年度末ということもあって仕事が忙しく、派遣社員のわたしですらほぼ毎日残業をしていた。それでもわたしは遅くとも八時にはあがれたし、土曜出勤はなかった。けれど維月さんは土曜の休みも返上して出勤し、残業も、退勤時間九時十時は当たり前、深夜にまで及ぶことも多かった。

日曜は日曜で、お互い別の予定が入ってしまい、この一カ月の間、



デートはおろか二人きりで会うことすらできず、せいぜい電話で話すか、メールをしあうくらいだった。こうやって二人きりで会えるのは、バレンタインデー以来。

会いたかった。

そう思うのも、贅沢なことだつて分かってる。

だつて、会社へ行けば維月さんの顔を見ることはできて、声を聞くことだつてできた。

けれど……だからこそ余計、寂しかった。

会社で会っているのは、維月さんじゃなくて、高倉主任だから。

維月さんは“主任”としてわたしに接し、わたしもまた高倉主任の監督のもとで働いている、一派遣社員としての態度を崩さないよう努めてた。

維月さんの顔を見られるだけで嬉しい気持ちはあつたけれど、ただ見ているだけじゃ物足りない気持ちになつて、寂しさは募る一方だった。

上司ではない高倉維月さんに会いたくて堪らなかつた。

でもそんな我儘は言えない。

日々仕事に追われ、おそらくはクタクタになつてるだろう維月さんに、わたしのために時間を割いてほしいなんて我儘、言えるはずがなかつた。

だから今夜、こうして会いに来てくれたのは嬉しかったけど、反面、申し訳ない気もしていた。ホワイトデーだからつて気を遣わせてしまったんだらうかつて。

「維月さん、今月はまだ忙しいんですね？ 無理しないで、ちゃんと休んでください。会いに来てくれたのは嬉しいですけど、わたしのせいで維月さんが疲れちゃったりするのは本意じゃないです」「疲れているのは美鈴もだらう？ 毎日残業して、いろいろ手伝つてくれて。助かってるよ、とても」

「維月さんに比べたらたいしたことありません。土日はちゃんと休んでるし」

「でも、最近元気のなさそうな顔をしていた」

「それは……っ」

あたしは下唇を噛み、俯いた。

元気がなかったのは、仕事疲れも……たしかに少しはあったけれど、一番の原因は……

「俺もね」

そつと、維月さんの大きな手がわたしの頬に触れた。

「俺も正直言えば、ちよつと疲れてた。まあ、仕事だし、仕方ないとわりきってたけどね。だから今夜は何が何でも美鈴に会いたかった」

「え、……あの？」

顔をあげると、そこにはまっすぐにわたしを見つめる維月さんの温かな瞳があった。温かい……？ ううん、熱いくらいのまなざしだ。維月さんが触れている頬が、自分でもわかるほどみるみるうちに熱りだした。

「派遣社員の木崎さんじゃない、俺の美鈴に会いたかった。美鈴の声が聞きたかった。こうして美鈴に触れたかった。美鈴を抱いて、癒されたかった」

「……………」

わたしはもう声も出ない。

なんのてらいもなくさらりと気障なことを言っただけのける維月さんに啞然としたけれど、それ以上に、心が震えるほどに嬉しかった。

同じことを思っていてくれたこと。そして、“俺の”と言ってくれたこと。

今、わたしを見つめ、触れてくれている人を、「わたしの維月さん」だと、わたしも思っていていいのだろうか。

「維月さん」

「何？」

わたしの頬にあてられた維月さんの手に、自分の手を重ねた。わたしはちよつと笑ってみせて、

「上手ですね。本物のホストみたいです」

からかうように、言った。

「……それ、褒めてる？」

維月さんはわずかに眉根を寄せて、微妙そうに苦笑した。

「うーん、どうでしょう？ でも褒めてます、たぶん。だってわたし、今いい気分になって、元気になりましたから。ってことで。お茶、わたしが淹れますね」

「いや、俺が淹れる」

維月さんはいつになく強引だった。きっぱり断って、わたしを再びソファ―ベッドに押し戻し、座らせた。

「美鈴には体力を温存しておいてもらわないと。だから今はおとなしくしてて」

そして維月さんは意味深な微笑を浮かべて言った。

カーテンの隙間から、やわらかな旭光が射しこんでいた。仄かな光と淡い影が揺らいで、夜とも朝ともつかない曖昧な時が室内にたゆたっている。あえかな霞光が、わたしと維月さんを包んでいた。

大きな手が、わたしの寝乱れた髪を宥めるように撫せている。時折指に絡めたり、耳の後ろを搔いたりしながら。

「……………」

わたしは維月さんに抱かれ、身じろぎもできない。

体中が軋むように痛い。……筋肉痛になりそう、そんな痛さ。

「もう……………ばか……………」

わたしは顔を俯かせたまま、小声で維月さんを非難した。

疲れてるって言ったくせに。眠らせてもくれないなんて。

わたしの拗ねた声は、維月さんの耳にしっかり届いていたようだ。

「じゅめん、つい」

くつと、維月さんは笑った。謝罪する声に反省の色は感じられない。

「つい……って。もうっ」

維月さんはわたしの体をさらに抱きよせて、耳元で囁いた。

「だから言つたる？ 体力温存しておいてっ」

「……っ」

「この程度で根をあげるのは早いよ、美鈴？」

「こ、の程度って！ そっ、そんな……っ」

慌てて身を離そうとするわたしを、維月さんが逃してくれるはずもなく。

わたしは維月さんの熱い抱擁の中、激しいキスの嵐にもまれて息も絶え絶えになりながら、熱い奔流に呑み込まれていった。

白み始めてゆく明け方の空を見ることがなく。

いつも俺を翻弄する君に、せめてもの仕返し。

どうやら彼女の目に映る俺は、泰然とした態度を崩さない「大人」であるらしい。

不本意だが、そうであらねばならないと思っっているのは確かだ。だから時々それを崩したくなる。「子供」っぽい畏をしかけたくなる。

彼女の初々しい反応に、たとえこちらが先に「落ちて」「しまった」としても。

日ごろ、人目を気にして沈着な態度を心がけているらしい彼女は、だが、不意にあどけない少女のような表情を見せる。

彼女は頬を桜色に染めて、拗ねた顔を俺に向ける。

「高倉主任ばかり余裕で、ずるい」

上目遣いに俺を見て、可愛らしく文句をつけるのだ。

俺を焦らしているなど、考えもしないのだろう。

まったく、敵わないね、彼女には。

だけどね、と、俺は言葉を返す。

「木崎さんも、ずるい」

俺がそう言って笑うと、彼女は反射的に身構える。頬を鮮やかに色づかせて、身体を固まらせ、そうして「誘って」いる。

俺は微笑を浮かべて木崎さんの頭に手を置く。肩を竦ませて、木崎さんは瞼をきゅっと閉める。それからすぐに伏せた瞼をあげて、俺を見つめる。

「……高倉主任？」

ため息が、思わずこぼれ出る。

社内では、と自分を抑えていたのだが。

給湯室には幸い誰もいないし、誰かやってくる気配もない。

ここで偶然木崎さんと居合わせたのは、ご褒美なのかもしれない。真面目に、物堅く、平静を装っていた俺への。

ありがたく、いただくとしようか。

「社内恋愛の醍醐味ってやつだよな、こういうの」

「は、……え？」

抱きしめたい衝動だけはなんとか堪えられたが。

彼女……美鈴の後頭部を強く掴んで寄せる。美鈴に逃げる余地など与えずに、素早く唇を奪う。

「……続きは、今夜。……ね？」

「……っ」

耳元で囁き、それから身を離れた。

「じゃ、また後でね、木崎さん」

そうして身を翻すと同時に、俺は彼女の上司に戻る。

「ちよっ、もあやだっ、高倉主任っ」

「ハハ、ごめんごめん」

「ごめんじゃ済みませんよ、高倉主任、どうしてくれるんですかっ

！もあっ、心臓がっ」

「はいはい。それじゃ、深呼吸して息整えて」

「ううっ」

不服げに、木崎さんは俺を睨みつけてくる。

俺はため息まじりに笑って、付け足した。

「木崎さんを乱した責任は、今夜とるから。それで勘弁して？」

木崎さんはさらに顔を赤くして、可愛らしく、わめく。

「もあっ、高倉主任、全然反省してないしっ……！」

赤面し、慌てふためいている彼女をその場に残して立ち去らねばならない俺の気持ちも、少しは解かってほしいのだけだね。

社内恋愛の醍醐味とやらは、これからますます味わえそつだ。苦  
味を含みつつ、甘くて美味だ。  
癖になりそうなくらいに、ね。

彼女は臆病だ。臆病だが、ひどく無防備だ。不安定に揺れている。

付き合い始め、恋人同士となった今でも、彼女は俺に対しどこか遠慮がちで、自分を顕わにはさらけださない。

無防備に笑うくせに、ふと怯えたようなまなざしを向けてくる。

「美鈴」

と、名を呼べば、びくりと肩を竦ませる。

「な、なんですか？」

その反応のきこちなさは、可笑しいくらいだ。

美鈴は今俺のマンションにいて、まったく寛いだ姿勢でチューハイの缶を手に行っている。小気味のいい音をたてて二本目の缶のプルタブを開けたはいいが、声をかけられ、中途半端なところで手をとめた。

美鈴は上目遣いに、俺を見つめる。

寛いでいるのか緊張しているのか、彼女はいつも揺らいでいる。

「二十四日と二十五日は、空いてる？」

俺が訊くと、美鈴は目を瞬かせた。

「え？ ええ、それは、まあ……空いてるっていつか、その日は普通に仕事ですよね？」

「まあそうなんだけど」

美鈴のそっけないとも言える返事に、俺は苦笑を返すしかなかった。

本来ならば、もっと周到に予定を組んでおくべき冬のイベント日だ。

クリスマスだよ、と俺が言えば、美鈴は少しばかりとまどったような顔をし、そうですねと返してきた。

それから、申し訳なさそうな顔をして、美鈴は言葉の先を続けた。



「クリスマスだっていても、会社は休みじゃないし、それに年末でことで、最近仕事忙しいですよね？ 維月さん、このところ残業も多いし。だから、その……ええっと……」

気を遣わなくてもいいです、というようなことを、どうやら美鈴は言いたいようだ。だが、言いあぐねている。遠慮の仕方、美鈴は不器用だ。慌てている様子がたまらなく可愛い。

「わたし、クリスマスにはそれほど思いいれなくて」

チューハイで喉を潤してから、美鈴は言葉を継いだ。グレープフルーツのチューハイは、思ったより苦味がきつかったのか、美鈴は一瞬眉をしかめ、一口飲んだだけでチューハイの缶をテーブルに戻した。

「クリスマスって、あんまり楽しい思い出ってなくて。あ、けど別に嫌な思い出があったとかいうんでもなくて、単に浮かれるようなことがなかったってだけで。だから……その、クリスマスが嫌いとかそういうんじゃないんです」

美鈴はしどろもどろに、言葉を紡ぐ。

美鈴は寂しがりやだ。それを彼女自身、気付いているのかいないのか。

美鈴は、自分の心をごまかそうとする時、おそらく無自覚なのだろうが、饒舌になる。「でも「や」けど」という語彙で不明瞭な言葉を繋ぐ。

「クリスマスの雰囲気自体は嫌いじゃないし、できれば楽しみたいなーとかは思うんですよ。でも……だから雰囲気につられて浮かれない自分がちょっとなんだかなあって思ったりして。あ……と、やだ、やだな、何言ってるんだろ、わたし。すみません、なんだか訳のわかんないこと言っちゃって！」

美鈴はアルコールのせいだけではなく赤くなっている頬に手をあて、きゅつと眉をひそませた。

首を小さく振ると、肩にかかっている髪が頼りなく揺れる。美鈴の髪はやわらかく、手触りがいい。

俺の手は、ほとんど無意識のうちに伸び、美鈴の髪に触れ、指を通していた。髪の流れにそって梳き、そのまま顎のラインに指を這わせた。

「あのっ、維月さん」

「うん？」

「……怒って、ませんか？」

「どうして？」

ふ、と笑うと、美鈴はさらに頬を赤らめた。

ソファーに座っている俺を、床にクッションを敷いて座っている美鈴は、困りきった顔をして見上げる。身体をにじらせて、俺の近くに寄ってくる。美鈴の手が、俺の膝の上に置かれた。

「クリスマスなのに……」

素直に楽しもうとしない自分が、もどかしく切ないのだろう。

「普通はもっと盛り上がるものですよ？ でもわたし、どうしたらいいのか分からなくて」

美鈴は少し顔を背けた。俺の手を払いのけはしなかったが、居たたまれなさそうに目を泳がせている。

「分からなくて、そのせいで維月さんの気を悪くさせちゃったんじゃないかって」

美鈴はしょんぼりと肩を落とし、ため息をついた。

彼女は、ひどく臆病だ。

寂しいと思う気持ちを抑え込もうとし、かつ怯えている。

彼女のそうした怯えに気づいたのはいつだったか。

何がしかのきっかけがあったわけではない。ある時ふいに、気がついた。気がついて、そして……その時には既に俺は落ちていたのだろう。

その時からもうずっと、美鈴が恋しくて堪らない。

「美鈴は、ちょっと考えすぎなところがあるね。あれこれ考えすぎ

て、がんじがらめになってる。もう少し感情に流れてもいいと思うよ?」

「……………え。あ、それは、その……………」

美鈴は肩を竦ませて、顔をあげた。

「分らないなら分らないと言えればいい。どうして欲しいのかよ、自分がどうしたいのかをもっと前面に出して。せめて、俺には」

「維月さん……………」

「といつても、美鈴の性格じゃ、それを言うのは難しいかな。会社でもそうだけど、美鈴はいつも後手にまわりがちだから」

美鈴の頬から手を離し、一瞬の油断を与えた後に、俺は美鈴の腕を引っ張り、強引に抱き寄せた。

「いつ、いつ……………っ!?!」

「美鈴。二十四日の夜は、他に予定を入れないで、俺のために体を空けておいて。会いに行くから、待っていて」

強い口調で、言った。美鈴に「でも」という言葉を出させないよう、端的に。

「美鈴と二人で過ごしたい」

「う、うん……………」

美鈴は俺の胸に頬を摺り寄せ、か細い声で応えた。遠慮がちな所作で、俺の背に腕を回してくる。

「わたしも維月さんと一緒にいられたらいいなって、ほんとは思ってます。だから……………」

ちよつと窮屈そうに体を寄せながら、それでも美鈴は照れくさそうな顔を俺に向け、微笑みを見せる。

「だから、すごく嬉しいです、維月さん」

「うん」

ありがとつと言い添えようとした美鈴の唇に己の唇を重ね、それから微笑みをも交し合った。

二人きりの、クリスマス前夜。

美鈴に、外気の冷たさなど感じさせないよう、そして寂しさなど忘れてしまえるよう、俺という存在の“熱”を、心にも体にも刻みつけてゆく。

美鈴は臆しながら、それでも俺の熱情を受け入れ、やがて融解していく。

赤いキャンドルがちろちろと燃え、艶やかな光と影を揺らめかしている。

そして今、俺の上で、焰のように鮮やかに燃えている美鈴がいる。露わになった白い焰は、目を瞠るほどに美しい。

「美鈴も、俺を楽しめばいい」

とまどいがちに揺れ動く彼女の白い姿態を眺め、低くささやいた。そして指を絡ませ、握る。

羞恥と快楽に惑う美鈴の瞳は、まるで水面に映る半月のようだ。

ゆらゆらとたゆたいながら、光を水の内にこもらせている。

美鈴の熱せられた身体を、腰を掴んで引き寄せた。

「もっと、深く……」

美しい焰は、さらに熱く強く、燃え上がる。

俺を焦がすために。

J o y f o r e v e r (後書き)

A t h i n g o f b e a u t y i s a j o y f o r  
e v e r . b y J o h n K e a t s (1795-182  
1)

満月 full moon

日が傾くにつれて、雲が多くなっていった。

日中は陽射しがきつく、暑かったが、日が暮れるに従って気温も下がり、風が心地よく涼しくなってきた。梅雨入り宣言にはまだ至らず、風に僅かな湿り気はあっても、不快なほどではない。

雲の多い夜空を、何気なく仰ぐ。共に歩いていた彼女 木崎美鈴も、俺が足を止めると同じように歩みを止めて、やはり空を仰ぐ。「月、見えませんか」

そして彼女は、少し淋しげな口調でそう言うとふっと視線を落として、それから俺の方に向き直り、やわらかく微笑んだ。

雲で隠れているのか、はたまたまだ昇っていないのか、月の姿は見え、ただ風だけがさわさわと街路樹の梢を揺らし、流れていた。

今日、六月七日は二十九回目の誕生日だ。

美鈴は「誕生日おめでとございます」の言葉とともに、祝いの品を俺に差し出した。

「プレゼント……結局無難な物になっちゃって……」

俺にプレゼントを手渡してから、美鈴は少しだけ残念そうな顔をし、心配げに俺の顔を覗き込んでくる。

「気に入ってもらえるといいんだけど……」

手渡された箱の中身は、白にややグレイのストライプの入ったワイシャツと淡いセルリアンブルーのネクタイだ。シンプルなデザインと落ち着いた色合いで、彼女らしいチョイスという気がした。

彼女のことだ。選ぶのにずいぶんと時間がかかったことだろう。

無難な物と美鈴は言うが、高価な物だ。質もいい。

「それからこつちも」

と、別に手渡された紙袋には、ケーキとクッキー、そしてワインが入っていた。

ケーキとクッキーは美鈴の手作りだ。

「ケーキもクッキーも、我ながら美味しくできたんですよ！」

美鈴は珍しく自慢げに笑った。ケーキ作りは失敗する率が高いらしく、成功したのがよほど嬉しいようだ。

ケーキは甘みをおさえたコーヒー味のスポンジケーキで、生クリーム量は控えめにしてきたらしい。

クッキーの方はイタリアの赤ワイン「バローロ」を使って作ったという。そのクッキー作りの際に使用した赤ワインも持参していた。俺も美鈴も、ワインにはさほど詳しくない。それに美鈴はどちらかといえばワインはあまり好まず、飲むとしても白か口ゼだという。しかし、この「バローロ」という赤ワインは口に合ったらしい。

「維月さんの口にも合えばいいんですけど」

バローロというワインは、「イタリアワインの王様」と呼ばれていると美鈴が教えてくれた。ワイン専門店で見習いから教えてもらったのだという。

「フランスワインの王様はブルゴーニュ」というのは聞いたことがある。とすれば、「バローロ」というワインは、ワイン通であれば知っていて当然のワインなのかもしれない。

俺も美鈴もワイン通ではないから、「へえ」としか相槌を打てない。

だが、美鈴の気持ちには適当な相槌を打つだけでは、足りない。足りないのに、感謝の意を上手く言葉に表せず、もどかしくなる時もある。たとえば、

「レシピを見たら他の赤ワインでも代用できるって書いてあったんだけど、維月さんの誕生日なんだし、やっぱりちゃんとバローロを用意したかったんですよ。見つかってよかったです！」

満面の笑顔でそう言った美鈴に、「そうか」としか返せなかった時。

我ながら気恥ずかしいほど初な反応に、内心苦笑せずにはいられない。

が、美鈴は俺が浮かべた微笑を、どうやら「一人で勝手に盛り上がってる」とからかって笑ったものと思いこみ、

「わたしだけが浮かれてるみたいでちょっと恥ずかしくなってきたやつたんですけどもっ！」

と、可愛らしく拗ねてしまった。

むろん、俺はすぐに「そんなことはない」と返した。

「俺だつてかなり浮かれてる」

しかし美鈴は不満顔だ。

「そんな風には全然見えませんけどー！」

まあ、見せないようにしているのだが。これでも多少の“見栄”はあるからね。

誕生日という「イベント」に盛り上がるのは、やはりどちらかといえば女の方なのだろう。祝われるのも嬉しいようだが、祝うのもまた楽しいらしい。

美鈴も例にもれず、俺の誕生日を祝いたかったらしい。誕生日を知ったのがつい最近だということもあって、焦っていたようだ。

付き合う以前は、誕生日など訊いてもこなかった美鈴だ。こうして、俺の誕生日を知ったというだけで「どうしよう」と右往左往する様は、可笑しくもあり、可愛くもある。

彼女のそうした心境の変化は、そのまま俺に対する気持ちの変化でもあるのだろう。うめばれていいのなら。

外で簡単な食事を終えて、マンションに戻ってきたのは、夜の七



時。

プレゼントはその時に手渡された。

美鈴は俺に渡したプレゼントのうち、ケーキだけまた手元に戻し、そのままキッチンへ持っていった。今すぐ食べましょう、と言った顔は嬉しげに緩んでいる。

俺は居間に腰を据え、クッキーが入っている袋の封を開けた。親指程の大きさのクッキーがいくつか入っている。赤ワインを使用したクッキーだが、色はほんのり赤みがかかっているくらいだ。香りも、バターとナツメグの方が強く出ている。

歯触りは、ややしっとりめだ。口に含むとバローロの芳醇な香りが広がる。くどさのない甘さだ。

美鈴が、期待を込めた眼差しを俺に向けてきた。

「バローロのクッキー、どうですか？」

「美味しいよ。ちょっと変わった風味だけど……高級菓子みたいだな」

「それはちょっと褒めすぎだと思いますけど。でも、口に合ったのなら、よかった」

褒められて、美鈴は照れながらも素直に喜んだ。まるであどけない少女のような顔をする。こういう時の美鈴は、素直な分無防備で、かえって手を出しにくくなる。

俺のそんなよこしまな下心などまるで気付きもしない様子で、美鈴は切り分けたケーキを俺の前に差し出した。彼女の分も当然あるのだが、俺のより、幾分小さめに切ってきたようだ。

「一応ちっちゃいろうそくも用意してきたんですけど……立ってます？」

「いや、ろうそくはいいよ」

俺は苦笑をし、小さく肩を竦めた。

いくらなんでも三十本近くも立てられないだろう。美鈴は一本を十年分にして三本立てましょうか、などと冗談めかして言うが、いきなり四捨五入されて、三十になるのは複雑な気分だ。

これでもまだ一応ギリギリ二十代だと、それを口にすれば、美鈴はごろごろと笑いだすに違いない。

「じゃあ、残念だけどうそくはなしで。はい、どうぞ」

美鈴の手作りケーキは、見た目だけでも十分に美味しそうだった。トランプのカードくらいの大きさで、高さは十センチほどだろうか。挟んである生クリームは、できるだけ量を控えめにしたらしい。全体的に、甘さ控えめのケーキにしてくれたようだ。

「維月さん、紅茶淹れますね？」

「うん。……ああ、ついでにワインも飲もう。せつかくだし、美鈴も飲まない？」

「え……うん、じゃあ、そうしようかな」

俺の誘いを、美鈴は断らない。今日は特に、美鈴は素直だ。健気なほどに、俺に気を遣う。

美鈴は落ち着かなげに、一度下した腰をまたあげて、キッチンへ戻っていく。紅茶のティーパックもティーサーバーもカップも、それにワイングラスのありかも、美鈴はもうおぼえたようだ。キッチンだけでなく、俺の部屋そのものにもっと馴染んできてくれてもいいのだが、まだそこまでは至らない。慣れきってしまうほど来ていないのだから仕方がない。泊まったのは、まだたった二度だけ。彼女の私物もほとんどなく、俺の部屋にはまだ美鈴の残り香は移っていない。

その代わりに、今部屋の中に漂っているのは、クッキーとケーキの甘い香りと、温かな紅茶の香り、そしてやや渋みのある赤ワインの独特の香りだ。それらがふわりと柔らかく、そして濃厚な甘さを絡めて溶け合っている。

「……………」

美鈴の手作りケーキを一口、二口食べてから、俺は美鈴の視線に気がついて、笑みを返した。

「うん、美味しい。見た目よりずっとさっぱりしてるな」

「ほんとですか？ よかった！」

美鈴はほつと安堵の色を顔に浮かべた。

胸元で組まれた両手の奥、ちらりと見える美鈴の素肌を飾るネットクレスが目を惹く。四つ葉のクローバーを模った、エメラルドのネットクレスだ。

そのネットクレスを贈った時と同じように美鈴は嬉しげに微笑んで、恥ずかしそうに俺を見つめている。

杯を重ねるうち、美鈴はゆるゆると姿勢を崩していった。頬は上気し、酔いが回ってきているのがわかる。

美鈴は酒に弱い方ではない。正体をなくすほど酔ったことはないと本人も言っていたし、俺もそうだった美鈴を一度も見たことがない。ただ洋酒……とくにウイスキー系は弱いという。眠くなるか、気分が悪くなってしまうため、普段はあまり飲まないらしい。ワインも日頃飲まないせいか、酔いやすくなっているようだ。

とくにこのイタリアワイン・バローロのアルコール度数は高い。普段ビールやチューハイ程度で満足している美鈴には、少しきつかったかもしれない。

が、それでもまだ酔っぱらって意識がない状態になるには遠そうだ。

そうなられて困るのは、何も美鈴だけではない。俺はもう、美鈴のグラスにワインを注いだりはしなかった。

「あの、維月さん。ちょっとお願いがあるんですけど」

美鈴は恥ずかしそうにちよつと小首を傾げて、上目遣いに俺を見る。その瞳は酔いのせいだろう、潤みを帯びていて、ひどく色っぽい。

「ん、何？」

美鈴は座ったまま、グラスを傾ける俺ににじり寄ってきた。

いつの間に取りだしたものが、セルリアンブルーのネクタイを俺に見せて、

「一度やってみたかったです。ネクタイ、締めさせてもらっていますか？」

と、訊いてきた。

そのネクタイは、俺へのプレゼントだったものだ。

「締めさせてつて、もしかして俺に？」

「はい。一度やってみたいなああって思ってたまして！ それで、ネクタイ結ぶの、練習してきたんです」

美鈴は、大真面目だ。酔っているせいか、少し早口になり、語尾が力んでいる。

俺はくすつと小さく笑い、いいよと応えた。

「どこでどう締めても結んでも、美鈴の好きなようにしていいよ」「えっ、いや、あの、首に巻くだけですから！ 変な誤解しないでください！」

「なんだ。てつきり美鈴にはそういう趣向があるのかと……」

「ちよつ、そういう趣向つてどんなですか？ つて、いいです！ 訊きませんから答えなくていいです！ほんとにネクタイ締めるだけですから！ ちよつと、こつち向いてください」

そう俺を促すや、美鈴はソファアの上で膝たちになり、俺の首にするりとネクタイを回した。

俺は持っていたグラスをテーブルに戻す。

美鈴との距離が近い。互いの熱を、触れ合っていないなくとも、肌を感じる。

「う、うん、と……」

美鈴の眉間に、深々と皺が寄る。手はぎこちなく動き、ネクタイは結ばれていくのだが、どうにも上手く締められないらしい。上と下の長さがあべこべになったり、はては表と裏まで逆になったりもした。

美鈴は存外不器用だ。

料理は上手いのだが、不思議なことに手先は器用ではないらしい。「練習ではちゃんとできたのに……」

本番で上手くできないのがよほど悔しいのか、ムキになって何度も締め直そうとする。

結局、見かねた俺が一度締め方を実践してみせ、それを見た後、美鈴は「今度こそ！」と再々……、再何度目かのチャレンジに挑んだ。

そしてようやく、

「きちんと結べたー！」

という声を、美鈴の口から聞くことができた。

俺はついつい笑みをこぼしてしまう。

もしも、だが。

この調子で美鈴に朝出勤前に「ネクタイを結んでくれ」と頼んだら、ずいぶんと時間に余裕を持って頼まなくちゃいけないだろう。

……残念ながら、その機会はまだなさそうだが。

「それと、よかった」

ネクタイの先をまだ指で挟んだまま、美鈴ははにかんだ笑顔を俺に向けて、小さな声で、ぽつりと言った。

「この色、維月さんに似あって、よかった。……わたし、維月さんのことほんとにまだ全然知らなくて。誕生日だって知ったばかりで好きな色も知らなかったんですよ……」

「美鈴……」

「だからこれを機に、維月さんのこともっと知っていきたくって思っただけです。些細なことでも、維月さんのこと、知りたいです」

美鈴は、やはり酔っているのだろう。

恥ずかしかがってなかなか本心を言い表してくれない美鈴だが、今夜は素直になるのが早い。

「美鈴。もう、ネクタイはずしてくれる？」

「あ、はい。はずすのはばっちりですから！」

美鈴は屈託なく笑う。ネクタイをするりとはずし取った。

酔っている美鈴は、自覚はないのだろうが、ひどく大胆だ。

俺は美鈴の背に腕を回した。片方の手は腰を掴み、もう片方の手

はやや上に上げて、肩甲骨にかかるやわらかな髪を指と指の間に挟み、軽くこぶしを握った。

「美鈴」

「はい？」

「俺のことが知りたいなら、何でも聞いてくれていい。美鈴が望むような答えをあげられるかは分からないが」

「……わたしが望むのは、維月さんのありのままのすべてです。贅沢だって自分でも思いますけど」

「うん？」

「ありのままの維月さんを教えてくれたら、嬉しい」

言つてすぐ、美鈴は俺の首に腕を巻きつけてきた。体を寄せ、ぎゅっと抱きついてくる。

ああ、と、ため息がこぼれでそうになった。

甘く、熱い。

バロー口よりも赤く、美鈴の頬は赤く色づいていることだろう。触れた肌から蕩けるような熱が直に伝わってくる。ひどく官能的な香りが鼻腔をくすぐり、乱酔しそうなほどだ。

抱き返すと、美鈴は少し戸惑ったような声で、「維月さん」と俺の名を囁いた。うん、と応えると、美鈴はもう一度「維月さん」と呼ぶ。美鈴は俺の首に腕を巻きつけたままほとんど動かないが、次の行動を俺に委ねるように、繰り返し名を呼んだ。甘え、ねだるような声音だ。

美鈴の手にあつたネクタイが床へ落ちたようだ。「あつ」と、美鈴は小さな声をもらした。だが拾おうとはしない。否、拾えない。ネクタイがはずされた時に、俺の理性の籬もはずれてしまったのだから、今更結び、締め直そうとしても手遅れだ。

美鈴も、今夜ばかりはそれを分かっているのか、俺の腕に大人しく囚われている。

「教えるさ、いくらでも」

その言ってから感謝の意を込め、美鈴の耳にキスをした。



珍しく、美鈴はご機嫌斜めだ。

酒を飲む気分にもなれないらしく、俺のためには酒を……仕事の疲れがとれるように、そして体が温まるようにと、梅酒のお湯割りをだしてくれたが、自分はホットウーロン茶を飲んでいる。

昨日までの好天はどこへやら、午後から俄かに曇りだし、夕方には強い北風が吹きつけ、曇まで降ってくる悪天候になった。曇はやがて雨に変わり、今も降っては止み、止んだかと思えばまた降りだし、時折雲間からまたたく星々が見られるものの、雨雲が去る気配はなかった。外気は冷えきって、結露した窓ガラスの外側もまた雨に濡れていた。

美鈴がご機嫌斜めになっているのは、寒さのせいではない。

美鈴が怒っているその理由は、俺だ。

美鈴は明後日の日曜日、美容院に行く予定だったらしい。週初め、早々に予約を入れていたのにと、心底残念そうにつぶやいた。そしてこれ見よがしにため息をついてみせる。

なんでも、「ヘッドスパ」とかいうものに挑戦するつもりだったらしい。

頭皮のエステだという「ヘッドスパ」、その冬バージョンを当店で始めました、というお知らせメールが行きつけの美容院から届いたというので、早速予約を入れたのだという。しかしやむなくキヤンセル。俺のせい、とのことだ。

「行ってくればいいのに」

と言うと、美鈴は柳眉を逆立てて俺を睨みつけてきた。

「恥ずかしくて行けませんよ、もうっ！」

美鈴は子供が頬を紅潮させてぶんすか拗ねているといった顔と口



調で、俺に苦情を言いたててくる。

「キャンセル料をとられるわけじゃないから、急遽断っても、お店の人には迷惑だろうけど、わたし的にはいいんです。ヘッドスパは体験してみたかったけど、何がなんでもやらなくちゃって思ってたわけじゃないし、カットの方もちょっと傷んだ毛先をカットして、整えてほしいって程度だったから、明後日じゃなきゃいけないってことはないんだけど……」

明後日の日曜、俺は友人と先約があり、美鈴とは終日会えない。

美鈴はそれならばと美容院に予約を入れ、その後、友人と遅めのランチをとり、ちょっとショッピングにでも……という予定をたてたという。

友人とのランチはともかく、美容院はキャンセルだ。

せつかく都合つけられたのにと、美鈴は落胆しきりだ。

「気にしなくてもいいのに」

俺が苦笑まじりに、キャンセルすることなかったのにと繰り返す言つと、美鈴は自分の首に指先を当て、俺に指し示した。

「この痕！ 気にするなとか言われても、無理ですっ！」

左耳の下、……いや、そこだけではなく、今は珊瑚色のルームウェアの下に隠されて見えないが、左右の鎖骨の下あたりから、鳩尾、他にも皮膚の柔らかいところに何箇所かある、それ。

昨夜、俺がつけた痕だ。

「今日はコンシーラーでなんとかごまかしたけど、さすがに会社と違って、美容院では隠しきれないし……。シャンプーの時に見られちゃうかもって思うだけで、もう……」

恥ずかしくすると、美鈴はひとりごちる。

今日、美鈴は首筋にある赤い痕を隠すため、ハイネックセーターを着こんで出勤してきた。配給されている制服に着替えてからはスカーフを巻き、それでも気になって仕方ないといった様子で、仕事中でも休憩中でも、人と対面している時は片手を首に当てていた。時には髪をいじるふりをしてうなじを隠したり、スカーフの位置を

頻々と直したりしていた。あまりに不自然すぎるごまかし方で、俺はそんな美鈴を見かけるとび失笑を堪えなくてはならなかった。

一方の美鈴は、俺と目が合うと、恨めしそうな顔をするのだがすぐにそっぽを向く。動揺が朱色の頬や泳ぐ目線にありありと表われていて、それがまた可笑しくもあり、危うくもあつた。

美鈴は人目を気にする性質だ。自意識過剰というよりはむしろその逆、自己を厭うような怯臆な感情からきているように思う。「わたしなんか……」と、美鈴の口癖からもそれは窺える。

そしてまた、初々しいほどに恥ずかしがり屋だ。大袈裟なほどに照れ、慌てふためいている。

「この季節じゃあ、蚊に刺されたなんて言い訳もできないし……。もうっ、すっごく困ったんですから！」

普通にしていれば、誰も気づかないだろうに。

内心そう思っていたが、美鈴はきつとこう返してくるだろう。「わたしが気になるんですっ」と、それが予想できたから、言わずにおいた。

「明後日、いや、明日にはもう消えるんじゃない？」

もう一度予約取れないか訊いてみたら、というと、美鈴は「消えませんか」と言い切った。

「維月さん、前もそう言いましたよね？　けど、三日くらいは消えなかったです」

「そうだった？」

「そりゃ、少しは薄れますけど、その薄らいだ痕がかえって恥ずかしいんです。なんかいかにもキスマークですって感じで！」

「いかにも何も、そのままなんだけど」

俺が笑うと、美鈴は眉をしかめ、キツと俺を睨みつけてくる。迫力はないが、可愛らしい魅力はある。……つい、からかってしまいたくなるような。

「まあ、ちょっと強く吸いすぎたかもしれないな」

「ちょっとどころじゃないと思うんですけど！」

「ちょっとでは済ませられないから。……どうしてもね。加減できるような余裕はないし」

「……………」  
美鈴は一瞬硬直し、声を失った。頬に触ればおそらく、熱いだろう。さっきまで飲んでいた梅酒のお湯割りよりも濃い朱色に染まり、熱帯びているのが一目で分かる。

「みつ、見えるところはダメって言うてるのに！」  
たしかに度々そう懇願され、なるべく首には痕を残さないようにしている。しかし、見えないところにつけても、それはそれで不平をもらす美鈴なのだが……。

それでも美鈴は本気で怒って文句をつけているのではないことは、分かっている。

とはいえ、やはり熱中し過ぎ、調子に乗ってしまったのは悪かったと、俺は素直に謝罪した。

「……………ごめん。もしかして、まだ痛い？」

「……………」  
うつ、と、美鈴は言葉を詰まらせて気弱げに肩をすばませた。顎をひき、ちょっと俯き加減になり、上目遣いに俺を見る。そしてぽつりとこぼした。

「……………そういう顔、ずるい……………」

美鈴も人のことは言えないだろう。しかしそれを言えばさらに機嫌を損ねてしまいかねない。第一、俺と違って美鈴は“天然”だ。

俺は聞かなかつたふりをして、美鈴の首に手を伸ばした。美鈴の手に、自分のそれを重ねる。美鈴はびくりと肩をふるわせ、反射的に身じろいだ。が、俺を拒んだりはいしない。

「もう、痛くはないです」

「他のところも？」

「……………」

美鈴はこくりと頷いた。

さっきまでの威勢もどこへやら、美鈴は急にしおらしくなって、

紅潮している顔を僅かに俯かせた。けれどまたすぐに俺の様子を窺うようにそろりと顔をあげる。落ち着かなげに視線を泳がせ、俺と目が合うと、慌てたようにふいつと逃げる。

美鈴の姿態から瑞々しく熟れた果実のような佳香が匂ってくる。

俺に向けられる美鈴の仕草や表情は、あどけなさを感じつつも、やはり“女”のものだ。美鈴のためらいがちな瞳も、白いうなじも、まだ乾ききっていない髪も、美鈴の全てが齧りついてくださいと主張している。食されるのを待っている。

「維月さんって……」

美鈴は俺をじっと見つめ、小首を傾げた。

「ん、なに？」

俺と美鈴はカーペットの敷かれた床の上に座っている。背もたれにしているのは、ソファアベッドだ。一人暮らし用のアパートだけに程良く狭く、もともと寄り添い合うような形で座っていたから、距離を縮めるのは容易い。このまま美鈴の腕を掴み、抱きしめてしまえば、あとはそのまま崩し的に事は進むはずだ。

俺のその下心に気づいてなのかどうなのか、美鈴はちょっと呆れたような……困ったような微笑を浮かべた。

「維月さんって、……キスマークつけるの、好きですよね」

美鈴は何気なく、思ったことを言ってみただけだったのだろう。美鈴は時々こんな風に墓穴を掘る。しかもそれに気づいていない。気付かないままではないが、逃げだせない状況になってから、慌てたように気付くのだ。

人の気も知らないでと、ほんの少し責めたくもなる。

苦っぽく笑った俺を見、美鈴は少々焦ったような顔をし、恥ずかしげに口ごもりながら、不器用に語を継いだ。

「だって、そこらじゅうにつけたがるし……。それに、その……痕をつけるのに慣れてるなって思ってた……」

どうしてキスマークをつけたがるんですかと訊きたかったのかもしない。

俺は嘆息し、美鈴の問いに答えた。

「好きというよりはむしろ……」

「むしろ？」

「独占欲の表れだから。印をつけるのは」

「……………」

印の意味は、説明せずともわかってくれたようだ。美鈴の耳朵が熱くなっている。

「……………だけじゃない。それに……………」

「え？」

美鈴は首を傾げ、目を瞬かせて俺の顔を覗き込んでくる。

「印、というよりは傷痕、だな。美鈴を傷つけたくないのも本心だけど、それだけじゃない」

「え……………」

美鈴は俺の本心を聞きたがった。まじまじと俺を見つめ、そうして言葉の先を待っている。

「……………」

しかし、こればかりはとも話せなかった。我ながらあまりに勝手すぎる感情だ。浅ましい劣情と言うべきか。

美鈴に対する執着心を、俺自身、持て余すことがある。抑制がきかなくなる。

美鈴の全てを奪い、傷つけていいのは俺だけだ。

その本心を告白すれば、はたして美鈴はどんな反応を示すだろうか。

答えは容易に想像がつく。拒みはしない。困ったような、照れたような顔をして笑ってくれるだろう。あるいは、「維月さんはわたしを傷つけたりなんかしません」と、真摯な顔をして言うかもしれない。

しかし、……

今まで、俺は何度となく美鈴を傷つけてきた。身体だけではなく、心も。それでも美鈴は俺を赦し続け、変わらぬ好意を示してくれる。俺は美鈴の好意につけこんで、甘えている。美鈴が拒まないのいいことに……

急に黙り込んだ俺に、美鈴は何か感ずるところがあったのだろう。無理に聞き出そうとはしなかった。聞いたそうではあったが、それをぐつと堪えているといった風に眉をしかめていた。

美鈴は暫時逡巡していたようだが、ためらいを押しやり、意を決したような目で俺を見据えて、口を切った。

硬くなりかけた空気を和らげようとしたのかもしれないが、美鈴の発言は突拍子もないものだった。

「あの、維月さん、わたしもつけてみたいんですけど！」

「え？」

「キ、キスマークを！ 維月さんに」

思いもかけない美鈴の大胆な要求に、俺は一瞬返答に窮した。

美鈴の類はやや強張っている。自分の発言に、「言っちゃった！」と内心で狼狽しきっているに違いない。けれど後にはひかなかった。「だって、わたしばかりつけられっぱなしで、なんだか口惜しい

し！」

美鈴は頬を上気させている。本気で口惜しがっているのかどうかは判別しにくいところだが、食言するつもりはないようだ。

「ああ」と応えて、俺はほくそ笑んだ。

「それはまた……願ってもない申し出だ」

シャツのボタンを一つ二つ、三つとはずしていくと、首にキスマークを付けるつもりでいたらしい美鈴は慌てて俺の手を止めた。

「全部はさなくていいですからっ」

今はずそうが後ではずそうが、どうせ脱ぐのだから構わないじゃないかなどと、余計なことは言わずにおいた。今この状況で美鈴の勘気を誘うのは愚行というものだろう。

美鈴は膝立ちになり、俺の襟元を軽く掴むようにして、両手を置いた。美鈴の緩慢な動作を急かさず、黙って首を傾けた。

美鈴は肩を竦めて生唾を飲んだ。白い喉が動く。ひどく蠱惑的だ。長い睫毛の下、含羞に揺れる瞳が俺を見つめ、かと思うと視線をはずす。

やがて美鈴はおずおずと顔を近づけ、首の付け根あたりに唇を押しつけた。柔らかな弾力のある唇が、不器用に俺の首を吸い上げる。美鈴の髪から立ち上ってくる甘い芳香が鼻腔をくすぐってくる。

「……………」

美鈴の顔は当然見えないのだが、おそらく苦しげに眉をしかめているだろう。俺の襟を掴む手に力がこもっている。それでも押し当てられた唇の感触はいつまでも柔らかいままだ。

美鈴の腰に腕を回して体を支えてやると、美鈴は僅かに身じろいだ。

「……………は、あ……………っ」

息苦しくなったらしい。美鈴は息を吐き出し、顔をあげた。それからすぐに小さなため息をつき、むっと眉をしかめる。口を尖らせて「痕、全然ついてない」と口惜しげにつぶやいた。

「全然痕ついてない……。むつかしいよ、どうやったら痕なんてつけられるの？ 肺活量の問題かなあ？」

さっきまで唇を押し当てていたところを指で撫ぜながら、美鈴はひとりごちる。再チャレンジする気にはならなかったようだ。

「肺活量はどうかかわからないけど、つけにくいとは思っただよ？ そもそも肌の弾力というか、質が違うからね」

「うーん、そうなのかなあ？」

「いっそのこと、噛みついてくれても構わないけど？ それなら確実に痕を残せる」

「噛みつくなんてっ！ できません、そんなことっ！」

美鈴の腰に回していた腕に力をこめて引き寄せると、美鈴は俺の発言に驚いたこともあって、とっさに俺の胸に両手を押し当てて背をのけ反らせた。

「俺は構わないのに」

「構わないことないですからっ！」

美鈴は顔を赤らめて言い返してくる。相変わらず、打てば響くような、いい反応だ。

クツと喉の奥で笑ったの、美鈴に見咎められた。

「もういいですっ！ わたしにはできないって分かりましたから！」

「できないということはないだろう？ 実際、時々痕をつけてくれるじゃないか」

「え、ええっ？」

美鈴はきよとんと目を瞬かせた。その表情は呆れるほど無防備だ。俺は口角をあげて笑い、それから美鈴の身体をさらに強く拘束した。そして短く言葉を継ぐ。

「背中に、赤い爪痕を」

「……っ」

「見せつけて、美鈴の存在を思いきり自慢してやりたいのに、他人に背中を見られるなんてそうそうないからね、残念なくらいだ」

「や、やだっ、何言っんですか！ 残念って、そっ、そんなのっ、



意味分からないしっ！ それに……それに自慢なんて、わたしなんか、……っ」

慌てふためく美鈴の口を、強引に塞いだ。

美鈴の口から、自分自身をないがしろにするような言葉はもう聞きたくなかった。俺のせいだと言っのなら、なおさら。

身勝手だと分かっている。

焦燥に駆られ、それが口づけを荒々しくさせた。唇を深く重ね、息を吸い、舌を絡めとる。

「……っ、い、……っ」

突然のことに動揺した美鈴は俺の胸を押ししたり叩いたりして、最初のうちは抵抗した。しかしやがて観念し、一度軽く息継ぎをした後、美鈴からも舌を絡め、不器用ながらも応戦し始めた。

美鈴は蕩心しきって、酔ったような熱を持っている目を閉じた。遠慮がちに腕を俺の首に巻きつけ、身を委ねてくる。

「い、つき……さ、ん……」

美鈴の切なげな声が息継ぎの合間に漏れ、それがまた俺を誘う。

まるで貪り食うような、ひどく甘い官能的なキスだ。美鈴の思考を俺だけに向けさせる。そのために何度も角度を変えて、息をも奪うキスを続けた。

唐突に押ししてきたかと思えば、不意に遠慮が立ち、すぐに諦めて身を引いてしまうのは美鈴の悪い癖とあっていいだろう。気の変わりやすい自儘な性格というわけではない。ただし感情が不安定なのだと思っ。揺れ、惑っている。

その感情の揺れを、美鈴自身は「自分勝手な我儘」だと解し、それゆえにいつも自己を諫めて二の足を踏む。その消極さが自分を傷つけていると気付いているのか。美鈴は傷を抱え、困惑顔をする。それでも以前よりも美鈴は心を素直に表わしてくれるようになった。

怒って苦情を言ってみたり子供っぽく拗ねてみたり、大胆な欲求

をさらりと口にしてくれたりもするようになった。

恥じらいながらも俺の気持ちを受け入れ、求め続けてくれる美鈴が愛しくてたまらない。

どれほどそうしていたのか。

名残惜しかったが唇を離した。美鈴の瞼があげられ、潤んだ双眸が露わになる。目と目が合い、微笑みを交わし合った。

余韻にひたるように美鈴の顔の輪郭を指でなぞった。頬は熱く、熟れている。

どうやら機嫌は直ったようだ。

しかし朝になったらまた機嫌を悪くして拗ねてしまいかもしれないと、忍び笑った。

キスでごまかして有耶無耶にされたと苦情を言いたて、けれど結局、美鈴は俺の身勝手さを赦してくれるだろう。

「美鈴」

「ん」

軽く額を突き合わせると、美鈴はくすぐったそうに目を細めた。

とりあえず、今夜はあらかじめ許可をとっておこう。

「痕をつけてもいい？」

訊くと、美鈴ははにかんだ笑顔を浮かべ、小さく頷いた。

「……見えないところになら」

窓ガラスを打つ雨音も植木の梢を撓らせる風の音も、もはや遠い。四肢の檻に閉じ込めた美鈴の甘い吐息と切ない啼き声が官能を昂らせる。

そうして今宵もまた、甘い疼きを伴う傷の上にキスを重ね、熱を刻みつけていく。

## 甘い桃色

風呂上がり、彼女が桃を向いてくれた。

「食べやすいように小さく切り分けますね」

彼女 木崎美鈴は、手間を惜しまない性格のようだ。本人は、「そんなことないです。けっこうずぼらなんですよ？」と笑うが、仕事でもプライベートでも、細かなことによく気が回り、手間をかけてくれる。

彼女が持ってきた桃は、「あかつき」という品種名らしい。

「桃の有名な品種の、白桃と白鳳を交配させた品種なんだそうです。一度食べてみたかったんですね」

そう言っただけ美鈴はいそいそと桃の皮を剥く。桃の皮は柔らかくて剥きにくいだろうに、包丁さばきはなかなか手慣れたもので、話をしてるうちに一口サイズに切り分け、皿に盛る。

部屋中に、桃の甘い香りが漂う。

「甘くておいしい」

美鈴は、実に美味そうに食べる。スイーツ系はとくにそうだが、好きなものを食べる時の美鈴の表情は、嬉しげで楽しそうだ。

「お腹いっぱいときでも、美味しいものは別腹にちゃんと入ってくんだから、不思議ですよ」と、

と、屈託なく笑う美鈴だ。

「それに、美味しいものを食べてる時って幸せだなあって思いませんか？」

「そうだな、たしかに」

俺が笑って応えると、美鈴はちょっと拗ねたような顔をした。「どうせいやしんぼですよ」とでも言いたげだ。

今日の美鈴は、機嫌がいい。

食べてみたかった桃を手に入れたからかもしれないし、他に何か良いことがあったのかもしれない。

嬉しげに笑っている美鈴を見るのは、淋しさを隠そうとして不自然に笑っているのを見るより、ずっといい。切なげに瞳を潤ませている美鈴も、堪らなくいとおしいのだが。

美鈴は風呂上がりということもあって、ロングTシャツに短パンというラフな格好をしている。パジャマ代わりなのは、俺と同様だ。美鈴が着ているTシャツは先ごろ俺が贈ったもの。以前「ドエス」のロゴが入ったTシャツをもらった返礼だ。

白の生地にピンク色の文字で「LOVE ME!」と胸元にプリントされたものを選び、贈った。「ドエム」のTシャツも見つけ、そちらにしようかと迷ったのだが、着てもらえなさそうな気がしたので（少なくとも俺の前では）、やめにした。「LOVE ME!」の方は抵抗なく着てくれている。俺の下心など素知らぬ風だ。

いつそ、「小悪魔」とプリントされた黒いTシャツを贈るべきだった……かもしれない。

その「小悪魔」な美鈴は、生乾きの髪を後頭部でゆるくまとめあげているために、白いうなじが露わになっている。おくれ毛が少し湿った素肌にはりついていて、ひどく艶めかしい。

桃もたしかに美味いが、それよりも美鈴の方が美味そうだと言ったら、なんと言うだろうか。……まあ、想像に易いが。

「……なんですか、維月さん?」

俺のヨコシマなまなざしに気が付き、美鈴はちょっと怪訝そうな顔をする。

「何か言いたそうですけど」

美鈴は自ら墓穴を掘るようなことを、さらりと言う。自覚があるとも思えないが、少々迂闊なところがある点は、自認しているようだ。

会社での木崎さんは、わりあいガードが固く、隙もあまり見せない。が、気を許した相手には、彼女はひどく素直で脆く、甘い。

俺は目を細めて、改めて美鈴を見る。

やっと手に入れた。

曖昧な微笑で心意を隠され、やわやわとかわされ続けていたが、こうしてようやく、手元に引き寄せることができた。

こうして無防備な彼女を見るたび、それを実感する。そして、もつとという欲も出る。

「維月さん？」

「……いや、甘いなと思って」

桃を一口口に放りいれる。水蜜とはよくいったもので、みずみずしく、甘い。

「それに、桃の香りはなんだか美鈴みたいだ。そっちの桃もいただきたいものだが、いいかな？」

「……なっ」

案の定、美鈴は頬を赤くし、声を詰まらせた。

いいかな？ と、問いかけておきながら、しかしそれはもう決定事項だ。美鈴の許諾を待つことはしない。

「桃、もういっぱい食べてるじゃないですかっ！ お腹いっぱいですよね、ねっ？」

美鈴は俺を拒まない。口では拒むようなことを言うが、それすら俺を誘っている。

「美味しいものは別腹なんだろう、美鈴？」

「……いつ、維月さん、ちよっ、まっ……」

「いくらでも入りそうだ」

いずれにせよ、皿に盛られた桃を完食してからだが。

さつき食べたばかりの桃と、今、舐るようにして食らいつついる桃風味の美鈴。

どちらが美味く甘いかなど、比するの愚かなことだ。

美鈴は恍惚と乱れ、その肢体を桃の花のごとく鮮やかに咲き開か

せてゆく。

そして、あまい桃色の息を吐きながら俺の名を繰り返す。

切なげに狂おしく、抱き合う幸せを告げるように。

側にいさせて、抱きしめて

ふわふわ、地に足が着かない。

それは気恥ずかしくなるほどの、幸福感。

そわそわ、常に気が落ち着かない。

それは自己嫌悪とも言える、不安感。

千々に乱れる感情は、日毎に強くなっていく気がした。

逃げ出してしまいたい衝動に駆られ、思い詰めてしまうことがある。

いつそ、会社を辞めてしまおうか。

派遣社員という立場だから、それほどしがらみはない。他にも大勢派遣社員はいて、わたし一人が辞めたところで、社会的には何の支障もない。

だけど……。

上司と部下という関係を切ってしまったら、高倉主任とわたしの「関係」はどうなるんだろう。

付き合い始めて間もない、わたしと高倉主任。

恋人同士という関係は、まだどこかぎこちない気がする。

ため息をついて、わたし自身を見つめた。

鏡に映るわたしはいつもどこか「揺れ」ている。

ゆらゆらと、甘い想いと苦い理性に、翻弄されている。

就業し、帰宅の途につくべく着替えを済ませ、会社を出る。

今日は珍しく残業をしたおかげで、ちょっと、疲れた。

現在、八時十分。三十分の電車に間に合うかな。

足早に、会社から離れる。一度肩越しに振り返ったのは、まだ会社が高倉主任が残ってるからだ。

「お先に失礼します」と軽く頭を下げ、目も合わせなかった。

高倉主任は他の社員さん達と同じように「お疲れ様」とだけ返し、わたしを引き止めたりはしなかった。

何を期待したんだろう、わたし。

会社内では今までどおり、ただの上司と部下という関係を保とうと決めたのに。人の口に上らない振る舞いをしようって心がけるのに。

いい大人なんだもの。公私混同なんてしちゃだめだって、……わかってるはずなのに。

夜空を仰いだ。

薄雲がかかって、霞んでる。

春の夜空はおぼろげだ。星の瞬きも薄くて弱い。

ため息は夜風に流され、消えた。

訳もなく……うつん、訳はあるのだけど、無性に寂しくなって、泣きたくなる。

春って、厄介だ。

金曜日だからなのか、すれ違う人達の声は弾んだものが多い。

サラリーマン達、学生達、それから何の職種に就いているのかわからない目では判断できない人達、その他様々な人達が駅の改札口を出、あるいは入ってゆく。

わたしの足取りは、気持ちと比例して、ひどく重い。

改札口まで、あと数歩。わたしは足を止め、時刻表を眺めやった。最近ようやく独り暮らしを始めたわたしは、いつもここで間違える。



「あ、そうだ、違った」

八時三十分の電車じゃなく、三十八分だ、わたしが乗るのは。つい、今まで乗っていた電車の発車時刻を見てしまう。

はあ、と、ため息が知らずこぼれる。しみついた習慣って、なかなかとれないな。といったって、まだたったの二年だけだ。

そう、だ。

高倉主任と出会って、まだ二年。親しくなっただけからは、一年と半……くらいかな？

時間なんて関係ないって、高倉主任なら言うかもしれない。

わたしだってそう思いは、するけれど。

慣れないのは、時間のせいもあるのになって思ってしまう。

「……………」

時間を再確認し、改札を通ろうとしたその時だった。

肩を掴まれ、止められた。

振り返るとそこに厳しい顔つきの高倉主任がいて、わたしは心底驚き、硬直した。

半ば強引に、高倉主任はわたしの手を掴んで歩き出した。

「あ、あのっ、高倉主任っ?!」

「送ってく」

「ええっ?」

わたしは慌てた。

会社の人に目撃されたらどうしよう。背中に冷たい汗をかきつつ、辺りを見回した。

高倉主任は手を放してくれない。

「いいです、そんなんっ。帰れます! まだそんな遅い時間じゃないし!」

「アパートまで送る」

「しゅっ、に」

高倉主任は無言のまま、駅のロータリーに停めていた車の助手席

にわたしを押し込んだ。それから素早く運転席に乗り込み、エンジンを始動させる。

「あ、あの」

とまどいがちに、声をかけた。

高倉主任はこちらに顔を向けてくれない。視線も向けてくれない。心なしか怒ってるみたいだな、硬い顔をしている。

沈黙が破れない。

わたしは縮こまり、俯いて唇を噛み締めた。膝の上で組まれた手が小刻みに震える。抑えようとすれば、するほどに。

どうしよう。

どうしたんだろう。

わたし、何かしたんだろうか？

思考がぐるぐる回って、不安が身体を拘束する。

重い沈黙の向こうにいる高倉主任を見つめるしかできなかった。

どれほど時が経ったのか。気づくと、車はアパートのすぐ近くまで来ていた。

高倉主任は路肩に車を寄せ、停車させた。ハザードがカチカチと鳴っている。

「美鈴」

高倉主任が、振り向いた。わたしの名を、刺すように呼んで。

「……………」

わたしは視線を逸らした。

どうしよう。どうしたらいいの？ 何を言えばいい？

胸が痛い。喉も鼻も痛くて、堪えきれない。

「美鈴、今日一日、ずっとそんなだったね？」

「……………」

「ずっと上の空で、辛そうにして」

「……………」

まるでひび割れたガラスに触れるような慎重さで、高倉主任はわたしの頬に触れた。

「何か、あった？ ……それとも俺が、美鈴を泣かせるようなこと何か、した？」

「……ち、がつ」

泣いてなんていません。

とは、言えなかった。だって、泣いていた。涙が、わたしの意思を無視して、勝手に零れてた。

ぼたぼたと、それは膝の上に落ちて、ジーンズを濡らしてゆく。ぎゅっと瞼を閉じて、止まらない。

「……ッ」

きりきり喉が痛んで、声は出ない。否定しようにもできなくて、もどかしさにさらに涙が溢れてくる。

「……美鈴」

カチリという金属音が、続けて二度聞こえた。それはシートベルトをはずす音。高倉主任とわたしの安全を縛っていたものが、はずれた。

高倉主任はわたしの肩を掴んで引き寄せ、抱きしめた。うなじに当たる高倉主任の手は少しだけ汗ばんでいた。

「言いたくないなら言わなくていい」

その代わりに、とても言わんばかりに、高倉主任はわたしを抱きしめる腕に力を込める。

「けど、もう嫌なら、今すぐに俺を拒んで」

「……」

言ってることが矛盾してるよ、高倉主任。こんなにきつく抱きしめられて、どうやって拒めるの？

……うつん。

高倉主任は気づいている。だからそんなことを言っただ。拒むつもりなんか無い。

だって原因は、わたし自身にあるんだから。

「……………ひ、どいですが、……………維、月さん」

「うん」

「拒……………ませ、ないで、くださ……………っ」

「うん」

「傍に……………居たいのに……………」

「うん、わかってる」

「……………っ」

暫時、高倉主任の胸に縋って、わたしは泣き続けた。

会社を辞めてしまえば、維月さんと離れてしまえば、この気持ちは落ち着くのか？ 不安はなくなるのか？

この不安を消すことが、わたしのほんとの望みなのか？

何分そうしてしたのだろう。

「すみ、ません」

ようやく涙は止まってくれた。だけど維月さんはわたしを抱きしめたままにいる。少しだけ、腕の力を緩めてくれた。

「すみません、急に」

わたしは身体を竦めた。肩を丸めて、維月さんの腕の中に、もつと、と、納まる。

温かいどころじゃなく、汗ばむほどに身体は熱い。だけど離れたくなかった。

泣き顔を、維月さんの胸に埋める。

「あ……………、……………維月さんのせいじゃ、ありませんから」

くぐもった声は、はたして維月さんに届いたろうか？

心配になって、繰り返そうとした。

「……………で、くれ」

だけど維月さんのかすれた声が聞こえ、わたしは戸惑いがちに顔

を上げた。

間近に見つけた維月さんの顔は、微笑を湛えていた。優しく、苦しげな微笑だった。

維月さんは軽く瞼を閉じ、ため息とともに緩く目を開いた。

「俺も、原因の一つだよな？」

「え、あ……」

「美鈴の気持ちはわかってるつもりだから」

「……………」

維月さんはまたため息をつく。けれど微笑は崩さない。わたしを氣遣って、言葉を選んでくれている。

「だけど、ごめん」

「え？」

「我儂言うけど、辞めないで欲しい」

「…………… 維、月さ…………」

視界が滲んで、維月さんの顔がよく見えない。

「あくまで俺の我儂だから無理強いはできないけど、今のまま、辞めないでいて欲しい」

「維月さん」

頬を伝うものも拭わず、わたしは言った。

きつぱりと、言い切った。

「辞めません、わたし」

だって、わかったから。

たとえ会社を辞めたところで、不安になるのは同じだ。

維月さんのことを好きだから、好きな想いと同じくらいに、不安になる。

それは認めなくちゃいけない。認めた上で、折り合いをつけてつきあってほしい。

不安を消す、そのことばかりに気を取られては、もっと大切なものを失ってしまうかもしれない。

たとえばそれは、維月さんへの想い。そして、維月さんからの想

い。

「辞めるなんて、……言いません」

「……………」

「わたし、頑張りますから。だから、見捨てないでいてくれると、嬉しい、です」

「ん、わかった」

維月さんはわたしの髪を撫ぜる。もう片方の手は腰を掴んでいて、また僅かに力がこもる。

「ごめんなさい、わたし、我俣ばかりで」

「こついうのは我俣って言わないよ、美鈴」

「え、そ、そうですか？」

にこりと、維月さんは笑った。今度は穏やかに、甘く。

「というか、美鈴の我俣ならぜひ聞きたいし。……ね？」

維月さんの、わたしを包んでくれる腕は、強くて熱い。不安はいつしか薄らいでいた。

「あ、の、それじゃあ維月さん」

我俣を言っても、きつと受け止めてくれる。そんな安心感が、維月さんにはある。

「我俣、聞いてくれますか？」

今夜はもう不安な気持ちになりたくない。

だから。

思いきり、甘えてみることにする。

「維月さん、今夜はずつと傍に居てください」

そして、抱きしめていてください。

耳朶に口づけてから、囁く。

「喜んで」

維月さんは、悪戯っぽく艶めいた微笑を浮かべてる。目を閉じてしまったから、わたしにその顔は見えないけれど。



側にいらせて、抱きしめて（後書き）

「甘えて。」の章はすべて、TV様からお借りしたお題を使用しております。



月も待たずに、キスをして

ポールハンガーにかけられた、シフォン素材のワンピース。早々と貰ってしまったこの洋服、明日着ようと楽しみに、改めて眺めやる。

柔らかなシフォン素材のワンピースは、白と黒と薄緑を配した斜めラインのストライプで、シンプルなデザイン。ノースリーブのワンピースなんて普段ほとんど着ないわただけど、膝丈ということもあって、さほどの抵抗なく、着られた。黒のカーディガンと合わせたら、ちよつと大人っぽい雰囲気にもなる。

一日早い、バースデイの贈り物。

似合うよと言ってくれた人が、似合うからと、買ってくれた。

カランと、グラスの中の氷が音をたてた。

グラスの中身はブランデー。ロックで飲んでいる人は、わたしの務め先の上司であり、……恋人でもある高倉維月さん。

布団はのけてあるけれど、背を倒せばベッドにもなるソファに、維月さんはゆつたりと寛いだ姿勢で、座っている。

わたしはその斜め横、床の上に座布団を敷いて、そこに座っている。

自分の部屋だというのに、落ち着かない。小波に揺れてるような春風にくすぐられてるような、そんな気分。居心地が悪いなんてことは、全然ないのだけど。

わたしを落ち着かなくさせる原因が、ふと、何か思いついたかのように、声をかけてきた。

「ね、美鈴？」

「あ、はい？」

濃い目に淹れたコーヒーみたいな維月さんの瞳は、突然甘みを増

す。色は変わらないのに、近づくと、甘い香りが漂ってくるようだ。維月さんの微笑に引火して、顔から煙が立ちそうですけどっ。

「な、なんですか、維月さん？」

くすつと、維月さんは小さく笑い、持っていたグラスをテーブルに戻した。

「その服、気に入ってくれたんだ？」

「あ、はい。もう、ものすごく！」

わたしは即答した。

維月さんが買ってくれた、誕生日の贈り物。

今日、一緒にデパートに行つて見つけたワンピースだった。ウィンドウに飾られていたものだったし、わたしなんか似合うとは思えなかったのだけど。

けど、着てみて、我ながらそんなに不似合いに感じなかったのは、デザインやカラーがシンプルにまとまったものだったからだと思う。それに、なにより嬉しかったのは、そのワンピースを選んでくれたのが維月さんだったってこと。

「これ、美鈴に似合いそうだね」と言ってくれたものが、わたしの好みの範疇内だったってことも、嬉しかった。

「ね、美鈴。着て、見せて」

「はい？」

「着てるところ、見たい」

にっこりと、維月さんは笑って言った。

なんとというか、……キケンな予感のする、艶めいた笑顔で。

わたしは小首を傾げて、訊き返した。

「え、でも、試着して、ちゃんと見せたじゃないですか、お店で」

「うん、そうだけど」

「明日着るつもりでしたから、明日、見れますよ？」

誕生日当日の明日は、日曜日。もとより維月さんと出かける約束

をしていたから、明日、買ってもらったワンピースを着るつもりでいた。

「着てるって、見たいと思って」

艶然としか言いようのない微笑をわたしに向けて、維月さんは言う。

「……………」

一瞬どうしようか迷ったけれど、買ってくれた本人が「見たい」というなら、やっぱりそれに従うのが礼儀かな？ そう考え直して、わたしは立ち上がった。

「分かりました。じゃ、ちょっと着替えてきますね」

ポールハンガーにかけられたワンピースを取り、そのままバスルームへ向かおうとしたわたしを、維月さんは引き止めた。ぎゅっと手首を掴んで。

「あ、の？」

「着てるところを、見たいんだけど」

「……………は？」

わたしはしばし、硬直した。思考も、停止した。

今、なんて言いました、維月さん？

維月さんにはっこり笑って、

「着替えるところを見たい」

そう、言い直した。

当然ながら、わたしの声はひっくり返る。

気が動転し、夜も更けた頃だというのも、すっかり忘却の彼方だ。防音はそれなりに施してあるらしい壁だけど、だからといって大声を張り上げるのは、あまりよろしくないワンルームのアパートだ。

「なっとなっとなっ、何言い出すんですかつ、維月さんっ！」

「いやだって、見たいから」

にこにここと、維月さんは笑ってる。

明らかに、わたしをからかって、反応を面白がってるよっ、その表情はっ！

「いつも俺が脱がせてばかりだからね。たまには美鈴が自分で脱ぐところを見てみたいな、と」

「どわあああっ、ちよっ、何言ってるっ」

「別に恥ずかしがることないのに」

何を今さら、と維月さんは笑うけど。

花も恥じらう乙女……とは言いませんが、それなりにまだ羞恥心は持つてるんですよ、わたしだって！

恥ずかしがって当然ですってば！

「いつ、維月さん、セクハラ親父みたいですけどっ」

「ハハッ」

「ハハッ、じゃなくて！ てゆうか、否定してくださいよっ！」

維月さんはセクハラ親父呼ばわりされたにも関わらず気分を害することもなく、むしろ嬉しそうに笑っている。ほんとに、こういう時の維月さんは「いたずら小僧」っぽくて、「いじめっこ」だと思っ。

わたしに回避するルートを与えてもくれない。

維月さんの甘やか雰囲気は濃度を増し、エロ度指数はつなぎのぼり。

胸が高鳴って、息もつけない。沸騰した身体が熱くて、卒倒しそっ。

「わかりましたよっ、もおおっ！」

結局、観念したのは酸素を得るためだった。

体育の授業前の着替えを思いだした。あれと同じ方法で、さっさと着替えを済ませてしまおう。

なるべく他人に見られないよう素早く着替えるのは、慣れたものだ。

うんしょと長袖のラグランのカットソーを脱いでから、上からワンピースをかぶって、袖を通す。

「早いなあ」

と、眉尻を下げて維月さんは残念そうに笑った。

「いつも、会社の更衣室でもそんな風？」

「そーですっ」

綿パンツを脱いで、着替え完了。総時間、たぶん一分弱。

見るほどのものじゃなかったでしょ、と、つれない言葉を付け足した。

維月さんは小さくため息をついた。けれど不満げな様子はない。

穏やかに笑っている。

……なんで？　なんでそんな風に、笑うの？　　なんでそんな嬉

しそう？

維月さんを満足させるようなこと、わたし、してないと思うけど

……？

維月さんって、やっぱり不思議。不思議で、すごく、ときどきする。

「美鈴ってほんと、他人に見られるのをすごく気にするね」

「え」

維月さんはノースリーブのワンピースに着替えたわたしの前に立った。維月さんとの距離が急に近づいて、鼓動が跳ねる。

「す、すみません。気にしないようにしてる……つもりなんですけど」

維月さんに、「他人の目を気にしすぎだ」と指摘されてから、是正しようとはしたのだけど……。染み付いてしまった癖って、なかなか拭えない。

「責めてるわけでも怒ってるわけでもないよ。ごめん、落ち込まないで、美鈴」

維月さんは、しゅんと俯いたわたしの頭に手を乗せて、くしゃくしゃと髪を掻いた。

「ただ、疲れないかなと思って。肩の力を抜いて、ほら」

それから維月さんはわたしの肩にそつと片手を置いた。

素肌に触れた維月さんの手は熱く、肩からじわじわと、焦げていくみたいに全身が火照ってくる。

「せめて俺の前では。……ね？」

「……………」

ずるい。ずるいよ、維月さん。

子供っぽくいたずらをしかけてきたと思えば、大人に戻って優しく宥めてくれる。

これじゃあ素直にならざるを得ない。意地を張ってもいられないし、感情を抑えてもいられない。

泣きそうになる。もちろん、嬉しくて、だけど。

けれど、寸前で涙を堪えた。鼻の頭は、きつと赤くなってるだらうけど。

「美鈴、ちよつとそのまま、目、瞑って」

維月さんが、低く囁いた。催眠術でもかけるかのような、しつとりと落ち着いた声音。

「……………はい」

わたしは顔を上げず、言われるがままに、目を閉じた。

維月さんの両手が、首の後ろに回った。同時に、胸元に冷たいものがあたったのに気づいた。

「美鈴、目、開けていいよ」

「……………え……………？ あの、これ、は？」

「気に入ってくれればいいけど」

胸元に見つけたそれは、四葉のクローバーの形をした、ネックレス。銀のクローバーの中心に、緑色の石が嵌められている。

「五月の誕生石、それだって聞いたから」

透明な緑色の石は、じゃあ、……………も、もしかして、エメラルド？

薄緑色の宝石は、蛍光灯の光に反射して、きらきら、眩しいくらい綺麗だ。

う、うそおっ？ エメラルドって、高価なのにつ！

「それくらいシンプルなものなら、何にでも合うだろうし、毎日つけてられるかな、と」

こともなげな口調で維月さんは言うけれど、わたしの首から下がつてていいモノじゃないよ！

「ほんととは明日渡すつもりだったけど、今、あげたくなった」  
せつかちでご免と、維月さんは照れくさそうに言う。

ただでさえ動揺が激しいというのに、維月さんのその表情に胸を打ち抜かれ、締めたつもりだった涙腺まで緩んで、涙が溢れてしまった。

「維月さ……っ、ふっ、不意打ちはだめですっ！ほんと、だめ、で……っ」

堪えきれなくなつて、維月さんの胸に顔をうずめた。

「こんな、のっ、どうしたらいいんですか、わたしっ」

喉が詰まる。それ以上に、胸が詰まる。感情が、溢れ出す。

維月さんはわたしの肩を抱いてくれ、片手で髪をさすってくれた。それがまた涙を誘って、もう、止まらない。

「わ、わたし、もらっただけで」

「負担？」

「ちっ、違います！でも、わたしなんか、そんなっ」

負担なんかじゃない。負担なのは、むしろわたしの方なんじゃないかと不安になる。

維月さんにこんなにももらっただけの価値が、果たしてわたしにあるの  
かって。

「わたし、どうしたらいいのか、どうすればいいのか、分からなく  
てっ」

「じゃあ、教えてあげるよ、美鈴」

「……え？」

涙を拭いつつ、顔を上げた。

維月さんは少しだけ身体を離し、優しいまなざしをわたしに向けて、言った。

「ありがとうって言えばいいんだよ、こういう時は」

「あ……」

ああ、そうだ。

狼狽しまくって、そんな単純なことすら忘れてしまった。

わたしって、ほんと、なんて迂闊なんだろう……。

「まあ、そうして、贈った物を身につけてくれるだけでも嬉しいけどね」

「維月さん……」

比べて、維月さんはやっぱりオトナで、懐の深さときたら、底が見えないくらいだ。

「維月さん、あの、わたし、すごく嬉しい、です」

「うん」

「もったいないな、とは思うけど、でも、すごく嬉しい」

維月さんが言うように、シンプルなデザインのネックレスだから会社にしてもいいけど、これなら目立たない。ワンピースは着ていけないから、せめてネックレスだけは、毎日つけていよう。

「秘密の暗号みたいで、ちょっと、ときどきしますけど」

わたしがそう言うと、維月さんは今度こそ心から満足そうに笑った。

「贈った甲斐があるね、それは」

そして維月さんは、続けて言ったのだ。いともあっさり、爽やかな顔をして。

「ついでにもう一つ、あげたいことがあるんだけど」

「ええっ？ もうお腹いっぱいですけどっ」

「もの、じゃないから。遠慮は無しで」

「は？」

あ、あれ？



今、頭の中でキケンのシグナルが点灯しましたけど？

なんですか、維月さん、その艶かしい表情は？

ブランドーの匂いのする大人っぽい微笑に、わたしはたじろいで頬を赤くした。

「……よっ、と」

維月さんはわたしの腕を掴んで、そのままソファ―ベッドに倒れこんだ。

抵抗する間もなく、わたしは維月さんに抱きかかえられるような形で、ソファ―に腰を落としてしまった。

「は、わ、ちよっ、維月さんっ？」

「脱がせてあげよう」

「ちよっ、待っ、あげるって、そっちのあげるですかっ」

「もちろん」

にっこり、維月さんはいたずらっぽく笑う。そう、まるでジャンケンに勝った時みたいに。

「ちよっ、やっ、だっ」

「大丈夫。皺にならないよう、ちゃんとハンガーにかけるから」

慌てふためくわたしをからかって、維月さんは肩に口づける。

全身鳥肌が立ち、ひゃあっと情けない声上がる。

「や、ちよっ、維……っ」

「……ああ、そうだ」

ふと何か思いついたように、維月さんは目線を上にあげ、そしてまた戻してわたしを見つめて、言った。

「いつも俺ばかりが脱がしてて、不公平だよな？ いいよ、美鈴

？ 俺を脱がし……」

「だっ、わっ、ちよっ、何ゆってんですか、もあっ」

維月さんは、おどけた風に笑って、両の手のひらをわたしの前にひろげて見せる。

「俺ばかりずるいって、よく言うじゃない、美鈴。だから不公平に思ってるのかな、と。たまには脱がせてやりたいって思っ」

「のわっ、何をいきなりっ！　そ、そういう意味じゃないしっ」  
声を昂ぶらせて、維月さんの言葉を遮った。

もおっ、この人は何をいきなり言いだすのっ！

「ふっ、不公平とかそんなの、全然考えたこともないですっ！　脱がしてみたいとか、そんなのも、無くて！　だからもおっ、自分で脱いでくだ……………あ」

気づいたときは、もう手遅れ。

わたしはまた、あっさり、いとも容易く、維月さんの術中に落ちてしまった。

「了解。そうしよう」

「や、あ、ちよわっ、わあっ」

満面の笑顔を浮かべて、維月さんはシャツのボタンを片手で器用にはずしてゆく。

「いつ、維月さ…………っ」

やっぱり、不公平だ！　これって絶対的に、不公平っ！

わたしばかりがいつも動揺して慌てて焦って、余裕がない。

わたしの苦情は、維月さんの耳には届かなかった。口を塞がれて、呑みこまされてしまったから。

ずるいよ、と呟くわたしに、

「美鈴こそ」

と、維月さんは返してくる。

甘く、甘く、耳元で何度もわたしの名前を繰り返しながら。

深夜十二時を回った頃。

維月さんはわたしを膝の上に座らせ、力強く抱きしめて、身体を支えてくれている。

「美鈴」

ふと、腰の動きを止めて、熱い声で維月さんが囁いた。  
わたしの胸元に下がっているネックレスに軽く口づけてから、わ  
たしを見つめる。

「誕生日おめでとう、美鈴」

ありがとうと返す余裕は、もう、わたしにはなくて。

ただひたすらに、維月さんの優しい口づけを、静夜の月明かりの  
下、受けている。

そして、応えてる。

月も待たずに、キスをして (後書き)

「甘えて。」の章はすべて、TV様からお借りしたお題を使用しております。

甘い声音で、ささやいて

知らなかった。

自分がこんなにも甘えたがりな性格だなんて。

わたしの知らないわたしが、ひょっこりと芽をだし、おどおどしながら伸びていつてる。

芽吹いたばかりの「わたし」に光を当て、水を与えてくれるその人は、伸び盛りのわたしを観察し、満足そうに、でも時々は心配そうに、見守ってくれている。

わたしは頼杖をついて、「わたし」の観察者を見やる。

甘えさせ上手なその人は、わたしの上司で、「秘密の社内恋愛」の相手でもある、高倉維月さん。

職場では、高倉主任に視線を固定しないように気をつけているんだけど。……つい、姿を探して、追ってしまう。顔を見たくて、視線を送ってしまう。

わたしの視線に気がつくと、高倉主任は微笑みを返してくれる。何、と問うように。

わたしは慌てて視線をそらす。高倉主任と目を合わせないよう顔を背けて、一度ぎゅっと目を閉じる。

高倉主任みたいに上手く気持ちを隠せないから。

目が合うだけで、こんなにどきどきして、気が焦ってしまう。

胸に溢れる想いを抑え込むだけで精一杯。

余裕なくて、いつでもいっぱいはいいの、わたし。

隠しておきたいと言ったのはわたしなのに。

気持ちを隠しこんでしまえる高倉主任のことを「ずるい」って、拗ねた気分になるのは、ただのワガママ。

だけどね。……ううん、だから、かな？　ワガママなわたしだけか

ら、時にはうんと甘えて、試してみたくなる。  
不安の裏返し、とも言うんだろうけど。

昼過ぎの休憩時間、わたしは高倉主任を呼び止め、唐突に切り出した。

「高倉主任、ジャンケンしましょう！」

「……え？」

いきなりの申し出に、さすがの高倉主任も目を丸くした。

「わたしが勝ったら、コーヒー奢ってください」

そう言って高倉主任に挑む人達は今まで何人もいた。主に男性社員さん達が挑んでいたのだけど、ジューズなりコーヒーなり、たかりに成功した人はいない。

「いいけど」

高倉主任は小さく笑って、勝負を受けてくれた。

周りで、高倉主任の同期社員さんや、わたしと同じ派遣社員の子達が、妙な盛り上がりを見せている。

高倉主任は「ジャンケン不敗の人」だから、もっともなことだと思っ。

実は、高倉主任を負かせたことがあるわたしだけど、それは内緒にしていた。

だから、わたしが高倉主任に勝負を挑んだのは、みんなにしてみれば「無謀な初挑戦」。失笑しつつ、わたしと高倉主任とを見やっている。

わたしはじっと、高倉主任を見つめた。

あの時、高倉主任はわたしが何を出すのか分からないのが前提だったと、勝負を挑んできた。

けど、今はどうなんだろう？

わたしは高倉主任に勝てるのかな？ やっぱり負けてしまうのかな？

勝ちたい気持ちもあるし、負けてしまいたい気持ちもある。

二人きりの場所ではなく、会社内の、みんながいる場所での勝負は、どんな結果になるんだろう。

高倉主任はわたしの気負いを讀めてしまっただろうか。

わたしですら分からない感情の機微を見出せるんだろうか。

どんな時でも……？ どんな場所、状況でも……？

ジャンケンをしようと言い出したのは、そんな不純な動機からだった。

周りでは、

「木崎さん、高倉の不敗神話を崩してやれよ」

と、囁し立てる人もいるし、

「高倉主任、不敗記録伸ばしてくださいよ」

と、高倉主任にプレッシャーをかける子もいる。

高倉主任は「勝手な事を」と言いつつ、笑っている。

「木崎さんが負けたら、僕にコーヒー奢ってくれろ？」

「もちろんいいですよ。じゃなきゃ勝負にならないですし！」

「そうだね」

ふつつ、と高倉主任はため息をついた。

瞼を軽く伏せ、もう一度ついたため息とともに、コーヒー色をした瞳をわたしに向けた。

「じゃあ」

高倉主任は少しだけネクタイを緩めてから、手を差し出した。

「一回勝負ね、木崎さん」

「はいっ」

そうして、「ジャンケン、ホイッ」と真剣勝負。

まっすぐに高倉主任を見据えて、わたしはこぶしを振り出した。

そして。

自動販売機の前で、わたしは連勝記録を伸ばした高倉主任と、紙コップに注がれた熱いコーヒーを飲んでいる。

高倉主任はいつものブラックコーヒー。わたしは砂糖を減量させたカフェオレ。

午後三時だというのに、自販機の並ぶ小休憩所にはわたしと高倉主任以外、誰もいない。こんなことって珍しい。

……会社内で二人きりになるのって、必要以上に緊張して、落ち着かない。つい、周りを気にしてしまう。誰も見ていないか、聞き耳たててないか、心配になってしまう。

高倉主任も、一応は人目を気にしているのか、「主任」の顔を崩さないでいた。

「それにしても、いきなりで驚いたな」

軽く息をついてから、高倉主任が笑みを向けてきた。

「ジャンケン挑まれて、ですか？」

「うん、そう。いきなり何を言い出すのかと」

「……………そうですね」

高倉主任は笑ってる。だけど、少し複雑そうな色を瞳に浮かばせていた。

胸が、チクリと痛む。

罪悪感……………とまではいかないけれど、やっぱり「悪い事」をしちやった気分だ。

みんなの前、という事を利用して、わたしは高倉主任の心を推し量ろうとした。

だけど結局、わたしなんかに分かりはしなくて。未だ不安を抱えたままにいる。

「勝つとも思わなかったし、戸惑ったよ。どういう反応を示せばいいのか、と」

「え？」

わたしは目を瞬かせ、まじまじと高倉主任を見つめた。

「勝つと、思わなかったんですか？」



「うん。結果的には勝ったけど、勝てる気はしなかった。というより、どうなるのか、どうすればいいのか、分からなかった」

「でも、高倉主任、なんとなく分かるって言うてたじゃないですか、相手が何を出すか」

高倉主任は、気負ってるのと分かるって言うてたのに。

高倉主任に勝とうとしてた訳じゃないけど、「わたしの心を読んで見せて」って思ってたから。

わたしはきつと、ずいぶんと気負ってたと思う。

高倉主任は僅かに肩を落とし、同時に小さなため息をついた。

「相手と状況によるよ。……俺は、そんなに冷静な人間に見える？」

「……え」

「それでも内心では動揺したりもしてるんだけどね？ それを、おっぴらに反応して見せればよかった？」

立ちのぼるコーヒの甘くて苦い香りの向こう、高倉主任は切なげに目を細めている。

それは、「主任」の表情じゃなかった。

「すつ、すみません、わたしっ」

頬が、火がついたように熱くなる。

不意に見せられた維月さんのやるせない瞳の色に、胸が締めつけられた。

わたしは慌てて謝罪した。

「ごめんなさい！ わたし、高倉しゅ……や、じゃなくてっ、……維月さんのこと試すようなことしちゃって！」

「……」

もう、他人の目も耳も、気にしていられなかった。

維月さんを傷つけてしまったそのことの方が、わたしには怖かった。

「わたし、不安で！ 信じてるのに、我俣だから、勝手に不安になっちゃって、だけどそれをどう言えばいいのか分からなくて！」

必死になつて下手な言い訳をするわたしの頭に、維月さんは手を乗せた。

維月さんの手は、わたしの心を宥めてくれる。子供扱いされてる気もするけど、決して嫌じゃない。

「怒つてはいないよ。俺もそうだから、分かるし」

「え……」

「不安で、怖くなる。だから試したくなるんだよね、時々」

維月さんは二度ほど軽く頭を叩いてから、手を放した。

上目遣いに見上げた維月さんは、紙コップの中のカフェオレより甘い表情をしていた。

「美鈴」

そして、不意をつく。

突然に名を呼ばれ、鼓動が跳ねた。

「俺の気持ちを確かめたいのなら、今夜うちにおいで」

「……っ」

「直接試してみればいい。何度でも、納得するまで」

「や、わっ、ちよっ」

痛いよっ、胸が、どきどき鳴つて！ 頭もくらくらする。

維月さんは腰をかがめ、わたしに顔を迫らせてくる。

茹でたトマトのごとく赤面し、硬直してるわたしの髪を一房手に取り、維月さんは悪戯っぽく、そしてとびきり甘やかに笑つて、ささやいた。

「もちろん、俺も試させてもらっから」

「……っ」

「美鈴が不安を感じなくなるまで、ね」

「……っ！！」

出かかった奇声をどうにか飲み込んだけど、失神寸前。

もうっ、維月さんの艶めいた笑顔は心臓に悪すぎるっ！

今の台詞だけで、胸の内できすぶつてた不安なんて、吹っ飛びましたけど！

目も口もぱっくり開けて、嘩然茫然、茹だつたまま立ち尽くしているわたしを、維月さんは愉快そうに眺めている。

「ここが会社じゃなかったらね……」と呟いてわたしから身体を離れた維月さんは、すっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干し、紙コップをゴミ箱に捨てると同時に、踵を返した。それから肩越しにわたしを見やって、礼を言う。

「コーヒー、ごちそうさま」

維月さんとも、「主任」とも、どちらともつかない曖昧な微笑を浮かべて。

その日の夜、維月さんの言葉に甘えることにした。

甘えて、「直接試して、確認」してみようと思ったわけだけど。

「……………」

どっ、どうしろっていうのっ？

「いつ、維月さ……………」

玄関入るなりいきなり抱きすくめられて。髪を撫でられて。耳元で名を囁かれて。

もがいて、抗ってはみたのだけど、維月さんの腕は力強くて、ほどけない。

先手を打たれて、成す術もありませんけどっ。

わたしを待ち受けてた維月さんは、

「さあ、どうぞっ？」

と、わたしを促した。

「心ゆくまで、試してよ」

「……………」

俺を試していいよ、と言いながら、維月さんはわたしの心を覗きこんでくる。そして、わたしの成長具合を「試して、確認」する。

維月さんは意地悪な微笑を向けて、不敵に言った。

「気の済むまで、何度でも。……ね？」

息をひそめて、微笑んで

昼食時、社員食堂は大賑わいだ。

同じ部署の先輩と一緒に昼ご飯を食べにきたのだけど、小洒落たカフェテリア風のわが社の社員食堂は、昼時になるといつも満席見渡す限り、空席はない。

久しぶりに来たけれど、相変わらずの混雑ぶりだ。それに、同じ会社の人達とはいえ、知らない顔も多い。大企業というほどではないにしろ、それなりに大きな会社なんだなっということを改めて認識させられる。

「いつものことながら、混んでるねえ」

九歳年上で、同じ派遣社員で勤労主婦の浅田さんは「どうしようか」と言いつつ、獲物を狙う猛禽類の鋭さで、食堂をくまなく眺めている。

わたしは「そうですねえ」と相槌をうつ。

「ところでさあ、木崎さん？」

浅田さんは体半分だけ振り返り、後ろにいたわたしの顔を窺ってきた。

「木崎さんって今、彼氏いる？」

「はあ……って、はええっ?!」

いきなり投げかけられた質問に、わたしは頓狂な声をあげてしまった。

社員食堂の入り口付近にいる数人が、奇声を発したわたしの方向を向けてきた。刺さってくる視線が痛くて身を竦ませたわたしだけど、突飛なことを言い出した浅田さんを睨みつけた。

「ちよっ、なんっ、なんですか、浅田さん、突然っ」

「いや突然は認めるけど、訊きたかったのよねえ」

浅田さんはからかうような笑みをわたしに向けて言う。

「ちょっと前はいいって言ってたけど、最近はどうなのかと思っ  
てね」

「……………」

「その様子じゃ、いるんだ、彼氏」

「それは、ええっと」

「そっかあ。うんうん、やっぱそっかあ」

笑うと八重歯がちらりと覗き、そのせいか年齢よりずっと若く見  
える浅田さんは、高倉主任より二つ年上。ベリーショートの髪型が  
似合うさっぱりとした性格で、高倉主任曰く、「うちの課で一番漢  
気がある」人。

勤続年数も、高倉主任とそんなに変わらないということもあって、  
高倉主任と浅田さんは仲がいい。仲がいいというより、信頼しあっ  
ている、という感じかな。会社の内でも外でも、それは変わらない。  
だけど「友達」なのかというと、それも微妙なところだと思う。

以前は、高倉主任と浅田さん、そしてわたしの三人で飲みに行っ  
ていた。浅田さんが結婚してからは、わたしと高倉主任の二人で飲  
みに行くようになった。だけど、それは浅田さんにはまだ言っていな  
い。隠すのは気がひけたけど、言い出すタイミングが見つからなく  
て、未だに内緒にしている。

浅田さんは持っていた長財布を小脇にはさんで両腕を組み、一人  
「うんうん」と頷いて得心している。

「いやあ、あたしの勘もまんざらじゃないね」

浅田さんは何やら嬉しげだ。

「木崎さんって、会社ではあまり感情ださないうようにしてるけど、  
最近、すごく感情豊かよね？ ちょっと雰囲気変わったっていうか」

「そ、そっですか？」

「うん。ぎゅっと握って転がしたいくらい」

「……………なんですか、それ」

浅田さんはカラッと晴れた空みたいになんて笑って、続けた。

「木崎さんさあ、春だからってこともあるかもしれないけど、落ち着かなげで、なんかこう……小動物みたいなのよね、最近。ハムスターとかそんな感じの」

「はあ？」

浅田さんは可笑しそうに笑っている。なんだか楽しそうだ。

こういうところ、浅田さんって高倉主任と似てるかも。そういえば一緒に飲みに行ってた時も、二人に遊ばれていた……気がする。

「木崎さんって、反応が面白い」って、声を揃えて言われたこともあったし。

わたしは少しだけ口を尖らせて、浅田さんをじっと見つめた。

浅田さんはここに笑ったまま、今度はストレートに言った。

「木崎さん、可愛くなったよねってこと」

「……てっ、なっ、何を急にっ」

思わずのけぞってしまった。

顔が赤くなってるのが、自分でもわかる。

「うーん、その反応とか。オヤジに狙われちゃいそうで、危ないな

あ

「……オ、オヤジ……？」

「セクハラ中年にご用心ってこと。『お嬢ちゃん可愛いねえ。オジサンが何か買ってあげるよ？ 欲しいものはないかい？』って具合

に誘われて、拉致されかねないな。オヤジの甘い言葉に騙されちゃ

ダメよ？」

浅田さんはふざけた調子で言うのだけど、どうやら本気でわたしのことを心配してくれているらしい。心配の方向性がたとえちよつとずれているにせよ。

もちろん、心配してくれているのはありがたいことなんだけど、わたしは堪えきれず、

「ぶっ、く……っ！」

噴出してしまった。

浅田さんは怪訝そうな顔をして、細目でわたしを睨めつける。

「何でそこで笑うかなあ？」

と訊かれても、頭に思い浮かんだ人の名を、口にはできない。

「オヤジ」なんかじゃ全然ないし、騙されてもいないから（からかわれてると思う時はあるけど）、思い浮かべること自体、失礼なんだけどっ！

浅田さんが知ったらなんて言うかな。

怒りはしないと思うけど、

「七つも年下の子に手を出すなんて！」

っていう小言はあるかもしれない。

わたしより七つ年上のその人は、きつと肩を竦めて苦笑するだろう。

想像すると、可笑しい。可笑しいけど、だからちよつと、浅田さんに内緒にしていることが、少し、後ろめたかった。

浅田さんの人となりを知っているから尚のこと、心苦しい。

高倉主任とのこと告白してしまうか否か、まだ決めかねている。

高倉主任はきつと、「浅田さんになら話してもいいんじゃない？」  
と言っただろうけれど……。

わたしは笑いをおさめて、胸にたまっていた息を吐き出した。

それと、ほぼ同時だった。

「浅田さん、木崎さん」

少し離れた場所から、声が上がリ、わたしと浅田さんは声のする方に目をやった。

そこに見つけた顔は、わたしの頭にさっきから浮かんでいた人。

「ここ空くから、おいで」

にこやかに笑って、高倉主任がわたしと浅田さんを手招いていた。わたしは上げそうになった奇声を、前歯の裏側でなんとか押しとどめた。



心の準備を与えてくれないという点でも、高倉主任と浅田さんは似てる。

二人はきつと声を揃えて言うだろう。

「驚かせるつもりはないんだけど。木崎さんが気づかなさすぎ」と、と。

慌しく昼食を済ませ、仕事場へ戻る途中だった。

小休憩所でコーヒーを飲んでいた高倉主任に呼び止められた。

別段声をひそませるでもなく、高倉主任が尋ねてきた。

「浅田さんに、何を言われてたの、木崎さん？」

当の浅田さんは、いない。食堂を出たところで別れた。

浅田さんは事務長に用があるからと言って、総務部へ向かった。それを知ってか知らずか、高倉主任はわたしが一人で仕事場へ戻るところを、タイミングよく、つかまえた。

高倉主任は、もの言いたげな色を瞳に含ませている。

「どうやら、わたしと浅田さんが食堂の出入り口で話していたところを見ていたらしい。気にかかるといっほどもないけれど、「やっぱり気になって」いたようだ。」

「浅田さん、嬉しそうな顔をしてたけど？」

「はあ、……その」

「どう言えば、何から言えば……、と、戸惑って、口ごもってしまった。」

「たいしたことじゃないんですけど……その、浅田さんに見抜かれてしまったというか……」

答えてから、わたしは周囲を見回した。

同じ部署の人はいないけど、見知った顔の人が廊下を通っていく。こちらに注意を払う人はいなかったけど、『壁に耳あり、障子に目

あり』ということもあるうかと、高倉主任との間にもう僅か、距離を置いた。

「見抜かれた？」

「……か、彼氏がいるんだらうって」

う、わっ！ 当人を前にして、何言っちゃったんだらう、わたし！？

まともに高倉主任の顔が見れず、慌てて両手で口を隠した。

高倉主任は目を瞬かせた。それから小さく笑った。

「さすがだね、浅田さんは」

「は、はあ……」

間の抜けた声が、わたしの口からこぼれ出た。

「まあ、でも最近の木崎さんは分かりやすいから」

ほんつと、高倉主任はわたしの頭を軽く叩いた。

「そ、そうですか？」

我ながら頼りない声で、聞き返した。高倉主任はまだ「高倉主任」の顔をして、笑っている。

「うん。以前に比べたら、ずっと」

「……………」

困ったな、と呟いた。気をつけなきゃ、と肝に銘じた。

読心術を心得ているとしか思えない高倉主任は、一步、わたしに歩み寄り、そして声をひそめて訊いてきた。

「可愛くなったとか、そんなようなこと言われたんでしょ、浅田さんに？」

「な……んっ!？」

ぎょつとし、高倉主任を凝視した。

「どうして分かるのかって？ 簡単。僕もそう思ったし、……なんとというか、木崎さんの反応の仕方です」

「そんなあ」

わたしは情けない声をあげ、肩を落とした。

高倉主任はそんなわたしを笑ってる。

砂糖を増量したコーヒーみたいに甘い瞳にわたしを映して。

わたしと浅田さんのやりとりを離れた場所で見っていた高倉主任は、ある程度話の内容を推察していたようだ。

なんていう超常的な洞察力の持ち主なんだろう、高倉主任って！  
ずるいよ、ほんとに！

「浅田さんも僕も、『当たり前』だ」

「……………」

高倉主任は、わたし以外の誰にも見られないよう、そっと微笑んだ。いたずらっぽく片目を瞑って。

もう！ 敵わないよ、維月さんには！

だけどそれが嬉しいなんて、……………言ってやらないんだから！

チリチリと胸が痛んだり、ドキドキと落ち着かなくて強張ったりするけれど、……………もう少し今の状態のまま、内緒にしたい。

息をひそめてささやく声と、わたしだけにこっそりと向ける微笑を、独り占めしていたいから。

指を絡めて、寄り添って

寂しい、なんて。

一人で夜を過ごすのが寂しくなるなんて。

……そんな自分にまだ、戸惑ってる。

独り暮らしを始めて二ヶ月。

念願の独り暮らしは慌しく毎日が過ぎ、慣れるまではなかなか落ち着かなかつたから、一人でいる寂しさを感じる暇もなかった。

でも、慣れてしまっつて、こわい。震えてしまっくらいに。

もちろん慣れることは悪い事じゃないし、むしろ楽になることの方が多いと思う。

だけど。

慣れてしまうと、一人きりの部屋のあちらこちらにある空虚な穴が目に入るようになってしまう。

普段は気づかないような、小さな小さな、暗い虚。

仕事でちょっとした失敗をした日や、実家からおざなりな電話がかかってきた休日、会いたくないからと避けていた人の噂話を聞いた晩。

些細な事が原因で、気分が浮上しない日ってある。

そんな日は、テレビを観ていても、好きな音楽を流していても、借りた本を読んでいても、……何をしても気分は紛れず、暗く沈んでしまう。

それはきつと、わたしがもう「独りきり」ではないからなのだろう。

「……………」

充電されている携帯電話に目をやる。そして、ほとんど無意識に手を伸ばして、着信履歴の一番上にある人に、リダイヤルをした。た。

電話で聞く彼の声が好きだった。

同時に、ちよつと後悔もする。

「どうしたの、美鈴？」

ほんの少しの沈黙が、電話越しだと、酷く重く感じられる。

なんでもないです、と、応えられない。

だって今、わたしは彼のことを独り占めしている。

わたしだけに向かつて喋り、わたしの声だけを受けている。

そしてわたしも今、彼にだけ話しかけ、彼の声だけを耳に寄せている。

「維月さん」

彼の名を口にするだけで、心が震える。

頼りない自分の声が恥ずかしくて、わたしはベッドの上、背中を丸めて膝を抱えた。

ほんの数時間前まで、何時間も一緒にいたのに。

上司である彼とは、ほぼ毎日、会社で顔を合わせている。

だけどそれはあくまで「上司と部下」としてだから、それだけじゃ足りなくて。

……もつと傍にいたいと、傍にいてほしいと、求めてしまう。

贅沢なことだって分かってる。

毎日顔を見ていられて、間近に声を聞ける。

それなのに、……ううん、だからこそ、なのかもしれない。

上司じゃない、「高倉維月」さんに会いたくて会いたくて、堪らなくなる。

優しい腕に抱かれないと、欲してしまう。

泣きだしたいくらいに、今、こんなにも、維月さんが恋しい。

わがままだつて分かっているのに。維月さんの負担にだけはなりたくないのに。

自分の弱さに、泣きたくなる。

「美鈴、今、アパートだね？」

「……え？ はい……あの」

「じゃ、行くから」

「え……」

「すぐに行く」

短く言つて、維月さんは通話を断つた。

仕事を終え、帰途についていたらしい維月さんは、進路をかえてわたしのアパートに駆けつけてくれた。

一緒に食べようと、ワッフルを携えて。

「この店の好きだつて言つてたよね？」

「あ、はい。……じゃ、紅茶、淹れますね」

「うん」

維月さんは何も訊かない。

何も訊かず、わたしに笑いかけて、傍にいてくれる。そうして、買ってきたワッフルを、一緒に食べる。

四つあるワッフルのクリームはそれぞれ別種で、バニラカスタードとストロベリーとチョコラ、それと新発売の黒糖。

「美鈴、その黒糖、美味しい？」

「うん、それなりです。……半分、食べます？」

「うん。じゃ、こっちのショコラも半分」

「わたし、ショコラとバニラが好きなんですよ。とくにショコラは程よい甘さで、癖がなくて」

ナイフで切り分けた黒糖のクリーム入りワッフルを維月さんに手渡すと、維月さんは強引に手で切り分けたショコラクリームのワッフルをわたしに差し出した。

「そうなんだ。美鈴は定番の味が好きだよな、そういえば」

「うん、そうかも。あまり冒険ってしないんで。維月さんはけっこう新発売とかに弱いですね？ 前も、新発売のカップアイス買って……微妙な顔してましたし」

維月さんは苦笑して、紅茶を一口すすった。

それからふつと目元をやわらげて、わたしを見つめる。

わたしは訳もなく赤面して、ショコラクリームのワッフルをほおばった。

「美鈴は本当に美味しそうな顔をして食べるよね？」

「そ、そうですね？」

「うん、すごく」

甘いショコラが、舌の上でとろける。

甘い維月さんの瞳が、わたしの心をやわらげて、痛いくらいに蕩けさせる。

一瞬の沈黙と、維月さんの悪戯っぽい微笑が、紅茶の香りに混じって、わたしの嗅覚をくすぐってくる。

鼓動が跳ねたのと、それは同時だった。

「本当に美味しそうだ」

「……………っ!？」

わたしの口の端に付いていたショコラクリームを親指で拭き取ると、維月さんはそれをぺろりと舐め、にこりと笑う。

「うん、美味しいね」

「……………ちよっ、維っ……………んっ」

最初、軽く啄ばむようなキスをしてから、維月さんは中途半端に浮いていたわたしの手を胸元に寄せた。指と指との間に、自分の指を挟ませて、握っている。

次第に深まってゆくキスのおかげで、心に引っかかっていた寂しさは薄れていったけれど。

代わりに、堪えていた涙がこぼれてしまった。

維月さんは唇を離して、そのまま何も言わず、わたしを抱きしめ

てくれた。肩を抱き、髪を撫ぜ、時折耳や額に接吻を落とす。

何も訊かない。何も言わせない。

ただ、静かに寄り添ってくれる。

わたしのわがままを、それと氣遣わせずに、包んでくれる。

きっと、寂しくなる夜はまたやってくるだろう。

戸惑いは消せないけれど、それでもいい。

だって。

維月さんはシヨコラより甘く、

「寂しがりな美鈴の傍にいられるのが嬉しいからね」

そう言っつて、微笑ってくれる。

わたしの心に空いてる、暗い虚ごと全部、受け入れて。



## 月といましめ

手の動きが、止まった。

それと同時に、低いささやき声が背後でこぼされた。

「拒んでもいいんだよ」

と、気遣わしげに。

驚いて、振り返った。肩越しに振り返ったそこに、維月さんはいる。わたしの濡れた髪をタオルとドライヤーとドライヤーで乾かしてくれている。一旦スイッチを切られたドライヤーは床に置かれ、維月さんの手の動きも止まっていた。

「え、あの……？」

首をかしげ、聞き返してみた。

維月さんはわさわさとわたしの髪を撫でている。濃いめに淹れたコーヒーのような双眸は、少しだけわたしから逸らされた。

維月さんは甘さと苦さを含んだ微笑を浮かべている。わたしの声が聞こえなかったみたい、曖昧に。

維月さんの部屋は居心地がいい。程よく整理整頓がなされていて、こざっぱりとしている。それでいて開きっぱなしの雑誌が放置されていたり、飲みかけのブランデーの瓶がピーナッツの小袋と並んでいたりと、脱ぎ捨てた上着が無造作にソファの背もたれにかけられていたりして、維月さんらしい生活空間がちゃんと横たわっている。維月さんの気配に満ちているこの部屋は、まったくと寛げる温かな空間だ。

維月さんの後にお風呂を借りて、秋風に冷やされた身体を十分に温めたわたしは、パジャマ姿でゆったりとソファに腰かけている。そして維月さんに髪の毛を乾かしてもらっているという贅沢さだ。

「髪、乾かしてあげる」と言って横に座った維月さんは、わたしが  
お風呂にはいつている間にブランデーをロックで二杯、空けていた。  
現在三杯目のグラスを傾けている維月さんだけど、顔を見る限りで  
は酔っているようには見えない。

「……」  
「あ、なんとなく辛苦を堪えたような表情をしていた。切なげ  
……」  
「あ、維月さん」

わたしより先にシャワーを浴び終えていた維月さんの髪は、とう  
に乾いている。なのに、湿り気のある雰囲気がある。維月さんの身体に滲  
み出ている、なんというのか、ひじょうに艶っぽい。

盗み見るようにして維月さんの顔を、改めて見やった。上目遣い  
になってしまふのはわざとじゃないんだけど、自然、そうやってし  
まう。だから、そう……困ったような顔をしないでほしいんですけ  
ど。

「拒んでもいいって、それは……」

「言葉どおりの意味だよ。ただし、俺自身を本気で拒まれたらさす  
がに凹むけどね」

「はあ……」

ますます意味が分からない。首を捻ると、維月さんはくすつと小  
さく笑った。再びドライヤーのスイッチが入り、しばし言葉が途切  
れた。

オーディオから流れている音楽は、男性ボーカルの軽快な洋楽。  
七十年代後半のクラシカルなハードロックで、わたしの知らない歌  
だ。でも不思議なもので、懐かしく感じる。曲調や音そのものが最  
近のものとは違うから、なんだろうか。けど、ちっとも古臭さくな  
い。

洋楽ということもあって、流れている歌は耳に留まらず、聴くと  
はなしに聴いている。軽快なリズムはまどろみを誘わない。

お風呂上りで身体は温まっているけれど、まだ眠くはならなかつ  
た。

「こ、拒むって、何を、なんですかっ」

ドライヤーの風音に負けないよう、ちよつと音量をあげて、もう一度訊いてみた。

だつて、「拒んでいい」なんて、気になる！

「俺を、だよ」

「え？」

「だから、俺を」

「ええ？」

今度は思いきって体ごと振り返った。ドライヤーの熱風が額に当たつて、ちよつと目を瞑つてしまった。

維月さんは慌てることなくドライヤーのスイッチを切り、ため息をついて両手を下ろした。

「美鈴は俺のすることを、めつたに……というかほとんど拒まないよね。口ではイヤって言いつつ」

「え、それは……」

「うん、まあ、大抵俺が強引にしてるから、拒みきれないんだろうけど」

「や、ちよつ、待つてください！」

「ん？」

この時になつてようやく維月さんはわたしの目を見てくれた。ちよつとだけ決まりの悪そうな表情をしていた。……珍しい表情ではあるけれど、見惚れている場合ではない。

「それじゃあまるでわたしが維月さんのこと嫌がつてるみたいじゃないですか。わたし別に嫌がつてなんか……や、そりゃまあ、困つてることもありますけど」

たとえば、こちらが思いつきり恥ずかしくなるようなこと言ったり、いきなり抱きすくめたり、……明かりをつけたまま……したり、とか。困りはするけれど、「拒め」と言われると、それはちよつと違うというか。

「拒んでいいなんて言われても、わたし、どうしたらいいか分かり

ません。……あ、それとも」

もしかして、維月さんが、なの？ 暗に、わたしのことを拒みたいって言うてるの？

こんな風に甘え、頼りきってるわたしが……やっぱり負担になってきてるんじゃないかな。だとしたらわたし……ど、どうしよう……。

全身から力が抜け、肩を落として、うな垂れた。

だって、ありえるもの。今だってこうして、維月さんが優しいからって安心しきって、甘えてる。依存してるといってもいいくらいに。

もう成人式も三年前（正しくは二年とちょっと前、かな？）に済ませた「いい大人」であるはずなのに、わたしの維月さんに対する子供っぽさって、我ながら情けないと思う。

「美鈴、違うから」

維月さんの温かな手が頬に触れた。けど、顔はあげられない。だって泣きそうになって、鼻の頭が痛い。

「……………」

こんなところが甘えきってて子供だっていうんだ……。

「何を考えたかだいたい分かるけど、そうじゃなくてね、美鈴」

維月さんは両手でわたしの頬を挟んで、顔をあげさせた。そしていきなり、ごつんとおでことおでこをぶつけてきた。軽くだったけど驚いて、目を丸くし、すぐ近くにある維月さんの瞳を直視してしまった。

ドツと心臓が鳴った。

「俺はね、けっこう必死になって美鈴のこと繋ぎとめようとしてるから、それが重いと感じたら、拒んでもいいよってこと」

「え……………」

「言ってくれば、自信はないけど、少しは自重するから」

「……………」

「美鈴は、俺以外のことなら、そう……………仕事のこととかは、嫌なこ

とは嫌だとわりあいはつきり断わるよね？ 流されやすいのかなと思ってたけど、存外そうじゃなくて」

「……………」  
わたしは無言のままにいる。だって維月さんの顔が近すぎる。おでことおでこは、ひつついたままだ。

「けど、俺のことはあまり拒まないから、もしかして我慢してるのかなと思って。美鈴は辛抱強いからね」

「わ、わた、し、辛抱なんて……………」

心臓がやかましいくらいに鳴ってる。動悸がちつとも治まらなくて、苦しい。目を伏せて維月さんのまなざしから逃れても、手から頬に伝わる熱が全身を痺れさせて、維月さんが「いいよ」といつてくれたようには、「拒め」ない。

「もちろん本音を言えば拒んでほしくないけど、美鈴に辛い思いをさせたくないのも、本心だから」

「……………」

ほらまた…………！ そんな風に、維月さんは優しいことばかりを言っつて、わたしを困らせる。拒むなんてできない。拒む理由なんて、何一つ見つからない。

拒んでほしくないって思ってるのは、必死になって繋ぎとめてるのは、わたしの方こそだ。

「維月さん、そんなこと考えてたんですか？」

視線を上げず、聞き返してみた。維月さんは「うん」と短く応えた。声が、少しかすれてた。

その声があまりにも切なげで、胸が詰まった。

「維月さん」

泣きそうになってるのをごまかすために、わたしは維月さんに抱きついた。胸に両腕を回し、胸に顔をうずめた。維月さんはさりげなく抱き返してくれた。

「あまり優しいこと言わないください。…………って、これも“拒んでいい”のうちに入りますか？」

「うっん……どうかな」

維月さんの声は微笑を含んでいるようだった。ブランドーの仄かな香りが、わたしをふわりと包む。

「ああ、だけど、この後の展開については、できれば拒んでほしくないな」

「……う、それは……」

この状況では……拒めません。

だって、なんだかわたしから誘っちゃったみたいな状況だしっ！  
や、もう全然そんなこと考えてなかった……はずなんだけど。

「拒み、ません」

ぼつりと、小さく応えるのが精一杯。

「よかった」

維月さんの眩きが耳朶に触れる。

抱きついたものの、そのままの姿勢で硬直してるわたしの身体を、  
維月さんは髪を撫ぜんがら、ゆるゆると解していく。

優しく手馴れた、指先で。

深閑とした秋の夜空から、いさよつ月が照らしてる。

解きほぐされてゆくわたしと、いましめをはずした維月さんとを。

## ときめきに策略

今夜で何度目の“お泊り”だろう。

ふと思つて、今自分がいる部屋を改めて見回した。

白、茶、グリーンといった優しい色合いの部屋。模様替えをして、家具の配置が時々変わっていたりもするけど、それでもすっかり見慣れた部屋だ。

居間のソファーにゆつたりと腰をおろしている人……高倉維月さんの、ブランデーを傾ける様子もまた、相変わらずのものだ。

維月さんはごく自然な、寛ぎきつた態度でわたしに話しかけてきたり、お酒をすすめてくれたりする。時には黙り込んで雑誌を見たり音楽を聴いていたりすることもある。わたしは傍に居るのが当たり前といった風で、わたしだけが維月さんのひとつひとつの些細な挙動にときめいたり、見惚れたり、落ち着かなくなったりしている。初めて維月さんのマンションに泊まった夜は緊張した……というよりも、「もう何が何だか分からないうちに」という感じだったわけ。

二度目は緊張してた。三度目も四度目もまだときどきしつぱなしで、余裕の欠片もなかった。寝ぼけて、おかしなことを言つて、維月さんに笑われたこともあった。

はじめ、維月さんもわたしの様子を窺つて、

「今夜は泊つていつて」

と、懇願するような口調でわたしを引き止めた。そして少しずつ、言葉尻が変わつていった。

「今夜は泊つていくよね？」

頼むようではなく、ほとんど確定事項のように聞いてくるようになり、近頃ではそれがさらに進化して、

「先にお風呂使つて」

と言つようになつた。何気ない口調で、さらりと。

今夜も維月さんは、それを言ってくれるのだろうか……？

「ああ、しまった」

と、維月さんが髪をかきやり、うめいた。

それは、洗濯物を衣装ケースに入れてある時だ。わたしがたたみ、維月さんがケースに入れる、といった流れ作業の途中。

維月さんはブルーグレイの綿シャツを見るなり、がくりと頂垂れ、そしてちよつと情けない顔をして、うっかりしてたとボヤいた。わたしが首を傾げると、

「これ、袖口のところが破れていて、それで洗う前に捨てようと思つてたんだ」

と、教えてくれた。

捨てるつもりでいたのに、うっかり洗ってしまったことが口惜しいらしい。

わたしはちよつと笑ってしまった。

だって、そんなたわいもないことで、口惜しそうな顔をするなんて。

でも、洗っちゃったから捨てるのが勿体ないって感覚、すごくよく分かる。わたしがそう言うのと、維月さんは眉を下げて笑い、「美鈴も？」と聞き返してきた。賛同を得られたのが嬉しいらしい。

わたしより七つ年上の維月さんは、年齢的なことだけじゃなく、とても大人な男性だ。子供っぽい悪戯心を見せることもあるけれど、それだって、どちらかといえば「大人な」悪戯だ。そういう時の維月さんは、非常に色っぽくてなまめかしい。

わたしの心緒を優しく気遣ってくれて、さりげなく包みこんで、寂しさを癒してくれる。

いつだって余裕たっぷりという感じで（本人は否定するのだけど）



、めつたなことでは動揺せず、くだらないことで気分をへこませたり口惜しがったりしない人だと思ってた。

だからこんな風に、ちょっとしたことだがつくり肩を落したり、喜んでみたりする維月さんは、なんだか新鮮だ。

「維月さん、それ捨てちゃうなら、わたしにくれませんか？」

「いいけど、もらってどうするの？」

わたしは維月さんからシャツを受け取り、たたんであるそれをひろげてみた。たしかに、左の袖口が破れてる。長袖のシャツなのだけど、ボタンのところから、肘のあたりまで破けてしまってる。裁縫は得意じゃないから、縫いなおすにしてもきつと元のように直せない。

「実は、維月さんのシャツ、欲しかったんです。古いのでいいから何か要らないのがあったらいつかもらおうって」

維月さんは「どうして」と訊いてくる。顔には嬉しげな微笑みが浮かんでいた。少しくすぐったそうな表情でもある。

維月さんのシャツが欲しかった理由は、我ながらオトメチックで気恥ずかしい。維月さんが着ていたものに身を包んで眠りたい、なんて。

けど、理由も言わずにシャツをくださいっていうのは失礼な気がしたから、恥ずかしかったけれど、それを素直に伝えた。

「維月さんの着古したシャツをパジャマ代わりにしたいなって思ってたんです。この季節なら、一枚でちょうどいいパジャマ代わりになるし」

晩夏とはいえ、まだ暑い日が続き、夜もまだ寝苦しい日が多い。だから寝る時は、ちょっとだらしないのだけど、すぐゆるい格好をしている。大抵は、着古したTシャツと短パン。ロングTシャツ一枚だけって時もある。

維月さんは顎を撫で、何か考えている風にちよつと黙った後、「ああ、なるほどね」と相槌を打った。それからふつと、ブランドーの香りが漂ってきそうな官能的な微笑を浮かべ、わたしの頬に手を

添えた。維月さんの指が、頬から耳へと這い、髪を梳く。

ぞわりと、鳥肌が立った。維月さんのまなざしにとらえられ、金縛りにかかったように、体が動かない。心臓がうるさいくらいに鳴りだした。

維月さんの甘い声が耳朶をうつ。からかうような、そんな声音だ。

「いつそ、俺をパジャマ代わりにしてくれてもいいんだけど？」

「……っ！」

わたしは維月さんのシャツを抱きしめたまま、顔を真っ赤にして絶句した。

今夜の維月さんはずいぶんと意地悪だ。しかもとても楽しそうだ。そしてわたしはというと、動揺させられっぱなしだ。

「いつ、維月さんっ！」

わたしは脱衣所で立ち往生し、おもわず声を張り上げた。

「維月さんっ、わたしのパジャマと下着、返してくださいっ！」

維月さんったら、ひどい。わたしがお風呂に入っている間に、着替え一式を脱衣所から持ち去ってしまったのだ。脱衣籠にはさつき脱いだ服と下着がある。だけどそれを着る気にはなれない。今日は残暑が厳しくて、けっこう汗をかいちゃったし。

せっかくシャワーで汗を流し、さっぱりした気分でバスルームから出たっというのに。

汗がまた滲む。

わたしはバスタオルを体に巻きつけた格好で少し脱衣所の引き戸を開け、そこから居間に居るであろう維月さんに訴えた。

「維月さんっ、もうお願いですから服返してくださいっ！」

「着る物ならあるだろう？ それを着ればいい」

その声とともに、維月さんがこちらにやってきた。

それ、とはブルーグレイの綿シャツ。さっき維月さんに「くれませんか」とせがんでもらった、シャツだ。

その洗いざらしのシャツが一枚、椅子にひっかけてある。シャツだけが、ある。

「今夜から早速、パジャマ代わりに着ればいいだろう?」

「……そ、そうですねっ」

かく言う維月さんは、すでにシャワーを浴び終えてパジャマ姿になっている。

「維月さんだけちゃっかりパジャマに着替えてて、不公平じゃないですか?」

「ああ、それなら」

維月さんはニツと不敵に笑ったかと思うと、前に進み出て、脱衣所の戸をわたしが止める間もなく、すらりと全開させた。

距離を詰められ、わたしはたじろぎ身をひいた。

それでもまだ維月さんは脱衣所に踏み込んで来ない。けれどそれはわたしに逃げ場がないからだ。バスルームから、むっとした湿気と石鹸の香りが漂ってくる。さらには維月さんの艶帯びた熱視線にあてられて、わたしの心拍数は不健康な具合に上がってきている。

「それじゃあ俺も脱ごうか? 美鈴がそう言うのなら、ここで」

「言つてませんっ! 言つてませんから、そんなこと! もっ、もういいです、着ます、シャツ着させてもらいますから、向う行つてくださいっ!」

わたしはいともたやすく白旗を上げ、完敗宣言をした。だけど、ちよつとだけあがいてみた。

「着替えますから、維月さん、せめて下着だけでも返してください」  
キャミソールはこの際なくてもいい。だけど、ショーツだけは返してほしいと訴えた。けれど意地悪な維月さんは、うんと言つてくれない。

それどころか、維月さんはさらりと、とんでもないことを口にする。

「要らないだろう? どうせすぐに脱ぐんだから」

「のわああっ!! 維月さんっ、ちよっ、もうっ、そういう露骨な

「こと言わないで！」

頭に血が上り、わたしはもう卒倒寸前だ。顔どころか耳まで真っ赤になってるだろうわたしを、維月さんは愉しげに見つめている。そして、とんでもないことをしれつと言いつつ。

「美鈴の露骨な姿を見たいんだからしょうがない」

「もっ、もう勘弁してくださいっ！」

情けなくも、声がひっくり返る。顔中熱くて、汗がじわりと浮き出てきた。

維月さんは可笑しげに笑い、そしてわたしの訴えをあつさりと退けた。

「それじゃあ美鈴、向うで待ってる」

そう言つと、維月さんは踵を返し、悠々と居間へ戻っていった。肩越しに振り返り、「早くね」と笑つ。

「……………」

もっつ、維月さんの意地悪っ！！

維月さんの笑顔は官能的で、黒すぎる。敵いつこないよ。……ほんと、ずるいんだから……。

ぶつぶつ文句を言いつつも、結局わたしはもらったばかりのシャツをはおり、足元を気にしながら、維月さんの元へと向かった。

かくして。

二人分の汗を吸いこんだブルーグレイのシャツは、翌朝再び洗濯機に放り込まれることになり、今度はわたしがぐりと肩を落とす、ため息をつくはめになった。

## 逡巡と衝動の交差点

大雨の注意報が発令されたのを、さつき、ニュースで見た。

注意報だけど、局地的には警報が発令されてるんじゃないかしら、というほどの雨量だ。

ガラス窓を叩きつける雨はいよいよ勢いを増し、わたしの声をかき消してくれる。声だけではなく、羞恥を誘う熱い音も。

今日は朝から降ったり止んだりのぐずついた空模様で、太陽の姿はほとんど見られなかった。

定時に仕事を終え、帰宅の途についた頃は、少しだけ雲が切れて雨もしばしの間止んだのだけど、日が暮れると同時に……そして、わたしの一人住まいのアパートに高倉維月さんがやってきてすぐに雨はまた降りだした。

「また、ずいぶん降ってきちゃいましたね」

温度計と湿度計を確認しつつ、空調の温度を設定する。

「維月さん、暑くないですか？」

体を熱くするだろうアルコールを摂取している人に訊くと、「ちよどいいよ」と笑顔が返ってきた。

七月も半ばを過ぎ、梅雨明け宣言をニュースで聞いたばかりだと言いつのに、この雨だ。少し気分が滅入る。雨は嫌いじゃないけれど、蒸し暑くて重たい空気はやっぱりちよつと苦手で、テンションも下がりがり気味になってしまふ。けれどわたしなんかより、維月さんの方がもっと疲れているはずなのだ。つきかけたため息をぐつと堪えた。

「維月さん、もしかして明日も出勤なんじゃないですか？」

「ん？ ああ、いや、どうかな。もしかしたら呼び出しはかかるかもしれないけど、一応休みだよ」

「……そうですか」

七月に入つてすぐ、顧客からのクレームが相次いでしまい、その対応と処理に奔走していることは聞いている。もちろん維月さんだけじゃなく、顧客の対応業務に就いている何人かの社員は維月さん同様、土日の休みを返上してららしい。

毎日の朝礼で経過報告だけは聞くけれど、わたしののような派遣社員は、休日出勤は基本的になく、依頼されるのはせいぜい残業くらい。先週末までは、わたしもほんの二時間程だけど残業をしていた。今週に入ってからはどうにか通常業務に戻れて、週末の今日金曜日も、定時に上がった。

どうやらクレーム処理はスムーズに片付いてきているようだ。

それでも維月さんの仕事量は減っていないようで、日々、忙しそうだった。

「あの、維月さん、あんまり無理しないでくださいね。あ、つていうか、いいんですか、うちに帰らなくて？ 疲れてますよね、いつも帰るのが遅くなって日付変わっちゃうなんてこともけっこうあるって……。うちでゆっくり休んだ方がいいんじゃない？」

「うん、まあ、そうだな……。無理をしてるつもりはないけど、さすがにちよつと疲れてるかな」

維月さんはくすりと苦つぽく笑つて、空になったグラスを振つて見せた。

本日の維月さんの飲み物は、アルコール度数の高い、ドイツの“キルシュヴァッサー”という無色透明のスピリッツ。サクランボを発酵させてつくった蒸留酒で、ドイツのシュヴァルツヴァルトの名産品らしい。甘いような酸っぱいようなフルーツブランデー、その香り自体は好きんだけど、アルコール度数40なんて、わたしには高すぎて飲めそうもない。つてことで、わたしは梅のチューハイをちびちび飲んでいる。

フルーツブランデーを氷でも水でも割らずにストレートでさらさらと飲みほし、それでも維月さんはいささかも顔色を変えない。う

うん、変わっているかも。匂い立つような艶色に。

維月さんはわたしを見つめ、

「いつもより酒量が増えるくらいにはね」

と、艶笑して言った。

そんなに飲んでいないはずのわたしなのに、途端に頬が熱りだす。それが恥ずかしいこともあって、わたしは維月さんから顔を背けてしまった。

「で、ですよねっ、疲れて当然ですよねっ」

うっかりお酒を出してしまったから、このまますぐには帰せないや、ごく当然と言った風に酒瓶を持ちだしてきたのは維月さんの方。なんだけど。

それに、ほんのさつき……小一時間前に来たばかりの維月さんに、「もう帰って」なんて言えないし、……言いたくなかった。

「でも、お酒飲んじやってるから帰るにも、車はダメだし……」

わたしはテーブルの上に並んでるグラスや酒瓶、おつまみなんかを片づけるでもなくせにちょっと動かしてみたり、汚れを拭いてみたりと、落ちつかないげに手を動かしている。

「美鈴」

「は、はいっ」

名を呼ばれて、はっと顔を上げる。わたしの斜め向かいに座っている維月さんは、グラスをテーブルに戻すと、目を細めてわたしを見、静めた声で言った。

「ちょっと疲れてるから、今夜はここに来た。けど、そういつてみれば、疲れてるのは美鈴も同じだね。……押しかけて来て、迷惑だった?」

「違います!」

慌てるあまり、声が詰まりそうになった。

「そんなことは全然ないです! 来てくれて、驚いたけど嬉しかったです。って、いえ、わたしじゃなくて、維月さんの方です! わたしのことなんかより、自分のこと心配してください! やっぱり

ゆっくり休んで体の疲れをとったほうがいいんじゃないかと思うんですけど。わたしは、お酒を飲むくらいは一緒にできるけど、でもかえって気を遣わせちゃってるんじゃないかと思うとそれが心配でそれに迷惑なのはわたしの方こそじゃ……」

誤解を解きたくて、早口になってしまふ。もう自分で何を言ってるのか、わからない。

疲れているだろう維月さんに心配をかけて、さらに疲れさせてしまふなんて！

せっかく会いに来てくれたのにその気持ちを踏みにじるようなことを言っちゃって、自分の気の利かなさに泣きたくなった。思考はネガティブに偏っていくばかりだ。

「わたしばかりが維月さんに癒されてますよね……。来てくれてそれだけで嬉しかったから、維月さんのこと後回しになって。でもわたしにできることなんて全然なくて、力になりたくてもできなくて……」

激しく窓を打つ雨の音にまぎれ、小さくなっていくわたしの声は、もしかしたら維月さんに届かなかったかもしれない。

「美鈴」

しゅんと頂垂れるわたしの傍にいつの間にか寄って来ていた維月さんが、鋭く名を呼んだ。わたしは再び維月さんの方に顔を向ける……向けようと顔を上げたのと同時に、維月さんがわたしの後頭部に手をまわした。

暑いからと、後頭部で一つにまとめ、バレッタで留めていたわたしの髪がぱらりと肩に落ちる。

維月さんが、バレッタをはずした。

「さっきも言ったけど、今日は、疲れていたからこそ美鈴に会いに来た」

「……………」

「溜まった疲れをとるにはいろいろ方法があるんだよ。とくに、男は」



「……………」

わたしは首を傾げ、維月さんを見つめ返した。維月さんは悪戯っぽく笑って、わたしの髪を撫せてくる。ひどく、くすぐりたい。

「それには美鈴の協力がある」

「……………」わたし、の？」

「美鈴を、もつと疲れさせることになるけど。そのつもりで来たって言ったら、怒る？」

「……………」

色めいた表情、そして甘い声で囁かれて、言葉の意味が分からないとぼけることはできなかった。

維月さんは、ズルイ。

言葉巧みにわたしを誘導して、わたしを頷かせる。

鬱に沈みそうだった気分も羞恥心も、維月さんは全部飲みこんで、そして笑ってねだってくるのだ。「欲しい」と、わたしを見据えて。

大気を湿らせ、土を潤し、水を滴らせる、夜の雨。

そしてわたしは、今夜の激しい風雨よりももっと強く、緩急をつけて揺さぶり、打ち付けてくる維月さんという集中豪雨に翻弄されている。

激流に呑みこまれるのが怖くて、不安で、わたしは必死の思いで維月さんにしがみついていた。維月さんもまた、わたしを離さない。乱れる息の合間に、何度も維月さんの名を呼ぶ。維月さんもわたしの名を呼び返してくれる。頬にはりつく髪を指ではらい、泣き濡れている脛にキスをしてくれた。

甘い囁きと熱っぽいキス、そして怒涛のように押し寄せてくる維月さんの、全て。

涙があふれて、とめどなく零れ落ちる。

わたしはもう耐えきれず、叫び声をあげた。体が強張り、両の手にも力がこもる。

「…………ツ」

その一瞬、維月さんの眉が苦しげに寄せられた。艶めいた鬢りが<sup>ひそみ</sup>鬢に落ちる。

直後、身を引き裂かれるような甘美な衝撃が走り、わたしはあえなく意識を失った。

「あの…………」

意識を取り戻したのは、それからすぐのこと。体の火照りは残ったまま、汗もひいていない。呼吸だけがどうにか落ち着きを取り戻していた。

まだ窓の外は暗く、雨は相変わらず激しく降り続けている。

「あの、維月さん、…………ご、ごめんなさい」

「うん？」

維月さんはわたしの汗に濡れた髪を撫せてくれている。子供をあやすように…………しては、ひどく官能的な指の動きだけでも。

くすぐったくて、わたしは顔を上げられずにいる。俯き加減のまま、言葉の先を続けた。

「あの、さつき…………、背中に思いきり爪をたてちゃって、…………痛そうだったし、その、痕が残っちゃってるんじゃないかなって」

「ああ」と、笑いを含んだ声が返ってきた。

顎を上げると、悪戯っぽく笑っている維月さんと目が合った。維月さんはわたしの頬を親指の腹で撫ぜ、「いいよ」と微笑む。

逡巡と衝動がクロスする交差点の真ん中で、どうしたらいいのか分からずうろたえているわたしの手を取り、維月さんはいろいろな路があることを教えてくれ、そして迷ってもいいのだと宥めてくれ

る。

巡り巡ったその果ての衝動を、維月さんは受け容れてくれる。時には強引に抱き寄せて、温かな四肢で檻をつくり、わたしを閉じ込めてしまうこともあるけれど。

わたしは維月さんの手に、自分の手をそつと重ねた。

「美鈴」

維月さんがわたしの名を呼ぶ。

その、少しためらいがちな声が好き。少し強引なキスも。熱い抱擁も。

維月さんはおでこをくつつけてきて、ふつと笑い、わたしを誘惑する。

「いいよ、美鈴。もっとたくさん痕を残しても。俺が美鈴にす

るように」

雨はまだ止まない。

そしてわたしは、雨月の夜に溺れ、酔い痴れる。

今だけでいい。 五感をすべて俺のために使ってくれないか

五感のうち、おもに視覚と聴覚を、彼女は周囲に対して過敏なほどに使っている。

他者の目と口、そこに見え隠れする他者からの自己評価というものに、彼女は無意識的に怯えている。

下される評価のおおよそは、彼女自身が下したものだ。彼女が下す彼女自身の評価は、低い。それゆえに、他人の目を気にしないでいることは、難しいようだった。

何故なのかと、それは問わない。

傷を抉りたくはなかった。そうすることによって、彼女に拒まれるのを怖れているのも、本心だ。

彼女の傷を完治させる力が俺にあるなどは、驕っていない。だが、ひと時でも痛みを忘れさせることはできるだろう。

俺なりの方法で、少しずつでも傷を癒していく。

ただその方法は、彼女を困惑させ、恥ずかしがらせ、時には泣かせてしまう荒療治ではあるのだが。

何気なく手に取った国内旅行のパンフレット。

梅雨時は、シーズンオフ・プライスだ。

パンフレットを熟読した後、行く先と泊まる旅館を決め、赤丸をつけていた。

「一泊で、温泉旅行に行こう」

唐突に、誘った。

俺の向かい側に座って、まったりと紅茶を飲んでいる彼女 美鈴は目を丸くし、「はあ？」と間の抜けた返事を返してきた。

「ここ。近場だし。来週の土日、空いてるよね？」

「……空いては、いますけど……」

美鈴は、了承しかねていた。とまどいがちな目を俺に向ける。人目を気にする美鈴は、大衆浴場が苦手らしい。

「温泉は嫌いじゃないんですけど、スーパー銭湯みたいところはどうも苦手で……」

例外は、友人らと行く旅行先での温泉くらいだという。

あとは、のぼせやすい体質らしく、長湯ができないのも理由の一つらしい。

「だから、基本は露天です。露天風呂ならのぼせにくいし」  
なるほど、と、俺は笑う。

たしかに美鈴はのぼせやすい。熱すると、すぐに茹だって赤くなる。

俺がそう言っていると、美鈴は目をぱちくりと瞬いて、首を傾げる。くせのある髪が揺れると、ほのかにフローラル系の甘い香りが漂ってくる。

「なんでわかるんですか、そんなこと……?」

……まったく、美鈴は無防備な上、天然だ。

呆れて、苦笑とため息がこぼれ出る。

今すぐのぼせさせてやるつかと悪戯心が湧いてくるが、とりあえずは、堪えることにした。

温泉は好きだけど、銭湯は苦手。

そんな美鈴のために、選んだ温泉旅館は部屋にも露天風呂のある処だ。むろん宿泊費は安くはない。だが、シーズンオフだ。通常の二割引きの料金というのは、格安だろうと思う。しかも、急遽決定したにも関わらず、部屋が空いていた。

「って、もしかしてもう予約しちゃったとか?」

「善は急げって言うでしょ?」

「せ、善て……」

美鈴は頬を赤らめて、うろたえる。

「そういうの善って言わないと思いますけど！」

「そう？　けど、もう予約しちゃったから。そのつもりでね」

「ちよっ、けど、あの、いつ、維月さんっ」

美鈴が慌て、とまどう理由は、わかる。

俺との、初めての泊旅行だということも、その一つだろう。

「ボーナズ前だけど、大丈夫。今回は俺の奢りだから」

「そんなんっ！　悪いです！　だって温泉つきの部屋、料金高いし！

いくらシーズンオフだからって」

遠慮しなくてもいいよ、と、俺は笑って返す。

目的があるからね。

「奢らせてよ。混浴目当てなんだから」

「……………」

予想通り、美鈴は絶句した。

下心が八割を占めている俺の「好意」を、美鈴はその真面目さと優しさ、そして無防備さゆえに、戸惑いつつも、受け取った。

「キャンセル料払うのはもったいないし」

と、美鈴は言い訳じみた事を、頬を赤らめて口にする。

「けど……………旅行って久しぶりだから、……………嬉しい、な」

はにかんだ美鈴の笑顔に良心が僅かに咎めた。が、目的の一つが果たされ、安堵もした。

心の枷をはずして笑う、素直な美鈴の笑顔を見たかった。

「たまには羽をのばして、ゆっくり寛ごう。羽目も、できればはずして、ね？」

美鈴は照れくさそうに肩をすばませ、頷いた。

そうして、今。

幾つかの目的を、ひとつひとつ、消化している。

本当のところ、当初の目的なぞ、とうに失念している俺なのだが。

予想通り、大仰に恥ずかしがって、なかなか露天風呂に近づこうとしなかった美鈴だが、お人好しの彼女にはつけこむ隙がありすぎる。

わざとらしくろっが、しょんぼりと肩を落として背を向ければいい。

それだけで美鈴は、容易く俺の術中に落ちる。分かっている、落ちてくれる。

「維月さんっ、向こうを向いててください。目を瞑っててください。そんなに見つめないください」

恥じらって、可愛らしく文句をつけながら。

無抵抗な美鈴に、俺も抗えない。とめどなく湧き上がってくる恋情を押しとどめられず、美鈴に負荷を与えてしまつと分かっているも、なお。

美鈴を背後から抱きしめ、彼女のほっそりとした肩に額を寄せた。

「……美鈴」

名をささやくと、美鈴は羞恥に身体を縮こまらせ、背後から回された俺の腕をきゅっつと掴み、俯く。

無色透明の温泉は、程よく熱い。さほど広くない湯船に、俺と美鈴は身体を寄せ合って浸かっている。

「今だけでいい……」

さらに美鈴の身体をきつく抱き、肩に口づけてから顔を上げた。美鈴は、とまどいながらも振り返り、上目遣いに俺を見つめる。

俺の視線だけを感じていればいい。俺の声を聞いていればいい。俺の舌だけを味わっていればいい。俺の存在だけを嗅いでいればいい。……俺を受け入れ、過敏なほどに、感じていればいい。

五感全てを、今は俺だけのために使えと、言えば美鈴はどんな反応を示すだろうか。

嘆息し、眉根を寄せた。

「……維月さん？」

眇めた目を、美鈴は不安げに、あるいは怯えたように覗き込んでくる。

初めて俺のマンションに遊びに来た時は、警戒心の欠片もなく、まったり寛ぎきっていた、美鈴。

あの時の美鈴とは別の彼女が、今、ここにいる。

熱い湯気が立ち上る中、のぼせているのは、俺の方だった。

「維月さん、あの、もしかしてのぼせちゃった、とか？」

そうつと、美鈴は手を差し伸べる。俺の頬に手を軽く添え、肩越しに振り返ったまま「大丈夫ですか？」と、繰り返し訊いてくる。

大丈夫なわけではないだろう、と零したくなる。

「……溺れて、のぼせあがってるよ、美鈴にね」

俺の微笑に、美鈴は過敏に反応し、身体を擦らせた。

「いつ、維月さ……っ」

こういう時だけ、美鈴は敏感だ。危険のシグナルが、おそらく美鈴の頭の中で点灯されているだろう。

羽目はずさせようと思っていたが、うっかり立場は逆転した。

それには気づかない美鈴は、俺の腕の中で慌てふためいて、無駄な足掻きを試みせる。

ばしゃばしゃと飛沫が跳ね上がり、湯煙が揺らめいて、視界を白く濁らせる。

熱にうかされ、箍の外れた俺は、当然美鈴を離さない。

「ちよっ、やつ、待つ、維……月さんっ」

艶かしい美鈴の声を、呑み込んで。



湯煙の向こう、雲間から姿を現した上弦の月が、俺と美鈴を覗き見ていた。

落ちかかってくる微かな月光を、晒され、熱った素肌に反射させる。

だが美鈴の目には、月の光の欠片さえ、映させない。

再び月は姿を隠す。

唇の端をきつく結び、声をひそませようとする美鈴を、憐察したのかもれない。

火を点けたのは君。いまさら煙に巻かれたことを自覚した？

彼女が突然、のたまった。

「維月さんって、ドエスですよね！」

確信に満ちた表情をして。

苦笑を返すしかない、彼女……美鈴の断言だ。

そうだよ、と認めれば、「少しは否定してくださいよ」と文句をつけそうだし、そんなことないと否認すれば、「ちよつとは自覚した方がいいと思いますよ」と呆れた顔をするだろう。

真性のサディスト宣告を受けた俺は、返答に窮し、ため息をついた。

「そんな維月さんに」

美鈴はというと、何やら嬉しそうな顔をして、トートバッグからB4ほどの大きさの包みを取り出した。

「これ、あげます」

「……なに？」

俺の誕生日までは、あと数日ある。

どうやら誕生日の贈り物ではなく、

「昨日帰りがけに寄った店にあつて。維月さんによさげだと思って買ってみました」

という、突発的なプレゼントらしい。

受け取り、中身確かめる。

綿のTシャツだった。黒地で、胸元に小さく、そして背面に大きく、白文字のプリントがある。

「……………」

言葉に詰まっても、しかたないだろう。

プリントされている文字はカタカナで一言、『ドエス』。

「維月さんにぴったり」

語尾に星マークかハートマークでも付きそうな、明るく弾んだ声でそう言った美鈴は、俺の微妙で複雑な表情を見、喜んでいた。

「やれやれと、俺は肩を落とす。」

「まあ、どう思われていても構わないけれどね。」

「なるほど。美鈴は俺をエスだと思ってるわけだ？」

「一応、確認をしてみた。」

美鈴は大きく頷いて、付け足した。

「上にドがつくほどの、ですよ？ しかもなんか時々黒っぽいし！」「力いっぱい、主張する。」

「冗談まじりではあるが、本気の方が占める割合は多そうだ。」

「うーん、そっか……」

俺は微苦笑を返す。

それをどう受け取ったのか、美鈴は心配そうに、あるいは怪訝そうに、俺の顔を覗き込んできた。もしかして自覚なかったんですかとでも言いたげな目をして。

俺は軽く息をついてから、反撃に打って出た。

「俺がドエスなら、その俺に付き合える美鈴は、ドエムってことかな？」

「……は？」

美鈴はきょとんと目を丸くし、俺を見つめ返す。

その、初な瞳、無防備な表情

無自覚なのは、美鈴の方だろう。

手を伸ばし、紅潮している美鈴の頬に触れた。

「じゃあ、実践してみようか」

「は、ええっ……？」

美鈴はこういう時、一瞬思考が停止するようだ。反応がワンテンポずれる。

思わず、笑みがこぼれる。

会社にいる時の、淡々として平静な「木崎さん」とは違う、無邪気で多感な少女のような美鈴が愛しくてたまらず、抑制がきかない。

なるほど、たしかに俺は『ドエス』なのかもしれない。

困惑しながらも、僅かな期待を含ませた美鈴の瞳には、抗えない。美鈴の瞳に映っている俺は、さぞ黒く、意地悪く、不敵な表情をしていることだろう。

ならば、美鈴も『ドエム』であるはずだ。俺の『ドエス』心を駆り立てるのは、美鈴だけなのだから。

美鈴はイヤと口で言いながら、いつも、決して俺を拒まない。

「や、ちよつ、維、月さ……っ」

押し倒した時の、うるたえ顔を見るのが楽しみだと言って笑えば、美鈴はどんな反応を示すだろうか。

予想はつくが、それはまた別の機会にとっておこう。

「とりあえずは」

いとも容易く俺の腕の中に囚われた美鈴を間近に見下ろし、ささやいた。

「ドエスってことを実証してみせよう。美鈴の期待に副うようにね」  
「……や、まっ、待……っ」

じたばたと、無駄な抵抗を試みる美鈴だが、その手にも、瞳にも、本気で抗う力はない。

「待てると思う？」

声のトーンを落とし、訊く。

「火を点けたのは美鈴だからね。分かっているとと思うけど？」

美鈴は言葉を詰まらせ、恥じらいに潤んだ瞳を向けてくる。

「ちよつ、あのっ、全然分かりませんけどっ！」

慌てふためく美鈴だが、もう逃げられないことは、さすがに分かっているようだ。

美鈴に関しては、………実証するまでもないかな？

雨のそば降る土曜の夜。

遠く、聴こえてくるのは静かな雨音と木立を揺らす風の音。

そしてすぐ傍で、俺自身が奏でる音が耳をくすぐり、想いを煽る。

それは美鈴の甘く蕩けた啼き声。

俺を、深みに落としてゆく。

君を想う気持ちに迫られて気がくるいそうだなんとかしてくれ神様

まどろんで夢を見ていたが、肌寒さに目を覚ました。

軽く息をつき、窓の外に目をやった。

そろそろ夜明けだ。空が白み始めている。

閉めないままのカーテンの向こう、窓の外に見える空は、雨は上がったもののまだ少し曇っていた。

雨天に戻るか晴天になるか、昨夜は天気予報を見なかったせいで、分からない。

梅雨入りも間近い。今日は曇天模様かもしれない。

髪を手櫛で整えつつ、身体を起こし、そのまま腕を伸ばして部屋の明かりを消した。

普段、電気を点けたまま寝てしまうようなことはない。

彼女が泊まった日だけだ。

彼女 美鈴はいつも、「灯かりを消して」と懇願する。だが俺は「勿体無い」と笑い、当然断る。

そして美鈴は顔を赤らめて、言い返してくるのだ。

「電気点けっぱなしの方が勿体無いですっ」

むろん、照れ隠しだ。わかっている。

勿体無いのは……、と、その先を俺に言わせたいのだろうか。

言えば、また恥ずかしがって怒るだろう。その顔を見るのも、嬉しいのだが。

俺の傍らで眠っている美鈴を、改めて見つめた。

乱れた髪、涙でこごった頬、僅かに開いた口からこぼれる寝息は安らかだ。寝息に合わせ、胸元が上下している。

身体を横に向けて寝入っている美鈴は、組んだ両手を顔のすぐ側に置いてある。離そうにも、離せない両手。……手首を、ネクタイで縛られているせいだ。

解けかかっているネクタイの端を、掴んで少しだけ引いてみた。

美鈴はまだ目覚めない。

痛々しいほどに白い肌が、俺を惑わせる。

夢にまで現れ、俺を誘い燃え立たせた彼女は、はたして今、どんな夢を見ているのだろうか。

うなじにも、肩にも、胸元にも、赤い痕がいくつも残っている。

おそらくは背中にも、そして内腿のきわどい場所にも、それはあるだろう。

やりすぎたかな、と思わないでもない。

だが、一瞬の後悔は、恍惚とした悦楽の熱へと取って代わる。

ふつつつと湧き上がる、嗜虐の衝動。

歯止めがきかなくなりそうで、自分自身が恐ろしかった。

かつて、これほどの熱情を抱いた女はいなかった。

まさかこれほどまでに溺れるとも、思わなかった。

知らず、ため息がこぼれ出る。懊惱ゆえの甘く熱い吐息。

信じてもない神様とやりに救いを求めたくなる。苦しくて胸が

張り裂けそうだ、なんとかしてくれ、と。

それを告白しても、美鈴は半信半疑といった顔を返してくるだろう。

だから、その想いを態度で示すしかないんだよ、美鈴？

はにかみやで、疑りぶかい君のためにね。

過去、付き合っていた女を抱いた時、あるいは一夜限りの関係の女を抱いた時、俺なりの愛を示すため、知る限りの技巧を用い、それなりに情熱を傾けた。淡白だったとは思わない。だが、常にブレーキを踏める状態でいたことは、否めない。

が、今ではどうだ。

アクセルを踏みっぱなしで、減速することを忘れ、ブレーキの存

在すら失念しかけている。

それを知らず、美鈴は拗ねて文句をつけるのだ。

「維月さんばかり余裕で、ずるい」

あまつさえ、「意地悪しないでください」と、上目遣いに俺を見つめて言うのだ。

俺を酔わせ、狂わせ、意地悪にさせるのは美鈴だ。

無邪気で無自覚な美鈴に、どれほど心を掻き乱されている事か。

だからこそ、「仕返し」をしたくなる。美鈴を乱したくなる。

美鈴の手を縛った時の、あの愉悦。

戸惑い、慄き、美鈴は瞳を潤ませた。

「やめて」と哀願しながら、結局美鈴は束縛を解かなかった。

二重三重に巻いたネクタイを、そつとはずした。

きつく結んだつもりはなかったが、やはり手首には縛りつけた痕が残り、鬱血こそしていなかったが、赤くなっていた。

美鈴の手首をそつとさすり、呟いた。

「ごめん」と。

してしまった行為を詫び、続けてしてしまう行為をあらかじめ謝罪しておく。

美鈴が、俺を称したその言葉通りに、もう一度……いや何度でも実践してやるう。

……さあ、次はどんな手で、美鈴を啼かせようか？

はだけたままの美鈴の肩に接吻してから再び横たわり、頬杖をついて美鈴の寝顔を見つめた。

次第に明るくなっていく空を、早起きの鳥達が忙しなく飛び交っている。

鳥達の囀りを遠くに聞きながら、美鈴の「鈴を振るような美しい」啼き声を思い返し、気持ちを昂ぶらせる。



そして、数分後。  
夜とはまた一味違った啼き声を、俺は存分に堪能する。

## ときめかせる君の罪

くだらない、わがままで。  
ひとりごちて、嘲笑した。

ため息が、俺の腕に抱かれ寝入っている美鈴の額にかかる。汗に濡れた髪が、ひどく艶かしい。

白み始めた空を目の端にとらえつつ、美鈴の閉じられた目を見つめ続けている。

睫が長い。涙の痕が眦に残っている。

時折瞼がぴくりと動くが、目を覚ます気配はない。

華奢な肩を指先で搔いてみるが、起きる兆しはまだ見られない。

美鈴は安らいだ寝息をたてて、眠り続けている。

疲れきっているのだろう。

それを思うと、起すにはしのびない。だが、無理やりにも起して、さらに疲れさせてやりたいという悪戯心も湧いてくる。

美鈴の、くせのある柔らかい髪は、撫ぜ、触っていると手に馴染み、気持ちがいい。

美鈴はその「くせ」が好きではないらしく、「くせ」が目立ってくる前に、切ってしまう。

彼女は何かにつけて、そうだ。自分自身を無下に扱い、正視しないところがある。感情もだ。

繊細すぎるのだろう。あるいは、素直すぎるのかもしれない。

そして彼女は、そんな自分自身の感情を 懼れている。

だから、なのだろう。

美鈴の口から今まで一度も漏れたことのない言葉があり、俺は常にその言葉を聞きたいと欲している。

艶かしく喘ぐ声に、ちらりとでもいい、紛れ込ませて呟いてくれ

たなら……。

「イヤ」ではなく、「好い」と。

俺ばかりがそれを云っているのが滑稽にすら思え、つい、美鈴を責めてしまふ。美鈴の心ではなく、身体を。

「俺だけが」

自嘲まじりに、言葉を紡ぐ。

「俺だけが言うのは、不公平だな」

「そ……そんな……なっ」

荒い息の隙間をぬって、美鈴は抗議しようとする。俺を、薄目で覗き見るようにし、泣く。

「そんな……こと言うなんて……維月さん、ズルい……っ」

「ズルのは、美鈴だ」

俺は責め続ける。唇で、指で、……俺の全てで美鈴を追い詰めてゆく。

「不安で、たまらない」

俺の呟きは、少なからず美鈴を動揺させたようだった。

美鈴は目を見開き、俺を見つめ返した。

「……不安なんだよ。本当はイヤなんじゃないかって、ね。美鈴の言葉を、額面通りに受け取るのなら」

「そっ、そんな……っ」

「うん、そんなことないって、それは分かっている。だからこれは、俺の、ただのわがまま」

「……」

美鈴は何か言いたげに、だが、どう応えてよいのか分からないといった風に、黙りこくってしまった。

好き、という告白ならば、彼女は恥じらいつつも、口にしてくれる。

それは、美鈴の素直な感情でもあるが、俺に対しての誠真だからだろう。彼女の心は、俺を想い、恋うてくれている。

が、 身体は。  
それが、不安だった。  
心だけではなく、身体ごと、俺に恋焦がれてほしい。俺が、そうであるように。

浅ましい欲望を美鈴に悟られるのが怖かった。ゆえに、自制はしている。

我ながら、情弱だと思う。

美鈴に去られるのが、不安でたまらない。不安のあまり、美鈴に縋り、甘え、時には縛ってさえいる。

そして、愚かにも「俺ばかりが」と、責めてしまうのだ。

美鈴を、逃げる力をなくさせるほどに激しく責め立て、腕の中に押し込める。

美鈴は泣きながら、必死で俺を受け入れている。そうした時の美鈴の声ほど、俺を心酔させるものはない。

心をかき乱す不安も、その恍惚とした瞬間には、はじけて消える。

起き上がろうと、美鈴の肩を抱いていた腕を、そっと抜き、離そうとした。

「……………」

だが、止められた。美鈴の身体が動き、俺の身体にさらに密着してきたのだ。

目を、覚ましたようだ。いや、あるいは、目を覚ましていたのかもしれない。

「維……月さん」

美鈴は、俺の胸に顔を埋めて言った。手に、力がこもっている。頬の熱さが、肌の奥へ沁みてくる。

再び、美鈴の裸身を包み込むようにして、きつく抱きしめた。

美鈴はためらいを押しやって、半ば唐突に、切り出した。

「維月さん……あの、……よかった、です、あの、……すごく」

「……………」

「気持ち……よかった、です」

俺の顔を見ず、か細い声で、言った。語尾が、硬い。

「ずっと……今も、気持ちいいです」

俺の望んだ言葉を、美鈴はただどしく、口にする。美鈴の心音が、肌を通して響いてくる。身体のほてりが、急速に伝わってくる。

晩夏の朝、ようやく姿を現したばかりの太陽は、室温を上げるほどの効力をもたない。だが、満ち溢れる朝日の美しさは、たとえばうもない。

眩み、とまどう。

まいったな、と、俺は苦笑まじりに嘆息した。

美鈴のこうした言動が計算ずくであるのなら、たやすく白旗を揚げようなことはない。

が、美鈴に計略はない。他愛なく、子供っぽくすらある所作をしてみせるだけだ。

たったそれだけで、美鈴は俺を陥落させる。

「ズルイな、美鈴は」

その眩きは、胸に収めた。言えば美鈴は、拗ねて、言い返してくるだろう。

その表情までもが、俺をときめかせるのだから、たまらない。

だから、仕返しをしたくなる。振り返ちにあうことを、むしろ、望みつつ。

「……………美鈴」

美鈴の乱れた髪を、掻きやった。美鈴の身体が反射的に強張る。

俺は俺の体内の熱を、さらに高める。美鈴の耳元に唇を寄せ、そ

の熱を感染させる。

「美鈴、教えて」

「……っ」

「どこが、よかった？ もっと好くしてあげるから」

「……や……っ」

美鈴は身を竦ませ、小さな声をもらした。

俺をやすやすと溺れさせる美鈴の「罪」に、相応の「罰」を。

美鈴は甘んじて受けるだろう。

心と身体、その全てで。

箍を外してあげようか？

秋の夜長、読書に耽るのも良いが、遊蕩に浸るのも、また一興だろつ。

枷と箍をはずしてやろつ。羞恥という、たわいない枷を。

彼女 木崎美鈴は、どちらかといえば受動的だ。だが、内向的で消極的というわけでもない。適度に社交的で、人当たりも良い。見た目的にも浮ついたところがなく、さっぱりとした清潔感がある。

仕事ぶりは、真面目そのものだ。地味な仕事を地道にこなす。ミスが皆無ということはないが、大きな失敗はしない。良くも悪くも逸脱したところがない。

社内での彼女は、目立つタイプでこそないが、かといって存在感が薄いということもない。

少しばかり依存心が弱く、そのため自分ひとりで抱え込んでしまふところがあるが、それはさしたる欠点ではない。他人に対し不信感があるようでもなく、時と場合によっては人に頼ることもある。

卓抜した能力はないが、堅実な仕事ぶりは好感が持てる。

それが、派遣社員としての「木崎美鈴」の評価だ。むしろ上司視点からの総評だが、若干私情が入っているのは否めない。

彼女は、プライベートでは俺の恋人なのだから。

上司の「僕」ではなく、個人である「俺」から見た彼女 美鈴は、少しだけ違う。

美鈴は、受動的だ。その点に関しては、個人的見地からでも大差ない。美鈴の性格は、「受動的」という輪郭で縁取られている。

事を起すのは大抵俺からで、今のこの状況も、俺から作った。口づけて押し倒し、逃がさぬように美鈴を組み敷いている。

そういう時、美鈴は慌てふためいて、小さく奇声をあげたり、反射的に抵抗したりする。心底嫌がったの抵抗ではなく、羞恥がそうさせるのだろう。

「こっ、心の準備が……っ」

心（と体）の準備をさせてくださいと困り顔で言う美鈴に、「それじゃあ」と準備をする猶予を与えたことがあったが、美鈴にとつては失敗だっただろう。

なかなか準備を完了できない美鈴に焦らされ、煽られ、結局俺は痺れを切らした。その後の“行為”が激しいものになったのは、しごく当然のことだ。

おおよその場合受身の彼女だが、それがかえって、裏目に出る。彼女にとつては。

受動的な彼女は、そういう意味で焦らすのが巧い、ともいえる。

「焦らしてなんかいませんっ」と、彼女は文句をつけるだろうが、焦らされては痺れを切らし、恋情を激しく燃え盛らせている俺としては、苦笑するしかない。

そんな彼女も、時として能動的になる。能動的と言っていいかは微妙なところだが、“好き”という気持ちを、不器用な行動で示してくれることもある。

例えば今、俺の左腕にある時計をはずそうとしているのが、それだ。

「ん……、あれ、はずれない……」

美鈴の指の動きは、ぎこちない。あるいはわざと、ぎこちなく動かしているのかもしれない。

その日の気分で付け替えている腕時計だが、最近では皮製のバンドのものはつけない。皮製に限らないが、取り外しの簡単なベルトタイプのものは避けるようにしている。穴にピンを差し込むタイプのベルトは、さして時間もかからずはずせてしまうため、美鈴は「あ、もうはずれちゃった」と言わんばかりに、物足りなげな顔をするの



だ。バタフライバックルのタイプを好むのは、素早くはずせないからだろう。

そうまでして、美鈴は俺の手に……手首に触れたがる。

何か行動を起こす時、美鈴は理由をつけたがる。彼女はそうして自分の気持ちをごまかしている。ごまかす必要などないというのに、ごまかさねば、どうにも恥ずかしらしい。

俺は忍び笑いを口元に浮かべつつ、美鈴の所作を見守る。

俺の手首を、美鈴はたどたどしく触る。そして指先で血管をなぞるようにして触れる。ずいぶんと官能的な仕草に感じるのは、美鈴の吐息が熱いせいもあるだろう。

くすぐつたいが、心地好い。美鈴なりの“愛撫”なのだろうと思つとさらに気分は高揚してくる。

美鈴は、自ら語るところだが、「腕フェチ」であるらしい。

「腕、というか、手とか手首とか、そのあたりなんですけど……」  
つい触りたくなるのだと、照れくさそうに笑って言った。

腕時計をはずすことが、手首に触るいい口実になっている。そして、腕時計を俺の手首からはずす行為は、意思表示でもあるのだろう。俺が美鈴を抱きたいと思つているのと同じ気持ちだが、彼女にもある。

だから俺は、自分では腕時計をはずさない。そうして美鈴に委ねる。美鈴の好きにさせている。

美鈴が不慣れな手つきで腕時計をはずそうとしている間、俺のうち片方の手は如才なく動いている。ちなみに、口もだ。

美鈴の熱くなっている耳たぶを噛んだり、こめかみにキスしたり、首筋を舐めたり、美鈴の反応を愉しみつつ、緩慢な愛撫を繰り返す。空いているほうの手は、美鈴の腰を支えつつ、撫でることにも余念がない。美鈴は時折身体を擦らせながら、それでも俺の手首にはめられている時計から手を離さない。しげしげと時計の文字盤

を見ることすらあった。

腕時計はやがてはずされる。美鈴がはずし、少し離れたところに置く。置くところまでは、気遣う余裕がないらしい。というよりも、その頃には、俺の手に翻弄され、余裕を奪われている。

俺はようやく解放され、自由になった手を美鈴の後頭部に回した。さらに顔を近づけ、ささやいた。

「……はずそうか？」

「え……？」

美鈴の目が、瞬く。熱っぽい瞳を向けられ、俺は微笑みを返した。

「俺も、はずしてあげようか」

「な、な、に……？」

もちろん、衣服や下着ではない。それらは、美鈴の許可を得もせず、勝手にしている。

美鈴のやわらかい髪は、触れていると気持ちがいい。指の隙間をするりと抜けるときの感触は、快楽を誘うものだ。髪、というより頭皮は、美鈴の感じやすい部分でもある。後頭部を指先でカリカリと搔いてやると、反射的に身を縮こまらせ、眉をひそめる。

美鈴は受け身だ。いつでも身を竦めて、俺を……俺の行動を待っている。

それを、不満とまでは言わないが、物足りないと思うこともある。美鈴が心にかけている、恥じらいという枷をはずしてやりたくはなるのだが、それは腕の中で、時をかければゆるゆるとはずされていく。始めからはずされてはいないというだけで、いつまでもはずれない枷ではない。

そう、外れはする……

俺はため息をつき、美鈴の顔の左横、額を肩に乗せるようにして、落とした。

「維、月さん……？」

「……うん」

「あの、……」

美鈴のとまどいがちな声が、何かを言った。耳元で言った美鈴のそれは、熱い吐息に絡められ、ひどく甘い香りを含ませていた。

美鈴の両腕が、俺の首に巻きついてきた。

ぎゅっと、美鈴の手に力がこもる。体がさらに密着し、お互いの心臓の音が肌から直接伝わって聴こえる。

「……はずして。今度は、維月さんが」

何をと問うまでもない。

だが、外されたのは、俺のほうだ。

箠は外れ、理性は消し飛んだ。

「箠を外してあげようか」などと、墓穴を掘るだけの愚かな誘い文句だ。

受け身でありながら、美鈴はやすやすと俺を攻め落とす。

秋の夜、箠を外し、思う存分浸り、耽る。

長いようで、ひどく短い、相愛を感じあえる喜悅の夜を。

生真面目で優しく、人一倍寂しがり屋の君が好き

我ながら思いきったなと、思う。

コンクリートに白のペンキで書かれた『6』という字を見ながら、嘆息まじりの笑いをこぼした。

そして携帯電話を取り出して、メールを送信する。

送信先は、「高倉維月」さん。会社の上司である高倉主任ではなくて。

ごくごく個人的な内容の、メール文。それなのに、仕事の報告でもするみたいなメール文になっていた。

『アパート近くの月極駐車場に、駐車スペースを契約、確保しました。今夜から、6番に停めてください。木崎美鈴』

週の真ん中の、水曜日。夜の八時に、高倉主任、もとい、……維月さんはやって来た。

今日うちに来る約束なんてしてなかったのに、と、とまどい顔で迎えると、スーツ姿の維月さんはにこりと笑って応えた。

「今夜つて、メールにあつたからね」

「あ、う……それは……っ」

「来てほしいって意味にとつただけど、違つた？」

「うつつ、それは、その……」

返答に詰まり、視線を泳がせた。維月さんは静かに、翳を潜ませた笑顔でわたしを見つめている。

そつえば、『今夜から』って、文字打つてた。

無意識だよ、そんなの。とくに何も考えてなかった……と、思う。

『今夜うちに来てください』なんていう意味をこめたりは……しなかつた。……たぶん、だけど。

「すみません、誤解させるようなこと書いちゃって、あの……」  
「誤解？」

維月さんの甘やかな色を持つ瞳が、ふと沈んだ。

「そう、か。俺の早とちりだったわけだ。迷惑なら、このまま帰るよ？」

ふっとため息をつき、維月さんは玄関のドアノブに添えていた手を離しかけた。

「まっ、待つて！ 維月さん、待つて！ 驚いただけで、迷惑なんてこと、全然ないですからっ！」

冷や汗をかきつつ、わたしは慌てて維月さんを引き止めた。

「そう？ なら、よかった。けど、行くっていう連絡くらいすればよかったな。ごめん」

「……う。や、もう、いいです」

玄関先での攻防戦、わたしはたやすく白旗をあげて、降伏した。だいたい、維月さんの不意打ちや切なげなため息に抗おうなんて、無駄な抵抗以外のなにものでもない。敵いつこないって、顔を見た瞬間に、分かった。

結局、維月さんを追い返すなんてことはせず（できるわけもなく）、部屋にあがってもらった。

維月さんはネクタイを緩め、勝者然と微笑っている。

引越してから、ひと月半。ようやく住み慣れ、自分の居所だという実感を持てるようになったアパートだけど、一人きりである時間が長くなつたせいか、時々、虚無感に襲われることがある。初めての一人暮らしは、気楽だけど、心細い。

そんな心細さを、維月さんはさらりと流し、払ってしまう。強引な維月さんの言動にたじろいでしまうことのほうが多いのだけど、

その強引さは蜂蜜みたいにまるやかで、甘い。維月さんはその強引な甘さでわたしを包み、熱し、蕩かしてくれる。

僅かの間に、維月さんの存在はどんどん膨れ上がって行って、なくてはならないものになってしまっていた。

維月さんの存在に、いったいわたしは、どれほど救われているだろう。

それを考えると、怖くなる。不安になる。いなくなってしまうたら、どうなるんだろうって。

だから必死になって繋ぎとめている。維月さんをひきとめ、とどめようと、小ざかしい手を使う。

甘えきつた欲求を、維月さんは受け入れてくれるだろうか。

薄曇りの今夜は、少し汗ばむほど蒸し暑い。それが、維月の出現のせいで、さらに体感温度が上がった気がする。半そでTシャツに短パンという、ゆるみきつた格好が恥ずかしいせいもある。

それに、やっぱり妙に照れくさかった。

だって、維月さんは嬉しげに笑って、『6』番に車を停めてきたよ、と言っただもの。照れくさくしょうがない。

そ、そりゃあ、維月さんのために用意した駐車スペースなんだけども！

ともあれ、維月さんに寛いでもらおうと、座布団敷いたり、冷蔵庫から麦茶をだしてきたりと、わたしはせかせかと動き回った。

「ところで、美鈴」

「はい？」

維月さんは依然立ったまま、わたしの腕を掴んで足を止めさせた。じわりと、わたしと維月さんの距離が縮まる。

「美鈴は、車を持ってないどころか、免許も持ってないだろう？」

「ええ、まあ」

「駐車場の料金は、俺が払うよ。美鈴が使っわけじゃないんだから」  
当たり前のことだと言わんばかりに、維月さんは言った。だけど

わたしは首を横に振って、維月さんの申し出を断わった。

維月さんは、絶対に割り勘をしない人、というわけではない。食事でも何でも、奢ってくれる率は確かに高いけど、割り勘を拒むようなことはないし、時には奢らせてくれる。いつも、わたしが負担を感じないよう、気遣ってくれている。

「だけど、ううん、だからこそ、たまには負担させてください、と、頼んだ。」

「わたしが勝手に契約したんですから、わたしに払わせてください」  
「だけど、美鈴」

「いいんです」

わたしは頑として言った。

「わたしが払います。これくらいは払わせてください」  
「……………」

維月さんは困ったような顔をし、暫時黙り込んでしまった。

「ど、どうしよう……。もしかして、怒っちゃったのかな。不愉快な気分になせちゃったのかな。」

維月さんはわたしの腕を掴んだまま、離そうとしない。

「だって、ですね！ 路駐はやっぱりよくないと思うんです」

わたしはちよつと腰を引きつつ、いい訳じみたことを口にした。

「路上駐車は違反で、迷惑なことなんだし。それに、駐禁カード貼られて罰金なんてことになったらいやじゃないですか。かといって毎回駅前の有料駐車場じゃ、勿体無いし。あそこの料金、けっこう高いですよ？ 駅前だからしょうがないとは思いますが、週末の夜は割り増し料金になるし。だから、月極の駐車場借りたほうが、安くつくんじゃないかって思ったんです」

「たしかに、ね」

くすつと、維月さんは口角をちよつとあげて笑った。

「だけどやっぱりまだ納得のいかなそうな顔をしている……。気がする。そんな、微妙な笑みだった。」

「あと、それに、維月さんだけじゃなくて、友達にも車持ってる子

いるし、だから、その、維月さんのためだけってわけでは、……な  
くて。ええっと、つまり、維月さんがお金を払うことなんか、なく  
て」

しどろもどろの言い訳は、嘘に変わっていった。

言っに事欠いて、何言っちやっただら、わたし！

維月さんのためじゃないなんて。違う。だってそれじゃあ維月さ  
んを拒んでるみたいに聞こえちゃう。

そんなの本心じゃない。

「わかった」

「え……」

「せっかくの美鈴の好意なんだし、ありがたく受け取るよ」

「そ、そうしてくれると、助かります」

維月さんはクツと喉の奥で笑った。

「美鈴は真面目だね。少し頑固なくらいに」

にこやかに言っ、維月さんはわたしの頭をぼんっと軽く叩いて、  
それからくしゃくしゃと髪を撫でつけた。

維月さんの愁眉はいつの間にかひらいていて、瞳の色は優しくな  
ってた。

「あと、可愛すぎだから」

「……………は？」

わたしは目を瞬かせ、ぼかんとした。

「まいっだな。無自覚に、いろんな手管使ってくれるね、美鈴は」

維月さんは嬉しげに、というより愉しげに笑っている。

「てっ、手管って、なんのことですかっ？」

「甘えてきたかと思えば、つれない態度とって、そのくせ顔を赤く  
しっ」

言い終えないうちに、維月さんはわたしの体を抱きしめてきた。

維月さんのため息が耳にかかって、くすぐりたい。

「まったく、堪らないな。どこまで俺を落とせば気が済む？」

「え、え……っ、あの、すみ、ません」



わけも分からず、けれど何か責められている気がして、とりあえず謝ってみた。

肩をすくめて、おそろおそろ顔をあげた。そこには艶然とした微笑を湛えている顔があつて、色っぽいとしかいいようのない目が、わたしを見つめている。

心臓が、ぎゅうつと、絞られた。痛いほどに鳴っている。脈拍も速まって、頭に血が上る。

「あのっ、ほんとすみませんっ」  
すみません、ほんともう、助けて。

わたしはもうにつきもさつきもいなくなつてた。

維月さんの両腕から逃れようにも、うまく力が入らない。そのうえ脳内がパニック・ルーム化していて、正常に機能してくれない。思考が麻痺しかけてる。

「謝るようなこと、美鈴はしてないだろ？」

「で、でも、維月さん、怒って……」

「怒ってなんかいいよ。そうだな、ちよつと呆れてはいるかな」

「え……」

「さつきも言った。素直になつてくれれば、もっと可愛いと思うけどね」

「や、あの……っ」

なっ、なんですか、この人！？ ホストばりの気障な台詞を、なんでこうあっさり口にできるの？ や、ホストなんて会ったことないから、実際はどんなのが分からないんだけども。

「だけど！ わたしこそ言いたいよ。」

「維月さんは、いったい何度わたしを降伏させれば気が済むの？」

「ずるいよ、わたしばかり負けて。泣きたくなるほど、恋させて。」

「……っ」  
もう、こうなつたら……っ！

わたしは維月さんの背に腕をまわし、ぎゅうつと、抱きつき返した。顔は、胸にうずめ、隠した。そして、羞恥心を投げ捨てた。

「嘘です。ほんとは維月さんのためです。維月さんに会いに来てほしくて、駐車場、契約したんです。だから、無駄にならないように、駐車場、ちゃんと使ってください。もつと、わたしに会いにきてください。こうやって、抱きしめてください」

寂しさを忘れさせてください。不安なんて感じさせないでください。傍にいてください。いさせてください。

縋りついて、まくしたてた。

抑えがきかなくなって、涙まで出てきた。みつともなくて、恥ずかしい。顔があげられない。維月さんを正視できないよ。

わたしの気持ちを察してくれたのかもしれない。

維月さんは覆いかぶさるようにして、わたしを抱きしめた。体が折れそうなくらいに、強く。

維月さんの表情は見えない。だけど、高まる鼓動と熱だけは、素肌を通して痛いくらいに伝わってくる。

「維月さん」

ほっとしたのか、心配になったのか。その両方の思いが、か細い声になって、こぼれ出た。

「うん」

そして維月さんは、わたしの耳朶にそつと口づけた。

その後、維月さんはため息まじりに呟いた。

「まいるね、美鈴には」と、甘さたつぷりの、切なげな声で。

## コーヒー色の瞳に魔法をかけられ

明け方、ふいに目が醒める。

一人寝の時にはありえない早朝の目覚め。

まどろみにたゆたいながら、淡い水色をした空を見、それから視線を落として腕枕をしてくれている人の、めったに見られない寝顔を見つめる。

あれほど身体を濡らした汗は乾き、肌のそこかしこに打たれた細かな熱だけが、うつすらと、ところによってははつきりと、残っている。

ひっそりと嘆息し、肩を僅かに竦めた。

緩急入り混ぜ、息もつかせぬほどの手練手管でわたしを蹂躪したその人は、疲れきった様子で眠ってる。

わたしと違って、夜にコーヒーを飲んでも、眠れなくなるってことがないらしいその人は、昨夜も夕食後にコーヒーを飲んだ。

香りたつ、オトナの味覚の『アイリッシュコーヒー』。

アイリッシュコーヒーは、どちらかといえばコーヒーというよりカクテルに分類されるのだと思う。

コーヒー通というわけでもないみたいだけど、コーヒー好きのその人……高倉維月さんは、わたしにアイリッシュウイスキーと生クリームを加えるホットカクテルの淹れ方を伝授してくれた。

「維月さんのような、味がします」

そう言ったら、維月さんは苦笑してわたしを見つめ返し、

「あまり不用意なことは言わないようにね、美鈴？」

と、窘めた。

維月さんは苦つぽく笑いながら、だけど嬉しげに目元をやわらげていた。

もしかして、酔ったのかもしれない。

アイリッシュコーヒーに、ではなく。

いつも以上にとまどい、焦るほど、悩乱した。記憶がところどころ曖昧で、抜け落ちてすらいる。

盛る焔が風によって勢を増すように、その火に引きつけられ飛び込んでいく羽虫のように、わたしは熱を求め、掻き抱いた。

不安で、怖くて、苦しくて、泣きじゃくった。

いつも、そう。

維月さんは優しいささやきをくれるけど、容赦ない。

満月に怯えつつ狂い、喘ぎながら転身する。そんなわたしを熱っぽい目でとらえ、「もっと」と促してくる。

頬を両手で挟んで、顔を背けさせてくれない。

灯かりを消してほしいという懇願は、声になる前に塞がれてしま

う。  
汗で湿った乱れ髪に鼻を近づけ、「いい香りだ」と笑い、羞恥を煽る。

心と体、すみずみまで支配しようとする維月さんの指先の激しさに翻弄され、わたしはたやすく屈服し、情けなく縋り、慈悲を請うてしまう。

深く繋がり、一つに溶け合う。重なり合った鼓動と呼吸、それを確かめて、維月さんは導いてくれる。

心の奥底に沈め、不器用に隠そうとするわたしの渴きを、維月さんは強引に、こともなげに、掬いあげてくれる。

そして、潤いを与えつつ、宥めてくれるのだ。

「美鈴、大丈夫だから」と、甘やかな声音で。

維月さんはわたしを支配する一方で、解放もしてくれる。

我儂な不安や独りよがりの寂しさを受け止め、そのうえでわたしを見つめてくれる。

だからわたしも見つけられる。

維月さんの双眸に浮かぶ、僅かな惧れを。後悔にも似た、深憂の色を。

吹きつける夜風の音に紛らわせた小さなため息を、肌に感じる。

熱い息と冷めた息。濡れた肌は敏感にそれらを感じ取る。感じ取らせてくれる。

維月さんを、「もっと」と、求めさせてくれる。

それは、維月さんがわたしにかけて『魔法』。

酔いにも似た高揚感が、感じる力を強めてくれる。

蒼穹に響かせるように囁っているのは、雀だろうか。

秋の清澄な明けの空を、小さな影がいくつもいくつも、過ぎっていく。

日曜の朝は、いつも気だるい。身体は重く、忙しなく飛び交っている雀のように、動けない。

もうすぐ、わたしが起きていることを察し、維月さんも重たげに瞼を上げる。

濃く淹れたコーヒー色をした瞳が、露わになる。

そして笑いかけてくれるだろう。悩ましげな瞳をわたしに向け、とびきり甘く。

そうしてわたしはまた、コーヒ―色をした『魔法』にかかる。

不安も我俣も受け止めてくれるから、つい甘えなくなる

わたしだけに。わたしだけを。

子供っぽい独占欲だと分かっているても、止められない。苦しくなるほどに。

辛うじて抑えこんでいる感情だから、我慢しきれなくなることが怖い。歯止めがきかなくなりそうで……。情けなくて、恥ずかしい。懼れが拭えない。

わがママを言っつて、泣き、縋る。そうやって彼を困らせてしまうことが辛くて、嫌で……。それなのに、甘えきってしまう。

わたしを抱きしめてくれる彼の腕が離れてしまわないことを、願いながら。

終業時間は十八時。時間内に仕事を終えられることがほとんどだけど、たまに残業を依頼されることがある。

わたし達派遣社員の場合、残業は強制ではないから、断ることもできる。

用事があるうがなかるうがきっぱり断る子達もいるし、特別な用事がない限り諾々と引き受ける子達もいて、わたしはどちらかといえば、後者。そう度々あることではないから、おおよそは承諾し、二時間前後、残業していく。

今日も、そう。

久しぶりに残業を依頼され、ちょっとだけ「どうしようか」と考えたけど、結局、承諾した。

高倉主任から個人的に頼まれた、なんてことは決してなく！あくまで、上司の依頼を気軽に受けただけのこと。

特定の人に対する個人的な感情は、会社にいる時はなるべく出さないよう、心がけてる。思いを顔に出さないよう、気を引き締めてる。高倉主任のこと目で追わないよう、見つめないよう、必死で堪えてる。

上手く出来ているかどうかは、我ながら微妙だけど。

今日の残業に残った派遣社員はけっこう多くて、先輩の浅田さんもむろんいる。珍しい顔ぶれもあって、わたしと同期で同年の桃井さんも、残ってた。

「桃井さんが残業なんて珍しいこともあるもんだね」

浅田さんがちよっぴり皮肉を込めて言うと、桃井さんは、  
「最近ちよつとヒマなんでえ」

と、鼻にかかった甘ったるい声で応えた。浅田さんと桃井さんは、どうにもウマが合わないらしく、敬遠こそしてないけど、二人がお喋りに興じることはめったにない。

一方で、わたしと桃井さんは、ほぼ同時期に入社したということもあってそれなりに親しくつきあっているけど、仲が良いというほどの間柄じゃない。他愛ないお喋りの相手にはなるけど、その程度。今日の桃井さんはいつも以上に饒舌だ。聞くところによると、近頃彼氏と別れたらしく、「寂しいんだよね」という心境でいるらしい。そういうわりに、ケロリと笑っている。無理して明るく振舞っているのかもしれないけれど……わたしが目が伏し穴なのか、そういう風には見えない。

そんな、失恋して傷心を抱えている(らしい)桃井さんが、終業間際、唐突に訊いてきた。

「ね、木崎さん、今週の土曜、空いてない？」

桃井さんはバレッタでひとつに束ねていたライトブラウンの髪を解きつつ、わたしの顔を窺ってきた。

桃井さんは人をじっと見つめる癖がある。アイメイクが濃いせい



か、目の力にたじろいでもって、話しかけられても、いつも返答が遅れてしまう。

「ね、土曜なんだけど？」

「土曜って、あさっての？」

「そうそう。あさってさあ、コンパがあるんだけど女子があと一人、足りないんだよね。で、木崎さん、予定ないんなら、来ない？」

「……………」

考えるふりをして、わたしは室内を見回し、高倉主任の姿を探した。

さつき事務長と出て行ったつきりで、戻ってきてないようだ。

ちよつとほつとして、桃井さんに応えた。

「ごめん、土曜日は予定入ってるから」

「そうなのお？ 夜まで？」

わたしは頷いた。桃井さんはむっつと口を尖らせつつも、言葉を継いだ。

「あー、もしかして彼氏とデート、とか？」

明らかに、わたしが「そんなんじゃない」と答えることを予想しての、桃井さんの物言いだった。

桃井さんに対抗意識を持つてるわけじゃない（と、思う）けど、少しばかり驚かせてやりたいって衝動に駆られた。

だから、

「うん、実は……………」

と、気恥ずかしさを抑えて、答えた。

桃井さんは思っていた通りの反応をしめしてくれた。

「えええっ、うっそ、マジッ?!」

大袈裟な驚きっぷりを見せてくれる桃井さんに、わたしは苦笑を返していた。

そこまで驚かなくても……………と思う一方で、やっぱり驚くだろうし、もしかしてシヨックだったかな、とも、思った。

「けどさ、木崎さん、ちょっと前まで彼氏なんていないとか言っ  
てなかった？」

「うん、……ちょっと前までは、いなかった」

「うーわあ、そうなんだあ……そうかあ……」

桃井さんは眉間に皺を寄せたり、口を尖らせたり、どうやら心中  
穏やかではないようだ。

相手はどんな人なのかとか、どこでどう知り合って付き合いだし  
たのかとか、桃井さんは、こと恋愛話に関しては根掘り葉掘り訊き  
たがる性質なんだけど、今はその余裕もないみたい。

桃井さんは以前、

「木崎さんって、高倉主任に気があるの？」

と、面白半分、興味半分といった具合に、訊いてきたことがある。  
桃井さんは、女特有の鋭い勘を持つてる人だから、あれこれ訊か  
れたら、わたしと高倉主任のこと、感づかれてしまいかねない。

高倉主任に、唐突に、出し抜けに、けれどどこか心の奥で期待し  
ていたのかもしれない告白をされて、もう三ヶ月が経つ。

今、わたしと高倉主任は、ただの「上司と部下」という関係では  
なくなってる。

よく一緒に飲みに行った浅田さんにも、わたし達のこととはまだ  
話していない。浅田さんにだけは、いずれ折を見て話すつもりでい  
る。

だけど、できれば桃井さんには知られなくなかった。

桃井さんは、悪気はないんだって分かってるけど、口の軽いとこ  
ろがある。「誰にも言わないで」と頼めば頼むほど、秘密を漏らし  
てしまいそうで、正直信用できない。

別に「不倫」ってわけじゃないんだから誰に知られたって不都合  
なことはないんだけど、やっぱり、困る。高倉主任に迷惑をかけて  
しまうのは、嫌だから。

だから、桃井さんに「彼氏」のことを追及されなくて、ほっとし  
た。ごまかしきれない自分を知ってるくせ、つい「彼氏ができた」

なんて言ってしまったって、内心焦ってた。

安堵のため息をつき、胸を撫で下ろしていた……………っというのに！

「あ、高倉主に〜ん！」

どうしてタイミングを見計らったように現れるんですか、高倉主任！？

それに、どうして桃井さんも手招きして、高倉主任をこちらへ来させるの？

空調のきいた涼しい部屋だというのに、全身が焦げつくように熱くなり、こめかみにじっとり汗が滲んだ。

「何、桃井さん？」

人当たりのいい気さくな高倉主任は、訝しげな顔もせず、歩み寄ってきた。

白い長袖のワイシャツとびしっと糊のきいたスラックス姿の高倉主任は、片手でサックスブルーのネクタイを緩めて軽く息をつき、穏やかな微笑を浮かべた。

もう片方の手にはホットコーヒーの入った紙コップがあって、そこから苦いような甘いような香りが立ち上っている。

「いいところに、高倉主任！」

桃井さんは瞳をパチパチと上下させ、にっこりと笑った。

爪楊枝が二、三本乗りそうなくらい、たっぷり黒々と施されたマスカラの下の瞳が、勝負を挑むように光っている。媚びているように見えるのは、きつとわたしの偏見だ。

……………今わたし、きつと厭いやな顔してる。すごくイヤな「女」の顔してる……………。

それを少しでも隠そうと、切りすぎた前髪を指先でつまんで、引っ張った。その指の隙間から、ちらりと桃井さんと高倉主任の顔を窺った。

「いいところって？」

「高倉主任、今あたし、彼氏絶賛募集中なんですよお。なあんでっ

！ コンパしましょうよ、コンパ！」

「コンパ？」

高倉主任は、少し困った顔をして訊き返した。

「そーですよ、コンパコンパ！ 人集めてセツティングしてくださいよ！ もうこの際社内のヤツラでもいいから、人数集まりませんか？」

「うーん、そうだなあ……」

高倉主任は可とも不可ともつかない曖昧な笑顔で言葉を濁している。

あえて、だと思っけれど、わたしの方に視線を流さずにいる。

「高倉主任もチャンスだと思って、気合い入れてくださいよ！ あたしもできるだけ女の子集めますから、パーツとやりましょうよ、パーツと！ 新たな出会いを求めてっ！」

「あ、あの、わたしっ！」

耐えきれず、わたしは椅子を倒さんほどの勢いで立ち上がった。

椅子の足が床をこする不快な音が、わたしの上擦った声に重なった。

「ごめん、桃井さん」

「……………」

盛り上がっているところにいきなり水を差されたのが癪に障ったのか、桃井さんはムツと眉をしかめてわたしを睨みつけた。

けれど、桃井さんの不機嫌顔をことさらに無視して、わたしはさつさとデスク周りを片付けた。

「もう終業時間だし、わたし、帰るね。それじゃ、高倉主任、桃井さん、お先に失礼しますっ」

向けられた視線を断ち切るようにして、わたしは二人の側から逃げ出した。

場の空気を白けさせたわたしの態度は、桃井さんを不愉快に、そして不可解な気分にしただろう。

それに、高倉主任まで嫌な気分になせちゃったかと思うと、気分はさらに沈下し、自分の不甲斐なさが腹立たしくすらあった。

あんな態度とつちやうなんて、サイアクだ、わたし……。

凹み、うな垂れて、のっそりとロッカールームから出、ため息をついた、その時だった。

「木崎さん」

と、背後から呼び止められ、飛び上がるほどに驚いた。

低いけれど、柔らかな声音。振り返ると、そこには両腕を組んで高倉主任がいた。

「木崎さん、ちよつと頼み事があるんだけど」

「あの……頼み事、ですか？」

「そつ」

淡々とした短い言葉の中に、怒気が含まれている様子はない。だけど、強い吸引力を持つ瞳がわたしをとらえて、視線を逸らすことすら、赦してくれない。

「こつち。ついてきて、木崎さん」

「あ、あの、わたし……」

「こつち」

高倉主任は顎をしゃくってわたしを促し、踵を返して歩き出した。高倉主任はわたしの手を掴むでもなく、先に立って、すたすたと廊下を歩いてゆく。

わたしがついてこないなんて、まったく考えてないようだった。実際わたしは見えない紐で牽引されてるかのようになり、小走りになって、高倉主任の後を追いかけている。

上の階と下の階からはやや活気の衰えたざわめきが聞こえてくる。けれど、今わたしと高倉主任がいる階に人気はなく、二人分の足音だけが空気を揺らし、夜の静けさを際立たせていた。

高倉主任は一言も発しない。黙ったまま、わたしの方に振り返り

もしない。「高倉主任」と、恐る恐る声をかけても、応えてくれなかった。

どうしよう……。きつと、怒ってるんだ、さっきのこと。

気まずい雰囲気を作ったまま逃げ出したんだもの、呆れられても、怒られても、当然だ。

でも、でも……！

「……………」

ふと、窓ガラスに映った自分の顔が目に入り、足を止めた。

夜闇とネオンとを背面にした窓ガラスに、わたしが映ってる。光がチラチラ揺れているようにわたしの目も不安に揺れ、その黒目に自分を映した。

中途半端に伸びた癖のある髪は、あちらこちらで毛先が跳ねてる。眉間に不自然な力みがあつて、泣き出す寸前といった顔をしてる。

正視に堪えないほど酷い表情（かお。きつと、さっきもこんな顔してたんだ。

「木崎さん」

名を呼ばれ、はつとして顔を上げた。

けれど、その時にはわたしの前に高倉主任の姿はなく、ただ声だけが、曲がり角の向こうから聞こえてきた。「木崎さん、こつち」と。

わたしは声のするほうへ駆け、角を曲がった。

曲がりしなに、いきなり、だった。

「捕まえた」

腕をつかまれ、腰を引き寄せられ、逃げる間もなく、高倉主任に抱きしめられてしまった。

「えっ、や……っ」

「逃げられないよ、美鈴。観念して」

悪戯っぽく言つて、高倉主任はわたしの体を拘束した。

「や……っ、ちよっ、しゅ……にっ」

もがいても、高倉主任は腕を放してくれない。

驚きと焦りで、全身が熱くなる。心臓が破れそうなくらいに胸が鳴りだして、息が、……苦しい！

「や、だ……っ、だめです、しゅに……っ、こ、こんなところでっこんなところを誰から見られたら、という不安ももちろん頭を掠めたけど、今はそれよりも、高倉主任の激しい抱擁に溺れていきそうなのが、怖かった。震える程に怖くて、わたしの口から出るのは、拒絶の言葉ばかりだ。

「や……っ、お願いっ、お願いです、放してください！ 放してっわたしの懇願を、高倉主任は聞き入れてくれない。わたしの背に回した両腕の力を緩めてくれない。

「美鈴」と、耳元でささやいて、さらにわたしの身体を熱<sup>ほて</sup>らせる。

苦しいよ、高倉主任……っ！

高倉主任の腕の中で、溺れて、死にそう……！

「だめだよ、美鈴」

ふいに、高倉主任の腕が少しだけ緩んだ。

「そんな顔をさせたまま、帰せない」

高倉主任は射し込むようにわたしを見つめる。

その眼力は香りの強いリキュール入りのコーヒーみたいに、わたしの目を覚まし、かつ、酔わせる。

「……………」

唇を噛んで、俯いた。

やっぱり、怒らせちゃったのかも。

フォローのしようのない、感じの悪い態度をとっちゃったんだから、怒って、あたりまえだ。

でも……でも、聞きたくなかった。あの場に居たくなかった。

子供っぽい我侷だって分かってるけど、でも……

「桃井さんに、コンパのことは別のヤツに話を持ってくよう、言うておいた」

「え？」

「俺は、参加する必要もないしね」

顔を上げるとそこには、『高倉主任』ではなく、『維月さん』の顔があった。

「他もまあ、適当にごまかしておいたから。……桃井さんのことは、気にしないでいいよ」

「……っ」

や、やだっ、泣きそう……っ！

ただでさえ酷い顔してるのに、この上泣き顔まで見られたくない。それなのに高倉主任はわたしの頬に片手を添え、俯かせてもくれない。

「や……っ、顔、見ないで」

喉と鼻の奥が痛くて、涙が眦に滲んだ。

「今すぐく、嫌な……変な顔してるからっ」

「変な？」

高倉主任は小さく笑った。

「底意地の悪い、嫌な顔してるって、自分でも分かってるんです。だって、わたし……」

声が詰まって、言葉を継いでいけない。

「わ、たし……」

さつきまで、やきもち焼いて、苛々して、情けなくなっただけで落ち込んだのに、高倉主任の言葉を聞いて泣きそうになるほど嬉しいなんて、ゲンキンすぎる。

高倉主任は微笑したまま、わたしを深く見つめてる。そうして、わたしの心を引き出し、受け止めてくれる。

高倉主任……うっん、維月さんだ。わたしの想いを包み込むようにして抱きしめ、支えてくれるのは。

「だから、その……、維月さん、……ごめんなさい」

わたしは維月さんの洞察力に甘えてばかりだ。

「ほんとにごめんなさい」

繰り返して言うと、維月さんは目を細めて、口元をほころばせた。「美鈴、それは俺の台詞だ」



「え？」

維月さんはわたしの顎を指先に乗せ、何気ない口調で、言った。

「妬いてる美鈴の顔を見て嬉しいなんて言ったら、怒る？」

凝り固まってたわたしの心を解きほぐすよう、甘やかに笑って。

想いが、堰を切って溢れ出す。流され、溺れ、呼吸が止まりそうになる。

維月さんは、不安にたゆたうわたしに手を差し伸べてくれる。

そうして、したり顔で言うのだ。

「人工呼吸なら、いくらでも」

わたしを溺れさせておいて、抜け目なく。

社内では見れない顔を独り占めしたくて

俺だけに。俺だけを。

彼女に対して抱く、子供っぽい独占欲と嫉妬心に、苦笑いがこぼれる。

当たり前前の感情なのかもしれないが、ひどく、強い。胸が焼けそうなほどに。

辛うじて抑えこんでいる感情だが、我慢は長続きしない。長続きをさせようとする気がないのだから、我ながら始末に終えないと思う。

惧れがないわけではない。

束縛は、彼女を怯えさせるだろう。彼女を戸惑わせ、泣かせてしまっ。

それでも、吐露せずにはいられない。胸をひしめかせている想いを。

彼女が俺の腕の中から逃げ出さないことを願いながら。

昼の休憩時間、昼食を済ませた社員達は、だいたい好き勝手に行動している。

休憩時間だということにもかかわらず溜まった仕事と格闘しているヤツもいれば、デスクに突っ伏して一寝入りしているヤツもいる。真剣な顔をして新聞や雑誌を広げている子達もいるし、一つ処に固まって談笑しているグループもいる。

勤務中とは違う顔が、そこかしこで見られる時間帯だ。

食堂から職務を行なう部屋に戻ると、ついいつもの癖で、『木崎美鈴』の姿を探してしまう。

派遣社員で、俺より七つ年下の木崎さんは、会社においては俺の部下だ。

彼女は、社内ではさほど目立つ存在ではない。仕事ぶりは丁寧で実直、おおよその事はそつなくこなせる。主任の立場として木崎さんを評価するなら、「目立たないが、確実な仕事をする、真面目で無難な派遣社員」といったところだ。

だがその評価は、あくまでも主任という立場から見たものだ。

俺の目で見る彼女は、少し違う。いや、大いに違う。

その彼女は、先輩であり、かつ飲み仲間である派遣社員の浅田さんと一緒にいた。二人は椅子を向かい合わせて座り、レトロな遊びに興じていた。

「懐かしいことしてるね？」

俺が声をかけると、木崎さんは驚いたらしい。肩をびくりとあげて、振り返った。切りそろえられた前髪の下、そこにあるのは派遣社員の木崎さんの瞳ではなく、とまどいがちな美鈴の瞳だった。

応えたのは浅田さんだ。八重歯を見せて笑い、

「今ね、懐かしの昭和遊びの話題になってさあ。や、あたしもそんな詳しくはないんだけど、これは得意だからってことで」

浅田さんは赤色の紐を両手の親指と小指にひっかけたまま、腕を上げた。

「それを木崎さんに伝授してるってわけ」

木崎さんと浅田さんが興じていたのは、あやとりだ。

「む、難しいです。全然憶えられなくて……」

木崎さんはわずかに頬を紅潮させ、慌てて俺から視線をはずした。彼女は、社内ではなるべく俺と顔を合わせないようにしている。

かといってあからさまに避けることはしない。懸命に、「いつもどおり」を装っている。

ぎこちない彼女の所作は微笑ましく、たまらなく可愛い。その思いが顔に出そうになって、慌てて引っ込めた。

俺はむろん、一線を敷いた態度で接している。彼女がそうしてい

るように、「いつもどおり」「かつ、「今までどおり」の「僕」でいる。

「秘密の関係」は、かれこれ三ヶ月以上続いている。浅田さんにもまだ明かしていない。社内での僕と木崎さんは、あくまで『上司』と『部下』だ。

「木崎さんは、あやとりしたことない？ ていうか、もしかして初めて見るとか？」

俺が訊くと、木崎さんは浅田さんの手元を見つつ、「そんなことはないですけど」と応えた。

浅田さんは指を動かしながら俺を睨みつけ、

「あのね、高倉くん。人をいかにもオバチャン扱いしないでくれる？ 四捨五入すれば同じ三十でしょ？ ホレ、これとって」

と、相変わらずの強引さで言って、あやとりをこちらに差し出ししてきた。

「え、高倉主任、できるんですか？」

俺が親指と人差し指で赤い紐をつまむのを見て、木崎さんは驚いたように顔を上げた。

「うん、まあね」

ひょいっと、紐をひっぱり交差して形を整え、『川』の形をつくった。

「高倉くんくらいだよ、あたしに対抗できるの」

今度は浅田さんが俺の手から紐を取る。その様子を、木崎さんは目を見開いて見つめている。

浅田さんの手に移った紐の形は、『橋』。そこからまた俺が取り、今度は『たすき』だ。

「わあ……っ」

木崎さんは、どうなってますかー、と、素直に驚きの声をあげる。

「浅田さんも高倉主任も、器用なんですね。わたし不器用なんで、ちっとも憶えられないんですけど」

「これくらいはすぐできるんじゃない？ 僕も、すぐに憶えたから俺は紐を一旦はずし、伸ばした。

それから両手の親指と小指に紐を引つ掛けそこで一卷きさせた。同じ手の中指で紐をとり、その後親指と小指の紐をはずし、

「ほら、ゴム」

手を近づけたり離したりして、紐を伸び縮みさせて見せた。

「わっ、ほんと」

木崎さんは、幼児が手品でも見せられたような喜色を顔に浮かべ、あやとりに見入っている。

「やってみる？」

紐をはずし、それを木崎さんに渡した。木崎さんはちよつとためらいつつも紐を親指と小指にひっかけける。

「……あれ？ ……ん、と、どうでしたっけ？」

それからすぐに小首を傾げ、甘えたような声音と瞳をこちらに向けてきた。

それは、布でも被せて隠してしまいたくなる、「美鈴」の顔だ。

横から、浅田さんが説明に入った。

「ほら、中指でこの紐をすくってひっかけて」

「こ、こう？ あ、あれ、えー……っど……？」

仕事の手際はいい木崎さんだけど、どうやら手先は不器用らしい。

「えーっど……」と唸り、「ちよつと待ってください。紐が、絡まっちゃった」と焦り、結局、「もうわかんなくなっちゃったんですけどっ」と、早々に脱落した。

俺は含み笑いをしつつ、木崎さんの手から紐を取った。

「けっこう憶えてるもんだな。ずいぶん久しぶりにやったけど」

言いながら、紐を左手の指にかけていく。

「高倉主任、あやとりなんてどこで憶えたんですか？」

俺の指を目で追いながら、木崎さんが尋ねてきた。

「祖母からしこまれたんだよ。暇つぶしの相手にされてたっていうのが正しいかな。折り紙も教えてもらったしね」

「そうそう、高倉くんってさ、いろいろ折れるんだよね。船とか鳥とか亀とか蝶とか。箱も何種類か作ってよねえ？ 折り紙なんて、あたしは鶴と兜くらいしか作れないよ」

浅田さんが言うのと、木崎さんはさらに驚き顔し、感心しきって、「すごいなあ」と繰り返した。

「わたしなんて、鶴も……折れないかも。なんとなくこうだったかなあって記憶はあるんだけど」

「木崎さんって指細いから器用なのかと思ってたけど、案外ぶきつちよだったんだねえ」

「もう、かなりのぶきつちよですよ」

浅田さんが笑い、木崎さんも笑った。

こんな風は無防備な笑顔は、社内ではめったに見られない。木崎さんは平素、気を張ったような硬さがあり、愛想笑いこそすれ、相好をくずしきるといことがない。

ところが、時折こうして、少女っぽい笑みや仕草を見せるのだ。いつもの木崎さんとは違う木崎さんが、現れる。

俺はため息をつき、それから腰をかがめて木崎さんの前に手を差し出した。

「はい、これ」

「……これ？」

「紐、引っ張ってみて」

「はい？」

言われるまま、木崎さんは紐をつまみ、そうつと引っ張った。もつと一気に引っ張ってと促すと、頷いて、ぐつと引っ張った。すると、

「わっ、わわっ」

木崎さんは思ったとおりの反応を示してくれた。

するつと抜けて外れた紐と俺とを見やっつては、目をぱちくりさせている。

「ど、どうなってますかっ、これっ？」

「どうなってるんでしょうね？」

俺が小さく笑うと、木崎さんの頬がぱつと赤くなった。膨らんでいた花の蕾がふわりと咲いたような初々しい表情が、まぶしい。

マズいな。

だめだよと、言いそうになった。

そんな顔を、いきなり見せないでくれ、と。

「そろそろ休憩時間終わるね」

俺は半ば唐突に、木崎さんと浅田さんの側から離れた。

秘密を保つことなど、この状態ではできそうもない。恋慕が溢れて、顔に浮かび上がっているだろう。

我慢しきれるものではない。

俺はため息をついた後、胸のポケットに入っている携帯電話を取り出しつつ、去り際一度だけ、木崎さんの方に振り返った。

木崎さんは目を瞬かせながら、俺を見つめていた。戸惑いがちな色がそこにあり、俺が携帯電話をチラリと見せると、慌てて俯いた。

休憩時間終了、あと三分。

こういう時、メールは便利だ。

「タネを知りたかったから、今夜、うちに」

たったそれだけの文。強引な誘いをかけた。

そして数秒後、メールが返ってきた。

大急ぎで送信したらしいことが分かる一文。

「はい。お願いします」

生真面目な彼女らしい短い文に、微苦笑がこぼれた。

こちらこそ、願いたいものだ。

君を独り占めさせてくれ、と。

紐を伸ばし、操り、形を作つてゆく。

不器用に指を動かす美鈴は、時折俺の顔を窺う。甘え、ねだる少女の表情で。

「あの、維月さん……？」

俺はおそらく眉をひそめていたのだろう。

美鈴の瞳が不安げに揺れている。それでいて、あやとりの続きをせがむ子供っぽい無邪気さも、その瞳にはある。上目遣いで俺を見、目を瞬かせる。

「続きは、こつ」

美鈴の指に巻きついている紐を抜き取った。と同時に、強引に抱き寄せ、角度をつけて激しく口づけた。

不器用で無防備で、無抵抗の美鈴。

白い指に、赤い紐を絡めていった。引っ張ればするりと解ける巻き方で。

美鈴の指を絡める、一時の束縛。

そうしておいてからすぐに美鈴自身をも、解いてゆく。



ずっと分からないままでもいいのかもしれない（前書き）

ちよっぴり下世話な内容となっていますので、ご注意ください。

ずっと分からないままでいいのかもしれない

彼女　木崎美鈴は、何かにつけて理由をつけたがる。

たとえば、「ただ、会いたい」という理由では、俺に会いに来ない。「ただなんとなく声を聞きたかったから」と言っつて、電話をしなくてもいいのは、稀にある。だが、「会いたい」とは言わない。言えないでいるのだろう。

大抵、会う約束を取り付けるのは、俺からだ。俺から会いにいき、あるいは招く。

少しばかり、もどかしくも感じる。

だが、彼女の不器用な生真面目さは無防備さに繋がり、もどかささえ、恋慕を募らせる一端になる。

それを、彼女は知らない。

彼女は自分自身に関し、無知すぎるくらいがある。自分自身を軽視しているといつていい。

彼女は自分自身を知らなさ過ぎる。

その無知さは、ついている隙でもあり同時に、彼女の最大の武器でもある。つけいった瞬間に振り落とされる彼女の無自覚な「武器」の威力は、絶大だ。

そんな彼女が、俺を誘った。やはり彼女らしく、理由を付けて。

「スペアリブのトマト煮込みを作ったんです。食べに来ませんか？」という、そっけないとも言えるメール文を、作った料理の写真を添付して送信してきたのは、金曜の夜。

先に退社する美鈴からのメールの件名はいつも、「お疲れさま」だ。帰宅途中ではなく、アパートに到着してから、送信してくる。「ただいま」を言うように、メールは届く。

今日のメール、件名はいつもどおり「お疲れさま」だが、写メを

送ってくるのは珍しい。食事の「お誘い」も。

「維月さんにはいつも奢ってもらってばかりだから」

そのお礼だと美鈴は言う。だが、お礼だけが理由ではないだろう。手料理は、いい口実になる。美鈴にも、俺にも。

断わるはずもなく、俺は仕事先から美鈴のアパートへ直行した。

「最近、料理をするのがけっこう楽しくて。今、レパトリー絶賛増やし中なんです」

失敗も多いんですけど、と、美鈴は照れくさそうに笑う。

テーブルに並べられた料理は、実に色とりどりだ。スペアリブのトマト煮込み、胡麻味噌ドレッシングのかかった糸こんにゃくとキウリとじゃこのサラダ、ツナとキャベツともやしの入った春巻き。酒の肴にと、なすびと湯葉の白和え、エビのアボガドソース和えも用意された。

どれも簡単に作れるものだと言った美鈴は言うが、時間はかかっただろう。デザートには紅茶のプリンまで出るというのだから、豪華絢爛だ。

美味いと褒めれば、美鈴は心底嬉しそうな顔をし、「よかった」と胸を撫で下ろす。

失敗することも多いと言う美鈴だが、今のところ失敗した料理を出されたことはない。そういった料理は、おそらく美鈴の胃に隠されてしまうのだろう。

そんな美鈴だが、時には意地悪をして、ピーマンのどっさり入った野菜炒めを出してくる。

「あゝ、維月さん、またピーマン除けて！ 好き嫌いはよくないですよ？」

そう言って、美鈴は俺を窘める。ちよつとからかうような顔をして。結局除けられたピーマンの山は、美鈴が食べてくれるのだが。

「もう、しょうがないなあ」

と、なにやら満足そうな顔をして。

今日の料理には、ピーマンは使用されてない。同じように苦手なパプリカも。

おかげで、美鈴の手料理を十分に堪能できた。

出された料理を平らげた後、洗い物に立った美鈴に、「手伝おうか」と声をかけたが、いつものごとく、断わられた。美鈴は、ブランドーの瓶と氷とグラスを、酒の肴の和え物と一緒にお盆に乗せ、テーブルに置く。こういう時の美鈴は、実に手際がいい。

美鈴は、さり気ない。

俺が車で来ていることを知っていて、酒を出してくる。そうして帰れなくなる理由を用意してくれるのだ。

キッチンに立つ美鈴は、いつになくご機嫌な様子だ。料理が上手くできたことも、笑顔の要因のひとつだろう。

美鈴は、胸元に小さなロゴの入った白いTシャツと黒のカプリパント、その上からモスグリーンとベージュのストライプのエプロンを着用している。飾り気のない、シンプルなスタイルを好む彼女らしい格好だ。肩につくかつかないかの髪は、首の付け根辺りで無造作にまとめている。

美鈴のすらりと伸びた二の腕や、形よく並んでいる程よい大きさの胸、そしてきゅっと締まった細い足首は、じっくりと観賞するに価するものだ。

テレビの、さして面白くもないバラエティー番組を見ているより、ずっと目の保養になる。が、あまり見つめすぎると、美鈴は苦情を申し立ててくる。

「あまりそう、じっと……見ないで、維月さんっ！ ものすごく居たたまれないんですけどっ！」

美鈴は、人に見られている、ということに酷く敏感だ。たとえ好意的な感情からくる視線であっても、彼女自身はそれを感じない。

ただ「見られている」ということだけに反応し、萎縮してしまう。じっくり眺めていたのはやまやまだったが、美鈴を困らせないため、視線をはずした。じっくり観賞するのは、後の楽しみにとっておこう。

視線をはずしたものの、テレビを見る気にはなれず、何とはなしに目に入った女性向けのファッション雑誌を手にとった。

どうやら定期購読している雑誌のようだ。藤製のラックには、先月と先々月分が立てかけられていた。

女性向けの雑誌には、存外下世話な内容の記事もある。むろん、ゴシップ系の週刊雑誌に比べれば、一読の価値はある内容で、それなりに、役に立つ。

そして役立つ情報として受け止めるか否かは、読者側の裁量になるのだろう。

得た情報を利用するか否か、それもまた自由であるように。

手に取った雑誌のメイン記事は流行のファッションについてだ。着こなしや、メイクアップ術などがページの大半を占めている。その他、人気モデルやタレントのインタビューやエッセイ、占いのページ、簡単料理のレシピなど、実にバラエティーに富んでいる。

月替わりの特集記事は、女性雑誌ならではの記事といえる。呆れるほど率直な内容だ。

今月の特集記事はなかなか興味深い。記事に関連したアンケート結果やコメントが、イラスト付きで載っている。

……これを、美鈴も読んだのだろうか？

「維月さん、さつきから何を真剣に読んでるんですか？」

洗い物を終え、キッチンから戻った美鈴が腰をかがめ、俺の顔を覗き込んできた。

「ん、これをね」

口の片端が、つい上がる。

目を細めて、美鈴に笑いかけた。

「この記事。なるほどねと思って」

「……………」

美鈴は小首を傾げて、俺が指差した記事を見、瞬間、

「うっ!？」

と、声を詰まらせた。そして大慌てで、俺の手から雑誌を奪おうとする。むろん、そう容易くは奪わせない。

俺の横にぺたんと腰をおろし、…………というより、腰が抜けた、と言った方がいいかもしれない美鈴は、「わあわあ」奇声をあげながら、雑誌を引っぱり取るうとしている。

記事の内容は、実に下世話なものだ。下世話だが、真面目な記事でもある。

『彼との気持ちいいセックス・ライフ』

このタイトルだけでも、どんな内容なのか詳しく読まずとも分かるというものだ。

「これ、参考になるね？」

「なっ、何言つて…………っ」

「特に、ここ。『好きな体位はなんですか?』のアンケート。男女両方の集計があるのがいいね。うっん、存外重なってるな」

「や、もう、維月さん、そういうことはっ」

美鈴の慌てぶりときたら、ほくそ笑んでしまっくらいに、おかしくて、かわいい。

「そうだな、俺は……………」『座位』、かな」

「だっ、わあああっ! って、そんなこと聞いてないし!」

美鈴はようやく俺の手から雑誌を奪うことに成功した。

「美鈴は？」

「そっ、そんなこと真顔で聞かないでほしいんですけどっ!」

美鈴は両手で雑誌を床にぎゅうぎゅうを押しつける。その仕草、姿勢がひどく「そその」ものだとは、美鈴自身はまったく考えても

いないだろう。俺の視線がどこにいつているのか、それにも気づかない。

俺は苦笑しつつ、視線を僅かにあげ、美鈴のちょっと潤んでいる瞳を見つめた。

「本気で知りたいんだけど。美鈴が好きなの……」

「つて、もわあああっ!!」

「何もそんなに照れなくても」

「照れとかそういうことじゃなくて!!」

「照れじゃなくて? じゃあ、どういうこと?」

「し、知りませんっ!!」

美鈴はぶいっとそっぽを向く。頬と耳が、さっき食べたスペアリのトマト煮のように美味しそうに赤く色づいている。

「それなら実験して、自分で調べるしかないかな。あれこれと試して……」

「ちよっ、維月さん……っ」

俺の邪な手が伸びると同時に、美鈴は身体をのけぞらせた。

美鈴のガードは固いようで、脆い。その脆さに臆し、つい手を引いてしまう。

ひるんだ俺をどうとらえたものか、美鈴は困ったような顔をし、泳いでいた視線を恐る恐る俺に向けた。

「あの、……あのですね、維月さん」

「うん?」

俺はソファーに背を預け、ため息をついた。顔だけは美鈴に向けたままで。

「うっ……、あ、の、わたしはですね」

「うん?」

先を急かさず、美鈴の言葉を待った。

「ええっ……」

俺は急ぐ気持ちを抑え、美鈴の唇を見つめた。

どんな言葉が美鈴の舌を動かし、出てくるのだろう。

美鈴がためらいがちに言葉を紡いだ。小さな声で、たどたどしく。  
「その……わたしは、……維月さんと……す………の、好  
き、というか、……だから、その」

か細い声は聞き取りにくい。俺は床に放られていたりモコンを引  
き寄せ、テレビを消した。

美鈴は俯いている。

「なに？ 聞こえなかった」

美鈴は唾をこくと飲んだ。その音も、今は聞こえる。

「もう一度言つて、美鈴？」

紅潮している美鈴の顔を覗き込んで、「もう一度」と、ささやい  
た。

「や、だから、その……い、つきさんと、……す、るのが、いいか  
ら、体位とかそんなのは、………」

美鈴は固まっている。先を続けられず、ただ、「うう……」と、  
低く唸っている。

ほんの一瞬の沈黙だったが、それすら美鈴は耐えきれなかったよ  
うだ。

赤い顔をさらに赤くし、身を擦じらせて、前言を撤回した。

「つて、やっぱり今の、却下！ 却下で！ 聞き流してくださいっ  
！」

「それこそ、却下。聞き流せない」

この時俺の、頭を、心を、体を迸った激情は、とても言葉では言  
い表せない。行動に表したほうが早い。

美鈴の耳は、熱い。指先でつまんでやると、眉をしかめ、困惑し  
きった目で俺を見つめ返してきた。

「美鈴は、……上手だね」

「は……？」

俺に押し掛かれ、窮屈そうにしている美鈴は、目を丸くした。

「俺を誘うのが」

にっこり笑ってそう言つと、美鈴はさらに顔を赤くして、文句を



つけてきた。

「な、なん、もおおっ！ 聞こえませんっ！ 聞こえませんから、何言ってるのか分かりませんっ！！」

「うん、いいよ、それで」

「は？」

「……うん、そのまま」

「え、ええ？ 意味がわかりま……って、んううっ」

唇を重ね、呼吸の合間に、熱情を注ぎ込む。

待ちかねた行為だ。躊躇はしない。待ちかねていたせいで、少しばかり乱暴になってしまっが。

とりあえず、「好き」だという言質もとったことだし。今この行為にいたる「理由」としては、十分すぎるほどだろう。

分からないなら分からないままでも、いい。

ありのままの、飾らない美鈴をじっくりと見続けていたから。

## 抗えない本音 1

「抑えられない……、ごめん」

切なげな声で謝罪され、「え？」と戸惑いがちに瞼を上げたその直後

「……………」

一気に貫かれ、息が詰まりそうになった。

下腹部に衝撃が走り、その衝動は宣言された通り、おさまる気配がなかった。揺さぶりをかけ、奥へ奥へと突いてくる。

喘ぐわたしの声は、粘り気のある水音と湿った肌のぶつかり合う音と相まって、ひどくいやらしい。耳を塞ごうにも、わたしの手はシーツを掴んだまま固まってしまっている。

今夜はいつになく激しく、性急だ。

荒々しく熱い息がわたしの耳朶に落ち、かと思えば苦しげに「美鈴」と、わたしの名を口にする。

呪縛のような囁きだった。

「い、維月さ……………」

待ってと制止しても、聞き入れてもらえなかった。

何を。何が。何に。……………怒っているの？

訊こうにも訊けず、今はただ、維月さんの熱を慄きながら受け入れるばかりだった。

十二月に入ると、不景気だ経費削減だなんだとこぼすわりには、

やたらと飲み会の話が出てくるようになる。それでも昔に比べたらずっと減ったし地味になったと、先輩の浅田さんが苦笑した。

「以前は会社からちゃんと送迎バスも出して、ホテルで一泊忘年会なんてのもあったのよね。社員旅行も海外から国内になって、挙句に今年は中止になったっていう体たらくだし」

「そうなんですか」

「ま、社員旅行なんてものは、わたしら派遣社員にはもともと関係ないんだけど」

そう言つて浅田さんはあっけらかんと笑つた。それに応えたのは、浅田さんと椅子を並べて座つて一緒に昼食を摂っている営業二課の田辺さんだ。

「いやあ、バブリーな時期には派遣社員も連れてつたらしいですよ？」

田辺さんは営業マンらしく愛想笑いが板についてて、いつ見ても朗らかで楽しげにしている。言動の軽快さからか、きっちりとネクタイを締めて身だしなみも整つてるのだけど、学生っぽさが抜けないような雰囲気がある。

「ま、その頃俺もまだこの会社にいなかったつていうか、学生でしかたけど。そのあたり詳しいのは浅田さんの方じゃないっすか？浅田さんの方が俺よりずっと先輩ですし？」

「そうやってまた年寄り扱いする！ 田辺くんもだけど、高倉くんも人をお局みたく言うのはやめてほしいんだけど？ 何かつてーと人を古株扱いして、そのくせ派遣だとかつて軽んじて」

「頼りにしてるつてことじゃないっすか。少なくとも高倉さんは浅田さんのこと軽んじてないし、それは俺も同様ですし」

「あんまり当てにしないでほしいんだけど。これでもあれこれと多忙な主婦なのよ？ 新婚なのよ？」

「新婚て！」

田辺さんは思わず嘖き出し、「新婚つてのは結婚一年くらいの期間をさして言うんじゃないっすかね」と、つつこんだ。

「何気にひどいね、田辺くん？」

浅田さんは文句を言いつつ、本気では怒っていない。怒るふりをして田辺さんを困らせて面白がってる……といったところだろうか。その浅田さんの向かい側に座ってるわたしはというと、この場にはいない人の名が出て、ちよっと、どきりとした。どきりとして、つい、箸を動かす手を止めてしまったくらい。「高倉」という固有名詞……人名に反応しすぎなくらい、反応してしまう。こんな風に態度に出しちゃう自分をなんとかしなくちゃと思う、今日この頃だ。

「ねえ、木崎さんもそう思わない？」

「はあ、まあ……そうですね……」

どれに同意しているのか分からなかったけれど、わたしはとりあえず曖昧に相槌を打った。上空なわたしの返事に浅田さんは訝しげな顔をした。

「木崎さん？」

浅田さんは心配そうにわたしの顔を覗き込んできた。

「木崎さん、どうかした？　なんか顔赤いけど？　風邪でもひいた？」

わたしより九歳年上で勤労主婦の浅田さんは、ふとした表情が高倉維月さんに似てる。剣を真綿でくるんだような表情……っていうんだろうか。ぼんやりとした思考を切って割るような鋭さがある。けれど一見するとその表情にきつさや厳しさはなく、つい正直に気持ちを吐露してしまいそうになる鷹揚さがある。

「い、いえ、大丈夫です」

わたしは片手を振り、笑ってごまかした。こういう時、浅田さんがプライベートなことを執拗に問い詰めてくる気質でなくて助かっている。面倒見のいい人だけれど、立ち入ってもいいラインをちゃんと見極めてくれる。だから浅田さんは「お節介やき」にまでは至らない。

「ほんとに顔、ちよい赤いね？　大丈夫ならいいけど、最近、そっちの課は忙しそうだし、疲れ、溜めこまないようにしないと」

浅田さんに便乗して、田辺さんまでが心配げにわたしの顔色を窺ってきた。

「ほんとに大丈夫です。わたし、体はけっこう丈夫な方ですし」

「そうなんだ。うん、そういうのいいね。わたし病弱なんですーとか言われるより、その方がずっといいな！」

田辺さんの人懐こい笑顔につられて、わたしも小さく笑って返した。

田辺さんとは、たまたま社員食堂で居合わせて、なんとなく話して、なんとなく一緒にテーブルに着いた。浅田さんは顔が広くて、どの課でも知られている人だから、田辺さんと親しくてもそんなに不思議はなかった。

けれど、田辺さんがわたしのことまで知ってるとは思わなかった。わたしなんて、大勢いる派遣社員の一人にしかすぎないし、所属してる課だって違うのに。

わたしだって田辺さんのことはよく知らない。

会社内で何度か顔を合わせたことはあつたし、何度か参加した飲み会に田辺さんもいたような記憶はある。

たしかわたしより三、四歳は上だったと思う。もっと年上かもしれない。

フルネームは田辺一晃……だったかな？ 社内広報で何度か名を見かけたことがある。あと田辺さんについて知ってることと言ったら……、高倉主任と親しいみたいってことだろうか。談笑してるところを何度か見かけた。それに余所の課にも時々顔を出して、「どっか飲みいこうぜー」と声をかけて回ったりしてるのを目撃したこともある。その程度にしか、営業二課の田辺さんを認識していない。

そうだ、「飲み会」といえば。

浅田さんと高倉主任とわたしっていう三人だけの飲み会は、もうここしばらくは開いてない。浅田さんが結婚して身上が変わったこ

とが理由だった。結局それを契機に飲み会は消滅…… ってことにはならず、高倉主任はわたしを誘ってくれた。とても気軽な誘いだっただから、わたしも気軽に応じて、数度二人きりで飲みに行った。その後、まさかの展開でわたしと高倉主任は恋人関係になった。そのことを、未だ浅田さんに言えてない。…… いずれ浅田さんには話すつもりではいるのだけれど、きっかけがつかめないまま年末に至ってしまった。

思考があちらこちらに飛んで、妙に気が落ち着かない。師走っという、どこか忙しい月のせいかもしれない。

久しぶりに選んだオムライスがメインのAランチは、美味しかったけれど食べきれずに、少しだけ残してしまった。

すっかりぬるくなってしまったお茶を飲んで、はあっと息をつく。「心ここにあらずって感じだねえ、木崎さん？」

浅田さんがからかうように言った。笑うと八重歯がちらりと覗き、実年齢よりぐっと若く見える。ベリーショートの髪型のせいもあるかもしれないけれど、ちょっと少年っぽい雰囲気がある。

悪戯好きな少年っぽい表情もまた、高倉維月さんを彷彿とさせる。さつきからちらちらと脳裏をかすめるのは、…… 維月さんのことばかりだ。

無意識的にため息をついてしまうのも、そのせい。

「もしかしてなんかストレス溜まってるとか？ てゆうか、溜まってるのはわたしだったりするんだけど！ ってことで、久しぶりにみんなで飲みに行かない？」

「あ、いいっすね！」

浅田さんの話に即座に乗ったのは田辺さんだ。目を嬉々として輝かせ、身乗り出してくる。

「でもどーせなら、大人数じゃなくて気安いメンバーだけにしときませんか？ 俺、焼酎の美味い店知ってますよ？」

「へえ？ そこ近いの？」

「そうっすね、駅から徒歩十分くらいだし。ただちっさい店なんで、

三、四人で行くのがベストって感じっすかね」

「そっかあ。なら、高倉くんも誘うか」

「そりゃあ高倉さんも誘っとかないと！俺達の中で一番立場上な  
んすからね。けっこう付き合いもいよいよ豪気だし。そーいやあ最近  
高倉さんとも飲みに行つてないなあ」

「田辺くん」

浅田さんは呆れたように嘆息し、へらへらと笑ってる田辺くんを  
睨みつけた。けれど浅田さんの目つきに剣呑さはない。

「高倉くんにたかる気満々でしょ？だめだめ、やめといた方がい  
いよ。高倉くん、ちよつと前からどーも女ができたみたいで、財布  
の紐、緩めてくれないよ？高倉くん、締めるところはきっちり締  
めるからね」

「えっ、マジ？高倉さんに彼女いる情報は初耳だけど」

再び、どきり、だ。

二人の口から高倉主任の名が出る度にどきどきしてしまふ。平然  
としてられない。

「遠回しにだけとそんなようなこと本人が言つてたから間違いない  
と思うよ？」

浅田さんはさらりと言う。別にわたしの方を見てそれを言ってる  
のではないのに、わたしは何やら居たたまれない気分でいっぱいだ。  
内容が内容なんだもの、しかたがない。

「高倉さんって読めないからなあ。訊いてものりくらりとかわさ  
れちゃってさあ。けど、浅田さんが聞いたつてんなら確実ですよ  
ねーっ、そっかそっか。これ知つたらがっかりする女子、けっこう  
いるんじゃないかなあ」

田辺さんは腕を組み、気難しげな、それでいて面白がっているよ  
うな、そんな顔をしている。是が非でも飲み会に誘つて詳しく聞き  
出してやるうなんて呟く始末で、わたしは内心焦り、青ざめてしま  
った。

「高倉くん狙いの子っているの？それこそ初耳だけど」

浅田さんにしてみれば、高倉主任は同時期に入社した、いわば仲間……というか戦友みたいなもので、男性としてはあまり意識してこなかったらしい。それに、浅田さんは他人の恋愛事に関してさほど興味を持たない性質だ。そういう点で浅田さんは、高倉主任がいつか言ったように、さばさばとして、「漢らしい」。

けれど、わたしはとも浅田さんのようには「さばさば」と割り切れない。

さつきから胸がひしめいてる。耳を塞いでしまいたかった。

「飲み会なんかだと分かりやすいけど、高倉さんもいれば、飲み会に乗ってくる子もいたりするんすよ？ 本気がどーかまではわからないっすけど」

「へえ？ それは知らなかったわ。意外といえば意外だし、そうでもない気もする」

「あ、あのっ」

わたしは場の空気も読まずに、「お茶、おかわりを」と言って立ちあがった。

浅田さんと田辺さん、二人の視線が同時にわたしに向けられた。

「二人の分もよかったら淹れてきます」

早口になつてしまった上、笑顔がぎこちないものになつてしまったのが、情けなかった。



抗えない本音 1 (後書き)

こちらのお題は、お題配布サイト「TV」様からお借りしたものです。

その後、浅田さんと田辺さんは飲み会の事や高倉主任の事でひとしきり盛り上がった。ただ飲みに行く話は結局まとまらずに終わって、わたしは内心ほっと胸を撫でおろしていた。

学校のように予鈴が鳴るようなことはないけど、社員食堂は昼のピーク時を過ぎると途端に波が引くように人が少なくなり、おかげでだいたいの時間が把握できる。

わたしは職務の場に戻るべく、足早に食堂を出た。

「木崎さん、木崎さん、ちよい待って！」

食堂を出た所で田辺さんに呼び止められた。食器類を下げた所で別れたはずだったけれど、追いかけてきたみたい。

「あのさ、木崎さん」

「は、はい、なんででしょうか」

思いきり他人行儀な、硬い返事をしてしまった。田辺さんと対面するのに慣れなくて、妙に緊張する。田辺さんとうとうして直で話すのは初めてだからかもしれない。助けを求めようにも、浅田さんは先に化粧室に行ってしまった。

「木崎さん、もしかして気イ、悪くした？」

「え？」

「なんかずっと黙りこんでてほとんど会話に入ってこなかったしさ」  
田辺さんはすまなそうな顔をし、首の後ろかきながらわたしの顔色を窺ってきた。

「うるさくしちゃって迷惑だったのかなあって」

「そんなことないです。その……ちよつとぼうつとしてて。すみません、わたしこそ気を悪くさせちゃったみたいで」

わたしは慌てて謝った。田辺さんは眉尻を下げて、ぼつてりとした一重瞼をせわしなく瞬きさせた。そうして僅かの間、何やら物言いたげな様子でわたしのことを見ていたのだけど、わたしが恐縮し

きつてるのを察して、表情をやわらげてくれた。

「それならいいけど。それじゃあさ、木崎さん、さっきの話、一応念頭に置いてよ」

「さっきの話……?」

わたしは小首を傾げた。田辺さんはにこにここと愛想よく笑っている。

「うん、飲みに行こうって話。木崎さんとはゆっくり話してみたいって思ってたさ。大人数での飲み会でしか一緒になったことないしさ。課が違うとなかなか話もできないから」

「……………」

田辺さんの人好きのする笑顔は営業マンらしい当たりの柔らかさがあつて、つい引き込まれるようにして頷きそうになる。

けれど、困惑が返答を躊躇させた。

田辺さんが言うように所属してる課も違うから接点も少なく、個人的な話をする機会なんてなかった。今日みたいに一緒に昼食なんて今まで一度だってなくて、本当に、顔と名前が一致してるくらいのレベルでしか田辺さんを認知してなかった。田辺さんにしだってわたしのことその程度にしか思ってたなかつたと思う。……思うのに、どうして「ゆっくり話してみたい」なんて思ってくれたのかな……?

浅田さんと一緒にいることが多いから、もしかして目に付いていたのかもしれないけれど……? それだけ、よね? たったそれだけの、いわば社交辞令的なものと解釈していいよね?

「だからほんと、さっきの話考えといてよ? ちょうど忘年会のシーズンだし、飲みに行こうよ」

「そうですね……。浅田さんも乗り気みたいだったから……。考えおきます」

当たり障りのない返答に、田辺さんはちょっと失望したような色を目に浮かべ、けれどまたすぐに笑顔を取り戻した。

「うん、前向きに考えといて」

田辺さんは高倉主任と違って、感情をストレートに表わす人だ。

そうやって自分をアピールすることができる人なんだろうな。それは、営業マンとしては必要なスキルなのかもしれない。

田辺さんからのお誘いを迷惑だとは思わなかった。けれどやっぱり、正直……戸惑ってしまふ。だから返答はどうしても曖昧なものになってしまった。

「それじゃあ、木崎さん」

「はい？」

「田辺」

反射的に応えたわたしの声に、低い男性の声が背後から被さってきた。

「……っ!？」

心臓が跳ね上がるくらいに驚いて、わたしは肩越しに振り返り、声の主を見上げた。田辺さんもまたはっとして視線をあげる。

「……い、……っ」

わたしは口にしかけた声を、片手でどうにか押さえ込んだ。思わず肩を竦め、振り返った姿勢のまま固まってしまった。

「田辺、ここにいたのか」

わたしの背後に突如として現れたのは、高倉主任だった。

周りがざわついていたせいで、全然気がつかなかった。

いつの間にか現れてわたしの後ろに立っている高倉主任は、ダークグレイのスーツの上に、おそらくはカシミア100%と思われる黒のトレンチコートをざっくりと羽織ってる。どうやら出先から戻ってきたばかりのようで、片手に書類ケースを持ち、小脇にセカンドバッグを挟んでいた。伸びすぎの感のある前髪は少し乱れていて、それを片手で軽く整える様子はひどく気だるげだった。

高倉主任は珍しく朝から外に出ていた。わたしが出勤した時にはもう外出した後で、午前中は高倉主任不在の状態だった。昼過ぎには戻ると事前連絡はあったし、「主任」の代行者もいてくれたから、

仕事的には支障はなかった。

わたし的にも、高倉主任の顔を見られなくてちょっと寂しいなって驚沢なことを思ってしまったくらいで、さしたる支障はなかった。……今の、今まで。

このタイミングでの高倉主任の登場は、不意打ちすぎた。

だって、なんだかどきどきする。高倉主任の突然の出現に驚いて心臓が跳ねたってこともあるけれど、動悸は持続してる。やましいことをしてるわけでもないのに。頬まで熱ってきちゃって、心中で「平常心、平常心！」と言い聞かせても動悸と熱りは治まらない。

どっ、どうしよう……っ！ 我ながらものすごく拳動不審だ。田辺さんが変に思わなければいいけれど……。

そろりと視線を、突如現れた高倉主任から田辺さんへと戻すと、田辺さんは悠長に構えていて、わたしのことを不審に思っではないなさそうだった。

「あ、高倉さん、今から飯っすか？」

なんて、暢気顔で高倉主任に尋ねるくらいだから。

高倉主任はと言うと、わたしの後ろに立ったまま、怒っているような呆れているような、威嚇してるような……それでいて感情を抑えたような冷やかな目を田辺さんに向けていた。

「……………」

高倉主任は、一度だけわたしに視線を落とすとまたすぐにその目を田辺さんに向け直した。

高倉主任は、田辺さんの問いには答えず、別のことを告げた。

「さっきそこで村上さんに会ったんだけど、田辺のこと探してるみたいだった。早く戻った方が良いんじゃないか？」

「げっ、しまった！ 村上課長に渡さなきゃいけない書類があったのすっかり忘れてたっ！」

田辺さんは高倉主任の突然の出現よりも、失念していた業務を思いだし、そちらの方に気を取られたようだった。「やべえっ」と声を上げるや素早く身を翻して、駆けだした。

田辺さんは本当に表情筋の柔らかい人だ。ころころとよく表情が変わる。リアクションがちょっとオーバーなくらい。

去り際、田辺さんは一度足を止めて振り返り、わたしには「またね」と笑いかけ、高倉主任には「助かりました」と礼を言った。

田辺さんって、如才ない人だなあ。

高倉主任も如才ない人だけど、性格的には真逆のタイプだ。少なくとも、会社内では。

だいたいにおいて、高倉主任は感情を露骨に表さない、淡白な表情をしてる。笑うし怒りもするのだけど、その挙動は静かで平らだ。だから掴みどころのない人だって思われがちで、実際わたしもずっとそう思っていた。今だって、高倉主任の……維月さんのことを、掴みきれないでいる。

そんなことをぼんやり考えていると、背後から低い声がかかり、そこで思考はストップした。

「木崎さん、今まで田辺と一緒にだったの？」

「え？」

振り返り、そこに見たのは高倉主任の静かな微笑だった。口は緩やかなカーブを描いて笑みの形を作っているのに、目は笑っていない。高倉主任……ううん、違う。維月さんがそこにいて、わたしを見つめている。維月さんが醸し出している空気が、ひどく重い。

「知らなかったな。田辺と仲良かったんだ？」

「いえ、そんなっ」

わたしは慌てて否定した。

「仲が良いなんて、そんなことは……」

「……………」

「面と向かって話すのは今日が初めてですし、それに、さっきまで浅田さんも一緒だったんです」

焦るあまり、わたしの口調は言い訳がましいものになっていた。言い訳しなくちゃならないことなんてないはずなのに……。

維月さんは小さく嘆息した。

「そう」

そしてわたしから視線を逸らす。瞬間、維月さんの表情はもう「高倉主任」のものになっていた。

「僕は総務課に顔を出さなきゃいけないから、ここで。 それじやあ」

高倉主任は断ち切るようにそう言って、身を翻して歩き出した。

「あ、……」

待つて下さいと引き止めようとしたのに、声が喉の奥に引っかかって出てこなかった。

周りの目を気にしてもいたけれど、それよりも怯えが勝って高倉主任……維月さんに声をかけられなかった。

声をかけて、無視されたらと思うと、……怖かった。

だって、声をかけても振り返ってくれなさそうな雰囲気だった。

たとえ振り返ってくれても、わたしを見る目は上司としてのそれではがなく、そうなればわたしだって派遣社員の一人としてしか高倉主任に接せられない。

それを望んだのは、わたしだ。

会社では、わたし達の関係はできれば隠していたい。わたしの我儘を、維月さんは聞き入れて、守ってくれている。

今維月さんがとった態度……上司としての顔を崩さないでいたのだから、わたしの我儘を守ってくれてのことだ。

それなのに、どうしてこんなに胸が騒ぐの？ 寂しいなんて思うの？

維月さんがいつもと違う気がするなんて、どうしてそんな勝手なことを思うの？

「……………」

わたしは首を振って、暗く淀む思考を払った。

不安に思うのは、ただの我儘だ。

いつもと違うように感じたのは、きっと、一瞬だけのこと。

そう思い直して、わたしは踵を返し、社員食堂を後にした。

だけど。

やっぱり気のせいではないのかもしれない。

この数日間、わたしはずっともやもやを抱えていて、心は晴れないままだった。

だって……、維月さんのわたしに対する態度が、いつもと違ってた。あからさまに避けたり無視したりするようなことはないのだけど、どこことなく、違うと感じる。

挨拶をすればちゃんと応えてくれるし、浅田さんや他の派遣の子達と一緒に軽口をたたいたりもしてた。

それなのに普段は感じない不自然な隔たりが、わたしと「高倉主任」との間に横たわってる。その上、いつも以上に維月さんの影がちらついて、しかもその“影”はわたしを見張ってるかのようだった。

視線を感じてふと顔を上げると、高倉主任がわたしを見ている。日に、何度もそういうことがあった。

いつもなら、目が合うとわたしから先に目を逸らすのに、一昨日も昨日も、そして今日も、高倉主任の方から視線を逸らした。わたしに視線を向けていたのをごまかすみたいに席をはずしてしまふことすらあった。

目を逸らす瞬間、過るのは維月さんの影だ。そしてその影はわたしから離れない。わたしの方から影に囚われているのだろうけど。

退勤後、迷惑にならない程度に短い文のメールを送れば、少し時間がかかって、維月さんはちゃんと返信してくれた。時には電話してきてくれることもあった。わたしのことを気にかけてくれてるって、短い会話の中からも伝わってきた。

それでも、不安と違和感は拭えなかった。



わたしのそんな感情を察してなのか、維月さんの方からお誘いがかかった。

それは金曜日の晩のこと。わたしがおやすみなさいのメールを送信しようとした時、それを押し止めるようなタイミングの良さで、維月さんからメールが届いた。「土曜の夜、空いてる?」、と。

「なかなか美味しい創作料理の店を見つけたんだけど、行かない?」土曜日は大抵維月さんのために空けているから、他に予定が入っていることはめったにない。断る理由もなかったから、「いきます」と応じた。

そして土曜日の晩、維月さんはアパートまでわたしを迎えに来てくれた。お店は、車で小一時間ほどかかるところにあって、隠れ家のような店構えだった。

「最近、グルメ雑誌で紹介されたらしい」

地域限定の雑誌だけどねと維月さんは笑った。

雑誌掲載の効果もあるだろうし、土曜日ということもあって、ほぼ満席状態だった。けれどすんなりと席に案内されたのは、維月さんが予約を入れておいてくれたおかげだった。

車中でも食事中でも、維月さんはいろんな話をしてくれて、場が白けることはなかった。わたしも維月さんに乗せられるようにして笑ったり相槌を打ったりして、会話を楽しんでいた。

食事を済ませ、帰路に着く、今の今まで。

車中には沈黙が落ちていた。

店を出てからすぐは、それなりに会話が あつたのに。

どうして……? わたし、何か維月さんの気分を損ねることを言っってしまったんだろうか?

維月さんは次第に口数を減らしていき、ついには黙り込んでしまった。

どうしよう……。

何か話しかけなきゃと思うのに、なんとなく声をかけづらくて、わたしは口を噤んだまま維月さんの横顔を見つめるばかりだった。すれ違うヘッドライトは維月さんの顔にさらに深い翳りを作っている。

「今夜は、……」

ややあつてから、維月さんは半ば唐突に切り出した。

維月さんは助手席に座るわたしに、ちらりとも視線を流してくれない。まるで目を合わせないようにしてゐるみたいだ。

車中の空気がひどく硬い。

「場所を変えようか」

「え？」

聞き返しても、維月さんはわたしを見ない。口の端が上がり、笑みが滲んでいる。けれどどこか冷笑じみていた。

「たまには、ね。……それに、我慢できそうにない」

「維月さん？」

維月さんはふっと、自嘲するような笑いをこぼした。そして、迷いなくハンドルをきる。

どこへ行くのかと不安げに尋ねると、維月さんは笑いもせず、わたしの目も見ず、短く答えた。

「ホテル」と。

### 抗えない本音 3 (終)

もう、わけがわからない。

目を固く閉ざし、首を竦めて体を縮こまらせた。

ソレをするのが主な利用目的のホテル。維月さんは有無を言わずわたしを連れて来て、ソレ以外を求めてこなかった。

うるたえるわたしを言葉巧みに宥めたりもせず、力ずくといつてもいいような手練手管で……けれど決して暴力的にはなく、わたしをベッドの上に縛り付けた。そうしてわたし達は会話らしい会話もなく、無我夢中になって、抱き合った。

どれほどの時間が経ったのか……。

まだ夜が明けてないのが不思議なほど、ひどく長い時間を過ごしたような気がする。

……ううん、違う。時間が停止してしまってるような、そんな感覚だ。

いつまでも夜が明けられないような、そんな怯えがある。

維月さんと一緒にいて、こんな風に夜が長いと感じるのは初めてだ。こんな苦い気持ちを抱えたままにいるのも。

それに、暗い小部屋に閉じ込められたような狭隘さを感じるのも、初めてだ。

オレンジ系統の暖かな色合いの間接照明が照らし出す部屋は、十分すぎるほどに広い。そして、ベッドも。

普段寝ているベッドの、軽く二倍はある。ダブルベッドよりも大きいように思う。キングサイズっていうんだらうか。枕もシーツも掛け布団も、すべてがゆつたりとして大きい。

それなのに、窮屈だった。右隣で眠る人のせいだ。

維月さんはわたしをその腕の中にとらえ、離さない。そしてわた

しもまた、捕らわれたまま身を竦めている。

「……………」

首をわずかに伸ばして瞼を上げ、維月さんの様子を覗き見た。

わたしの横で、維月さんは静かな寝息をたてている。あれほど熱く乱れ、荒れていた息が嘘のように。

蒸れるような甘く艶めかしい香りが、汗の引いた身体にまとわりついている。その香りは、体中が訴えてくる痛みをやわらげてはくれなかった。

わたしを抱く維月さんの腕はいつだって激しいのだけど、今夜はいつも以上に性急で、荒々しかった。優しいまなざしでわたしを見つめ、悪戯っぽく笑いかけてくれることもなかった。

わたしの名を囁く維月さんの声は切羽詰まったようで、苦しげだった。名を呼びながら、けれど維月さんはわたしの目を見ず、ただ熱っぽいキスを耳朶や喉、胸元に幾度となく降らせ、わたしの喘ぐ声も噛みつくようにして塞いだ。苛立ちや怒りをぶつけてくるかのような、痛みを伴うキスだった。

……わたしが勝手にそう感じただけかもしれない。

でも、そうだとはい断じ切れない。

だって、維月さんの切なげにしかめられた眉宇や逸らしがちな目は、何か言いたげだった。責め問う代わりに体を求めてきたような、そうして感情的な言葉を抑えているようでもあったもの。

どうして……？

何を。何が。何に。……怒っているの？

わたしが、何か……、維月さんを怒らせるようなことをしてしまっただらうか？

「……………」

嗚咽が漏れそうになり、慌てて口を塞いだ。

怖かった。

維月さんの激しい抱擁が怖かった。痛くて、何度も「いや」と声をあげた。

それなのに。

怖かったのに、泣くほど怖かったのに、維月さんを拒めなかった。それどころか、わたしは維月さんに縋ってた。離さないでと言わんばかりに首に両の腕を巻きつけて、自ら体を摺り寄せていた。

維月さんの激しさに慄きながら、それ以上に、突き放されることが怖かった。何より、わたしの心も体も、維月さんを維月さんが求めてくるよりも貪欲に求めてた。

恥ずかしい。それに、浅はかで身勝手な自分が情けない。

維月さんを不愉快にさせる何かをしてしまったのではないかという不安を抱えながら、それでもなおかつ、維月さんの心情を慮るよりも、維月さんの全てを求めて、必死になって縋ってた。

自分のあからさまなその欲求が恥ずかしくてたまらない。

「……………」

羞恥が水滴に変わり、とめどもなく流れては落ち、口を押さえている手や僅かな湿り気を残している白いシーツを濡らした。瞼を閉じても、涙は止まらなかった。肩の震えも抑えられなかった。

「美鈴？」

ふいに、声がかかった。

いつ目を覚ましたのだろう。維月さんは体を起こし、心配げにわたしの様子を窺ってきた。

すうつと、維月さんが動いた拍子に空気が動き、微風がわたしと維月さんの間に入り込んだ。もうひいたとはいえ、さっきまで汗をかき、熱帯びていた体に触れる空気は、ひどく冷たいものを感じる。

「美鈴」

もう一度わたしの名を呼び、維月さんは少し戸惑いがちに、肩にそつと手を置いた。びくりと肩を震わせ、わたしは身じろいで、さらに体を硬くした。

わたしは身を竦ませたまま維月さんに背を向けている。維月さんは一旦肩から手を離すと、徐に両手を枕元につき、わたしのの上にか

ぶさってきた。

「美鈴、どうし」

「どうして？」

維月さんの声を遮るように、わたしは鋭い声を被せた。僅かに顔を上げ、涙を拭って維月さんを見つめる。

泣き顔を見せてくはなかったけれど、問わずにはいらなかった。

「どうして？ 何を、怒って……………わたし、維月さんを、怒らせ……………」

問わずにいらなかったのに、どう問えばいいのか分からず、言葉が明瞭に出てこない。その上みっともないくらいに涙声になってしまつて、一言発するたびに、涙が眦に浮かぶ。

じりじりと、喉が焦げるように痛い。目も熱い。鼻もきつと赤くなつてる。

「いつ、きさん、わたし……………何か、したん、ですか？ 何か、維月さんを……………」

維月さんの顔が滲んで見えない。

こんな時に泣くなんて、だめだ。みっともないし、維月さんを困らせるだけだ。

だめだつて分かっているのに、とめなくちゃって思つのに、ちつともうまくいかない。

振り絞つて出す声も、震えて掠れて、詰まつて、ちゃんと気持ち伝えられない。

「維月さ、んに、わたし、何か……………気を悪くさせちゃうようなこと、言つてしまつ……………た、んですか？」

その上、責めるような口調になってしまつた。

維月さんはすぐに否定した。狼狽してるような、そんな声だった。

「違う、美鈴」

「でも」

「違う、……………ごめん」

維月さんの指が、わたしの涙を拭ってくれた。額にかかる濡れた

前髪を払い、そこに優しい口づけが落とされた。

「怒ってなんかない」

「でも……」

「美鈴を泣かせるつもりはなかった。一方的にしすぎた。……ごめん」

「……………」

維月さんはわたしから体を離さず、髪を撫ぜたり、涙を拭ってくれたりしながら、すまなそうに「ごめん」と繰り返した。

維月さんはわたしの涙がひくのを待つてくれた。その間に、逡巡しているようだった。眉を曇らせ沈思していた。けれど、ふと小さくため息をつき、ためらいがちに声を発した。

「美鈴」

わたしは維月さんの体の下で、身を硬くしている。さっきよりは幾分気持ちは落ち着いていたものの、居たたまれなさは変わらない。それでも目だけは逸らさず、維月さんを見つめていた。

維月さんはようやくわたしを目を見つめ返してくれた。

「行くの？」

発せられた維月さんの声は、聞き取りにくいほどに低かった。

わたしは目を瞬かせ、「え？」と小さく口を開いた。

維月さんは目を伏しがちにし、躊躇を払うように息をつき、言葉の先を続けた。

「行くつもりでいるの、田辺が言ってた飲み会に」

唐突すぎる質問に、一瞬何を言われたのか分からず、とっさに返答できなかった。

「田辺からも直接誘われた。浅田さんと俺と“木崎さん”とで、今度飲みに行かないかって」

「あ、それは……………」

やっと、維月さんの質問を理解した。

今夜、その話を切り出したのはわたしの方からだった。創作料理のお店を出てから、ふと思いついて、維月さんに話した。飲みに行かないかって話が出てるんですけど。浅田さんがストレス溜めてるみたいで、憂さ晴らしをしたいみたいなんですよって。田辺さんの名前も出したと思う。

実は、飲みに行こうと話が出たあの日から、田辺さんからさりげなく打診され、返事を待たれていた。けれど、わたしは返答を曖昧にして、その場をのらりくらりとかわしてきた。乗り気になれずにいた。

だから維月さんにも話をふつたものの、「ぜひ行きましょう」というようなことは言わなかった。

「あの、わたしは……」

「断って」

維月さんはわたしの戸惑い声を遮って、短く言った。

「……………」

わたしは返答に困り、声を詰まらせてしまった。それを、維月さんは抗議の沈黙と受け取ったのかもしれない。ふと目を逸らし、自嘲気味に笑った。そしてまた、「ごめん」と謝罪した。

「他に約束が入ってて予定が埋まってるからとでも言って、断って。言えないなら、俺が適当に理由をつくって、飲み会自体をお流れにしてもいい。本当はこんなこと言いたくない。いや、言っただけじゃいいことじゃない。俺が決めることじゃないと、分かってる。……」

維月さんは歯切れ悪く言葉を紡ぎ、苦々しそうな顔をわたしから背けた。

こんな風に焦心を露わにしている維月さんを見るのって……もしかして初めてかもしれない。言葉を選びかね、困窮しているようにもみえた。

さっき維月さん自身が言ったように、怒ってはいないみたい。けれど苛立ちのようなものは感じる。わたしに向けられたものかどう



か、それは判然としないけれど。

「……………」

あっと、思った。

もしかして……。

もしかして維月さんは、わたしを案じてくれてる？

浅田さんとはもかく、田辺さんも一緒に飲み会に参加して、そこで、わたしがうっかり維月さんとの関係をおわせるような態度をとっちゃったり口を滑らせちゃったりするのを見越して、それを心配してくれてるの……？

維月さんとの関係を内緒にしていたいと頼みこんだのは、わたしだ。

浅田さんにはいつかちゃんと話したいって思っているけれど、それ以外の人は別。維月さんとのことは、極力隠していきたい。自分が社内ですぐに居たたまれなくなるからって理由もあるけれど、わたしなんかと噂になって、維月さんに迷惑がかかるのだけは耐えられない。それだけは絶対に避けたかった。

「維月さん、ごめんなさい。ちっとも気付かなくて」

「美鈴……」

維月さんの、少し困ったような目とぶつかった。

わたしは委縮したまま言葉を継いだ。

「付き合ってるってこと……うまくごまかせないで、きつとっかかり顔にだしちゃいますよね。飲み会の席じゃなかったって、維月さんへの気持ちを隠しきれずに不審な態度とっちゃうのに」

高倉主任、という名が出ただけでも胸が鳴って、平静さを装うのに必死なのに。

酒の席ともなったら、もっと態度があらさまになってしまふのは想像に易い。わたしは維月さんみたいに冷静じゃないし、ごまかすのだって下手だ。

「それなのに、どっちつかずな態度なままできっぱり断れなくて……。維月さんに迷惑がかっちゃうって分かりきってるのに、そんな

ことさえ気が回らなくて。怒って、当然です……」

「美鈴」

維月さんの手が、頬に触れた。そうしてわたしの声を止め、ふと目を細めて優しく微笑した。

「美鈴らしいな。そんな風に考えるのは」

「……え、あの？」

頬に添えられた維月さんの手が、熱い。まなざしも。吐息も。

胸が、ときどきする。

「まったく、情けないな。美鈴を不安にさせて泣かせて、俺が考えもしなかったことにまで気を回させて」

「……維月さん？」

「男の嫉妬ほど見苦しいものはないな」

維月さんは片頬をあげて苦笑いをした。

「え、……え？」

意味が分からず、わたしは維月さんの顔をまじまじと見つめた。

維月さんはうろたえるわたしを、からかうようではなく、優しく目元をやわらげて見つめ、笑いかけてくれた。

「あ、あの」

どぎまぎしながら、訊いてみた。嫉妬って聞こえたけど、聞き違いかもしれない。

「嫉妬って、え、と……それはどういふ……」

「美鈴は」

維月さんは答える代わりに、わたしの体をぎゅっと抱きしめた。

維月さんの熱い息が耳朵にかかる。

「誰にも渡さない」

「え、あのっ、いつ、維月さん？」

耳を甘噛みされて、思わず「ひゃうっ」と小さな奇声を漏らしてしまった。全身に電流が走ったみたいだ。息をかけられた耳は、火を点けたみたいに熱くなってる。

「……」

維月さんは応えない。摺り寄せてくる頬や触れる髪の毛の感触がくすぐったくて、維月さんの沈黙がひどく甘い。

維月さんの体重がそのままのしかかってくる。重くて、ちょっと苦しい。けれど維月さんの重さを全身で受け止めていたかった。

「維月さん……」

「うん？」

「……………好き」

口をついて、出てしまった。

思いがけない告白に動揺したのは、他ならぬわたし自身。ぎゅうとかがたく目を閉じて、首を竦めた。

本心だけど！ 心からの想いだけれど！ 恥ずかしくって、維月さんの顔をまともに見られない。

維月さんのわたしを抱きしめる腕の力が、さらに強まった。それよりも先に、わたしと維月さんの体の間に挟まっていた薄い掛け布団が取り払われた。

肌と肌が直接触れ合い、熱が伝わる。

「美鈴、泣かせてごめん」

「……………」

ふるふると、維月さんの腕の中で首を振った。

「怯えさせて、無理に押さえつけて。それなのに拒まないでいてくれて、受け止めてくれて、嬉しかった」

「……………」

「それでつい手加減せずにしてしまったけど、…………もう、怒ってない？」

「怒ってなんか…………っ」

慌てて顔を上げると、それを待ち構えていたように、維月さんは顎をつかみ、唇を重ねてきた。息すら奪うような、深く激しいキス。眩暈がする。

わたしの両腕は伸ばし、維月さんの首に回した。半端に巻きつけた腕を支えるように、維月さんはわたしを包み込むようにして抱

きしめてくれた。

抗えない。

そう思った。

維月さんが好き。

こんなにも好きになって、あられもなく溺れてしまうなんて。気持ちを抑えるなんて、きつともう、できない。抗いきれない。

怖れや不安は、この先もずっと抱えたままにいる気がする。

けれど……今、こんなにも満ち足りて、幸せだ。

「わたしこそ、気を揉ませてしまつて、ごめんなさい」

「美鈴が謝ることはないよ。俺が勝手に焦つてただけだから。我儘を言つて、無理を強いて、謝るのは俺の方だ」

「我儘なのはわたしの方です」

「それじゃあ……」

維月さんは小首を傾げ、小さく笑つて言った。

「お互いさま、ということだ」

わたしは目を瞬かせ、それから「はい」と応えて微笑を向けた。

「美鈴」

「はい？」

「……………」

維月さんは甘い声音で囁く。気持ちを、短い言葉で伝えてくれた。さらに唇を巧みに動かし、長い長いキスでも。

それから、……

維月さんはわたしを緩撫するような口調で、朝までここでゆっくり休んでいこうと、同意を求めてきた。わたしは頷いて笑顔を返した。

覚悟してるから、咎めたりなんかしない。

ゆっくり休ませてなんかくれなくせにって。

人には、得手不得手があると思う。

マル手になんでもこなせてしまう器用な人もいるだろうけど、わたしは不器用だから、不得手なことが多い。

例えば隠し事なんか、そう。

嘘がつかないというより、上手くごまかせず、動揺がつい顔に出してしまうみたい。「わかりやすい」ってからかわれることもしばしばで、それでまた焦ってしまう。

さり気なく話を逸らしたりお茶を濁したりするなんて、わたしにはできっこない芸当だ。

それなのに私意を隠そうとするから、ちぐはぐな言葉と態度になっってしまうのだと思う。

気持ちを隠すのも伝えるのも、ここぞという時に限って、上手くいかない。

そんな自分がひどくもどかしい。

何より、わたしの傍にいてくれる人にも、もどかしい思いをさせているのじゃないかって、不安になっってしまう。

そして隠し事の下手なわたしは、その「不安」をも、迂闊に晒してしまう。

もちろんそれは、特定の人に限るのだけど。

それはいつもと変わらない、平穏な冬の午後のこと。

昼食を済ませた後、わたしは同僚の桃井さんとともに、まったりとコーヒーを飲みながら雑談していた。

昼食は、いつも決まった人と一緒ってわけでもない。一人の時もあるし、浅田さんと社員食堂に行くこともある。仕事場から出ずにお弁当を広げている時なんかは、桃井さんや他の女の子達と一緒にすることもある。

そういえば、桃井さんと二人で昼食って、久しぶり。桃井さんの方から、「一緒にいい？」って訊いてきて、わたしも笑顔で応じた。他の女子社員達は、別の場所で固まっているけれど、わたしと桃井さんが輪から外されているってわけでもなく、なんとなく、そういう流れになった。

仲良しグループみたいなのはあるけれど、さすがに小中学校みたいな、がちりとしたグループっていうのがない。うちのサポート課の特徴だと、前に浅田さんが言ってたっけ。女子社員が多い課なのに珍しいとも。

こういう気風は、自分には合ってるし、何より楽だ。

今日、わたしはお弁当を持参していた。梅干し入りのおにぎり一つと、煮物を適当に詰めこんだ小ぶりの弁当箱一つ。

桃井さんのお昼は、出勤前にコンビニで買ってきたらしいサンドイッチとインスタントのコーンスープ。もともと小食なのか、小食を心がけているのか、桃井さんはあっけなく昼食を済ませてしまう。

「木崎さん、お弁当作ってくるなんて偉いよねえ」

食事中、桃井さんはわたしのお弁当を覗きこんできた。茶化している風ではないのだけど、感心しきって言うてるようにも聞こえない。皮肉っぽくもないのだけど、尻上がりの語調がちよつとひつかかってしまう。「そんなことないよ」と、当たり障りのない受け答えをし、スティック状に切ったニンジンを中心に運んだ。振りかけた粉カラシが、ツンと鼻にくる。

「水筒も持ってきて、なんかママだよな、木崎さんって」

「……………」

ペットボトルのお茶をなるべく買わずに水筒を持参してるのは、単に節約しなくちゃって理由からなんだけど。

そう言うと、桃井さんは「あ、そつかあ」と返してきた。

「木崎さん、一人暮らしはじめて、もう半年くらいだっけ？ ご飯とか用意するの面倒じゃない？ お弁当用意するのだって、朝早くに起きてしてるんでしょ？ あたしも一人暮らしに慣れてたけど、まだ無理っぽいもん」

自分で言うのもなんだけどね、と桃井さんはからからと笑う。

人差し指をたてて頬に当て、肩を竦めて小首を傾げてみたり、黒々としたまつ毛をせわしなく上下させたり、桃井さんのそうした所作は、少し子供っぽい。

けれど、そういった子供っぽい所作も桃井さんの外見にも合っていて、可愛らしい雰囲気をもとわせている。肩よりちよっと長めの髪は明るい栗色に染めていて、毛先をゆるくカールさせてる。目もぱっちり大きく（メイクによるところも大きいけれど）、少し厚ぼつたい唇にふわりと柔らかそうな発色の良いローズ系のグロスがよく似合っている。

全体的に地味で無難にまとめちゃってるわたしとはずいぶん違って、桃井さんはいつもおしゃれに気合が入ってる。とくに、アイメイクには。

ダメ一つなく、きつちりと塗られたマスカラをぱちぱちと動かして、桃井さんはわたしを見つめてくる。話す相手の顔をじっと見つめるのは、桃井さんの癖だ。

「でもぼちぼち料理とかそういうの、やっとなかいかないといけないかなあとか思ったりもするけどねえ」

「実際やってみたら案外簡単にできると思うけど……。慣れもあるかな？ お弁当に入れるものだって冷凍もの使っちゃってるし、夕飯の残りもの詰めこんでるだけだし。結構手抜きしてるよ？」

「でもさあ、木崎さんって料理上手っぽい感じするなあ。実際どうなの？ 得意なんじゃない？」

「得意って程じゃないよ。必要に迫られて作ってるだけで。うーん、けどまあ、料理自体はそんなに嫌いじゃない……。かも？」

「なんでそこで疑問形かなあ？」

「や、なんとなく」

桃井さんは可笑しげに笑いだし、わたしもつられて笑った。

こんな風に、わたしと桃井さんの会話の内容は、当たり前障りのない無難なものだ。

たとえば、最近気に入ってるコスメのこと、コンビニのデザートのとれが美味しくてハマってるかってこと。最近ちょっと太っちゃったから痩せなくちゃといったダイエット話も、デザートの話の後に、笑いながら言ったりもする。その合間に、仕事も愚痴も言い合ったりするし、社内に流れてる他愛無い噂も、話題に上がる時がある。切り出すのは大抵桃井さんから。

桃井さんは社内のおちらこちらで流れている噂を拾うのが、やたらと早い。デマもあるようだけど、大半は事実らしい。少しばかり脚色されていることもあるようだけど、噂話っていうのは大抵そういうものだろう。

仕入れてくる情報は個人情報が多い。色恋沙汰の噂話にはとくに敏感で、さらにまたそれを「ねえ、知ってる知ってる？」と話したがる。悪気があるのかないのか、わたしには判じかねるけれども、先輩の浅田さんなんかは、「あの子の噂好きにも困ったもんだ」と少々辟易した顔をしている。

桃井さんは目敏いんだと思う。女特有っていい勘も働くし、好奇心も強く、行動力もある。

情報通を、おそらくは自負しているらしい桃井さんは、得た情報の確認を怠らない。気になったことは即確認したがるし、話したがるようだ。

本日、情報収集に余念のない桃井さんの標的になったのは、社員食堂から戻ってきた、高倉主任だった。

「あつ、高倉しゅにーん！」

桃井さんは弾むような声で高倉主任を呼ばわった。



「高倉主任、ちょっと聞きたいことがあるんですけどお」「え?」

ドアを後ろ手に閉めたと同時に、声高に呼ばれ、高倉主任は戸惑ったような顔をこちらに向けた。桃井さんは上司である高倉主任を、まるで犬でも呼び寄せるように「こつちこつち」とにこやかに笑いながら手招きをした。

おおらかな高倉主任は苦笑しつつ、桃井さんの呼び寄せに応じてこちらにやってきた。「何?」と尋ねる声に陰しさはないけれど、桃井さんの言う「聞きたいこと」が仕事に関することではないと察したようで、高倉主任の目に、ごく僅かに警戒の色が浮かんだ。鋭さのない警戒だ。やわやわとした態度なのに、近寄せすぎない距離感を常に保っている。

桃井さんは物怖じしない性格だから、たとえ高倉主任の警戒を見て取ったとしても、それがあからさまな拒絶でない限りは、屈託せず、向かっていく。

ちよつと羨ましいほどの積極さだ。

高倉主任は一度わたしの方に視線を流し、そつと目配せをした。ほんの一瞬のことだったけれど、高倉主任としてではなく、維月さんとしてのまなざしがわたしをとらえた。何か言いたそうに唇が動いたようだけど、声にはならなかった。

わたしは慌てて顔を背けた。

今、真正面から高倉主任の顔を見ちゃだめだ。ぜつたい、桃井さんに不審がられる。

とはいえ、顔を背けたままでもまた不審を誘うだろう。

心の中で「平常心平常心」と唱えながら、冷めかけて苦くなったコーヒーを口に含んだ。

幸い、桃井さんの視線は高倉主任に注がれて固定していたから、わたしの動揺は目に入らなかつたはずだ。

「高倉主任、聞きましたよ」

桃井さんはさも嬉しげにニマニマと笑っている。

「高倉主任、彼女できたんですって？」

唐突な桃井さんの言に、わたしはぎょっとし、危うくコーヒーを嘔き出してしまうところだった。

「……っ」

必死で平静を装って、なんとか口内のコーヒーを嚥下したものの、やっぱりちよつと、噎せてしまった。取り繕うように咳払いをし、口元を拭った。

一方、問われた張本人の高倉主任はというと、動ずる様子もなく曖昧な微笑みを浮かべて、泰然としている。さらに勘のいい高倉主任はすぐに桃井さんに訊き返した。

「その情報源は、もしかして田辺？」

「うん、そうです、田辺うちからですよー」

桃井さんはあっさりと認めた。

もしかしくなくても、「田辺つち」っていうのは、営業二課の田辺さんのこと……よね？

「田辺つち」なんて軽く呼ばわるあたり、けっこう親しいんだろうなと推察できる。

桃井さんも交友関係の広い人だから、田辺さんと親しくても不思議はないし意外でもないのだけど、やっぱり少し、驚いた。

他の課の、それも特に男性社員達と、積極的に関わろうなんて思わないわたしと違って、桃井さんは物怖じせず、気軽に交友関係を広げてる。基本的には同世代で、男女問わず。だけど桃井さんは、男の方が話しやすいつて言ってたっけ。

社内の噂話……メインは色恋沙汰だけど、人事に関する事から各課の業務内容の変更増減に関するその他諸々、自分に関わってこない事まで知りたがり、首を突っ込みたがる桃井さんは、「話を広めるのは女の方が早いけど、情報を拾うのは男からの方が確かなのよね」と言ってたことがあった。それで必然的に、男性社員との繋がりが多くなるらしい。

そこまでして社内の人間関係に詳しくなるうって考えがわたしにはさっぱり分からない。それをちらつとこぼしたことがあったのだけど、桃井さんは、

「だって面白いじゃない？」

そう答えて、けるりと笑ったものだ。

これ以上ないってくらい、正直な答えだ。桃井さんはそういうカラツとした明るさがある。

だからかな、桃井さんの噂話好きには少々困ったりもするんだけど、心底辟易するってことはない。大抵話半分に聞き流して、適当に相槌を打っている。先輩の浅田さんにしても、「困ったもんだ」と苦笑するだけで、桃井さんの行状をいちいち咎めたりしない。

お喋り好きな桃井さんの話は益体も無いものがほとんどだから、右の耳から左の耳へ抜けさせてしまっても大して支障はない。

とはいえ、やはり聞き流せない場合もある。たとえば「高倉主任」のことが、そう。

表面上は興味なさげな顔をして、焦りなんて見せないようにして……つもり……なんだけど、内心では桃井さんの口から「高倉主任」の名前が出るだけでひやひやしてる。平静を装うのも一苦労で、うまくいつてる自信がない。

桃井さんというのと、焦りを必死に隠すわたしなど気にも留めず……というか、気付いてもいないようだ。高倉主任に詰め寄り、その顔を窺うことに余念がない。

わたしは心中穏やかではいられず、けれどそれを表面に出すまいと、口の端をきつくしめている。我ながらなんて不器用なんだと思うのは、こんな時だ。

「田辺っちは確かな情報って言ってたけど、ホントのところ、どうなんです、高倉主任？」

プライベートな話題をふられても、高倉主任は不快な顔をしない。ちよつとだけ困ったような顔はするけれど、

「それを知ってどうする。君には関係ないだろう」  
なんて冷たくはねつけたりはしない。

高倉主任は、煩わしげでも楽しげでもない、曖昧な微笑を面貌に貼りつかせ、いささかも動ずることなく、さらりと答えた。

「いるよ、彼女」

答えてからも、高倉主任はわたしの方をちらりとも見ない。見ないようにしてくれてるのだと思う。

わたしはといえば、高倉主任の一言に胸を高鳴らせ、とっさに視線を逸らしてしまった。　頬が、熱い。

「そっかぁ！」

桃井さんは満足げな声をあげた。

「へえ、そつかそつか、いるんだ、彼女お。へええつ」

桃井さんはなぜかやたらにはしゃいでいる。新情報がデマじゃないと分かったのが嬉しいのか、それとも同僚達に話すネタができたことを喜んでるのか、たぶん両方だとその思うけれど、ともあれ、「色恋」の話題は桃井さんを生き生きとさせる。

さあ、ここからが桃井さんの本領発揮。もつと詳しく追及すべく、桃井さんは押し迫るように身を乗り出した。ところが、高倉主任はかわし上手だ。

桃井さんが問いを重ねてくる前に、にこりと笑んで、制した。

「そつそつ、桃井さん。田辺といえば」

高倉主任の話の逸らせ方は強引だ。けど話の腰を無理に折ってしまふような強引さではない。

「僕も聞いたよ、田辺から。桃井さん、彼氏できたって？」

「へっ？」

同じ問いを返されて、桃井さんは目をぱちくりとさせ、それから憤然と声をあげた。といつても本気で怒ってるって顔はしてなくて、口元は笑いを隠せないといったように、緩んでる。

「んもおおつ、田辺つちめえっ！ なにポロツと喋っちゃってるかなあつ？！ って、そりやまあ別に口止めはしてなかったけどさあ！ 話すの、早すぎ！」

「そついえば口止めはされなかったなあ」

高倉主任は目を細め、愉快げな笑い声をたてた。

ここでもう、会話の主導権は高倉主任の手に渡ったとわかっていい。高倉主任は普段、他人のプライベートに関してあれこれと詮索する人ではないけれど、相手に合わせた会話もできる人だ。相手のペーイスにうっかり乗せられるということも少ない。それに、たとえばんな話であれ、下世話になりすぎない加減も心得ている。女性社員が多いこの現場にいるお陰で、色々と慣らされたのだと、以前高倉主任は苦笑まじりに語ったことがあった。

高倉主任の、心意を悟らせない表情の曖昧さは、経験の積み重ね

の結果なのだろう。

プライベートでの高倉主任にも、その名残はある。だけど、やっぱり会社での顔は作ったものなんだと、改めて気がついた。

高倉主任は掴みどころのない微笑を崩さず、言葉を継いだ。

「田辺はさすが桃井さんだって感心してだし、あと、羨ましがってた。コンパで知り合ったって？」

「そうなんだ、桃井さん？」

さっきまで、我ながら不自然だと思う程にだんまりを決め込んでいたわたしは、すかさず高倉主任の話に便乗し、会話に加わった。

ずっと黙ったまま、神経を張っていたからさすがに気詰まりだった。話の流れが変わって、やっと息がつけた。

「全然知らなかった。いつの間に？」

「うん、できちゃいましたよ、めっちゃ最近なんだけど」

高倉主任に話を逸らされたことにムツとするどころか、すっかり上機嫌になって、相好を崩しまくってる。

わたしはつい忍び笑ってしまった。そんなわたしに、高倉主任は悪戯っぽい笑みを見せ、軽く小首を傾げた。「大丈夫、安心して」と、目で合図をしてきた。わたしは内心ひやりとしつつも、ほっと小さく、嘆息した。

こういう時、高倉主任には敵わないってしみじみと思う。

桃井さんだけじゃなく、わたしも、高倉主任の掌の上で転がされちゃってる。それがあまりにさり気ないから、かえっていい気分になっちゃったりするんだ。

高倉主任って……ほんと、曲者だ。

桃井さんは、高倉主任の「彼女話」なんて忘れ去ってしまったがごとく、自己語りに浸り始めた。

「ほらあ、もうクリスマスシーズンでしょ？ さすがに独りは切ないなあって思ってたコンパ行きまくってた結果、いい感じに出会えますよ」

半年経つか経たないかくらい前に、彼氏と別れてフリーなのだと

言っていた桃井さんは、今までもそうだったようだけど、「フリー」でいる期間が短い。それでも今回は長かった方じゃないかな。

「しかも、なんと初の年下！」

と、桃井さんは自慢げだ。「彼、幾つなの？」とわたしが訊くと、桃井さんは鼻高々に二十歳の大学生だと答えた。

それから、その彼氏とのコンパでの出会いから現在に至るまでの経緯へと話が膨らむところだったのだけど、昼休憩がそろそろ終わりに近いことに気づいて、わたしは遠慮がちに水を差した。

「ね、桃井さん、もう昼終わるけど、タバコ、行ってこなくていいの？」

「うっわ、もうこんな時間っ?! ちょっと、喫煙場行って来る！」  
愛煙家の桃井さんはタバコの入ったポーチを掴んで立ちあがり、時間を確認しつつ、場を離れた。

桃井さんは結局、高倉主任の「彼女話」の詳細を聞き出せずに終わった。一服してる時に、それに気付かなければいいけれど。

わたしはちらりと、高倉主任を見やった。

維月さんは「やれやれ、相変わらず慌ただしいな」とでも言いたげな顔をして、桃井さんの去って行った方に目をやっていた。田辺さんに、できたての彼氏話を口止めしなかったように、桃井さんは高倉主任にも口外を禁じなかった。口止めの必要がないからってこともあるだろう。

高倉主任もまた、桃井さんに口止めしなかった。その暇もなかったといえはそれまでなのだけど、口止めしようとする気配もなかった。田辺さんにも、きつと口止めしてないんだろう。

彼女がいる。そのこと自体は隠すようなことじゃないもの、当然だ。

だけど……わたしには？

ふと、小さな悪戯心が湧きあがってきた。少しだけ、心に余裕が生まれたのかもしれない。それはきつと、高倉主任の……うっん、「維月さん」のおかげだ。

「あの、わたしも」

桃井さんが去ってすぐ、わたしも「今のうちに、わたしもお手洗いに」と立ち上がった。一応高倉主任に声をかけて、席を離れた。

高倉主任は「うん」と応えただけで、わたしを引き止めたりはしない。ただ少しだけ、何か言いたそうに口元が動いたように見えた。わたしが振り返ってみた時、高倉主任はもう自分のデスクに向かっているところだった。首を伸ばして嘆息し、それから胸のポケットにしまっていた携帯電話を取り出した。電話をかける様子はなく、メールチェックをしているようだ。

わたしは小走りになつて廊下に出、携帯電話を片手に持ち、開いた。ちよつと考えてから、指を動かし始める。

メールの送信先は、高倉主任。

『高倉主任へ』と、件名にいれた。そして、お願いしますと、文をつづつた。

『わたしにだけこっそり教えてもらえませんか？ 彼女の名前を知りたいです』

すぐに返信が届いた。わたしの意図を察してくれた高倉主任……

維月さんからの返信文は、短い。

『どうしても？』

『どうしても知りたいです』

『そんなに知りたい？』

『知りたいです』

子供っぽい押し問答に、わたしは小さく笑った。

そんな他愛無い維月さんの焦らしに、くすぐったい心持になり、自然と口元がゆるんでしまう。

このまま焦らし合いを続けるのも楽しいだろうけど、もうタイムリミットが迫ってる。

あと二、三分で昼休憩は終わる。それを維月さんも分かっ



今度はひどく直球な一文を返してきた。

『木崎美鈴、という。とても可愛い、大切な彼女だ』

「……………」

維月さんの声が耳元で聞こえてきそうな、そんな一文。

頬が火照りだしてきて、眩暈がした。すぐに返信しようと思ったのに、指が止まってしまった。

ほんとうに、維月さんはずるい。敵わない。

気の利いた台詞一つ思い浮かばない。けれど、わたしは再び指を動かさず、維月さんに返信した。

『口止めしないでいいんですか？　もしかしたら口が滑っちゃうかもしれません。そしたら、逃げちゃうかもしれませんよ？』

まるで、下手な脅し文句みたい。

自分で自分がおかしかった。口が滑るなんてこと、たぶん……ないし、逃げちゃうなんてことは、ありえない。

滑っても逃げても、困るのはわたしだけだろうに。

だけ。……　本当のところ、維月さんはどうなんだろうって

思った。思ったから、ちょっと脅してみたくなっただ。

わたしが逃げたら維月さんはどうするのだろう。逃げたらどうしようって、少しは……焦ってくれるだろうか。

あの日の、あの夜の維月さんの激しい抱擁を思いだしていた。維月さんの表情を曇らせたあの焦心を、もう一度見たいと……知りたいたと、期待してしまった。

悪戯なんて可愛いものじゃない。余裕だって、やっぱりちょっとしか持てない。

これは独占欲だ。あの夜と同じ、浅ましい本音。

維月さんは、そんなわたしの気持ちを引きつけてくれたのだろう。勘のいい、聡く優しい人だから。維月さんはいつだってわたしの我儘を叶えてくれるし、期待以上のことをしてくれる。

維月さんからの返信文は短かった。挑んでくるような、それでい

て包容力のある、維月さんらしい一文だった。  
『逃げられては困るから、今夜、口止めしに行くよ』

その夜、維月さんを訪ねてくれた。いつもよりは早めに上がったとはいえ、やはり残業はあって、維月さんがわたしのアパートに着いたのは、すっかり夜も更けた頃になってからだだった。

結果的に維月さん呼びつけるような真似をしてしまったことを悔いて、わたしは身を縮こまらせて謝った。そんなわたしの心を軽くしようと気遣って、維月さんは、

「よかった、逃げられてなくて」

冗談めかして、そう言った。

おどけたような口調だったけれど、維月さんは本気で安堵してるようだった。わたしを抱きしめる腕の力も、それを語ってた。

「逃げられたら口止めしようにもできないし、焦ったよ。間に合ってた良かった」

「……わたしこそ、待ってて良かったです。それにもう、……」  
わたしも強く抱き返して、「逃げられそうもありません」と言っ  
て顔を上げ、笑った。「離さないでください」、それを言外に  
語った。維月さんは、分かってくれたと思う。

そして維月さんは宣言通りに、わたしの口を塞ぐ。巧みに舌を使  
い、ひどく艶めかしく、甘やかに。

「美鈴」

と、“高倉主任”がこっそりと教えてくれた“彼女”の名を繰り返  
し囁きながら。

## 逃げるな危険 1

今までずっと、逃げ続けてきた。  
たとえばそれは、関わりたくないと思う現実や辛い過去、  
してわたし自身。

逃げちゃいけないと思う気持ちもあるのに、わたしはもうほとんど無意識のうちに逃げの態勢に入っていて、それが「癖」のようになっていた。

どうしようもなく、今までずっとそうして逃げてた。

そう、今までは。

そんなわたしの腕を掴み、抱き寄せ、「逃げないで」と引き止めてくれる人が、今はいる。

まだうまくはいかない。逃げてしまう時もある。

けれど、わたしの弱さもそのままに受け入れて、さらに立ち向かっていけるよう支え、促してくれる人を失望させたくない。

その人を……維月さんを失いたくない。

「逃げてもいい時はある。ただ、気をつけた方がいい」

維月さんは微笑して言った。口調は優しくかったけれど、まなざしはひどく切なげで、蠱惑的でした。維月さんのその瞳には、いつも惹きつけられる。

「逃げ続ける方がかえって危ないこともあるから」

維月さんは頷くわたしの手を掴み、意味ありげに微笑んだ。

十二月は会社的に忙しい月にも関わらず、忘年会は恒例行事として毎年必ず開かれる。

日程は十二月二十九日と決まっている。暮れと正月の連休始まりが、うちの会社は二十九日からのんだけど、その二十九日を忘年会日にしている。かつては不満の声も多く上がっていたようだけど、上からの命令でことで黙殺された……らしい。

会社の行事だから、社員はほぼ強制参加。だから二十九日は連休スタートの日ではあるんだけど、実質的には三十日が連休開始日になっている。お正月の三が日は休み。出勤日はカレンダーに従っているので、たとえば四日が土曜か日曜なら、その翌週の月曜日が仕事始めの日になる。

実のところ、忘年会は強制参加とはいえ、参加できない社員も少なからずいる。私的な理由で参加できない人もいるだろうけど、仕事の都合で無理な人もいるようだ。短時間だけ顔を出し、早々に引き揚げてしまう人もいる。それは平社員よりもむしろ上部の人の方が多かったりするみたいだ。

一方で、パーティや派遣社員は希望参加。思いのほか、参加率は高い。

希望参加だからもちろん不参加だって構わないのだけど、なんだか半強制って感じがして、断りきれない雰囲気がある。だからわたしも毎年参加してた。毎年といったって、まだ二回しか参加していないのだけだ。

忘年会の会費は当然徴収される。わりと良心的な金額だ。とくにお酒をめいっぱい飲む人的には。わたしも、元はとれてたと思う。お酒だけじゃなく、料理もけっこう堪能したし。

十二月の半ばになって、参加の可否を書きこむプリントが回ってきた。

参加に丸印をつけようかどうか迷っていたところに、同僚の桃井さんがやってきて、

「木崎さん、今年の忘年会も行くよね？」

と、先手を打ったように訊かれた。桃井さんの大きな瞳がわたしを見つめてくる。

「うん、……一応」

勿体ぶるつもりはないのだけど、曖昧に応えた。

桃井さんは丸印をつけかねているわたしのことなどお構いなしの様子で、「あたしんところにも丸印つけといてー」と頼んでくる。

「毎年会場を変えてるあたり、不景気だ何だといいつつ、けっこう気前いいよね、うちの会社って。いつそ新年会もやってくれたらいいのに。ね、そう思わない？」

「……………」

わたしは「それはちよつと……………」と苦笑した。桃井さんはノリの悪いわたしにちよつと失望したような顔をしたけれど、責めてきたりはしなかった。

「ま、新年会は個人個人でやるからいいんだけど。ああもう、年末年始はあれこれ費用がかさむよ、まいっちゃう」

「うん、ほんとそうだね」

これには心から同意できて、わたしは大きく頷いた。

出費の多い季節だから、忘年会もお財布的に少し厳しかったりもするのだけど、ともあれ、わたしは桃井さん同様、今年も参加することにした。わたしの所属しているサポート課の派遣社員の子達は、全員参加すると桃井さんからの情報も決め手になった。

これじゃあ、不参加に丸印なんかつけられない。

社交的な桃井さんは、他の課にも仲の良い人が男女問わずたくさんいる。だから会社の忘年会といっても、わたしと違って義務的な感覚ではなく、積極的に参加してる。二次会も三次会も。

「今年はとくに楽しみ！ 飲み会の場所、ほらあ、ここのホテルのレストランの料理、おいしいって評判なんだよねえ！」

と言って、桃井さんはきれいなピンク色のマニキュアで彩られた爪で、持ってきていたグルメ雑誌の表紙を軽くはじいた。

見せてもらった雑誌は地域限定のグルメ情報誌で、わたし達が参加する会社の忘年会の会場はページの二ページを使って紹介されて

いた。

「このホテルのカフェなら、前に友達と行ったことある。雰囲気もよかったし、ケーキもおいしかったよ」

わたしがそう言っていると、桃井さんは「へえ、そーなんだ」と興味があるようなないような反応を示した。

「今度、彼に連れてってもらおうかなあ」

桃井さんはダマ一つなくカンペキに塗られているマスカラに縁取られた大きな瞳をぱちぱちと瞬かせ、「これ、たっかーい！　ありえなくいい！」とか「これおいしそう、食べたい！」とか、いちいち声に出しながら、記事を追っている。

わたしもそれに相槌を打ったり合いの手を入れたりしていた。そうして概ね、聞き手にまわっていた。

その後、話は会社の忘年会から逸れ、桃井さんの新しい彼氏の惚気話やここ最近の職務の愚痴話になった。さら傍にいた同じ派遣元の子達も話に加わってきたものだから、話はあっちこっちに飛びまくり、けれどまた忘年会の話に戻ってきた。半ば強引に戻したのは、桃井さんだ。

忘年会の日までまだ数日あるというのに、桃井さんはもうすっかり飲み会モードに入ってるみたい。

「忘年会、楽しみ〜。飲みまくるぞーっ！　そしてあれこれ聞きまくるぞーっ！」

桃井さんのその発言に、わたしは防衛の強化をはからねば、と改めて思い、こっそりため息をついた。

会社の飲み会って、結局は仕事の延長線にあるものだから、たとえ「無礼講で！」と言われたって、そんなあっさりとは割り切れな

い。

桃井さんみたいに割り切るも割り切らないもなく、最初から自分のペースで楽しむ人もけっこういるけれど、義務的に参加してる人も多い。実際、「めんどくさい」とこぼしている人もちらほらいた。わたしはというと、やっぱり義務的な参加だ。大人数での飲み会は気楽な部分もあるのだけど、無駄に気を張ってしまつて、神経をすり減らしてしまうから、ちょっと苦手だ。

それでも、少しは楽しみな気持ちもあつたし、同じくらいに憂鬱でもあつた。

そんな気分を抱えたまま迎えた、忘年会当日。

前回の忘年会でもそうだったけれど、今回の忘年会もわたしの定位置は先輩の浅田さんの傍。忘年会が始まつてしばらくは、浅田さんもあちらこちらへと身軽に立ち回つていて、わたしもそれについていって、普段あまり接することのない人達にも挨拶をし、声もかけてもらった。

勤労主婦の浅田さんは、桃井さんとはまた違った意味で社内に顔が広い。勤務歴が長いから、というだけでもなさそうだけど、上の人達とも親交が深い。直属の上司だけじゃなく、他の課の上司達とも親しげに言葉を交わしていた。

けれどやっぱり一番親しくしているのは、直属の上司にあたる、高倉主任だ。だから浅田さんの近くにはごく当たり前に高倉主任がいる。

今もまた、一通り挨拶回りを済ませてきたらしい高倉主任が、浅田さんとわたしのもとにやってきた。

高倉主任は、濃いグレイのスーツ姿だ。ぴつちりと細身のシルエツトで、足元もシャープで艶のある靴で決めている。レースアップのショートブーツのようだ。ジャケットの下のドレスシャツは白色ネクタイはシルクの光沢が美しいパープルとヴァイオレットとグレイのストライプ。もちろん派手ではなくて、全体的に落ち着いたスタイルにまとめてる。だけど、会社での高倉主任とはまた違った雰

困気だ。

わたしも浅田さんもパーティー用のスーツを着てる。浅田さんはかっちりとしたパンツスタイルで、わたしは淡いピンクのワンピース。無難なパーティー用ドレスってところ。

「巡回、お疲れさん」

浅田さんは高倉主任にねぎらいの言葉をかけ、同時にビールのジョッキを差し出した。

「まずは一献……ってどうか、ひとジョッキ！」

「いや、もうジョッキはさすがに……」

高倉主任は苦笑いして差し出されたジョッキを押し返そうとしたけれど、それを浅田さんが許すはずもない。「ほほう？」と高倉主任を睨みつける。

「わたしの酒を断るとはいい度胸だね、高倉くん？」

「あ……、はい。有り難くいただきます」

浅田さんと高倉主任は、いつもこんな感じだ。そしてわたしは横でくすくすと忍び笑っている。

ちなみに、今回の忘年会はバイキング方式だ。席はあらかじめ割り振られていて、そのテーブルにもある程度料理は並んでいる。席に座って落ちついていられるのは最初だけで、常務やら部長やらの簡単な挨拶が済んだ後は自由行動になって、席で落ち着いていられる時間は短い。もちろん、どっしりと席について、せっせと料理を食べまくる人もいるのだけど。

わたしは浅田さんに連れられるような形で、会場内を巡った。上役の人達にお酌をさせられるようなことは、浅田さんがいたおかげでなかった。とりあえず「お疲れさまでした」とお辞儀をして、あとは他愛無い会話を少ししたくらい。

さつきまで普段喋らないようなお偉いさん方への挨拶回りをしていたせいで少し気が張っていたのだけど、ここにきてようやく緊張がほぐれた。

「木崎さんも、元を取るつもりでちゃんと飲んで食べなね？」



「はい。もうばっちり食べてます」

浅田さんは大皿にきれいに盛られたオードブルの中から、千枚漬とスモークサーモンのミルフィーユ風サンドを選び取ると、ぼいと口の中に放りいれた。

高倉主任も何か食べたそうだったから、小皿にヤマイモとマグロのサラダと、イカゲソとタコの卵白衣揚げを適当に持ってきてあげて、箸と一緒に渡した。「ありがとう」と笑った顔は、高倉主任のまままだ。維月さんの面影を無意識的に求めていたわたしは慌てて顔を逸らし、ホタテと大根のミニサンドにフォークを突き立て、口に運んだ。

頬が、ちよつと熱い。

……会場の熱気とお酒のせいってことにしておかなくちゃ！

「……っ」

熱りだした体を少しでも冷やそうと、中身の半分くらい残ったグラスを手にとり、一息に飲み干した。グラスの中身はアルコールだったから、体温を下げる効果はないと分かっていたのだけど、とりあえず、融けずに残っていた氷のおかげで、口内と喉はすっきりと冷えた。

頬は熱いままだった。

## 逃げるな危険 2

浅田さんは飲み食いを怠らず、手と口を如才なく動かしながらぐりりと宴会場を見回して、それから高倉主任に話をふった。

「今年は何人潰されると思う？」

「潰されるのは二次会になだれ込んでからじゃないかな。一応、終了時間も決まってるし」

「ここじゃ挨拶回りがメインだから、潰そうにも潰せないか。けど、潰されるの承知で絡んでってるよねえ」

「まあ、飲まされて潰されるのも接待の一つになってるから。酔わせるのを楽しんでる輩に近づいてる時点で覚悟完了してるだろうし。それに毎回潰されるメンツは大抵決まってる」

「だよな。他に被害が広がらないから助かってるっちゃ助かってるか。いやあほんと、サラリーマンはたいへんだね」

からからと笑う浅田さんに、高倉主任はやれやれと肩を竦めてみせる。「他人事だと思って」とでも言いたそうな顔をしている高倉主任は、入社したばかりの頃はやはり何度か潰されたらしい。

酔っぱらった高倉主任って……想像もつかない。

浅田さんと同じく、今は潰す側に入ってるから、泥酔した高倉主任って見たことがない。……どんな酔態になっちゃうんだろう？

「飲ませまくって潰してしまふのは、リスクもあるけど、一概に悪いとも言えないから止めようがないな。目に余るほどひどいのはさすがにストップかけるけど、それでかえって煽るような結果になったりもするから、けっこう難儀だ」

歎息まじりに言う高倉主任に、浅田さんも首肯して応じた。

「そうそう、特に女子はね。一応は目を光らせてるんだけど、取りこぼしもあるし。かといってあまり無粋なこともしたくないから難しいところよ」

浅田さんって、つくづくと姐肌あねむしというか世話焼き体質なんだと思

う。だけど決して押しつけがましくなくて、他人のプライベートに不躰に入り込んでくることは決してない。浅田さんのそういうきつちりと一線を引いた世話の焼き方は、わたしには有り難かったし、安心できる。

それは高倉主任もそうだ。

目端が利く、というのか。自分のことを疎かにせず、なおかつ周囲に気を配る余裕も保っている。……余裕があるように見せかけている。

感情的なところを周囲の人たちに見せない高倉主任だけど、それだつてわざとそうしているんだつて、最近ではなんとなく分かるようになった。

桃井さん達が高倉主任を評して、「何を考えてるのかよく分からない人」つて言つてたけど、高倉主任は意図してそうしてるんだ。

もちろん思考の全てを隠してるわけでもない。適度に晒し、適度に隠してる。

会社にいる時とプライベートの時の顔を明確に分けているはずなのに、境目をはっきりと見せない。切り替え方があまりにスムーズで、さり気ない。

そういう器用さのある人だ。

本人は、「そうでもない」なんて苦笑していたけれど。

そんなこと、あると思う。

プライベートでもそう感じるもの。隠されてる気はしないけれど、なんだろう……？

でもそれは、わたし自身に原因があるのかもしれない。怯えからくる不安感なんだろう。

そう、いつだつて原因はわたし自身にあるのだから。

空になったグラスを持ったままぼんやりしてるわたしを現実引き戻すように、浅田さんがぼんつと軽く、肩を叩いてきた。

「こついう無礼講の場つてのは、やたら積極的になつて、そのうえ酒のせいにしていろいろぶつちやける子もいるから、気をつけない

と。ね、木崎さん？」

「は、はいっ?!」

いきなり名を呼ばれ、反射的に返事をしたものの、声が裏返ってしまった。

は…恥ずかしい…っ!

「ほら、そうやってぼーっとしてるところを狙われるから」

「ね、狙われるって、そんな……。わたしなんか……。狙うとか、そういうのあり得ないですから」

「相変わらず危機感ないねえ、木崎さんは。どうよ、高倉くん？」

こういう子は気をつけてあげないと」

「浅田さんががちりガードしてるから大丈夫……とは言い切れないかな？」

高倉主任は忍び笑いを口元に浮かべて、さらりと言う。

「あ、あの……っ」

わたし一人だけが、みっともなく慌てふためいている。大丈夫ですよって愛想笑いをすればいいだけのことなのに。

浅田さんは別段深い意味を含めて言ったんじゃない。酒の席での他愛無い軽口にすぎない。そんなことはわかってる。

それなのに、胸がちくちくちと痛い。ざわついて、苦しくなる。

高倉主任。……どうしてそんな風にこともなげにさらりと流してしまえるの？

わたしはこんなにも動揺してるのに。わたし達のこと悟られやしないかって。……たしかに浅田さんになら話してもいいっていうか、いずれはちゃんと話そうって思っではいるにしても、こんな場では打ち明けたくない。大勢の人が聞き耳をたてているかもしれない、こんな場所では。

今の今まで、ぼんやりとおも惟みていたのが高倉主任のことだっただけに、わたしの狼狽は大きい。

切り返しの言葉が浮かばず、二の句を詰まらせていた。こんな時、不器用な自分が心底嫌になる。

「……………」  
落ち着かなげに視線を泳がせていると、高倉主任と目が合ってしまった。

違う。一瞬だったけれど、わたしに向けられたまなざしは高倉主任のものではなく、「維月さん」のものだった。すぐに逸らされたけど、その瞳は申し訳なさげな、そして宥めるような優しいものだった。

酔っていないはずなのに、頬が熱くなってきた。胸がきゅゅと締めつけられる。

「ごめんなさい、維月さん。」

心の中で謝った。

維月さんのこと責めてる自分に気が付き、途端、情けなくなった。わたしのことを気遣ってくれて、その上申し訳なさげな顔をさせてしまったなんて、わたし、最悪だ。……申し訳ないって思わなきゃいけないのは、わたしの方だ。

「……………」

ああ、いけない。だめだ！ 暗い顔してたらもつと心配させてしまう。それに浅田さんにも不審がられちゃう。

なんとか気を紛らわそうと、わたしはつまみをせつせと口に運んでは咀嚼し、胃に流しこんだ。

そんなわたしをどう見て取ったのか、高倉主任は小さく笑いつつ、「木崎さんのグラス、空になってる。持ってくるよ。同じものでいい？」

と、訊いてきた。

まさか上司にお酒を持ってきてもらうわけにもいかないと遠慮しようとしたのだけど、すかさず浅田さんが「わたしのもお願い。生で」と言い、高倉主任も「ついでだから」なんて言うものだから、結局断りそびれてしまった。

浅田さんは高倉主任からジョッキを受け取ると、もう十分に潤ってるだろう喉に冷えた生ビールを流しこんだ。「ぷはっ」と息を継ぐ浅田さんに、高倉主任が「相変わらずいい飲みっぷりだ」と、からかう。

わたしは乾杯の音頭の時に空けた生ビールの後は、ジントニツクを持ってきて、それを飲んでいて。挨拶回りをした時に何杯かビールを注がれたけれど、さりげなく残してきたり、飲むふりをしてごまかしてきたりしたから、量的にはまだそんなに飲んでいない。今は高倉主任がわざわざ持ってきてくれた二杯目のジントニツクをちびちびと飲んでいる。

「浅田さん、それ、何杯目？」

尋ねる高倉主任こそ、今持つてるグラスで、何杯目なんだろう。

浅田さんもそうだけど、高倉主任の表情は全く平常で、酔っぱらった様子も見られない。

三人で飲みに行っていた頃から、二人が“ザル”ってことは知っていたから今更驚くことでもないのだけど。

「さあ？ いちいち憶えてないわ、あちこちで飲んできたし。木崎さんは、今日はけっこう控えめだね？」

「ええ、まあ。今夜は食べるのをメインで来てるから」  
「なるほど。ここの料理、たしかに美味しいもんね」

浅田さんは得心がいったというように笑い、そしてまた手近にあったつまみを口に運んだ。薄くスライスしたカブに焼き蟹を巻いてある一口サンド。これはわたしも気に入って、たくさん皿に乗せてきた。高倉主任も食べている。

その他にもいろいろと小料理を皿に盛ってきたのだけど、さっぱりしたものばかりになってしまった。じゃこ豆腐、トマトのサラダにかかっているピリ辛のドレッシングは絶品だ。ごま油がベースになってるようだけど、薬味は他に何を使ってるんだろう？

「あ、わたしトマトだめだ。それ、却下。木崎さん、食べといて」  
「あれ、そうでしたっけ？ このサラダ、美味しいのに」

「もう、木崎さん、野菜物ばかり持つてくるんだからなあ。肉はないの、肉、肉！ カルビとかタンとかホルモンとかさあ！」

「いや、浅田さん、ここ焼き肉屋じゃないんだから」

高倉主任につっこまれ、けれども浅田さんは「えーっ、けど食べたい」と不満げな声を漏らす。

そんな風に、しばらくの間、わたしと浅田さん、高倉主任との三人で気楽に歓談していた。けれど高倉主任は立場上、一つ所にじつと腰を落ち着けているわけにもいかず、再び、浅田さんが言うところの「巡礼の旅」に出ることとなった。

高倉主任は「ちよつと行つてくるよ」と嘆息まじりに言ってから、グラスに半分ほど残っていたジントニックを一息に空けた。

「いつてらっしゃい」と声をかけ送り出したわたしと浅田さんに、高倉主任は「また後で」で片手を上げて合図をし、そのまま賑わいの中へ紛れ込んでいった。

その後、高倉主任と入れ違うように、浅田さん目的の女の子達がやってきた。わたし達と同じ課の子がほとんどだったけれど、派遣元は同じだけど別の課にいる子達もいた。その子達をまじえて、しばし語らっていた。

ふと、時計に目をやった。

忘年会が始まって、もう二時間近くが経つ。

宴もたけなわ、という状態で、会場は雑然と賑わっている。そろそろ二次会はどこだという話題も上がっているようだった。

わたしは、今までもそうだったけれど、二次会には出席しない。今回は珍しく浅田さんも行かないと言っていて、ちよつと気が楽になった。二次会を遠慮する人は女子に多いけど、男性社員にも幾人かいるようだった。

二次会は強制参加じゃない。むろん、二次会に会社は関与しない。ただ、飲酒運転等の違法的行為をするなどということだけは、くどい

ほどに念を押している。会社の信用を落とすことだけは絶対するなと厳命するのは、至極当然だ。「会社の信用とか、それ以前の問題だよ」と浅田さんが言うように、「違法的行為はするな」ってことは、どの社員も心に留めているはず。

それはさておき、二次会に関してだけど、二次会の場所は何箇所かに分かれ、仲のいい人達が集まって、それぞれ飲みに行ったりカラオケに行ったりするらしい。

そういえば、高倉主任は行くのかな、二次会。どうするのか聞いてなかった。

でも、つき合わせさせるんじゃないかなと、予想はつく。去年も二次会どころか、朝まで付き合わされたって言っていたし。立場的に断れないだろう。もしかして積極的に参加して、あるいは仕切ったりするのかもしれない。

あとで、メールで確認してみよう。

そんなことをぼんやりと考えつつ、化粧室から出てきたところだった。

「やあ、木崎さん！」

と、不意に声をかけられた。聞き覚えのある、陽気な声だ。

「え？」

反射的に振り返り、そこに見つけたのは営業二課の田辺さんだった。



### 逃げるな危険 3

「やあ、木崎さん！ 来てるのは知ってたけど、今日、顔合わせるのは初だね」

田辺さんはニカツと歯を見せて朗らかに笑い、足取りも軽く、こちらに歩み寄ってきた。

「こんばんは」と我ながら物堅い挨拶をすると、田辺さんは眉を下げて、ちよつともどかしげな顔をした。けれど笑顔は崩れない。営業スマイルが板についている、というより癖になっているんだろうか。

「これだけ人数がいるとどこに誰がいるやらさっぱりだよね」

近づいてきた田辺さんからはお酒と煙草の臭いがした。……少し、きつい。

「そうですね」

わたしは詰められた距離に戸惑いながらも、無難に相槌を打った。田辺さんが言うように、今夜の忘年会の参加者の総数は多い。

正社員は半ば強制参加だからほぼ参加してるだろうし、派遣社員やパートは自由参加とはいえ、存外出席率が高いらしく、参加総数は百はゆうに越えている。

わたしは浅田さんや桃井さんみたいに顔は広くないし、交友関係も狭い範囲で限られてるから、たとえば同じ派遣元から来た人達でも、課が違えば普段顔を合わせることもほとんどなくて、積極的な交流も持たないでいる。

それは社員でも同じことで、顔だけしか知らなかったり、名前だけは聞き知っても顔までは知らなかったり、顔も名前も見知っていないけど、一言も喋ったことがなかったり挨拶しかしたことがないって人が多い。

田辺さんも、ちよつと前までは関わりのない人だった。偶然、浅田さんを介して話すようになったけれど、ただそれだけで、親しい

間柄になつたわけじゃない。

田辺さんは忘年会以外の飲み会で、数度、わたしと顔を合わせたことがあるよと言つてた。その時に少し話もしたらしい。……でも、たぶん挨拶をかわした程度だったのだと思う。

飲み会の席だけじゃなく、会社内でも田辺さんとは顔を合わせるこつてなかつたように思う。田辺さんは外回りに出ていることが多いようだし。営業二課の田辺さんとはもともと接点なんてなかつた。

もちろん社内で見かけることはあつた。田辺さんという人を個人認識していたわけではなく、営業課の人だつていう程度。

高倉主任と一緒にいたから、目に留まっていた。「あの人は高倉主任と親しいんだ」と、わたしが一方的に見ていただけで、話しかけたりなんてしなかつた。

それなのに田辺さんはわたしの顔と名前を、きちんと一致させて憶えていてくれた。

どうしてなんだろうつて不思議だつたけれど、考えてみれば、それほど不思議でもないのかもしれない。

田辺さんは、浅田さんとも桃井さんとも親しい。二人からわたしの名を聞いたつて可能性は高いし、浅田さんと一緒にいることの多いわたしだから、自然と視界に入っていたんだろう。

田辺さんは誰にでも気安く接せられる、人懐っこくてマメなタイプの人みたいだから、見知つた顔程度のわたしにも、見かけた以上は声をかけなくちゃつて思つたのかもしれない。

「そういえば田辺さん、もう浅田さんのところには行かれました？」「うん、ついさつき顔出してきた。で、駆付け三杯は軽くいつてもらおうか、とかつて麦焼酎三杯飲まされたよ。周りにいた子達にも囃されてさあ！ さらに強い飲まされそうだったから、なんとかテキトーに理由つけて逃げだして、現在に至るつてワケ」

田辺さんのおどけた口調にわたしもつられて笑い、それから冗談めかして、

「それは大変でしたね。おつとめ、ご苦労様でした」  
と、畏まってぺこりと頭を軽く下げ、田辺さんの苦労を労ってあげた。

田辺さんは「痛み入ります」と、わたしにお辞儀を返してから、パツと明るく相好を崩した。

田辺さんは泥酔とまではいかなくとも、ずいぶんと酔いが回っているみたいだった。顔と言わず耳も首も赤くなって、たれ目がさらたれて、とろんとしている。

アルコールという潤滑油が大量に入ったおかげか、それとも元からか、田辺さんの舌はとめどもなく良く回る。

「しっかし、ほんと参るよなあ」

田辺さんはすでに緩めていたネクタイを解き、襟元をくつろげるため息をついた。

「さつきもさあ、ちよつとの間、高倉さんと一緒に飲んでたんだけど、同じくらい量の飲んでたはずなのに、あの人全然平気そうで、顔色一つ変えないんだもんなあ。浅田さんもだけど、あの人達って酒強すぎると思わない？」

「たしかに二人ともかなり強い……みたいですよね」

高倉主任も浅田さんもかなりの酒豪だということは重々承知しているけれど、分け知り顔もできずに、曖昧に答えた。ヘンに怪しまれないといいけれど……

田辺さんは腕を組み、「うんうん」と頷いている。わたしの焦思に気づいていないようだった。

「とくに高倉さんは要注意なんだよね。無理やりとかじゃなく、なんか知らない間に飲まされちゃってるっていうかさ。で、本人は涼しい顔して飲んで。あげくにさあ、まだ空けてないのかとかさらつと言っただから、性質悪いよ、あの人はい！」

本気で憤ってるわけじゃないから、田辺さんの顔は笑ってる。少々苦味の強い笑顔だけど、楽しげにも見えた。

田辺さんと高倉主任は、同期入社ではないようだけど、けっこう

付き合いが長いみたい。友達関係というよりは先輩後輩といった間柄のようで、浅田さんからまた聞きしたのだけど、高倉主任は入社当時営業の方において、それで田辺さんと親しくなったらしい。

会社内での高倉主任の交友関係について、詳しくは知らない。興味がないわけじゃないけれど、あえて聞きだそうとは思わなかった。だから今まで、たとえば浅田さんと一緒に飲みに行っていた時なんかでも、話題に上がった社員さん達の名を特に気に留めることなく聞き流していた。たぶん、田辺さんの名も出ていた。けど顔と名前が一致したのはごく最近。さすがにそれは田辺さん本人には言わなかったけれど、なんだかちよつと申し訳ない気分になったりもした。

このところ、そう頻々とはならないしろ、田辺さんから挨拶の声がかかったりすることが増えたからかもしれない。

それでもまだ田辺さんとの距離感を掴めなくて、返す言葉も笑顔も、ついきちないものになってしまう。

「そういうえば、高倉主任も、入社当時はけっこう潰されてたみたいですよ」

「ええっ、マジで？」

「浅田さんから聞いたんですけど、本人もそんなようなこと言っていましたし……」

「ええっ、そうなんだ！？ 酔い潰れた高倉さんって……うわぁ、想像もつかないな！」

「ほんとですね」

わたしは小さく笑って賛同した。

田辺さんもわたしと同じようなこと考えてたんだ。そう思うとなんだか可笑しくて、親近感もわいた。

維月さんの酔態は艶っぽさが増して、わたし的にはかなりキケンなんだってことは、田辺さんには言えなかったけれど。

それでも、「高倉主任ってズルイよ」って気持ちが田辺さんと同調したせいかな、つい口が軽くなってしまふ。

「酔い潰れるっていつてもきつと、寝入っちゃって起きないとか、そんな感じなんじゃないかな。それとも絡み酒？ そのくらいしか想像つかないですよね」

「へべれけな高倉主任って見てみたいけど、それってアレだよ、怖いもの見たさ的な」

「そうかも！ ちょっと怖いかも、ですよね！」

「やあ、なんかさあ、木崎さんに同感してもらえて、すっごく嬉しいよ」

田辺さんはうんうんと首肯し、それからわたしを見やり、破顔一笑した。

向けられた田辺さんの全開笑顔に、わたしはハツとして、慌てて顔を逸らした。

なぜかは分からない。

高倉主任の顔が脳裏をよぎった。上司としてではない、維月さんの顔。

そして、思い浮かんだ維月さんの顔は、なぜかしら、少し険しい顔をしていた。

高倉主任って、捉えどころがないと思わせるような振る舞いをする人だと思う。

会社内における高倉維月さんは、自身に関することはあまり語らず、良くも悪くも真意を他人に悟らせない。けれど秘密主義を前面に出している風でもなく、場の空気を読んで、無難な対応をとれる、要領のいい器用人だ。

真意をはからせない狡さも持ち合わせながら、他者を拒みきる冷たさがなく、ゆったりとした安定感のある寛裕な男性だと思つのは、あるいはわたしの臆目かもしれないけれど。

でも……、そう思ってるのは、きつとわたしだけじゃない。

たとえば、高倉主任の知られざる一面を見てみたいもんだと悪戯っぽく笑う田辺さんだつて、その興味は好意からくるものなんだろうって、容易に想像がつくもの。

もちろん、その好意の種類や重さなんかは、わたしとは違う。

わたしが維月さんに向ける感情は、甘くて苦くて重たくて、明るくなったり暗くなったりもする、複雑なものだ。

だからわたしは、……

「木崎さん」

名を呼ばれて我に返り、顔を上げた。真正面に、田辺さんの顔があり、視線がぶつかった。

話題が上がっていたのが高倉主任だったものだから、つい、思案に沈みきってしまった。

いけない。うっかり気を緩めすぎてた。

高倉主任…維月さんのことを想うと、どうしても心は平常ではないられず、気持ちが抑えきれずあらわれてしまう。会社にいる時や会社の人といる時は気を引き締めなくちゃって縛<sup>いまし</sup>めているのに。

田辺さんに、気持ちを悟られてしまった感はないけれど、どうだろう…？

「え、と、すみません、ぼうつとして」

とりあえずは作り笑顔で取り繕った。

「あのさ、木崎さん」

田辺さんは人懐っこい笑顔をしまい、真剣なまなざしでわたしを見据えてくる。

「俺さ、その……木崎さんに訊きたいことがあるんだ」

「は、はい…？」

どきりと、胸が鳴った。

もしかして感づかれてしまったのかな、……維月さんとのこと？

田辺さんは眉をしかめてわたしから視線をはずし、落ち着かなげに額や顎や鼻先をぼりぼりとかいている。けれどもすぐに遠慮がち

に探ってくるような視線をわたしに戻してきた。

「木崎さんってさ、今、つきあってる人、いるの？」

田辺さんの唐突な質問に、わたしは息を詰まらせた。

## 逃げるな危険 4

訊いてきた当人の田辺さんも、いささか唐突過ぎたと思ったのだろ。慌てて補足をした。

「い、いやさあ、その……木崎さん、今、彼氏いるって小耳に挟んだものだから。それ、ほんとなのかな、と」

田辺さんは焦り顔で視線を泳がせている。ちらちらと探るような視線をわたしに止めては逸らし、そうして返答を待っていた。

でも、焦っているのはわたしの方だ。

どうしよう……。

もしかして、高倉主任……維月さんとのこと、気付かれてしまったんだろうか？

わたしは隠し事全般がどうにも下手で、ごまかそうとするとかえって挙動不審になってしまつきらいがあり、高倉主任に笑われたこともあった。浅田さんからかわれたりもした。

それでも、高倉主任とのことは、なんとか上手くごまかし続けてきたと思つた。高倉主任もさり気なくフォローし続けてくれたから、誰にも気づかれてないと思つていた。だけど、ばれてしまったんだろうか、田辺さんに？

動揺を抑えるため、胸元で両手を合わせてぎゅっと握つた。

ともかく、今この場から……田辺さんから逃げ出すわけにもいかない。

なんとか白を切つて、ごまかしきらなきや。

ところが、わたしの内心の周章など田辺さんは気付く様子もなさそう、不明瞭に言葉を継いでいた。

「俺、木崎さんってフリーだとばかり思ってたから、いるって聞いてちよつと意外っていうか、驚いたって言うか……」

「……」  
わたしは少し俯かせていた顔をおそろおそろ上げ、田辺さんを見



やった。そこに見つけたのはからかう風でも冷やかす風でもない、ちよつと決まりの悪そうな田辺さんの困惑顔だった。

質問の意図は分からないけれど、ともあれ、高倉主任とのことを気付かれたわけではないようで、少し、ほっとした。

だけど、わたしの「彼氏」の情報はいったいどこから得たのだろう。

考えを巡らせるほどもなく思い当たったのは、二人。浅田さんと桃井さんだ。

わたしに、今現在「彼氏」がいると知っているのは、この二人だけだと思う。……当事者は除いて。

浅田さんは、他人の恋愛事を誰彼かまわず吹聴して回る口軽な人じゃない。口が堅く、他人のプライベートを無責任に侵したりはしない。

となると、やはり桃井さんだろうか？

もう随分と前になるけれど、桃井さんに、つい詰まらない見栄を張って、彼氏がいることを、わたしから明かしてしまったことがあった。もちろん相手が誰だかは言っていない。

桃井さんは噂好きで、悪気なく口が軽いから、仲が良いらしい田辺さんに喋ってしまつてる可能性は高いように思う。

ただ、ちよつと疑問は残る。

桃井さんは、他人の恋愛事情に関心が深く、その情報収集に余念のない人だ。だけど気が変わりやすく、最新の噂話を好むから、古い話題をわざわざ蒸し返すようなことはめつたにない。

それはわたしに対してもそうだった。

わたしの「彼氏話」なんて、すっかり忘却の彼方に追いやっていた……と、少なくともわたしはそう思って、ほっとしてた。

だから今頃になって、田辺さんにわたしの「彼氏話」なんて持ち出さないと思うのだけど……。

「田辺さん……その話は誰から聞いたんですか？ ……もしかして桃井さんから、ですか？」

「桃井さん？ 桃井さんからは特に何も聞いてないよ？」

田辺さんは「え、なんで？」とでも言いたげなきよとんとした顔で答えた。

「え……」

違うの？ 桃井さんじゃない……？

てつきり桃井さんだとばかり思いこんじゃってたけど、それじゃあ、浅田さんだったの？

そりゃあ、田辺さんと浅田さんは親しいようだから、その可能性だってなくはないんだろうけど……。

「で、木崎さん、ほんとのところはどつなの？」

「え？」

ずけりと、田辺さんが切り込んできた。ひどくもどかしげな顔を  
して、わたしの様子を窺っている。

「や、だから、彼氏のことなんだけど」

「……………」

わたしは思わず眉根をしかめた。

田辺さんのわたしに向けてくる視線が急に煩わしく感じられ、心  
がもやもやとしてきて、重たくなった。

「あの、わたし……、そういうこと聞かれるの、正直……嬉しくな  
いです」

田辺さんから顔を背け、ぽつりと吐きだした。

「田辺さんにも、会社的にも、関係ない……ですよね、わたしの、  
そういうプライベートなことって」

どうしてそんな個人的なことを詮索してくるのだろうと気持ち  
が苛立って、そのせいで、抑えたつもりではいたけれど、口調がきつ  
くなってしまうた。

すぐに言い方がまずかったと後悔したけれど、後の祭りだった。

気まずい思いを抱え込んだのはどうやら田辺さんも同様だったみ  
たいで、それをかき消すように、「ごめんっ」と即座に謝罪の声を  
上げた。

「ごめん、木崎さん！ プライベートなことあれこれ突っ込まれるの、たしかにいい気分じゃないよね。……いやでも、ただの好奇心とか興味本位っていう軽いノリなんかじゃなくって、俺なりに真剣なわけで……」

田辺さんはしどろもどろに言い訳を شدした。さっきよりも顔が赤くなってきたのは、酔いさらに回ったきたからだろうか。

「高倉さんにもさあ、すごくプライベートなことだから、迂闊に喋って木崎さんに迷惑かけるなって言われたんだよ」

「え、高倉主任……？」

どきりとして、思わず胸の前で手を握り、身を固めてしまった。

高倉主任の名が出るだけで過敏に反応してしまう自分が情けない。

「あ、あの、それじゃあもしかして、高倉主任から聞いたんですか？」

「え？ ああ、うん。ちらっとだけ。クリスマスとかの予定は彼氏と埋まってるらしいってなこと、高倉さんから聞いて。浅田さんから聞いたとか何とか……」

「……………」

ああ、そうか……。と、ようやく腑に落ちた。

少し前に、田辺さんからみんな…というか、わたしと浅田さん、そして高倉主任と田辺さんの四人で飲みに行こうと誘われたのだけど、どう断ってよいやら困っていた。

大人数で飲みに行くのならさほど躊躇しなかつたらうけど、あまりに個人的すぎる飲み会は極力避けたかった。わたしと高倉主任との関係が明るみになってしまふ危険性が高いから。

高倉主任はともかく、わたしは隠し事が下手で、気をつけてるつもりなんだけど態度に出してしまったているみたいで、そこから勘づかれてしまふおそれがある。

うちの会社は、社内恋愛禁止ってわけではない。それどころか、社内での恋愛が成就して結婚に至ったカップルだった。もちろん、ダメになったカップルもいるらしいけれど……。

どちらにせよ、色恋沙汰関連の噂話というのは、人心を惑わせる。そういった噂的になるのが、嫌だ。恋愛沙汰の噂話を社内に流されるなんて、もう……こりこりだから。

結局、田辺さんから言いだし、浅田さんも乗り気になっていた飲み会の話は、有耶無耶のうちにお流れになった。高倉主任がそれとなく中止にしてくれたのだろう。わたしの知らないうちに。

「こういう話ってさ、下手するとセクハラ発言になりかねないから気をつけろって高倉さんに念を押されてたんだ。気をつけろっていうか、そういう、迂闊な発言をして嫌な思いをするのは相手だけじゃないって」

「……」

「高倉さんってさ、昔っからそうだけど、会社内の人間関係にすぐ気を遣う人なんだよね。ちょっと神経質なんじゃねってくらいにあっちこつちに気を回して。上手いことバランスをとらせてるっていうか。まあ、そういう気配りとかが評価されて昇進しただけはあるよ。うん、さすがにさ」

田辺さんの口調は敦朴で、多少の妬心を感じないでもないけれど、嫌みつたらしくはない。高倉主任の事を信頼し、敬慕してるんだなと言葉の端々から感じられる。

そんな田辺さんの態様に、わたしは少しだけ気を緩められた。高倉主任に対して、似たような感慨を抱いてるんだなということが嬉しくもあつた。

だけど、それはそれ、これはこれというもので、田辺さんが投げかけてきた唐突な質問への警戒心やわだかまりは解けきらず、安堵しきれずにいた。

「あ、でさっ、話逸れちゃったけど、高倉さんに釘さされてたつてのに、不愉快なこと訊いちゃって、ほんとごめん。ヤな思いをさせちゃったよね。そんなつもりはなかったんだけど」

「そんな……、わたしこそ、すみません」

わたしは慌てて首を横に振って、謝り返した。

たしかに、ああいったことを訊かれるのは嬉しくないし、不愉快とまではいかなかったけど、いい気持ちはしなかった。だけど、もつともものやわらかな言い方があったはずだ。田辺さんの方がもっと嫌な思いをしただろう。

わたしは本当にどうしてこう不器用なんだろう。

言葉の選び方一つとっても上手くいかず、相手を傷つけてしまったり不愉快な思いをさせてしまったりする。どうして相手の心情や、先々の事まで考えが及ばないんだろう。

そのせいで誰かを疑ったり、あまつさえ、好きな人の心すら見失いかけたりする。

「わたしこそ、きつい言い方をしてしまって、すみませんでした」  
わたしは身を竦めて田辺さんに謝罪した。

「あの、わたし……、セクハラとかそんなの、全然思ってませんか」  
「ら」

「あ、ああ、それならよかったよ、うん、よかった。……けど、うーん、しかしまたこれはなんというか……」

田辺さんは何だかそわそわと落ち着かない様子で、顎を撫でたり、ネクタイをさらに緩めたりしていた。何か言いたげな顔をしてわたしの顔をちらちらと見やり、そのたびに困ったように眉を下げて嘆息した。

困っているというのなら、わたしもだった。

田辺さんと二人きりで対面してるところを誰かに見られているのではないかと心配で、わたしは気もそぞろになっていた。

幸い、周りに人はいない。廊下の留まっているのは、今のところわたしと田辺さんだけだった。

たまに会場からお手洗いに向かう人達も出てきたけど、お手洗いに直行するのは年配の男性社員がほとんどで、わたしと田辺さんには一瞥もくれない。

周りの目なんて気にすることないって頭では分かっている。けどどうしても気になって、平静ではいられなかった。

高倉主任の名前が出たからだけでは無い気がした。

田辺さんとうとうして二人でいること自体に緊張してるのだろうとは思う。今まで話す機会もめったになかった田辺さんと、どうしてこんな風に向かい合って話してるんだらう。

……ひどく、落ち着かない。頬も火照ってきてる。

なぜかしら田辺さんも沈着さを失っているようで、とまどっているような、もどかしげな表情をしていた。

「まいっちゃんよなあ、そういう顔されるとさ」

「え？ 顔って、わたし……ですか？」

「まいるっていうか、うーん、諦めつかなくなって弱るっていうかさあ」

「え……？」

何を言おうとしてるのか、田辺さんの意図がさっぱり読めず、わたしは首を傾げるばかりだ。

「木崎さん、俺さ……」

「はい？」

「……いや、やめとく」

田辺さんはふっと短く息をつき、急に真顔になった。

「今は酒も入ってるし。それに、なんかダメっぽい感じがひしひしと伝わってくるんだよなあ。……うん、てなわけで、今日のところはとりあえず引こう」

「……？」

田辺さんはひとり言のように言い、何やら一人納得しているようだけど、わたしは何を言われているのか全く分からず、返答に窮していた。

田辺さんは真顔を崩し、表情をこわばらせているわたしに、意味ありげに笑いかけてきた。

「じゃ俺、もう会場の方に戻るよ。引きとめて、へんなこと訊いちやって、ほんとごめんね、木崎さん」

「い、いえ……」

わたしはとまどいながらも、ふるふると首を横に振った。

……なんだろう、胸が熱くなってドキドキする。不安なような、怖いような……どうしてかは、分からない。

「それじゃ、またね、木崎さん！」

そう言うや、田辺さんはくると身を翻し、小走りになって、まだまだ宴もたけなわの会場内へと戻っていった。

そしてわたしは一人取り残され、しばしばう然と立ち尽くしていた。

その後、我に返ったわたしは、携帯電話を取り出して、メールを打っていた。

送り先は、維月さん。

何かしら不安で堪らず、今夜を独りきりで過ごすのは耐えられない気がした。

ううん。不安の原因は分かってる。

思いだしたくないことを思いだしてしまったからだ。

もう、過去のことなのに。忘れようとして、……忘れられていたはずだったのに。

会いたい。維月さんに会いたい。

気持ち之急いで、何度も打ちミスをした。それに、ひどく一方的な内容になった。

維月さんからの返信は、忘年会が終わる頃になってようやく届いた。それを確認し、わたしは大急ぎでアパートへ荷物を取りに戻った。

維月さんのマンションへ行くために。

## 逃げるな危険 5

維月さんの部屋に合鍵(マンション)を使って入るのは今日が初めてだ。

夏の終わりに渡されてからずっとキーケースの中で眠っていた合鍵を、まさかこんなに早く使う日がくるなんて、思いもよらなかった。

わたしのアパートの合鍵も維月さんには渡してあって、それも今まで使われてこなかった。

合鍵は、緊急事態用の……一種の保険のようなものと思って、わたしの部屋の合鍵は、そういうつもりで維月さんに預けた。心そのものを預けたという感覚もあるには……あるかな。

だから合鍵を渡した時は少なからずドキドキしたし、維月さんの部屋の鍵を受け取った時はもつとドキドキした。ほんとにわたしなんかに預けていいのって、内心不安にもなった。

こうして鍵を取り出し、戸を開けた今も、やっぱりドキドキしている。

不法侵入したわけじゃないのに、なぜか足音を忍ばせてしまう。

部屋の中は薄暗く、シンとして寒い。

維月さんのいない、維月さんの部屋。

維月さんの不在は寂しかったけれど、アパートに一人いるより、ずっといい。

維月さんの残り香に包まれていれば、寂しさも不安も、少しは抑えられると思うから。

かじかんでいた手を口元にあて、息を吐き出した。室内に入り、息はもう白く見えることはない。寒さのあまり硬くなっていた筋肉も、次第に弛緩していった。

明かりを点けて、室内を見回す。何度も訪れ、見慣れてきた維月さんの部屋。

維月さんの部屋って、好きだ。



インテリアのカラーを茶系とグリーン系でまとめてあるから目にも優しい。時々模様替えをしてるけど、全体の印象は変わらない。きちつとすぎない程度に整頓されていて、散らかっているところもちよつとある。たとえば、革張りのソファアに放っておかれた洗濯物みたいに。

出掛ける直前に急いで取り込んだのかな？ ハンガーもそのままに投げ出されている。

たたんでおいてあげよう。シャツにもアイロンをかけて。

他に何かしておいてあげられることはないかな。そんなことを考えつつ鞆をソファアに置き、ふと思いだして、携帯電話を取り出した。

新しい着信履歴はない。着歴のトップにあるのは維月さんからのメールだ。一時間以上前、件名はRe:だけ、本文には「美鈴も気をつけて」という短い一文。

初めにメールを送ったのは、わたしだ。忘年会の会場、田辺さんと別れてからすぐにメールを送った。

維月さんに会いたくて、一人なりたくなくて、わがままを承知でお願いした。

「今夜、維月さんのマンションにいさせてください」

理由は書かず、ただそれだけをお願いした。断られることも覚悟の上だったけれど、心のどこかで、維月さんは断らないだろうと確信してた。

はたして維月さんは、「何時に帰れるかわからないけれど、それでもよければ」と応じてくれた。

「ありがとうございます。勝手を言っでごめんなさい」

一方的だったと、我ながら思う。それなのに維月さんは理由も聞かず了承してくれた。メールで聞くのはもどかしかったのかもしれない。それに、ゆつくりメールを打ってる状況下にはなかったらうから。

維月さんの優しさに付け込んだ。

わたしはいつだってそうだ。

あの時はそんなつもりは全然なくて、維月さんに会いたくてたまらなかったから、ただそれだけの気持ちでメールを送った。だけど、維月さんの優しさや状況に付け込んだとしか言えない、得手勝手な要求だった。

維月さんは「なるべく早く帰る」とまで言ってくれた。けどさすがにそこまで負担はかけたくない。せつかくの忘年会だということに、わたしのために早々と切り上げさせてしまうなんて。

維月さんは二次会だけじゃなく、きつと三次会まで誘われてるはずだ。「何時に帰れるか分からない」ということは、もう行くことは確定的になってるってことだし。

去年も、その前の年も、朝帰りだったと言っていた。疲れた、参ったと苦笑しながら、それでも楽しかったんだろうことは表情から窺えた。だから無理に付き合わされるのじゃなくて、維月さん自身も望んでの二次会三次会参加なんだと思う。

維月さんの楽しみを奪うつもりは毛頭なかったから、

「わたしのことは気にせず、ゆつくりと楽しんできて下さい」

そう返信した。けどどすいぶん勝手な言い種だって、さすがに維月さんも呆れたかもしれない。けれど「わかった、何かあれば連絡して」という簡素の一文の後に「美鈴も気をつけて」の一言を添えてくれる。そういう気遣いをさり気なくできる人なのだ、維月さんは。

それなのにわたしときたら、言葉足らずの上、維月さんの気持ちや状況を慮ることもできない。

維月さんと二人きりになる前に、気持ちを整理する猶予が欲しかったからなんて、一方的で身勝手な都合だ。しかもそれを維月さんには告げないで、本人不在のマンションに居させてほしいと頼み込むなんて、図々しいにも程がある。

維月さんに話したいことがあるのだといっても、なにも今夜じゃなくたってって思う。だいたい、どうしても話さなきゃならない

ことではない。……ううん、もしかしたら話さない方がいいのかもしれない。過去の話なんて。

だけど話しておきたかった。その方がいい気もしていたから。でも、維月さんを不快にさせてしまうかもしれない。でも……それでも、話してしまいたい。

そんな葛藤を抱えたまま、今わたしはこうして維月さんの部屋にいる。

テレビもつけず、音楽も流さず、深々とした夜のしじまの底に沈んでいる。過去と現在に心を締めつけられながら。

本当は維月さんが帰ってくるまで、起きて待っているつもりだった。けれどシャワーを借りて体を温めたら、次第に瞼が重くなってきた、結局眠気に負けてしまった。

明かりを落とし、布団にもぐりこみまどろんでから、どのくらい時間がたったのだろう。

寝返りをうった時に、ふと、人の気配を感じ、同時にひそめられた優しい声が耳に届いて、意識が浮上した。

「美鈴」

ささやきが耳朶に落ちた。吐息がかかるほどに、その声が近い。髪を撫ぜられて、それに体が反応した。

「……ん……」

程良く温まっている布団の中でもぞもぞと小さく身じろいで、体を仰向けにした。薄く瞼を上げたけれど、室内が薄暗いせいもある。視界はまだぼやけていた。

「ただいま、美鈴」

「……………」

額かかる髪を指先でそっと払われた。何度か瞬いて、声の主を確かめる。

「……………」  
維月さんが、わたしの寝顔を覗きこんでいた。片手を枕元に置き、もう片方の手でわたしの髪を撫でている。維月さんの手は温かく、触れていない部分からも温もりが伝わってきた。

「起こして、悪かった？」

「……………」

首を横に振って応えた。まだ少し朦朧としていて、声が出ない。

よく見てみれば、ベッドの端に腰かけている維月さんはすでに着替えを済ませていて、夜着姿になっていた。シャワーも済ませてきたらしく、髪も、僅かだけ湿ってるように見えた。維月さんはいつにもまして官能的な香りをまとっている。お風呂上がりだからというだけじゃなく、お酒のせいもあると思う。維月さん自体が蒸留酒になってるみたいだ。強くて、甘い……………。

布団の端を掴み、維月さんを上目遣いに見やった。

維月さんが傍にいる。

ただそれだけで、胸のときめきが抑えられないほどに高まっている。く。

寝起きのせいで頭はまだ薄らぼんやりとしていたけれど、まばたきを繰り返すうち、次第に覚醒していった。

「……………今……………」

何時なのか訊こうとしたものの、声がかすれて音になりきらなかった。

維月さんはわたしの意を得て、答えてくれた。

「二時を少し回ったところ。……………遅くなってごめん」

「……………」

わたしはまた首を振る。それからようやく、「おかえりなさい」の一言を告げた。

「水、飲む？」

訊かれて、こくと頷いた。

ジャンケンが異常に強い維月さんは、やっぱり読心術でも会得し

てるんじゃないだろうかと思う。だってこんなにもさりげなく、口に出さない思いや願いをこともなげに察してくれ、叶えてくれるんだもの。

維月さんって、本当に不思議な人だ。……ときどきするけど寛げる、心地のいい人。

わたしが頷いたのを確認し、維月さんは立ち上がり、キッチンへ向かった。そのすらりと細い背を見送りながらわたしもようやく上半身を起こし、それからサイドテーブルに置いておいた携帯電話を掴み取って時刻を確かめた。

もう、二時半近い。

維月さんはいつの間にか帰って来たんだろう？ ドアが開く音にもシャワーの音にも全然気付かなかった。不覚にも熟睡してしまってたんだ……。

「美鈴、はい」

キッチンから戻った維月さんは部屋の明かりも点けないまま、再びベッドの端に腰を下ろした。間接照明の仄かな光が室内を照らしている。室温は若干低いけれど、寒いというほどでもない。

維月さんはわたしに水の入ったグラスを寄越し、自分はペットボトルから直接ミネラルウォーターを口に運んだ。

真夜中らしい静寂があたりを浸し、布の擦れる音や鼓動や息遣い、水を嚙下するかすかな音ですら耳につく。

「……………」

維月さんに話さなくちゃ。

水を飲み干し、空になったグラスを両手で包み持って、膝の上におろした。

話さなくちゃ。そう思うのに、どう切り出せばいいのか分からず、黙りこくって、顔を俯かせてしまった。

このまま黙りこんでちゃいけないって思うのに、何からどう話せばいいのか整理がつかなくて、頭の中がぐるぐるしてる。

どうしよう。ちゃんと話そうって決めたのに、このままじゃ

挫けそう……。

「美鈴」

やおら、維月さんがわたしの手からグラスを取り、持っていたペ  
ットボトルと一緒にサイドテーブルに置いた。それからすぐ、わた  
しの肩に腕を回して抱き寄せ、唇を重ねてきた。

「……………」

なんて……なんて優しい、キス。

押し当てられた維月さんの唇はすぐに離れてしまったけれど、感  
触は消えずに残ってる。

怖じていた心を温め、緩めてくれるような、そんな優しいキスだ  
った。泣き出してしまいたくなるような……。

どうして。どうして維月さんはこんなに優しいの？ こんなんにも  
わたしを愛<sup>いっく</sup>しんでくれるの？

どうしよう。こんなにも好きになって。維月さんが、恋しすぎて。  
苦しさすら嬉しくて。想いが溢れてとまらない。

心が波立って、泣きそうになった。

耐えられず、維月さんの胸元をぎゅっと掴んで顔をうずめ、「維  
月さん」と呼びかけた。声がかぐくもって聞こえなかったかもしれない。  
もう一度、今度は顔を上げて、「維月さん」と声を発した。

「何？」

「あの、維月さん、わたし……………」

「うん？」

「わたし、今日、い…維月さん、に……………」

上手く言葉が紡げず言い淀むわたしを急かしたりはせず、維月さ  
んはさりげなく水を向けてくれた。

「もしかして、何か困るようなことでもあった？ 忘年会で、何か」

「……………あの……………」

息を整え、わたしはようやく切り出した。

「今日、田辺さんに声をかけられたんです」

「……………田辺？」

維月さんが怪訝そうな声で訊き返してきた。頷き、わたしは維月さんに身を委ねたまま、語を継いだ。

「田辺さんに訊かれたんです。……わたしに、その……、彼氏いるのって」

逃げるな危険 6 (終)

気持ちが悪く落ち着かず、維月さんの顔が見れない。

「そんなこと田辺さんに訊かれるなんて思いもしなかったから驚いて……。それでなんだか、怖くなったんです」

「田辺が、怖かった？」

維月さんは腕の力を緩め、わたしの体を離した。けれどわたしの片腕を掴んだままで、じつと見つめてくる。心配そうな、剣呑なような、熱帯びたまなざしで。

わたしは身を竦ませ、怖々と維月さんを見つめ返した。

「維月さんとのこと気付かれちゃったのかなって。そうでなければあんなことわたしに訊いてくるはずないし……。そう考えたら、急に怖くなったんです。変な噂を流されたらどうしようって……」

「田辺には釘をさしておいたんだが。他に、何か言われなかった？」

「他……？」

「いや……」

そうか、とため息をついた維月さんは、眉間に皺をよせ、洗面をつくっていた。

「田辺さんはすぐに謝ってくれました。高倉主任に注意されてたのにつて。だから、維月さんとのことじゃないってすぐにわかったし、それは安心したんです」

「……………」

「田辺さんは、他人のプライベートなことを吹聴して回るような人じゃないって、それも分かってます。ただわたしが過敏に反応しすぎてしまっただけで……。でも、それで……」

俯き、膝の上のこぶしに視線を落とした。指先が冷たくなってきている。

「それで、その……思うことがあって、それを維月さんに聞いてほしくて。詰まらない話なんだけど、それでもちゃんと話そうって、



わたし……」

「うん」

維月さんは頷き、わたしの腕を離した。それからすぐにその手をわたしの手に重ね、優しく握ってくれた。手のひらから伝わってくる温もりに、涙が出そうになる。

けれど、溢れだしそうになる感情を何とか抑え込み、

「昔のことなんです。前にいた会社でのことで……」

俯いたまま、話を続けた。

「もう終わったことなんですけど」と、いい添えた。ちよつと言いつじみたような語りだしになってしまった。

あの時に負った傷がじくじくと疼く。治しきらないまま放置していた自分が情けなかった。

「高校を出て入った小さな会社でのことです。入社して一年が経った頃、会社内で、身に覚えのない、悪意のある噂話を流されたことがあつたんです」

「美鈴の？」

頷いて、先を続けた。

「わたしが、人の彼氏を横恋慕して、寝とつたつて……」

ますます維月さんの顔が見られない。後ろめたさとかそんなのではなくて、過去の彼氏について語るのが、なんだか恥ずかしかった。今まで一度もそんな話をしたことがなかったから。

「その頃、付き合い始めた人がいて、その人とのことをいろいろ言われたんです。その人とは、コンパを通じて付き合いようになつたんですけど、もともと会社の取引先の人だったから何度か面識もあつて話す機会も多かつたんです」

「……」

「コンパつていうのも、その人と、わたしと同じ会社の先輩の……えっと、真辻まつじさんつていう女の先輩とで盛り上がつてセツティング

したもので、それでわたしも誘われて、参加したんです」

当時付き合っていた彼の名はあえて出さずにいた。……維月さんは聞きたくないと思ってるかもしれない。なんとなくだけでもそう感じたし、わたしもできれば口に出したくはなかった。説明しづらいから真辻さんの名前だけは出したけど、本当は彼女の名も、記憶から引き出したくはなかった。

「後になって知ったんだですけど、真辻さん、その……彼のことを、好きだったみたいなんです。それで、わたしなんか先を越されたってひどく口惜しがってたみたいで、その腹いせに噂を流したらいいんです。真辻さんには入社当時からお世話になってたし、仲良くさせてもらってたから、まさかわたしのこと嫌ってたなんて思いもしなくて……すごく、ショックだった」

「嫌って……？」

維月さんが不審げに聞き返してきた。わたしは小さな声で「はい」と答えた。

「それも、後から知ったんです。面と向かって言われたのではないけど、真辻さんが、ああいう子嫌いっていつてるのを聞いて……。立ち聞きするつもりはなかったんだけど、聞こえてしまって」

そういうことが、一度ならずあった。

わたしと彼が付き合いだした頃からだったように思う。真辻さんがわたしとの間に距離を置くようになり、態度も冷たくなっていったのは。だから、その時点で気付くべきだった。それなのに自分のことにはかりとらわれて、真辻さんの気持ちを察せられなかった。何か気に障ることをしてしまったのかなという不安はあったけれど、その「何か」を思い当れなかった。

わたしが無神経だったのだろうと思う。だけど、やっぱりショックだった。あんな事実無根の噂を流すなんて。そのうえ……

「真辻さんは、腹いせで噂を流しただけじゃなくて、その後、……噂通りのことを自分がしたんです」

笑い損ねて、喉の奥がキリキリと痛む。声が滑らかに出ず、ぎこ

ちない語り口調になってしまった。

「でも、しばらくの間は気付かなくて、彼も、何も言わなかったから、付き合いは続けてたんです。それも、真辻さんの気に障ったのかも知れない。噂話もさらにひろまって、そのうちに陰口も酷くなつていって……。噂なんてすぐに冷めるから気にするなつて友達に励まされて、自分でも気にしないよう努めてたけど、会社で仲良くなつた子達にも迷惑をかけてしまって、それが本当に心苦しかった。どうしたらいいのか分からなくて、だけど噂に負けてしまったら彼にも迷惑がかかるつて思つて、耐えてた。そんな時に、彼と真辻さんの関係を知つて……」

目頭が熱くなつて、涙が視界を滲ませた。こぼれ落ちないようなんとかおさえたいけれど、喉の痛みは増して、うまく言葉が紡げない。気を落ち着かせるために深呼吸をし、感情を抑えて話を続けた。

維月さんは静かに耳を傾けてくれている。……怖くて、表情は窺えない。

「自分の中で何かがぶつくり切れて……。もう、耐えられないと思つた。だから彼とも別れて、会社も……。辞めました。わたし、みつともなく逃げたんです。何も解決させないまま、逃げだしたんです。わたしはいつもそうやって逃げてばかりで……」

「美鈴」

「わたし、……っ」

「……もう、いいよ」

維月さんは再びわたしを抱き寄せ、その腕で包み込んでくれた。堪らなくなつて、わたしは維月さんの背に腕を回し、縋りついた。泣き顔を見せたくない。口を引き結び、せせりあがってくる嗚咽を堪えた。

今でも目の奥に焼きついて離れない。二人の声が耳について離れない。

どうしてあんな場面を見てしまったのだろう。真辻さんと彼が抱き合っているところを目撃してしまうなんて……。

自分の間の悪さにも、少なからずショックを受けた。

真辻さんと彼が吐いた、わたしへの罵り。事実を言い表した言葉ではあっても、それは十分すぎるほど、わたしに深い傷を負わせた。嫌いなわたしから“彼氏”を奪い取れて、真辻さんは少しばかり満足げな様子だった。けれど二股状態の彼に、不満げに文句をたれた。

「あんな、おとなしいだけのつまらない子の、いったいどこがいいの？」

彼は不快げな顔をするでもなく、薄く笑って応えた。

「おとなしいから、都合がいいんじゃないか」

そうして二人は笑い合っていた。

あんな風に思われていたなんて知らなかった。……知ろうともしなかった。知ろうともせずそのまま漫然と日を過ごして、その結果があのようにだった。

もう、あんな思いはしたくない。

あの時の辛苦がわたしを臆病にさせた。人の目が怖いと思った時期すらあった。

「わたし……急に怖くなったんです。維月さんのこと、噂になって騒がれてもしたらどうしようって。あの時とは状況とか何もかもが違っつて分かってるけど、それでも無闇に噂されるのが怖くて……。そうなって、維月さんに迷惑がかかったらどうしようって」

維月さんに縋りついたまま、不安の全てを吐き出した。

「わたしなんかのことで、維月さんに迷惑をかけたくない。好きだから……。維月さんが、どうしようもなく好きだから、嫌われたら……離れていってしまったらって、不安で、怖いんです」

「……美鈴」

「今夜だって、不安で堪らなくなって、一人でいたくなくて、こんな風に押しかけてきて。自分の気持ちでいっぱいになりすぎて、維月さんの都合とか考える余裕もなくて。ごめんなさい。ごめんなさい、わたし……」

「美鈴」

維月さんはわたしの腕を掴んで、体を離した。わたしの気を落ち着かせるように、じっと見つめてくる。目を逸らそうにも逸らせない、まっすぐなまなざしでわたしを捕らえる。強くて、切なげなまなざしだった。

「謝らなくていい。むしろ、謝るのは俺の方だ。田辺に余計なこと言つて、美鈴を不安にさせて」

「そんなこと……っ」

わたしは慌てて首を横に振る。

「牽制しとかなきゃと、焦つてた。気付かれないよう言つたつもりだし、釘もさしておいたんだが、結果的に美鈴を不安がらせて、……まったく」

維月さんはふっと目を逸らし、「情けない」と呟いて長嘆した。

「美鈴」

「……はい」

維月さんが視線を戻し、わたしを見つめる。少し申し訳なさそうな、躊躇しているような目をした。維月さんのまなざしを受け、胸が高鳴りだす。

「思いたしたくないことだったろ？ 辛いのに、話してくれてありがとう」

「……」

「美鈴は、逃げだした自分自身を苛んでるのかもしれないけど、俺は責めない。逃げだしたくなることは誰にでもある。逃げだしてしまつのも時には必要だと、俺も思うよ。それに美鈴は逃げればかりじゃない。現に、こうして俺に話してくれただろ？ 逃げずに、ここに来てくれて嬉しかった」

「……い、つきさ……」

どうしよう……！ こんな、どう応えたらいいの？

ありがとうって、それを言いたいのわたしの方なのに。

臆病なわたしをありのまま受け入れて、赦してくれる維月さんに、

この想いをどう告げたらいい？

「今夜は、来てくれて嬉しかった」

維月さんは繰り返して言った。手を伸ばし、わたしの頬に触れる。口ごもっているわたしを労わるように、優しく触ってくれた。

暖房もつけていない室内は少し肌寒いけれど、維月さんの手は温かく、そこから伝わる熱が身体を芯から温めてくれた。維月さんが触れてくれるわたしの全てが温かくなり、心が融けていく。

それに、維月さんがいつも以上に近くに感じられて、嬉しかった。俺も美鈴に会いたかった。二人きりになりたかった。抱きしめたかった。……美鈴を、安心させたかった」

「……………」

「それなのに俺は、美鈴を泣かせてばかりいるな」

自嘲するように言って、維月さんは嘆息した。

「美鈴を悲しませたくはないんだが」

「ち、違います！ 悲しくなんて！」

わたしは思わず声を昂らせて維月さんの言葉を遮った。

黙ってばかりいちゃ、ダメだ！ ちゃんと気持ちを伝えなくちゃ

……………！

息を整えて、言葉を継ぐ。

「違います、維月さん。わたし、維月さんの前で泣いてばかりだけど、それは……………」

わたしの頬に優しく手を添えてくれる維月さんの手に、自分のそれを重ねた。さっき維月さんがそうしてくれたように。

「維月さんを好きな気持ちがいっぱいいっぱいになって、苦しくなったり不安になったりすることもあるけど、そんなわたしを維月さんはこうして受け止めてくれるから、嬉しくて、泣けちゃうんです。維月さんの優しさに甘えきってるって、それがちょっと情けないなっと思って思わないでもないけど、でもそれは、維月さんが甘えさせ上手だからしょうがないって思うんです」

わたしは口元を綻ばせて、維月さんに微笑みかけた。維月さんを

安堵させられるよう、うまく笑えたかは分からない。きっと、まだどこかぎこちない笑みだっただろう。

維月さんは瞠目し、顔を火照らせているわたしを見つめ返してきた。

維月さんがいつもそうしてくれるように、わたしも維月さんを甘えさせてあげられたらいいのにつて、ひそかに思ってる。維月さんを癒してあげられたらいいのにつて。

でもそんなことを言える自信もなかったし、恥ずかしすぎて口に出せなかった。

自信を持って言えたのは、たった一言。

「維月さんが、好きです」

維月さんの双眸が甘やかな色を湛え、わたしをそのままざしに縫いとめる。

「美鈴」

「はい」

「美鈴、愛してる」

「……っ」

眦に溜まっていた涙がまばたきに押され、零れ落ちた。

維月さんはわたしの涙を指で拭い、濡れた頬や顎を撫でてくれた。やがてそれももどかしくなったのか、わたしの体を支えながらベッドに押し倒し、覆いかぶさってきた。

「愛してる」

囁きを繰り返し、維月さんはやんわりと押し包むように、わたしの唇に自分のそれを重ねた。そうして、わたしの答えを……想いを、唇の奥に探し当ててくれる。

維月さんだけを感じていられるこの瞬間が幸せで。不安なんか入り込む隙もないほど、幸せで。

もう、維月さんしか見えない。

維月さんの腕の中から逃げだそうなんて、考えもつかない。

それに、わたしが逃げようとしても、きっと維月さんはわたしを

捕まえてくれる。だから安心していられるのだ。  
信じる強さを、維月さんは教えてくれたから。  
わたしは目を閉じ、心を開く。

そうして今宵も、維月さんの激しい熱情に囚われ、逃げられ  
ない。



Coffee essence (前書き)

逃げるな危険、翌朝のーこまです

## Coffee essence

午前十時十分。

小窓の、中途半端に閉められたカーテンの隙間から、淡い陽が射しこんでいた。どうやら曇天のようだ。日はもう高い所にあるだろうに、射し込んで来る陽は弱く、室内は相変わらず薄暗かった。

ずいぶんゆっくりとした起床になってしまった。

もそもそと毛布を手繰り寄せながら上半身を起こした。素肌に触れる空気が冷たい。夜ほどの冷たさはなく、それに毛布の中はとて暖かい。一人で目覚めた朝だったなら、きつともつと寒さを感じただろう。

ふと、視線を落として横で眠る人を見やった。その人……：維月さんは、うつ伏せて寝入っている。安らかで規則正しい寝息が聞こえ、目を覚ます気配はない。

こんなのは珍しい。

わたしは朝が弱いし、疲れきっているせいもあって、大抵は維月さんの方が先に起きて、わたしを起してくれる。起きかけているのにそのまままたベッドに縛り付けてくることも、たまにあるのだけだ。

それはさておき。

今朝に限っては当然かもしれない。

維月さんは昨夜、忘年会の後の二次会に（たぶん三次会も）顔を出し、マンションに戻ってこれたのは深夜二時ごろだ。お酒もずいぶん飲んできたことと思う。酔っている様子は見られなかったけれど、呼気にお酒の香りが混じっていて、唇を重ねられるたび、酔ってしまいそうになった。というか、維月さん自身の香気に当てられ、激しい抱擁に酔いつぶされてしまった。

見た目には分からなかったけれど、維月さんも酔っていたのかもしない。

それほどの熱っぽさが、昨夜の維月さんにはあったから。

ともあれ、今日は何の予定も入れてないと言っていたし、せつかなのだから、ゆっくりと休ませてあげよう。忘年会だって、きつと気疲れしただろうから。

脱ぎ散らかされた二人分の衣服を探し、拾い集めてベッドから降り、そのまま寢室を出た。足腰に力が入りきらなくて、ふらふらしてしまう。壁に手をつきつつ、どうにかこうにかバスルームに辿り着いた。

シャワーを浴び終えてから、再び寢室に戻り、中の様子を窺った。維月さんはさつきと同じ姿勢で、まだ眠っている。

よっぽと疲れてたんだなと思うと、少し気の毒でもあったし、可笑しくもあった。だけど数時間前までの、維月さんに組み敷かれていた自分の痴態を思いだし、ちよっと……ううん、かなり恥ずかしくなった。……あんなの、維月さんだって疲れるはずだよ……、もうっ。

だって、昨夜の維月さんは、いつにもまして激しくて、わたしはもうずっと翻弄されっぱなしだったもの。加減なんてちつともしてくれなくて、何度か意識を失いかけたけど、維月さんに揺り起こされて、気絶するのもままならないくらいだった。バスルームで気づいたけど、体のそこかしこにキスマークが残ってて、昨夜の情事じじょうがいかに激しかったかを、証拠として突き付けられたみたいだった。怖くなんかはなかったし、維月さんの気持ち伝わってきて、とても嬉しかったのだけど。それでもやっぱり思い起こすと恥ずかしい。

維月さんの、ブランデーのように熱く強いまなざし、切なげで甘い囁き……

それを思いだすだけで、顔中が火照りだして紅くなってくるのが自分でもわかる。胸が高鳴りだし、気もそぞろになってしまう。

うっっ、だめだめ……っ！

もう朝なんだから、しゃっきり目を覚まさなくちゃ！

いつまでも夜の余韻に浸ってちゃダメなんだから！

ブラックコーヒーでも飲んで、気を落ち着かせよう。ともかく、ひとまず寝室から出よう！ あと、深呼吸、深呼吸っ！

それから、維月さんの着替えも持っていつてあげよう。昨夜の夜着は、わたしのと一緒にもう洗濯かこの中だし。

それにもう十一時近い。そろそろ起こしてあげなくちゃ。

わたしは大急ぎで濃いめに淹れたブラックコーヒーを胃に流し込み、維月さんの着替えを用意して寝室へ戻った。

枕頭に着替えを起き、声をかけた。

「維月さん」

「……」

返事はない。維月さんは壁側に顔を向けているから、瞼が動いたかもわからない。

「維月さん、朝ですよ」

「……」

揺り起そうかと迷ったけれど、もう一度だけ「維月さん」と名を呼んだ。

「……ん……」

掠れた声がし、維月さんがこちらに顔を巡らせた。瞼がつつすらとあげられている。

「おはようございます、維月さん」

「……み、すず……？」

維月さんはごろりと寝返りをうち、仰向けになって額に手をやった。

「はい、わたしです。もうそろそろ起きた方がいいかなあと思うんですけど……」

「……」

維月さんは一度深く息をついたけれど、起きあがる気配を見せない。額に手を当てたまま、瞼も閉じてしまったようだ。

「維月さん？」

「美鈴、……ちょっと、そこ、座って」「はい？」

ほとんど反射的に維月さんの言葉に従い、ベッドの端に腰をおろした。その、途端！

「……っ、ひゃっ、わぁっ！」

維月さんの上半身が起きあがったかと思うと、いきなりわたしの腰に両腕を回してきて、太ももの上に頭を落とす。

「いつ、いつ、きさんっ!？」

「……も、すこ、し……」

寝かせてくれと言ったらしいけど、声がかくもって聞きづらかった。

というか、なんですか、なんなんですか、この体勢はっ！

わたしは両腕を中途半端にあげたまま固まってしまった。

維月さんは、わたしの腰をがっちりつかんだまま、もぞもぞと身体を動かし、さらに身を寄せてくる。布団がいざって、背中が丸見えの状態だ。

何か着ていればいいのだけど、さっきのわたしと同じ状態で……つまり、素裸なわけなので、このままじゃ身体を冷やしてしまう。慌てて布団を引き寄せて維月さんに向け、それからようやくほっと息をついた。

いえ、ちっとも落ち着かないのだけど。

「あ、あの、維月さん……?」

「ん……」

「維月さん、風邪ひきます」

「美鈴があっただかいから、へいき」

「でも……」

「あと、もう少し……」

「……」

どっ、どっ、どっ、どっ……?」

維月さんが……維月さんが、すごく可愛いんですけどっ！

こんな風にわたしに甘えてきて、仔猫みたいに丸まっているなんて！寝乱れてる髪を撫でてあげても、わたしの腰に回された維月さんの腕は悪戯をしかけてこない。そのうちに、すやすやと寝息をたてはじめ、再び眠りについてしまったみたいだった。

維月さんの柔らかい髪が、指に気持ちいい。肩とか背中とか、ほっそりとして見えるのに実は逞しくて、触れると存外硬い。

こんな風に甘えてきてくれるなんて、なんだか嬉しい。恥ずかしいけど、維月さん、寝てるし。

心も体も、ほこほこ温かくなってくる。

後頭部を撫でてあげながら、ふと思いついて、ちゅっと軽く、髪にキスをした。維月さんが起きていたら恥ずかしくて絶対できなかつた。維月さんは相変わらず寝息をたてていて、わたしはホッと安堵した。

いい香りがする。コーヒーかな……？

と思ったのと同時に、声がかかった。

「美鈴、そろそろ起きて」

「……っ！」

思わずがばっと身を起した。

わたしはいつの間にもやらベッドに体を横たえて、うたた寝してしまつたらしい。

「おはよう、美鈴」

維月さんはマグカップを片手に持って、わたしの傍に佇んでいた。わたしは瞠目し、すっかり身支度を整えている維月さんを見やった。

「いつ、いつ……っ」

「大丈夫、まだ十二時前だから。十一時半をちよつと回ったところ」……」

ということは、三十分くらい寝ちゃってた、ということか。

それにしても、維月さんに膝枕をしてあげていたというのに、わたしの方が寝入っちゃって、維月さんに起こされるなんて……！  
不覚というか、……いつも仕様というか。なんだかちよっぴり口惜しい。

しかも維月さんときたら、もうシャワーを浴び終えているようだった。ということとは、本当にあれから少しだけしか寝てないんだ。  
寝起きの悪いわたしと違って、すっきりと目覚めた様子でちっとも寝ぼけ眼じゃないし、それになんだか外の天気とは真逆に、晴れ晴れとした顔をしてる。

もうっ、維月さんはずるいよ……！

なんでそんな嬉しそうな顔してるの？ 楽しそうに微笑んでるの？  
その甘やかな瞳が胸をときどきさせるって、維月さん、分かっているのかな？

「うー……」

つい恨みがましい目で維月さんを睨みつけてしまった。維月さんはとうとうとまったく動ぜず、微笑みを深めるばかりだ。

「美鈴もコーヒー飲む？」

「……」

わたしはこくりと頷いた。まだ立ち上がる気力もなくて、肩をすぼめてベッドに座っている。

維月さんは距離を縮めてわたしの目の前に立ち、ちよっと腰を屈め、空いている方の手をわたしの頬に添えた。 温かな手。 けど、わたしの頬だって負けないくらいに熱くなってるはずだ。

「二杯目のコーヒーはカフェオレにしようか？」

そう訊いてから、維月さんはわたしの答えを聞く声に、ちゅっと軽く、啄ばむようなキスをした。 維月さんの手と唇はすぐに離れ、それを名残惜しく思いながら、リクエストした。

「……砂糖抜きのカフェオレをお願いします」

甘いのもう、維月さんでいっぱいいっぱいですから！

## 落花流水

ひらひらと、風の形を描いて桜の花びらが散り落ちる。

朧月夜が満開の桜を仄々とした薄桃色に浮かびあがらせている。

甘い蜜の香が緩やかな風に流されてくる。

桜の花色としっとり漂う香りに陶然としながら、ふいに思い返す。

「社内レンアイは出来ない」なんてうっかり吐露してしまった、あの日のことを。

わたしと維月さん、付き合い始めて一年が経つ。

もう一年なんだと驚く反面、まだたったの一年なんだと不思議な心持にもなる。

もともと、恋人同士という関係になる前から、わたしと維月さんは同じ会社の同じ課で働く上司と部下（部下、といってもわたしは多数いる派遣社員の一人にすぎないのだけど）という関係だった。

だから会社内での“付き合い”は、わたしが派遣されてきてからの年数……つまり約三年ってことになる。その間に、一緒に飲みに行ったりするようなプライベートな付き合いもあるにはあった。

けれどそれはあくまで上司と部下としての付き合いだったし、少なくともわたしはずっとそう思い込んでた。維月さんだって初めはそのつもりでいたからこそ、気軽に声をかけてくれたんだと思う。

でも、ただの上司と部下という味気ない関係が微妙に変わってきているような気がしはじめたのは、……気付かされたのは、維月さんの醸し出す艶めいた雰囲気のせいだった。



一年前のあの夜のことを思い出し、わたしはつい非難めいたことを維月さんに言ってしまった。

「あの日の維月さんはフェロモン香水でもつけてるのかって思うくらい、やたらに色っぽく感じて、……ああいう雰囲気わざと作ってたんじゃないんですか？」

あの日の維月さんは、いつもどこか違ってた。「じゃんけんしよう」と挑まれた時からそれは感じていたのだけだ。

あの夜、わたしは維月さんの醸し出す甘い空気にすっかり酔わされて、不用意とも不用心とも言えることをうっかりと口走ってしまった。

「なんだか誘導されてるみたいで、ちょっと口惜しかったです」

維月さんは「美鈴こそ」と、苦笑まじりに返してきた。

「美鈴こそ、こっちが困るくらいに無防備だった。まんまと罠にはめられたのは俺の方だ」

「罠なんて……そんなの仕掛けられるほど、わたし、維月さんみたくには器用じゃないです」

「意図して仕掛けられないところが美鈴の魅力だね。まったく、

敵いそうにないな」

「敵わないのはわたしの方ですから！」

ムキになって言い返すわたしを宥めるように、維月さんはさり気ない仕草で手を伸ばし、わたしの頬に触れる。

火照った頬に当てられた乾いた手の感触が心地よかった。

維月さんは懐かしげに目を細め、話をあの夜のことに戻した。

「美鈴が、あんな風に気持ち晒してくれたのは、あの日が初めてだったように思う。それまではもうちょっと、俺に対して距離を置いてた気がする。美鈴はもともとガードが堅かったから、それで安心していたところもあるけどね」

「安心？」

「うん、そう。ガードを堅くしてるってことはつまり、俺を男として少しは意識してるんだらうと、それで……ほっとしてた」

「……………」  
わたしは目を瞬かせ、維月さんを見つめ返した。維月さんは静かに含み笑っている。

維月さんの瞳の色は、濃く淹れたコーヒーのよう。大さじ一杯の砂糖を溶かしこんだように甘くなる時もあるし、ブランデーを注ぎこんだような熱を孕む時もある。ひどく苦い色を湛えている時もある。

今、維月さんの瞳には、甘みと苦みが混在している。どちらかといえは甘みの方が強いかもしれない。

「迂闊に手を出せないと思わせる雰囲気は美鈴にはあった。ガードの堅さとはまた違う、自己防衛的な壁……いや、柵かな？　そういう隔たりを持たせる柵が美鈴自身を囲んでた。だけど俺が差し出す手を邪険に払うような高慢さや冷淡さはなかった。簡単に流されもしないが拒みきることもしない。そういうニュートラルな姿勢でいてくれたから、安心して飲みに行こうと誘えた。美鈴はさりげなく隙を見せ、そうやって、距離を縮めようとするチャンスを俺から奪わないでいてくれた。まあ、これは俺の希望的観測だったかもしれないけど？」

「……………」  
返す言葉が見つからなくて、落ち着かなげに目を泳がせ、肩を竦めた。

「そんな大層なものじゃないです  
ぼつりと呟いた。

だってわたし、そんなこと考えてる余裕なんてなかった。深く考えてすらいなかった。

高倉主任って人の存在が心の中で日に日に大きくなってることすら、はつきりと自覚してなかったもの。ただ不思議で。気がつくとき目で追ってしまっていて。

それだけだった。

だから、人に「高倉主任に気があるの？」と問われてもすぐに否

定してた。そんな風に見られなくなかった。そう見られるのを怖れていた。

その怖れがなんであるのか。

それを教えてくれたのも維月さんだった。そしてその怖れと向き合うよう、促してくれた。

わたしはいつもそうだ。

いつも受動的で、維月さんに頼りきりになっている。

それを、改めて思い知らされた。

けれども、結局のところ最初に想いを伝えたのは、わたしと維月さん、はたしてどちらが先だったのだろうか……？

はつきりとした言葉で伝えてくれたのは維月さんの方だ。「好き」と、まるで当たり前のようにさらりと言って、しかも行動で気持ちを示してくれちゃったりなんかして！ わたしをひどく動揺させてくれた。

維月さんは、何もかも計算尽くで動く打算的な人ではないけれど、無茶な冒険もしない人だ。悪戯をしかけてくることは多いけれど、

それはともかくとして。

あの日、維月さんが「好き」と言ってくれたのは、わたしの真意を察してくれてのことだったと思う。わたしの中途半端な言を受け、ちよつと強引に（かなり強引だったような気もするけど）わたしの気持ちを引き出してくれた。

だとしたら、ひどく中途半端で言い訳じみてはいたけれど、気持ちを告白したのはわたしの方が先だったのかもしれない。

「高倉主任」に真意を見抜いて欲しいとカマをかけたつもりはなかった。あれはあれで、うっかり吐露してしまった本音だったのだし……。

それでもやっぱり、あんな告白のし方はなかったらうと、今頃ながらに思う。

やり直せたら、とまでは思わない。

だけど、改めて伝えたい。あの時はそんな余裕がなくてできなかつたから。

あれから、一年が経った。

時は移ろっていくけれど、維月さんを想う気持ちに変わりはない。それどころかますます深みにはまってるって思う。求める心を抑えられないくらいに。

その想いを、素直な言葉で伝えたい。

余裕のなさも、あの頃と変わらないのだけれど。

「夜桜を観に行こう」と誘いだしてくれた維月さんに、わたしは改めて謝意を述べ、「それから」と言葉を継いだ。

「わたし、維月さんがす……っ、っ、っ」

うっつ、しまった。意気込みすぎて、噛んじゃったっ！

好きですって、さらりと告げるはずだったのに。

失敗した途端、恥ずかしさがどっと襲ってきて、頬が痛いくらいに熱くなった。

維月さんは「ん？」と首を傾げ、わたしの様子を窺ってくる。「俺が？」と先を促してくる維月さんのその口調と表情には、明らかにからかいの色が混じってる。

こんな時、察しのいい維月さんがちよっぴりにくらしくなる。

わたしは挫けそうな気持ちを何とか持ち堪えさせて、維月さんを見つめ返した。一步、足を踏み出して維月さんとの距離を縮めた。そして維月さんの腕を掴んだ。

「維月さん、あの……今夜、こうして一緒にいられて嬉しいです」

維月さんは少し驚いたように瞠目した。けれどその瞳は、俄かに甘やかなものにかわっていく。

「わたし、維月さんが、好……っ、んっ」

わたしが言い終えるのを待たず、維月さんはあの日のように……

うっん、あの日よりももっと深いキスでわたしの唇を塞いだ。

背に回された維月さんの腕が、わたしの臆しがちな気持ちをも押し、支えてくれてるようだった。

深夜、零時。

夜桜を観に集っていた人達も、ライトアップのための照明が消えたのを折に引きはじめていた。そのためもあって、幸い視界がきく範囲内に人の気配はなかった。

まるで、わたしと維月さんだけが、桜色の世界に閉じ込められているような錯覚に陥る。それはひどく甘美な幻覚だ。眩暈がする。

「い、維月さ……っ」

満開の桜がおぼろげな月光に照らされ、夜闇を薄桃色に染め上げているようだ。微かに吹く風が桜の花びらをさらさらと流している。

「……………ん、んっ」

口づけの合間に息を継ぎ、それからもう一度、伝えなおした。

「す、き」

喘ぐような声になってしまったけれど。

維月さんは小さく笑って応えてくれた。嬉しがっているような照れているような、そんな目をしてわたしを見つめ、維月さんは鼻先を触れ合わせてきた。

「これだから美鈴には敵わない」

「敵わないなんて、そんなの維月さんの方こそで、それに……」

維月さんのくすぐったげな微笑を睨めあげながら、わたしはちょっと困った顔をして見せた。

「甘すぎなんです」

再び重ねてくる、そのキスも。

## 雨に落ち居る

雨の降る日は、少しだけ憂鬱。

けれど、少し安らいだ気持ちにもなる。

地面に降り落ちて潤いを与えるように、心にしつとりとした静逸さを与えてくれる雨は、どこかあの人に似ている。

あるいは、空模様の全てが似ているのかもしれないけれど。

雨の匂いがする。

久しぶりの雨はいいけれど、乾燥しまくってる空気はなかなか潤わないとか、今日は花冷えだとか、これでもう大抵の桜は散ってしまふとか、そんなことをつらつらと考えていたら、廊下の曲がり角で、人とぶつかりそうになった。

出くわしたその人にはぶつからずにすんだけど、持っていた書類を落としそうになって、とっさに胸元に押さえつけた。

顔を上げると、そこには見慣れているはずなのに、見るたびに鼓動が高鳴る人の顔があった。

「お、お……かえりなさい」

さり気なく言おうとしたのに、失敗してしまった。

「ただいま」

笑顔で応じてくれたのは、わたしが所属している課の上司、高倉主任だ。

上司ではあるけれど、ただの上司ではない、わたしにとって

は特別な……彼。

「今から、部屋へ戻るところ？」

訊かれて、わたしは頷いた。

わたしは総務課から執務の部屋へと戻るところで、ばったり出く

わした高倉主任は外出先から戻ってきたところだった。

いつそ、ぶつかってしまえばよかったかなと、頭の隅でチラリと思った。

ぶつかって、高倉主任に触れたいって思ってしまった。

余所余所しい距離を置かなくちゃいけないと気をつけているからこそ、偶然にかこつけて、高倉主任に近づきたかった。

そんなことを言えるはずもなく、わたしはひっそりと嘆息した。

「高倉主任も、戻るところですよね？」

「うん。夕方に会議があるから、またちよつと抜けるけどね」

高倉主任もため息をついた。

もちろんわたしとは別の理由からのため息だ。

高倉主任はため息をついた後、物憂げな様子で額にかかる髪をかきあげた。髪は少し湿っているようだった。それに肩先も僅かに濡れていた。雨に打たれたのだろう。ひどく濡れた様子はなかったけれど、ダークグレーのスーツが湿ってところどころ色を変えているのが見て取れた。

春の雨は、湿度は上がらないけれど、空気に靄がかかって、埃っぽさもおさまらない。いつそもつと激しく降ってくれば、空気中の埃とか飛散してるだろうスギ花粉なんかをおさえこんでくれるだろうに。

それに今日は、正午を回っても気温は上がらず、少々肌寒い。そのせいか、高倉主任の微笑に僅かな翳りが窺えた。顔色が冴えない。疲れているのかな？ 体調崩したりはしてないかな？

それを聞きたかったけれど、タイミングを逃してしまった。

「その書類、もしかして派遣の、契約更新の？」

「え……、あ、はい、そうです。契約内容自体に変わりはないんですけど、少し文書に変更があったからって。それに、契約更新していただけることになりましたから」

「木崎さんを切ったりしないよ」

「そ、そうですか……」

「木崎さんだけじゃなく、うちの課の子達は全員、今年は契約更新のはずだからね」

「そうみたいです」

当たり前障りのない、上司と派遣社員との会話だった。周りの目を気にして、どうしてもそういう味気ない会話になってしまふ。わたしの我儘で、わたしと「高倉維月さん」との関係は、社内では秘密にしているから。

それでも、高倉主任はわたし個人に対してさり気ない優しさを見せてくれる。

わたしが周りの目を気にしてぎこちない返答しかできないでいるのに、それを可笑しがったりもしないし、不快そうな顔をしたりもしない。高倉主任は気負いも見せず「主任」の顔を保って、それなのに不意をついて「維月さん」のまなざしを向けてきたりなんかつる。

たとえばこうして、二人きりであるときなんかに。

注がれる「維月さん」のまなざしは、降り注ぐ細雨のように静かなものだった。

会社の駐車場は、ビル横にある立体駐車場の他に地下にもある。けれどそこは重役専用らしい。

一応「主任」という役職をもらっているにせよ、立場的には平社員とさして変わらない高倉主任は、立駐に車を停めている。そこから傘もささずにビル内に戻ってきたようだ。

小雨だからと、傘は持って出なかったらしい。

わたしは周りを気にしながら高倉主任の様子を窺い、語を継いだ。「雨、まだ降ってるみたいですね。今日は気温も上がらなそうです」

幸い、人通りはない。人のざわめきは耳に届いてくるけれど、廊下にはわたしと高倉主任しかいなかった。



「うん。天気予報が見事に当たったね。帰りにはやむといいけど、  
どうかな」

向かうところが同じだから、わたしと高倉主任は一緒に歩き出した。なぜだか、わたしの方が前を歩いている。歩きながら、ぽつぽつと話をする。内容は他愛無いこと。仕事のことだったり、天候のことだったり。

背後にいる高倉主任の気配に、心は乱れがちだった。

何度となく聞こえる、高倉主任のひそめたため息が、気にかかった。

足を止め、振り返ってみると、高倉主任はちょうどスーツの上着を脱いでいるところだった。肩の凝りをほぐそうとしてか、軽く首を回す。それからドット柄のネクタイに手をかけた。インディゴブルーのネクタイを少しだけ緩めて、ため息をついた。

やっぱり、相当に疲れているんじゃないだろうか？

取引先への顔出しは定期業務みたいなもので、高倉主任はひと月に一度か二度は、外回りに出る。たまには外へ出るのも気晴らしになるよなんて高倉主任は笑っていたけど、そんな気楽なものではないはずだ。

疲れないわけがない。

それなのに、高倉主任はそういった泣き言や弱音をめつたに吐かない。疲れを吐露するにしても、それはほんのちよつと……そう、ため息をつくくらい。

大丈夫ですかと問おうと、開きかけたわたしの口から出たのは、くしゃみだった。慌てて口元に手をやり、スンツと溲をすすって肩を竦めた。ちよつと鳥肌がたった。

高倉主任は「大丈夫？ 風邪？」と含み笑いをしながら訊いてきた。それは、わたしが訊こうとしたことなのに。逆に訊かれてしまふなんて！

「だ、大丈夫ですからっ」

寒いのは、雨に濡れて戻ってきた高倉主任の方だろうに。それな

のにわたしがくしゃみをしてしまうなんて、なんだか恥ずかしい。  
わたしはふいつと顔を逸らし、また高倉主任に背を向けて歩き出した。少し俯き加減になって、書類の束を胸元で抱いた。

今も、周りには人気がない。わたしと高倉主任の道行を見ている人はいないはずだ。

相変わらず、離れた所から人の話し声や電話の鳴る音なんか聞こえてくるけれど、エレベーターが動く気配もなく、階段を上り下りする足音もまったく聞こえない。今わたし達がいる二階の廊下は奇妙なほど静かだった。

けれど、あと数歩進めば、わたし達の職務の場である部屋に着く。わたし達の会社が入っているオフィスビルは、事務所内や食堂なんかは広く造られているけれど、廊下は存外狭い。

片側には壁が続き、場所によっては絵画が掛けられていたり社のポスターなどが貼ってあったりする。もう片側は窓。窓といっても開閉できるのはごく一部。でもこのガラス張りのお陰で狭さを感じさせず、照明がなくても十分に明るい。

窓の外は、雨模様だ。まだ止みそうにない。

街は春雨に霞んでいる。街路樹も雨に打たれ、芽吹きだした木々の若葉色は、今日はくすんで見えた。細い枝先が風に揺れる。寒そうに震えているようにも見えた。

何気なく窓の外に向けていた視線を戻し、軽くため息をついた、その時だった。

ふつと背後の気配が揺れて、そしてそれが覆いかぶさってきた。

「……っ！」

足が、竦んだ。

振り返ることもできない。いきなりのことにびっくりして、鼓動が跳ねる。

わたしは高倉主任の両腕にとらわれ、きつく抱きしめられていた。  
「い、いつ……っ」

息が詰まるほどの、抱擁だった。

高倉主任はわたしの肩をぎゅっと掴んで抱き、髪に頬を寄せてきた。  
「……………」

高倉主任の嘆息が耳朶にかかった。硬直していた全身が粟立つ。

わたしは思わず目を閉じた。心臓が痛いほどにどきどき鳴っている。

沈黙の中、わたしの心臓だけがやたらに騒いで、きつとこの高鳴りは高倉主任にも伝わっているはずだ。  
「……………」

もう一度、高倉主任はため息をついた。疲れを吐き出すような、深い深いため息だった。それからすぐに、高倉主任は両腕をはなし、身を離れた。

長いように感じられたけれど、それはほんの数秒足らずの短くあつけない抱擁だった。

「ありがとう、美鈴。…… 助かった」

身を離すその直前に、高倉主任ではなく、「維月さん」がわたしの耳元でそう囁いた。

とまどい顔のわたしに、すまなそうな笑顔を見せた維月さんは、けれどもすぐに高倉主任の顔に戻り、「先に行くよ」と、わたしを追い越して行った。

取り残されたわたしは、ぼう然と立ち尽くしていた。

いきなり背後から抱きしめられて、しかも会社の廊下でっていう場所もあって、ひどく焦ったし、驚いた。

だけど、とまどったのは、維月さんの言葉にだった。

だって、……「ありがとう」なんて……。それに「助かった」って、わたし何もしていないのに。

ありがとうなんて言葉をかけてもらえる何かを、わたしは維月さんにしてないのに。

「ただ、……ただとたぶん分かる気がした。なんとなくだけど、維月さんがわたしを抱きしめた理由なら。それが「ありがとう」に繋がるのかもしれない。」

「きつと、すごく疲れていたんだろうと思う。疲れて、ちょっと寄りかかりたかったんだろう。」

「あんな風に、わたしに寄りかかってくれることなんてめったになくて驚いたけれど、心を隠してばかりの人じゃない。甘えてくることだってある。微苦笑しながら、「疲れた」って弱音を吐いてくれることもある。」

「わたしなんか、維月さんによくそうして寄りかかっている。」

「くだらないミスをしてへこんだ時や寂しさに心が塞いでしまいうな時に、傍にいてほしいと願ったり、甘えたりしてる。」

「だから、それと似たような理由だったんだと思う。」

「……………」

「胸を押さえたまま、深呼吸をした。」

「そして、ふと、思った。」

「疲れてる維月さんのために、何かをしてあげたいと思う。」

「けれど、何をしなくても、ただ傍にいて寄り添っているだけでも……もしかしたら、心の支えになれるのかもしれない。」

「わたしなんかにはできることは少ないけれど、それでもさつきみたいに、ただ居るだけならできる。」

「今もまだ、背中や肩に、維月さんの抱擁の熱が残ってる。耳にかかったため息も、囁きも。」

「維月さんがわたしを必要としてくれる。それが分かって、嬉しかった。」

「だから、さっきの「ありがとう」。それは、きつと維月さんのありのままの気持ちだ。ちゃんと受け取ろう。」

「そしてわたしからも「ありがとう」って伝えたい。」

「すぐにでも伝えたいから、休憩時間の時にでも、メールを送ろう。「ゆっくりでもいいですから、元気出してってください。呼んでく」

れたら、いつでも会いに行きます」「って。

気の利いた台詞は思い浮かばない。

けれどきつと維月さんは笑ってくれる。雨上がりの空のように、晴れ晴れとした笑顔を見せてくれたら嬉しいな。

そんなことを考えながら、わたしは首を伸ばして息をつき、再び歩き出した。

## 月守りの宵

いつもよりちょっと早目にバスタイムを切りあげ、髪をおおよそ乾かした状態でバスルームから出ると、わたしが出てくるのを待っていた維月さんが、にこりと笑って訊いてきた。

「美鈴、今日は何の日か知ってる？」

……何か、とても意味深で、悪戯っぽい笑みに見えるのは、気のせいですか、維月さん？

エアコンはドライ（除湿）モードになっていて、室内は程良く涼しいはずなのに、頬は上気し、動悸までし始めて、体が熱い。

不意打ちに、維月さんの艶おびた瞳とぶつかると、いつもそうだ。

「今日、ですか……？」

「うん、そう」

維月さんは少し小首を傾げ、突っ立っているわたしをじっと見つめてくる。答えを急かすようではなく、考え込むわたしの様子を見るのを楽しんでいるような目をしてる。

維月さんの隣に座ろうかなって思っていたのに、突然の質問に戸惑って足をとめてしまったわたしはそこから動かず佇んで、考えを巡らせた。

維月さんは艶笑を湛え、わたしを見つめている。

空の青さと雲の白さが眩しかった、今日。気温も三十度を優に超え、熱中症にお気を付け下さいとニュースや天気予報で繰り返されたほどの夏日だった。夕立もあって、そのせいなのか湿度も高く、夜の十時になってもまだ蒸し暑かった。

そんな蒸し暑い夜、維月さんは突然わたしのアパートにやってきた。もちろん電話連絡をくれた後。手土産にわらび餅を持ってきて、お風呂前に、二人で一緒に食べた。

今夜の維月さんはアルコール摂取量が少ない。度数も低い缶チューハイを一本空けただけだった。明日も仕事だからという理由もあったろうけど、普段ならもっと度数の高いものを飲むのに。

「そういう日もあるよ」

と言つて、維月さんは苦笑した。気を悪くしたようではなかったけれど、維月さんは少し情けなさそうな表情をして、ため息をついた。

維月さんはさっきまでつけていたテレビを消し、代わりにCDプレーヤーのスイッチを入れ、ピアノ演奏のジャズを流していた。一昨日買ってきたCDで、けっこう気に入ってるアルバムだ。

耳に優しいムーディーなジャズは、熱気に当てられ、疲れきった夜にはちょうどいい。

「美鈴に合うね」

と、維月さんが感慨深げに言った。わりあいメジャーな曲ばかり入っていて、CDのパッケージにはジャズ初心者向けと書いてあった。そういう無難さが、なんとなく「わたしらしい」って気がした。維月さんは「そうじゃないよ」と笑った。

「無難といえば確かに無難だけど、それだけじゃない。個性的すぎず、それでいてちゃんと存在感があつて、安心できる音だ」

そういうところが美鈴に似ていて、合っている。そう言ってくれた維月さんこそ、「安心させて」くれる人だ。いつもそうして、わたしの心を安らげてくれる。

安らげてくれるのだけど、同時に、落ち着かなくもさせる人なのだ。

そんな維月さんが訊いてきた質問、「今日は何の日か」って……。わたしは首を捻る。

「今日は、八月の……九日ですよね？ ええ……っと、終戦記念日は十五日だから……平和記念日でしたっけ、九日」

「平和記念日は六日」

「あ、そっか、そうでしたね。そういえばニュースで見たし……。それじゃあ九日って、なんだろ……。八月って祭日もないし。あ！八月の八で、なんか語呂合わせ的に、歯の日とか！」

「惜しい。語呂合わせ的なのはたしかにそうだけど、歯の日は十一月八日だったと思う」

十一で（いい）、八で（は）で、いい歯の日ってことか。なるほどと頷き、同時にそんなこと、維月さん、よく知ってるなあと感心したし、ちよつとだけ呆れたりもした。

それにしても、思いつかない。八月九日。

……はちがつ……このか……はち、と、きゅう。

眉をしかめて「うーん」と呻るわたしを、維月さんは嬉しげに微笑んで熟視している。

維月さんはわたしの口から正しい解答が出てくるのを期待してはいないみたいだった。というより、わたしが正解を持っていないことを前提で訊いてきたような、そんな気がする。

維月さんはソファアーベツドに座ったまま立ち上がり、上半身を傾けてテーブルの上からグラスを手に取った。中身はミネラルウォーター。氷がカラリと涼やかな音をたてた。

先に風呂を済ませていた維月さんは、わたしがお風呂に入っている間に、テーブルに並んでいた缶チューハイの空き缶やつまみの乗った小皿なんかを全て片付けてくれた。そのうえ、気の利く維月さんは、お風呂上がりでのぼせてるわたしのために、冷たい水を用意してくれていたのだから、本当にもう、至れり尽くせりだ。

維月さんのこういったさり気ない気の回し方には心底感心してしまう。

でも、せつかくうちに来てくれたのに、維月さんに気を遣わせてしまうなんて……。

寛いでほしいのに、わたしばかりが維月さんに甘えきって、なんだか申し訳ない気分にもなってしまう。



身を屈め、水滴で濡れているグラスを手に取った。滴がテーブルの上に、ぽたりと落ちた。膝をつき、そのまま腰をおろして、グラスを満たしていた水を半分ほど、一息に飲んだ。おかげで喉も潤い、茹だっていた体も少し熱が治まった。

コースターの上にグラスを戻してから、再び維月さんの方に顔を向けた。

「そ、それで、えっと……、今日は何の日なんですか？」

右斜め上に、維月さんの顔が見える。手を伸ばせば足に触れられる程には近いけど、微妙な距離だ。……隣に座りたかったのに、機を逃してしまった。

維月さんもグラスを置く。

そして上体を起こし直し、額にかかった前髪を押しつけるようにしてかきあげた。その仕草は気だるそうで、だけどひどく艶めかしい。

「今日は、……」

維月さんは髪をかきあげた左手を、わたしに差し出した。その手を「取って」と、維月さんの瞳が語っている。

わたしは維月さんの手を取り、腰を浮かせた。それから維月さんに促されるまま、維月さんの左隣に座った。わたしの目は維月さんの目に固定されている。吸引力の強い瞳に。

手は、緩く繋いだままだ。維月さんの手は少し汗ばんでいて、冷たかった。

「今日は、ハグの日なんだって」

「はぐ？」

わたしが首を傾げると、維月さんはさらに目を優しく細めて笑った。

「うん、そう。ハグ。八と九で、ハグだからだって」

「はぐ……？」

語呂の説明をされてもピンとこず、目を瞬かせた。意味に気がついたのは、維月さんが「して、いい？」と訊いてきてからだ。

「……………」  
わたしは「うん」と頷く代わりに、素早く維月さんに身を寄せ、ぎゅっと抱きついた。

「……………」美鈴

その後すぐに、維月さんもわたしの腰に腕を回してきた。機先を制されてさすがに驚いたみたいだった。わたしの髪に頬を寄せ、維月さんは小さなため息をこぼした。

「維月さん」

「うん？」

「大丈夫ですか？」

「……………」

維月さんはわたしの肩口に額を寄せ、嘆息した。  
流れていた音楽が止まり、維月さんのひそやかな息遣いが聞こえる。

心配だった。

だって維月さん、少し具合が悪そうだった。たぶん暑気あたりだ  
と思うけど、顔色もあまり良くなって、疲れているように見えた。  
うちに来た時からそれは見て取れたから、心配だった。

今夜はわりあい早く仕事を切り上げられたようだけど、ここ数日  
残業が続いて、さらにこの連日の暑さ。さすがに体力も落ちて、夏  
バテしてしまったのかも。それに、気疲れだつて溜まっていたに違  
いない。もしかしたら、体力的なことよりも精神的な疲れの方が大  
きいかもしれない。

維月さんは仕事上の愚痴をあまり漏らさない。まったく言わない  
わけじゃないけど、控えているみたいだった。プライベートに関す  
ることも、そう。いろいろと話してはくれるけど、弱音なんてめ  
ったに吐かない。

だから……………本音を言ってしまうと、とても嬉しかった。

わざわざわたしに会いに来てくれたのは、少しでも溜まっていた疲  
れをとるためなのかなって思ったから。「ハグの日」にかこつけて、

甘えたくなつたのかな……って。

「美鈴、……いい匂い」

「……っ」

ベッドが軋んだ。

維月さんの腕に力が入ったと思つた瞬間、わたしはいともあっさり押し倒されていた。維月さんがわたしの上に覆いかぶさり、耳元で囁いた。

「重い？」

「……」

重くないといえば嘘になるけど、嫌じゃない。だから、維月さんの背をきゅっと掴んで、応えた。

維月さんは今、どんな顔をしてるんだろう……？

肩口に顔をうずめて、顔を上げてくれない。

維月さんの鼓動が伝わってくる。熱っぽい吐息が耳朶にかかつて、思わず肌が粟立った。

顔も見せてくれない。何も言ってくれない。

だけど、それでいいって思った。……こうして寄りかかってくれるだけで、十分。

ほんのちよつとだけ、こうしてるだけでちゃんと疲れがとれるのかな、心が癒されるのかなって心配だったけれど……。

「美鈴」

「はい」

「今夜、ずっとこうしていい？」

維月さんは片方の肘を立てて少しだけ上半身を持ち上げ、やっと顔を見せてくれた。わたしを覗き込んでくる維月さんの目は、不安げな子供のようだった。それでいて、官能的な男性の色も含まれている。狂おしいほどにわたしを求めてくれている。あまりにも直截的なまなざしだった。

「……」

声に出さず、うんと頷いたわたしの眉間に、維月さんは優しいキ

スを落とした。

「今日、……来て、よかった」

胸がいつぱいになり、感極まって泣き出しそうになった。

維月さんのそのたった一言が、本当に……本当に嬉しかった。

「……維月、さん……」

いきなり泣き出して維月さんを困らせたくなかったから（維月さんはきつと困らないだろうけど）、少しおどけた口調をつくって、笑みを返した。

「今夜はずっと、こうして維月さんの抱き枕になってます。なんといつても、ハグの日なんですもんね！」

そうして、維月さんはわたしを抱き、心地よい睡眠を得たようだった。

眠りに就く前、わたし達は何度もキスをし、互いの抱擁を求め合った。そのおかげで少々睡眠不足になってしまったのは、予想の範疇。

**D o n ' t b e n a s t y !**

**(前書き)**

高倉維月視点の小話です。ぼかした描写ですが、“本番”微工口なので苦手な方は自己回避をお願いします。

Don't be nasty!

晩春、ひどく悩ましげな香りが室内を満たしていた。

甘やかな香りを元は、今、俺の四肢でつくった檻の中にいる。

熱い息が、互いの口から漏れる。

美鈴が、無駄と分かっているだろうに、いつものごとく俺に要求してくる。

「明かり……消して」

荒い息を整えられず、美鈴は喘ぐように言う。

まだ、意識が羞恥のせいではつきりとしているようだ。

俺に組み敷かれた美鈴は涙目で訴えてくる。汗に濡れた前髪を指で払ってやると、いやいやと首を横に振る。「見ないで」と、眉をしかめて目を閉じる。

何度請われても、美鈴の願いは聞き入れられない。

眺めずにはいられない。美鈴の、恥じらいながらゆるゆると咲き乱れてゆく様を。

これほどの悦楽はない。

美鈴の痴態は、憐れで美しい。

美鈴の裸体を隠しているのは、薄い生地のカミソール一枚。ラベンダー色のカミソールは、美鈴の白い素肌によく映える。捲くりあげるのも脱がせるのも容易い。しかし、たった一枚の薄い布地で官能への高まりを留めようとする美鈴を見るのもまた愉しかった。俺もまだ衣服の全てを脱ぎ去ってはいない。

シャツだけを、脱ぎ捨てた。ベッドから床に滑り落ちたシャツを、美鈴の目が追う。

美鈴の髪を、後頭部から持ちあげるようにして、枕辺に流した。

やや癖のある美鈴の髪は触り心地が良い。手櫛で梳くと、美鈴はび

くりと身を強張らせた。

髪を撫ぜ、それから頬に手を戻し、顎から鎖骨へと指を這わせた。しっとり濡れた肌から扇情的な匂いが立ち上ってくるようだった。今すぐにも食らいつきたい衝動を抑え、美鈴の肢体の輪郭を指先でなぞった。布地越しの愛撫に美鈴は焦れたような吐息をこぼした。胸の先へはわざと触れず、脇へと流し、そのまま腰から腹部へと指を移動させた。少しだけキャミソールを捲くりあげ、鳩尾に手を置いた。

ひゅつと、美鈴は息を飲む。

「い、つき、さ……っ」

こわごとと、美鈴は閉じていた目を開けた。戸惑いが美鈴の瞳を潤ませて、俺を見つめる。濡れそぼった瞳は、さらなる快楽を待ち望んでいるようだった。それを美鈴自身は認めまいとしているようだが、抗いきれないこともまた知っている。

視姦に徹したかったが、それも限界に近かった。

熱い吐息をもらす唇を掠め取るようにして口づけ、それからまた愛撫を再開させた。片手だけの愛撫に、美鈴はもの足りげな顔をする。そのくせ、懲りもせずに訴えてきた。

「あの、維月さん、あの……明かり、…消して……っ」

そんなに見ないと、両腕をあげて顔と胸元を隠した。

本心とも思えないその訴えに、俺は嘆息して体を起した。美鈴は「あ……」と小さく声を漏らし、淋しげな、そして追い続けるような目をして俺を見る。

「俺に見られるのが、……嫌？」

片手を美鈴の脇腹の横に付き、体を傾けた状態で美鈴を見つめ返して、問いかけた。意地の悪い質問だと我ながら思い、口元に苦笑いが滲んでくる。

「そ……んな、……嫌とかじゃなく、て……っ」

美鈴は困惑気味に言葉を紡ぐ。俺の刺すような視線に怯み、身を竦ませている。

「そうじゃなくて、その、だって、は……恥ずかしいから……！」  
「それじゃあ」

ふっと、緩んだ笑みを美鈴に返した。目の端に、都合のいいものが映っていた。それを、片手を伸ばして掴み取った。

今日、美鈴が首に巻いていた、シルクのスカーフだ。シルクなだけに生地は薄い。しかし黒地で、都合が良かった。

「これで、目隠しをしようか」  
「えっ」

途端、美鈴は息を飲み、顔を強張らせた。

美鈴の素直すぎる反応に、思わず失笑した。

「……こうすれば、美鈴は安心できる？」

スカーフで、目隠しをした。美鈴の目ではなく、俺の目を。そして上体を起こして、座り直した。

「これで、何も見えない」

「維月さん」

美鈴の戸惑う声が聞こえ、同時に衣擦れの音も聞こえた。美鈴も体を起したのが、気配で分かった。そちらに顔を向け、手を伸ばした。美鈴の頬に触れようとしたが虚空を掴んだ。

「……維月さん」

困惑し、けれど少し呆れたように美鈴はため息をつき、それから俺の手を掴んで、自分の頬へ導いてくれた。美鈴は俺の手を優しく握り、そして掌に口づけた。

「ずるいです、維月さん」

「そうだな」

含み笑って応えると、美鈴は「もっつ」と脱力しきったようなため息をこぼした。

今、美鈴はどんな表情をしているのだろうか？

それを見られないのがひじょうに惜しかった。

だから、というわけでもないが、目隠しの代償を美鈴に求めた。

いや、もともとそうした腹積もりはあったのだが。



「手探りで美鈴に触れるのもいいけど、それじゃあ美鈴もつまらないだろう？ だから、美鈴からして」

「えっ」

「またしても美鈴は驚きの声をあげた。」

「し、してって、何をすれば……っ」

美鈴は動揺のあまり、墓穴を掘る。

何をすればいいのか、具体的に語ればいいのか？ それを言うと、美鈴はさらに動転したようだ。目に見えずとも、その様子がありありと思ひ浮かぶ。

美鈴が離れた手をすぐさま掴み返して、体を引き寄せた。美鈴の細腰に片腕を回し、逃げられぬように拘束した。

「でっ、できません、わたし、そんな！」

「できるかできないか、試してみても遅くはないと思うけど？」

「だって、そんな！ 恥ずかしいし、わたしとてもそんな……っ」

「美鈴に、して欲しい」

「……っ」

もう、くどくどとかき口説くのももどかしかった。

俺の下腹部が疼き、美鈴を求めている。それは美鈴も同じのはずだ。中途半端に投げ出された官能をこのままにはしておけない。

お願いだと、美鈴を抱き寄せ、耳元で囁きかけた。もう待てないと。

美鈴がごくりと喉を鳴らした。

それが、答えとなった。

M a k e m e s w e e t

(前書き)

高倉維月視点、秋の小話。

## Make me sweet

天高く、馬肥ゆる秋。

青天が美しく、室内に引きこもっているのはもったいないからと、恋人をデートに誘ったのは数日前。三連休ということもあり、遠出をしようと誘いをかけた。ただ、都合がつかず日帰りの小旅行だが、それでもいいかと尋ねると、彼女：美鈴からは二つ返事でOKをもらった。しかし、その予定も崩れた。

急な仕事が入り、三連休の初日に出掛けるはずの予定を繰り越さなければならなくなった。中日はもともと彼美鈴にも俺にも先約があったため、結局、最終日に会おうということで、お互い都合をつけた。

日にちは変わったが、当初の予定はそのままに、ちょっとした観光地への、気楽なドライブを兼ねての小旅行に出た。

他に、どこか行きたいところはないかと尋ねると、美鈴は小首を傾げてちよっと考え、

「新しくオープンしたショッピングセンターに行ってみたいんですけど、いいですか？」

と、遠慮がちに言った。帰りにちよっと寄ってみる程度でいいですから、とも。

新しくオープンしたといっても、もうオープンしてから半年以上が経っているらしい。地元からずいぶんと遠く離れた所にある店だというのに、よくそんな情報を知り得たものだ。女性ならではのいい早耳だろう。

ともあれ、美鈴の希望を叶えるべく、小旅行の帰り道にそのショッピングセンターに立ち寄ることにした。

美鈴が来たがったショッピングセンターは、オープンして半年が

経つとはいえ、なかなか混雑していた。三連休の特別セールも開催されていたし、夕方という時間帯もあっただろう。真つすぐ歩けないほど、通路は雑然と賑わっていた。

横を歩く美鈴を見ると、人いきれに当てられたのか、ほんのりと頬を紅潮させていた。

「外は風があつてちよつと寒かつたけど、店内はちよつと…暑く感じますね」

美鈴は首に巻きつけていたスカーフをはずし、折りたたんでバッグの中にしまい込んだ。

美鈴は普段からカジュアルテイストの格好を好んでいるが、今日はそのスタイルに可愛い系のテイストを取りこんでいる。ネイビーブルーが地色のボードアのワンピースは短めの丈で、裾から白いレースがのぞいている。グレイのパンツ（レギンスというのだと教えてもらった）を履いているため、素肌は見えない。その上、ブーツだ。スウェード素材のロングブーツは履き口からファーがちらりと見えて、いかにも温かそうだが、この季節、屋内では少々暑そうにも見える。

美鈴は鏡に映る自分と俺とを見やって、「子供っぽすぎたかな」としょんぼり顔をした。声にこそ出さなかったが、もしかしたら美鈴は「不釣り合いだ」と思ったのかもしれない。

俺もまた、美鈴と同じようにカジュアルな…黒のTシャツの上にフェイクスウェードのロングシャツにジーンズ…という格好だったから、見た目的にはそう「不釣り合いだ」とは思わなかった。だが、美鈴の杞憂も分かる。美鈴が不安なように、俺も年齢差に関しては多少なり気にしている。美鈴の周りには、当然のことだが、俺よりも彼女に近い年齢の男が、幾人もいる。

むろんそれは口にしない。言えば、美鈴は困り顔をするだろう。

フロアガイドの冊子を眺めながら、美鈴は半ば呆れたように呟いた。

「専門店が百近くつて、すごい数！一日かけてこないと、全部見て回るなんて無理だ……」

気になる店はいくつかあったらしいが、ウィンドウショッピングに徹して、結局美鈴は何も買わなかった。

「そろそろ出ましようか。外、暗くなり始めてきちやってますし」  
そう切り出したのは美鈴の方からだった。

外食するつもりではいたが、ここでは落ち着かないということ、他所に行くこうということになった。

あちこちと楽しそうに見て回っていた美鈴だが、やはり少々疲労の色を見せ始めていた。

実のところ、俺自身も人ごみに当てられ、若干疲れていた。美鈴は敏感にそれを見て取ったのだろう。

しかしこのまま何も買わずに店を出るのはいささか勿体ないような気もした。それに、約束を急にキャンセルした詫びもなかった。美鈴は「気にしないで」と言ってくれたが、キャンセルの連絡を入れた時、電話越しで聞いた美鈴のあの残念そうな声は、しばらく耳から離れなかった。

食べ物で謝罪の意を示すのはあまりにも安易だが、何らかの形で償いはしたかった。

「美鈴は、デザートの中ではどれが一番好き？」

「え？ デザート、ですか？」

「そう。まあ、洋菓子里に限定しなくてもいいけど」

「すつごく難しい質問ですね……」

すつごく、の部分強調して言い、美鈴は目の前の洋菓子店に視線を移した。

生クリームとバニラと、あとは焼きあがった菓子の甘い香りが漂ってくる。隣にはベーカリーショップがあり、その横にはカフェがある。どの店も混んでいて、レジ前には列ができていた。

普段から優柔不断のきらいのある美鈴は、長考したあげく、「やっぱりひとつになんて絞れませんよ」と、逆にこちらを責めるよう

に返してくる。

「蒸しプリンも好きだし、ミルフィーユもワッフルもシュークリームもモンブランも好きだし、チョコレート系のお菓子ならなんでもいけるし、もちろんおはぎとかわらび餅とかの和菓子も好きなの多いし……」

言っているうちに、食べたくなってきたらしい。美鈴は「むーん」と唸って、眉根を寄せた。

「それじゃあ、今食べたいものでいいよ？ 今夜の食後のデザート、買っていい？」

訊くと、美鈴はさらに眉をしかめ、あまつさえ、恨めしげな視線を俺に向けてきた。

「維月さん、もしかしてわざと意地悪言ってます？」「意地悪？」

「あんまり誘惑しないでください。今わたし、絶賛ダイエット中なんですから！」

「ダイエットって……いつから？ というか、必要ないだろう？」

美鈴は真剣な顔つきで、「昨日からダイエット始めることにしたんです」と、あまり自慢できないようなダイエット宣言をし、片手で腹のあたりをさすりながらきゅっと眉をしかめた。

なんでも昨日、タイトストレートのジーンズを履こうとしたら、腰回りがきつくなって、履けはしたものの、苦しい思いをしたらしい。

「食欲の秋が靦面に効果を表したって感じで！ なんかもうお腹っというか背中っというか、ちょっとマズいというかピンチというか！ しばらくお酒も控えなきゃって思ってた……。だからこんな時にスイーツはタイヘンよろしくくないです。ここ、危険ゾーンですから！ そっ、そういえば維月さん、ランチ食べた後、いきなりほっぺをつまんできたりして……。もしかして、ふ…太ったとか、思ってたんじゃないですか？」

それは言いがかりだと苦笑しつつ否定すると、美鈴はまた文句を

つけてきた。

「美味しそうに食べるねって笑って……それって、よく食べるって意味なんじゃないですか？」

「そんなつもりはなかったけど」

「けど……、なんですか？」

「……いや、まあ、美鈴らしいなと思って。いろいろと」

美味しそうに食べる美鈴も、ネガティブな思考に走りがちになってしまう美鈴も、ムキになって詰め寄ってくる美鈴も、どれも可愛いと思う。会社では到底見られない表情ばかりだ。素のままの美鈴の表情は、暮れゆく空色よりも豊かな色彩を持っている。

美鈴が俺に見せてくれる素直な表情が嬉しく、つい口元を綻ばせた。

「もうっ、笑うなんてひどいです。わたし、……一応、真剣なのに」

「一応？」

「や、えっとなっ！ じゃなくって、かなり本気です！ 一応じゃないですっ」

「いや、やっぱり一応って程度がいいような……。我慢すぎるのはかえって体に悪い」

「でも！ 我慢しなくちゃならないこともあるんです！ だから今回ばかりは、スイーツ絶ちしますから！」

意気込んで宣言した美鈴は、この場においては危険だとばかりに俺の腕を引っ張って、歩き出そうとした。

そんな美鈴を、俺は半ば強引に引き止め、逆に美鈴が離れようとしていた店へと引っ張り込んだ。

「待って、やっぱり買っついていこう。俺も食べたいから」

「えっ、ええっ、でもっ、でもですね……」

「俺一人だけ食べるのは、さすがにちょっと切ないし。つきあってよ」

「でも……」

「ダイエツトは明日から……いや、今夜寝る前から始めたらいい」

「うっ…っ、丸めこまないでくださいよ……」

美鈴はなんとか反論しようとしていたが、結局、あっさりと折れた。「維月さんがどうしても食べたいっていうなら」と言い訳がましいことを口にして。

悩んだ末、レモンのムースとモンブラン、それからカシスとピスタチオのマカロンも各一つずつ買って、美鈴が言うところの「危険ゾーン」から脱出した。

移動中の車内、美鈴はケーキの箱を見つつ、何度となくため息をついた。なんとなく嬉しそうにも感じられるため息ではある。

そんな美鈴が可笑しくて堪らず、しかしなんとか笑いを抑えて、美鈴に声をかけた。

「ダイエットなら、俺も協力するから」

「え、協力って……？」

驚いたように目を瞬かせ、美鈴は俺の横顔をまじまじと見つめてくる。しかし美鈴は俺の言葉の裏までは読めない。あるいは読もうとしないのか。俺の言うことを顔面通りに受け取って、どんな風に協力してくれるのかと訊いてくる。

「食べた分だけ体を動かして消化すればいい。それなら、俺にも協力できる」

「ジョギングとかですか？ あ、それとも、テニス？」

「いや」

見え透いた下心が口元に浮かんで、不埒な笑みの形をとっているのだが、美鈴は気付かないようだ。

ダイエットに効果的な運動についてなど詳しくもない。

だが、体を動かして汗をかく方法なら、すぐに思い浮かぶ。

「もっと手軽な方法だ」

「……？」

「難しくもない。いつもしてることだ。……そう、今夜も」

「……っ」



予想通り、美鈴は絶句した。それからすぐに初々しげな反応を示してくれる。

「……………それ、セクハラ発言っぽいんですけど」

まあ、こればかりは否定できないな。

俺が開き直ったように言つと、美鈴は俯き、「勘弁して下さい」と小声を漏らした。

「ほんとにもう……………維月さんは甘すぎなんです……………」

夜も更けた頃になると、美鈴は本音をようやく吐露してくれる。

美鈴は俺の手に導かれるままにされ、体を任せ、心の縛りを解いて俺を見つめる。

「甘いものが好きなんです」

美鈴ははにかんで微笑んだ。

瞬きをし、ちよつと視線をはずして、また気恥ずかしげに俺を見つめ返してくる。長いまつげの下に陰が落ちている。そこにはなまめかしく匂う色香が潜んでいる。

美鈴はもどかしげに小さく口を開く。こぼれ出る声はやわらかく、温かな湿り気がある。

「維月さん」

「うん？」

「維月さん」

ただ、名を繰り返す。そうして背に回した手に力を込め、また俺の名を呼ぶ。

彼女は時々こんな風に、俺を誘う。

計算などしていないだろう。

遠回しなようできて、ひどく率直な、彼女らしい誘い方だ。

「甘いものが欲しくて、……我慢できないです」

我慢できないのは、お互い様だ。

腰を引き寄せられ、美鈴は窮屈そうに身を竦ませ、顎を上げた。同じ気持ちでいることを知ってくれたのだろう。

濡れそぼった瞳を俺に向け、さらにうっすらと朱唇を開けて、ねだってくる。

「ほんとに、維月さんは甘いです」

そして美鈴は、美味しそうに頬を緩ませ、優しく微笑んだ。

桂花の思惑

give off a fragrance (前書き)

読み切り話「金木犀」の翌週か翌々週あたりの話です。

## 桂花の思惑

give off a fragrance

高倉維月さんという男性は、甘えさせ上手だ。

無意味に甘やかすのではなく、心の縛りを解きほぐすよう、緩ませすぎないよう程良い加減で、わたしを甘えさせてくれる。

とても心地よく甘えさせてくれて和やかな心持ちになるのだけど、その一方で、心も体も維月さんでいっぱいになって、ほんのちよっぴり（かなり、かも）苦しくなってしまうたりする。

維月さんが与えてくれる甘い刺激は中毒性が高すぎて、欲する気持ちが抑えられなくなってしまうくらい。それが怖くて臆してしまふことも往々にしてあるけれど、それでもやっぱり維月さんの優しくて激しい抱擁を求めずにはいらなくなる。

とくに、人恋しくなるこんな宵には……

ヒガンバナの朱色が褪せ、キンモクセイの甘い香りも徐々に薄れて、風も冷たくなり始めたのを肌を感じるように、一人寝の寂しさをふと思ってしまう、秋澄む頃。

そんな秋の夜は、甘やかな誰かに傍にいてほしい。その誰が高倉維月さんなのは言わずもなだけれど。

維月さんは、わたしの心中を見透かしてか、それともわたしと同じ思いでいてくれたのか、終業後、夜更けてからアパートへやってきて、ゆったりと寛いでいる。すでにシャワーも浴び終え、パジャマ姿。

維月さんが着てるパジャマは先日わたしが贈ったもの。オーガニックコットンのニット素材、地色はアイボリーの格子柄。シンプルで無難なデザインだから、ちゃんと似合っってホツとした。肌触りの

良さを維月さんも喜んでくれて、それも嬉しかった。

ちなみにわたしはガーゼ素材で色はブラウンの柄なしパジャマ。元から持ってたパジャマで、維月さんのを買った時に一緒に買い求めたものではない。買っておけばよかったかなと、ちょっとだけ後悔してたけど、その心中を維月さんはあっさり見透かして、「お揃いじゃないんだ」とからかうように笑った。ペアのパジャマなんていくらなんでも恥ずかしいですから！

お揃いのパジャマもあったし、買っておけばよかったなんて本心は、口が裂けても言えない。……それも見透かされてると思うけど。

お揃いはさておき、わたしと維月さんはぴったりとくっついて座っている。そして維月さんはわたしの濡れた髪を乾かしてくれている、という体勢だ。この体勢も恥ずかしいといえば、ちょっと恥ずかしいかもしれない。

維月さんは膝をたてて座り、両足でわたしを挟みこむようにして座っている。

維月さんは、まるでわたし専用の座椅子だ。専用なんて言う

のはおこがましいけれど。

マッサージチェアなんかよりもずっとずうっとリラックス効果が高い。ただし、不埒な手や唇が度々悪戯を仕掛けてくるから油断はならない。といっても、それも承知の上でいるのだから、わたしの方こそが不埒なのかもしれない。

わたしの背後は、維月さんに対してはまったく無防備だ。

ドライヤーを当てられ髪を撫でられているうちに、体中がぬくぬくと温まって、気持ちも緩んできてる。

ドライヤーのスイッチを切ってから、維月さんは続けてブラッシングまでしてくれた。慣れた手つきで丁寧に髪を梳いてくれる。気持ち良くて、いつまでも梳いて欲しいと思ってしまうくらい。

もしもわたしが猫だったら、思いつきり喉をごろごろ鳴らして、すっごく気持ちいいんだってことを維月さんに教えてあげられるの

に。

「維月さんは、本当に甘えさせ上手ですよ」

「え？」

肩越しに振り返った途端、維月さんの優しい瞳とぶつかった。維月さんは少し首を傾げてわたしを見つめる。ブランドーの注がれたコーヒーのような艶色帯びた甘いまなざしを向けられ、心臓が高鳴りだし、眠気も飛んだ。

振り向いたままの姿勢では体も辛かったし、前に向き直った。維月さんの顔をまともに見てられなかったのもあるけれど。

「維月さんは、その、甘えさせてくれるのがすごく上手だなあって。なんだかこう……自然に、気づくと甘えちゃってるような状況になっっているというか」

そういえば維月さんはマッサージも上手だ。力加減も、強すぎず弱すぎずちょうど良く、体のコリをまるで蕩けさせるみたいになくしてくれる、まさしく“神の手業”<sup>てわぬ</sup> だと思う。

「上手かどうかは自分では分からないけど、美鈴を思いきり甘やかしたい気持ちは確かにあるよ。美鈴が俺に甘えてくれるのは嬉しいしね。ただ、……そうだな、そうすることで俺の方が美鈴に甘えきってるような、そんな気分になることもあるよ」

維月さんはふと笑みの混じったようなため息をつき、それからわたしの腰に両腕を回して、さらに体を寄せてきた。

確かにこの状況……というか姿勢って、甘えられているような気がしないでもない。甘えられているというか、ねだられているような……。ドキドキするし、ソワソワしてしまう。

「美鈴の方こそ甘えさせ上手だと思うよ。それに甘え方も上手だ。

いや、上手というより、可愛い」

「……っ」

また維月さんは、臆面もなくそういうことをさらりと！

背中向けてて良かった！ 瞬間沸騰して、今、顔、真っ赤だもの！

維月さんの、低すぎず高すぎもしない良く通る優しい声音も、器

用で如才なく動く大きくと温かな手も、思いがけず逞しい広い胸も、わたしに安堵感を与えてくれ、甘え心も満たしてくれる。けどその一方で、息苦しくなるほどのときめきが襲いかかってきて、胸が甘く疼いて痛くなる。

「わっ、わたしが甘え上手っていうならそれは全部維月さんのおかげで！ 維月さんがそうさせてくれるからうまく甘えられるんです。それにつ、こんな風に甘えたいって思うのも、甘えてほしいなって思うのも、維月さん限定ですからっ！」

「……うん。それでいい」

維月さんの満足げな囁きが耳朶にかけ、そこに火がついた。

さつきから上がりっぱなしの心拍数もさらにまた上がって、

この心音、きつと維月さんにも聴こえてる！

「美鈴」

「……っ」

リラックスモードのスイッチ・オフ。まったくどころじゃないモードに切り替わったスイッチ音を、維月さんの吐息に聞いた気がした。たぶん、空耳なんかじゃなく！

「あっ、あのっ！」

「美鈴……？」

「お茶！ お茶飲みませんか？ 今日、新しいお茶を買ってきたんです」

「………」

「中国茶なんですけど、わたしの好きなので、今の季節にピッタリのお茶で！」

「……じゃあ、もらおうか」

そう言ってから、維月さんはそっと腕を離してくれた。

慌ただしく立ち上がったものの、気を悪くしてしまったかなと今更ながらに焦って、維月さんを振り返り見た。とくに不機嫌そうではなくてホツとした。でも、名残惜しげに苦笑いを浮かべているその表情が、なんだかいじけ顔の少年みたいで、少しだけ可笑しかった。

た。

中国茶といえば烏龍茶とかプーアル茶がポピュラーで、他はフレーバーティーに分類されるかもしれないジャスミン茶ティーも広く普及してる。

ジャスミン茶は好きで、飲む機会も多い。でも今日買ってきたお茶 桂花烏龍茶けいかは、最近初めて飲んでハマッたばかりのお茶だ。ベースになってる茶葉は烏龍茶で、そこに金木犀の花をブレンドしたもの。

買ったお店のオリジナルブレンドティーらしく、金木犀っぽい香りのするお茶は他にあって、黄金桂おうごんけいという名のお茶がそうらしい。黄金桂には金木犀の花は入ってなくて、茶葉自体に金木犀っぽい香りがある。テイスティングさせてもらったけど、とても上品でさわやかな口当たりのお茶だった。

黄金桂も気に入ったのだけど、より好みだったのは桂花烏龍茶だった。フレーバーティーが好きだから、自分に合ったのかもしれない。封を開けると、そこからふわっと甘くて華やいだ芳香が立ち上り、鼻腔をくすぐってくる。

袋の背面に書かれた淹れ方の説明文に従って、お茶を淹れる。中国茶用の茶器はなくて本格的な淹れ方は出来ないけれど、耐熱性のガラスポットで代用した。

お湯を注ぐと金木犀の甘い香りが湯気とともに立ち、それが室内にも拡がっていく。

「これは金木犀の花……？」

室内を満たす花の香に、維月さんは少し驚いたような顔をし、わたしから耐熱性ガラスのグラスを受け取った。黄金色の茶は、金木犀の花の色よりはもっと淡く、よく飲まれているだろう烏龍茶の黄色よりはもっと濃い色をしている。

「桂花烏龍茶っていつて、ジャスミン茶の金木犀バージョンと思っ



てもらえば」

「……へえ」

ちよつと戸惑ったような顔をして桂花烏龍茶を口に含んだ維月さんは、直後、わずかに眉をしかめ、「芳香剤を入れたようなお茶だな」と苦笑した。その反応に、わたしは焦ってしまった。

「もしかして、そういうお茶、だめでした？」

「……いや、だめという程でもないけど、……まあ、どちらかと言えば苦手かも……」

「そう、でしたか……」

残念……。

しゅんと顔を俯かせ、それからわたしもグラスを手に取り、桂花烏龍茶を口に含んだ。

お店の人ほどうまくは淹れられないけど、けっこう美味しく淹れられたと思う。甘い金木犀の香りが口内にひろがる。

維月さんにも美味しいって思ってもらえたら嬉しかったけど、苦手なものはどうしたってあるし、こればかりは仕方ない。

「美鈴はそういう甘い系の香りが好きだね。シャンプーもさっぱりした甘い香りで……バラではなさそうだけど？」

「今使ってるのはヴァーベナっていうハーブのシャンプーで、香りの元は花じゃなくて葉っぱなんですよ。この香りもすごく好きで、ハンドクリームも同じメーカーの同じシリーズのもの使ってるんです。そのうちソープとかローションとかも買っちゃいそうなくらい。」

……維月さん、あの……こういう香りは平気ですか？」

「うん」

「……好きだと、いいんですけど……」

「もしかして、好きだと言わせたい？」

「……」

うつうつ、お見通しですね。 恥ずかしくて居たたまれないっ。

いざ口にしてみるとこんな恥ずかしい台詞だったなんて！

身を縮こまらせて、程良い感じに冷めて飲みやすくなった桂花烏

龍茶を飲んでグラスを空けた。

ちらりと横目で維月さんを見やると、金木犀の芳香が漂ってきそうな甘くて艶めかしい微笑があつて、わたしを見据えていた。

「お茶の方の香りも、この状態でならいくらでも飲める」

「え？」

そう言うってから、維月さんはやにわにわたしを抱き寄せ、深く口づけた。

「……っ」

「甘くて、美味い」

「……いつ、っ……んん……っ」

舌を吸われて、唾液も舐められ、息まで吞まれて頭の芯がクラクラとしてくる。

息が苦しくなり、維月さんの背を叩いて抗議すると、やっと唇を解放してくれた。だけど維月さんの腕はさらに力強くなって、気づけばソファアベッドの上に押し倒され、組み敷かれていた。

維月さんの甘やかで悪戯っぽい微笑が、吐息がかかるほど近くにある。維月さんは鼻先をくつつけて、わたしを見つめる。その熱いまなざしがわたしを捕らえて離さない。

「本当に参るな。美鈴の甘え方には。にくらしくなるね」

それは、維月さんの方こそですからっ！

桂花烏龍茶は維月さんの口に合わなくて残念だったけど、わたしの密かな思惑は叶えられた　と、思う。

金木犀の花言葉の通りに、とびきり甘く、“あなたの気を引きたい”夜だったから。

## モーニングコーヒー

何故だか気になる人がいる。どうしてか気になって、つい目でその姿を追って、見えなくなると探してしまう。何を考えているのか今一つ掴めない人だから、やたらときになっってしまうのかもしれない。

もっと知りたいと、求めてしまう。

\* \* \*

所用があり、いつもより四十分ほど早く出社した朝のこと。

仕事場にいるだろうと思っていた人の姿が見えず、首を傾げた。

高倉主任、どこにいるんだろう？

もう出社しているはずなのに。デスク回りを見ても使用された形跡がない。不用心にも鞆は置いてあったから、どこかにいることは間違いない。

わたし以外の派遣社員はまだ出社していなくて、部屋は妙に静かで寒々しい。

寒いといってももう春の最中。窓の外を見ると、ビルの間隙から優しい色合いのピンク色の桜が見えた。近くの公園の桜の木だ。もうそろそろ……週末には満開になるんじゃないかな。

用は済ませたことだし、思い立って廊下へ出た。

就業開始時間まではまだ猶予はある。とはいえそろそろ出勤ラッシュの時間だ。まだビル内は若干の静けさが保たれていたけれど、複数の足音が階下で聞こえ、時折は「おはようございます」の挨拶も聞こえてくる。それでもわたしのいる階にはまだ誰かが上がってくる気配はない。エレベーターも通過していく。

誰ともすれ違わない廊下を歩き、ふと見ると、会議室のドアがほんの少しだけ開いているのに気がついた。普段は立ち入らない小会議室だ。

この小会議室は短時間のミーティング等に使われる。白い長テーブルと折りたたみの椅子が置かれ、ホワイトボードがかかっているだけの簡素な会議室。ビル内の部屋のほとんどは禁煙となっていて、各階に喫煙ブースは設けられている。けれどこの会議室は完全禁煙室ではなく、多少の喫煙は許可されていて、そのため小型の煙草専用の空気清浄機が用意されていた。

その空気洗浄機目的で、この会議室でひっそり書類仕事をする社員さんもけっこういたりする。煙草を吸いながら仕事をしたい一部の人達だ。基本的はあまりよろしくないことなので、あくまでひっそりとしている。

まさかね、と思いながら、わたしは会議室を覗き込んで見た。

高倉主任はもう随分前に禁煙して、今もまったく吸ってないと言っていたから、ここにいるはずなのだけだ。

「……あ」

ところが、高倉主任はいた。煙草は吸ってなかったけど、ノートパソコンを開いて、何やら難しい顔をしてキーを叩いている。

ドアを開ける音に気付いて、高倉主任は顔をあげた。

会議室のほぼ真ん中、長テーブルを独り占めしている高倉主任は、気まずそうな顔もせず、ただ少しだけ驚いたように眉をあげた。

「おはようございます」

わたしが先に声をかけると、「おはよう、木崎さん」と笑みを返してくれた。

高倉主任はちらりと腕時計に目をやり、「もうこんな時間か」と小さくため息をついた。それから顎をあげ、コキコキツと首を鳴らした。

「今日はずいぶん早いね、木崎さん」

「ええ、まあ」

一応仕事があつての早出だったわけだけど、曖昧に応えた。高倉主任もいちいち詳しい説明を求めたりはしない。

「それで今、何か、僕に用だった？」

「いえ、そういうわけでは。ドアがちょっと開いてたから、誰かいるのかなあとと思って」

「ああ、そっか」

高倉主任は額にかかった前髪をぐいつと後頭部に押し上げた。物憂げな仕草と細められた双眸ら、……なんというのか、その……とてもドキリとさせられた。

高倉主任はジャケットを椅子の背もたれにかけ、白いワイシャツの襟元を寛げ、紺地の格子柄ネクタイを緩めている。顎から喉仏のラインに目がいつてしまう。いつもと何かが違うわけじゃないのに…… どうしてだろう。ひどく色めいて眩しく感じるのは。

わたしは周りに人がいないかを改めて確認した。廊下には誰もいない。

ホツと胸を撫でおろした。

「木崎さん、ちょっと」

不意に、高倉主任がわたしの名を呼ばわった。何か思いついたような顔をしていて、そんな時の高倉主任はいつになく子供っぽい表情をする。普段あまり見せない顔だ。

高倉主任が片手をあげ、こっちこっちと手招きをした。

「はい？」

「ちょっと、こっち来て」

「……………」

ちょっと戸惑ったけれど、言われるまま会議室に足を踏み入れ、高倉主任の傍へと近づいた。するといきなり、高倉主任はあげていた片手を軽く振って、「はい、ジャンケン」と促してきた。

「えっ」

と、驚き戸惑いつつも、「ジャンケン、ホイッ」という声にっられて、わたしも手を伸ばしていた。

そして、わたしが出したのはパーで高倉主任がチヨキ。

あつという間に勝負はついた。

「僕の勝ち。木崎さん、コーヒー奢ってくれろ？」

「ええっ？ そういうことはじゃんけんの前に言ってくださいよ、もうっ」

そう文句はつけたものの、結局奢ってあげることにした。

いつも居酒屋やバーなんかで、おおめに料金を払ってくれているから、そのお礼代わり。あまりにささやか過ぎるお礼だけど。

この数ヶ月の間に、高倉主任と二人で飲みに行ったのは、何回だったろうか？

初めの頃は派遣の先輩の浅田さんもいた。けれどある時、浅田さんのドタキャンがあつて、それ以来なぜなのか高倉主任と二人で飲みに行くようになったのだ。昔は浅田さんと二人でよく飲みに行ってたようだから、もしかしたらわたしはピンチヒッター的な立場なのかもしれない。それでも、高倉主任は無理をしてわたしを誘ってくれている風ではなかったし、わたしも断る理由のない時は、気軽に応じてた。

「そついえば、浅田さんがまたいつか飲みに行こうつて言ってますよ」

自販機で買ってきたコーヒーを手渡し、当たり障りのない会話の糸口をも提示した。

高倉主任はまだ椅子に座ったままでいる。片手はノーパソのキーボードに軽く添えられ、時々指が静かに動いた。コーヒーを飲みながらパソコンの画面に目を落としたり、つと視線をあげてこちらに顔を向けてきたりする。

「そついう浅田さんが一番都合つかなくなってるね。旦那さんの出勤のシフトが変わったからって」

「みたいですね。午後は出られても夜は出かけられないって言って

ましたから」

「一年以上経ってるとはいえ、一応は新婚さんだしね。本人の申告だけ」

高倉主任がくすつと笑って、わたしもつられて口元を緩ませた。

「そうですね」と応えたわたしに、高倉主任はさらりとさり気ない口調で聞いてきた。

「そういう木崎さんの都合はどう？ 金曜や土曜の夜に出かけて、不都合なことはない？」

「え？ ええ、まあ……だいたいは空いてますから」

我ながら、なんとも寂しい答えだと思う。いつも暇してますと宣言してるようなものだ。

習い事もしていないし、アウトドア的な趣味に一日を費やすというともない。土日のどちらかに友人と会うことはあるけれど、毎週というわけでもなくて、週末は一人で過ごすことが多い。それを高倉主任は知っているはずだ。誘われれば大抵OKしていたから。誘いをかけてくれる高倉主任は多忙そうなのに。

どうして、浅田さん抜きでもわたしを誘ってくれるんですか？

それを聞きたかった。けれど、聞くのが恥ずかしくて怖い気もした。……その理由はよく分からない。高倉主任の考えが掴みきれないのと同じくらいに。

ふと、高倉主任の目元が和らいだ。少し細めて視線を持っている紙コップに落とし、そしてそれを口に近付けた。軽く息をついて、きつともう冷めかけているだろうコーヒーを音もなく啜った。

コーヒーの香りがこちらにまで漂ってくる。

「……………」  
「なんだろう……？」

胸がどきどきする。

ひどく落ち着かない。

高倉主任から目が離せず、けれど見つめているのが苦しかった。

なんだろう、この相反した気分は。どうしてこんなに高倉主任の

一挙一動が気にかかるんだろう。

ここ最近ずっとこんな調子だ。

高倉主任の姿を目で追って、目が合えば逸らしてしまう。逸らしても、目の端でずっと追っている。

「あ、あのっ」

僅かの間の沈黙に耐えかねて、わたしは別の話を切り出した。

「高倉主任ってほんとにジャンケン強いですね。連勝記録伸ばして、負け知らずじゃないですか」

しみじみとわたしが言うと、高倉主任は苦笑で応えた。

「そうでもないよ。ここではたまたま勝ちが続いてるだけで、他では負けることもあるし」

「そうなんですか？ でも、ここだけっていつても勝ち続けているのはすごいですよ。さっきのジャンケンだって、勝てると思って挑んできたんでしょう？」

「まさか」

高倉主任はため息まじりに否定した。

「勝つかどうかなんて分からないよ。まあたしかに、勝てそうかなと分かる相手はいないでもないけど、それは木崎さんじゃないし。

……もしかして、奢らされたって怒ってる？」

「こんなことくらいで怒ったりはしません。ただ、高倉主任って計算高そうだなあと思って」

「慎重とって欲しいな」

「慎重だとは思いますが、なんかちょっと違います。負けない勝負は最初からしないというか」

「それは買い被りだ」

「でもギャンブルって基本しないって言ってましたよね？ しても、大損するようなことはないって」

「それは、まあね。怖がりだから」

「怖がり？」

意外な言葉が高倉主任の口から出、思わず首を傾げた。



高倉主任は真面目で慎重な性格だと思うけど、怖がりとか臆病と  
かってイメージはない。

これも勝手な想像で、本当の高倉主任がどんな人なのかは、わた  
しにはまだ分からない。

わたしの怪訝そうな顔を見やり、高倉主任は別の言葉に置き換え  
た。

「じゃあ、運がいいってことで」

「えー……なんかそれも違うというか釈然としないというか」

高倉主任はちよつと困ったように眉を下げ、微苦笑を浮かべた。

ちよつどその時、会議室の外からガヤガヤと賑やかな女の子達の  
声が聞こえてきた。時計を見ると、いつもの出勤時間だ。高倉主任  
もそれに気づいてノーパソを閉じた。

「もう時間ですね。わたしもそろそろ向こうに戻ります」

「うん。コーヒー、ごちそうさま、木崎さん。おいしかった」

「どういたしまして」

そうお決まりの文句で返したけれど、高倉主任の晴れやかな、そ  
れでいてどこか秘密めいた笑顔に、少々戸惑いを覚えた。それに、  
自販機のコーヒーがそんなに美味しかったのかと不思議で、それに  
奇妙にくすぐつたい気持になった。

「じゃ、また」

わたしは踵を返し、後ろ髪を引かれつつも歩き出した。

背中に、高倉主任の視線を感じた気がして、ふと、ドアに手をか  
けたところで足を止めて振り返った。

「高倉主任、今度はきつとわたしが勝ちますから、その時は奢って  
くださいね」

それはほんの他愛ない軽口。深い意味のないちよつとした冗談だ  
った。高倉主任に勝てる気なんて全然しなかったから。

緩めていたネクタイを直していた高倉主任は、ほんの一瞬虚を衝  
かれたような顔をし、それからすぐ目を細めて穏やかな微笑を湛え  
た。

同時に、高倉主任の唇が小さく動き、何か呟いたらしいのが見て取れた。けれどその声はわたしの耳には届かなかった。

だから、高倉主任にも聞こえなかったはずだ。笑顔を向けられて高鳴りだした、わたしの心音は。

一人になってからもずっと、ブラックコーヒーの香気が離れなかった。

いつまでも消えない高倉主任の姿貌と重なって、少し苦く、とても甘やかに、わたしの心に残り香をくゆらせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6295s/>

---

恋人宣言

2011年12月18日11時05分発行